

# 京都府遺跡調査概報

## 第 97 冊

京都新光悦村関係遺跡

- (1) 狭間墳墓群
- (2) 狭間中・近世墓群
- (3) 平山古墳
- (4) カチ山北古墳群
- (5) 今林古墳群
- (6) 今林遺跡第3次調査

2 0 0 1

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版



今林6号墳主体部全景(西から)

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成11・12年度に実施した発掘調査のうち、京都府企業局の依頼を受けて行った京都新光悦村関係遺跡に関する発掘調査概要を取めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何かのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、園部町・園部町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 樋 口 隆 康

## 凡 例

1. 本書は京都新光悦村関係遺跡に関する概要報告書である。
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
京都新光悦村関係遺跡	船井郡園部町瓜生野・内林町今林	平12.9.8～平13.9.26	京都府企業局	引原茂治・福島孝行

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

# 本文目次

## 京都新光悦村関係遺跡発掘調査概要

1. はじめに	1
2. 調査経過	1
3. 位置と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
4. 調査概要	5
(1) 狭間墳墓群	5
(2) 狭間中・近世墓群	39
(3) 平山古墳	43
(4) カチ山北古墳群	47
(5) 今林古墳群	52
(6) 今林遺跡第3次調査	84
5. 考察	96
(1) 弥生後期の南丹波地域の土器変遷	96
(2) 平山遺跡群の首長権形成と消長	98
(3) 今林8号墓出土鏡について	99
6. まとめ	101

# 挿図目次

第1図 調査地位置図	2
第2図 調査地点配置図	3
第3図 狭間墳墓群配置図	4
第4図 狭間1号墓平面・断面図	5
第5図 狭間2号墓平面・断面図	6
第6図 狭間2号墓第1主体部平面・断面図	7
第7図 狭間墳墓群出土鉄器実測図	7

第8図	狭間2号墓第2主体部平面・断面図	8
第9図	狭間2号墓第3主体部平面・断面図	9
第10図	狭間2号墓第4主体部平面・断面図	9
第11図	狭間3号墓平面・断面図	10
第12図	狭間3号墓主体部平面・断面図	11
第13図	狭間4号墓平面・断面図	12
第14図	狭間4号墓貼石平面・断面図	13
第15図	狭間4号墓第3主体部平面・断面図	13
第16図	狭間4号墓第1主体部平面・断面図	14
第17図	狭間4号墓第2主体部平面・断面図	15
第18図	狭間5・6号墓平面・断面図	16
第19図	狭間5号墓断面図	18
第20図	狭間5号墓第1主体部平面図	18
第21図	狭間5号墓第1主体部完掘状況平面・断面図	19
第22図	狭間5号墓第2主体部平面・断面図	20
第23図	狭間5号墓第2主体部断面図	21
第24図	狭間6号墓平面・断面図	21
第25図	狭間7号墓平面・断面図	22
第26図	狭間7号墓第1主体部平面・断面図	23
第27図	狭間7号墓第2主体部平面・断面図	24
第28図	狭間8号墓平面・断面図	25
第29図	狭間8号墓主体部平面・断面図	26
第30図	狭間9号墓平面・断面図	27
第31図	狭間11号墓平面・断面図	28
第32図	狭間11号墓断面図	29
第33図	狭間11号墓主体部断面図	29
第34図	狭間11号墓主体部平面・断面図	30
第35図	狭間12号墓平面・断面図	31
第36図	狭間12号墓主体部平面・断面図	32
第37図	狭間13号墓平面・断面図	33
第38図	狭間墳墓群出土土器実測図(1)	34
第39図	狭間墳墓群出土土器実測図(2)	36
第40図	ガラス小玉出土状況図	37
第41図	狭間墳墓群出土ガラス小玉実測図(1)	38
第42図	狭間墳墓群出土ガラス小玉実測図(2)	39

第43図	狭間中・近世墓群配置図	40
第44図	狭間中・近世墓群平面・断面略図	42
第45図	狭間中・近世墓群出土遺物実測図	43
第46図	平山古墳平面図	44
第47図	平山古墳鳥頭四獣鏡実測図	45
第48図	平山古墳主体部平面・断面図	46
第49図	平山古墳主体部土層断面図	47
第50図	平山古墳主体部遺物出土状況図	48
第51図	平山古墳出土鉄器・土器・玉類実測図	49
第52図	カチ山北古墳群平面図	50
第53図	カチ山北古墳群主体部平面・断面図	51
第54図	カチ山北1号墳南溝供献土器出土状況図	52
第55図	カチ山北1号墳出土土器実測図	52
第56図	カチ山北古墳群出土鉄器実測図	53
第57図	今林6・7号墳平面・断面図	54
第58図	今林6号墳埴輪列平面・断面図	55
第59図	今林6号墳不明土坑平面・断面図	56
第60図	今林6号墳主体部平面・断面図	57
第61図	今林6号墳主体部遺物出土状況図	58
第62図	今林6号墳主体部遺物出土状況図	59
第63図	今林6号墳主体部短甲出土状況図	60
第64図	今林7号墳主体部平面・断面図	61
第65図	今林7号墳鉄器出土状況図	62
第66図	今林8号墓平面・断面図	63
第67図	今林8号墓第1主体部平面・断面図	64
第68図	今林8号墓第1主体部遺物出土状況実測図	65
第69図	今林8号墓第2主体部平面・断面図	66
第70図	今林8号墓第3主体部平面・断面図	67
第71図	今林6号墳出土埴輪実測図	68
第72図	今林6号墳出土内行花文鏡実測図	69
第73図	今林6号墳出土短甲実測図	70
第74図	今林6号墳出土短甲実測図	71
第75図	今林6号墳出土短甲実測図	72
第76図	今林6号墳出土短甲実測図	73
第77図	今林6号墳出土刀剣類実測図	74

第78図	今林6号墳出土鉄鏃および農工具実測図	76
第79図	鉄矛実測図	77
第80図	今林6号墳出土玉類実測図	78
第81図	今林6号墳出土竪櫛実測図	79
第82図	今林7号墳出土須恵器実測図	79
第83図	今林7号墳出土鉄器実測図	80
第84図	今林8号墓出土土器実測図	80
第85図	今林8号墓出土鏡実測図	81
第86図	今林8号墓出土ガラス管玉実測図	82
第87図	今林8号墓出土鉄器実測図	83
第88図	今林遺跡A地区遺構配置図	85
第89図	S H01平面・断面図	86
第90図	S H09~11平面・断面図	87
第91図	今林遺跡A地区出土土器実測図(1)	88
第92図	今林遺跡A地区出土土器実測図(2)	89
第93図	今林遺跡B地区遺構配置図	90
第94図	今林遺跡B地区竪穴式住居跡平面・断面図	91
第95図	今林遺跡B地区出土遺物実測図	92
第96図	今林遺跡C地区遺構配置図	93
第97図	今林遺跡C地区遺構平面・断面図(1)	94
第98図	今林遺跡C地区遺構平面・断面図(2)	95
第99図	7号墳下層出土サヌカイト剥片実測図	97

## 図 版 目 次

### 京都新光悦村関係遺跡

図版第1	(1) 狭間墳墓群遠景(北から)	(2) 1号墓全景(南西から)
	(3) 2号墓全景(東から)	
図版第2	(1) 3号墓全景(東から)	(2) 4号墓全景(西から)
	(3) 4号墓貼石(北から)	
図版第3	(1) 5号墓全景(西から)	(2) 5号墓墳頂部(東から)
	(3) 6号墓全景(西から)	



- 図版第4 (1) 7号墓全景(西から) (2) 8号墓全景(東から)  
(3) 11号墓全景(北から)
- 図版第5 (1) 12号墓全景(西から) (2) 13号墓全景(西から)  
(3) 11号墓主体部(南から)
- 図版第6 (1) 2号墓第1主体部棺内完掘状況(東から)  
(2) 2号墓第2主体部棺内完掘状況(東から)  
(3) 2号墓第3主体部棺内完掘状況(東から)  
(4) 2号墓第4主体部土器出土状況(南から)  
(5) 2号墓第3主体部棺表示礫検出状況(東から)  
(6) 3号墓主体部棺内完掘状況(東から)
- 図版第7 (1) 4号墓第1主体部棺内完掘状況(東から)  
(2) 4号墓第2主体部棺内完掘状況(東から)  
(3) 7号墓第1主体部棺内完掘状況(東から)  
(4) 5号墓第1主体部棺内完掘状況(西から)  
(5) 5号墓第2主体部内完掘状況(西から)  
(6) 7号墓第2主体部内完掘状況
- 図版第8 (1) 2号墓第1主体部鉤出土状況(東から)  
(2) 8号墓第1主体部棺内完掘状況(東から)  
(3) 8号墓第2主体部棺内完掘状況(東から)  
(4) 4号墓第3主体部土器検出状況(東から)  
(5) 6号墓主体部棺内完掘状況(東から)  
(6) 8号墓土器埋納土坑土器検出状況(東から)
- 図版第9 (1) 平山古墳空中写真(北から) (2) 平山古墳空中写真(上が北東)  
(3) 平山古墳主体部(西から)
- 図版第10 (1) 副葬品北群出土状況(北から) (2) 副葬品南群出土状況(南から)  
(3) 主体部小口溝完掘状況(東から)
- 図版第11 (1) カチ山北古墳群空中写真(北から) (2) カチ山北古墳群空中写真(上が東)  
(3) 1号墳主体部鉄刀出土状況(東から)
- 図版第12 (1) 1号墳南溝土器出土状況(南から) (2) 2号墳主体部副葬品出土状況(北から)  
(3) 2号墳主体部副葬品出土状況(西から)
- 図版第13 (1) 6・7号墳空中写真(上が北) (2) 6号墳埴輪列検出状況(東から)  
(3) 6号墳不明土坑完掘状況(東から)
- 図版第14 (1) 6号墳主体部副葬品出土状況(西から)  
(2) 6号墳刀剣類出土状況(南から)  
(3) 6号墳農工具出土状況(南から)

- 図版第15 (1) 6号墳鉄矛出土状況(西から)  
(2) 6号墳玉類出土状況(南から) (3) 6号墳鉄鏃出土状況(東から)
- 図版第16 (1) 6号墳鏡出土状況(南から) (2) 6号墳短甲出土状況(東から)
- 図版第17 (1) 7号墳主体部棺内完掘状況(南から)  
(2) 7号墳「U」字形鍬・鋤先出土状況(西から)  
(3) 7号墳曲刃鎌出土状況(南から)
- 図版第18 (1) 8号墓空中写真(上が北) (2) 8号墓墳頂平坦面(西から)  
(3) 8号墓第1主体部完掘状況(東から)
- 図版第19 (1) 8号墓第1主体部副葬品出土状況鏡取り上げ前(北から)  
(2) 8号墓第1主体部副葬品出土状況鏡とり上げ後(南西から)  
(3) 8号墓第1主体部農工具出土状況(西から)
- 図版第20 (1) 8号墓第1主体部鉄ヤリ出土状況(北から)  
(2) 8号墓第2主体部石材出土状況(東から)  
(3) 8号墓第2主体部棺内完掘状況(東から)
- 図版第21 (1) 8号墓第2主体部鉈出土状況(南から)  
(2) 8号墓第2主体部方形刃先出土状況(西から)  
(3) 8号墓第3主体部土器出土状況(東から)
- 図版第22 (1) A地区空中写真(北から) (2) A地区SH01土器出土状況(1)(北から)  
(3) A地区SH01完掘状況(東から)  
(4) A地区SH01土器出土状況(2)(北から)
- 図版第23 (1) B地区空中写真(北東から) (2) B地区SH12完掘状況(東から)  
(3) B地区SH05完掘状況(西から) (4) B地区SH05竈検出状況(南から)
- 図版第24 (1) C地区空中写真(上が南) (2) C地区SX15(南東から)  
(3) C地区SX35・08(北西から) (4) C地区SX29(南西から)
- 図版第25 平山古墳出土遺物
- 図版第26 狭間墳墓群・カチ山北古墳群・今林古墳群出土遺物
- 図版第27 今林古墳群出土遺物(1)
- 図版第28 今林古墳群出土遺物(2)
- 図版第29 今林古墳群出土遺物(3)
- 図版第30 今林古墳群・今林遺跡出土遺物

# 京都新光悦村関係遺跡発掘調査概要

## 1. はじめに

この報告は、京都新光悦村建設に伴う平成11年度と平成12年度の2年度にわたる調査についてのものである。これらの調査地は、京都府船井郡園部町瓜生野・同内林町今林地内に所在する。園部盆地の北側に横たわる独立丘陵上に位置している。この地に京都新光悦村建設が計画されたため、京都府企業局の依頼を受けて、当調査研究センターが発掘調査を実施した。調査に係る経費は、京都府企業局に全額負担していただいた。調査は両年度を通じて当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克・同主任調査員引原茂治・同調査員福島孝行が担当した。調査にあたっては、京都府企業局や京都府教育庁指導部文化財保護課をはじめ、園部町企画情報室・園部町教育委員会・地元自治会などから協力していただいた。現地調査においては、地元有志の方々や学生諸氏に協力していただいた。

## 2. 調査経過

平成11年度の調査は、平成11年9月8日から着手し、当初瓜生野古墳群中の古墳7基と平山古墳状隆起の発掘調査、平山古墳状隆起および中世の山城跡の可能性のある地点3か所の試掘調査を行う予定で開始した。平山古墳状隆起では表土直下に岩盤が露呈し、遺構・遺物は存在しなかった。したがって平山古墳状隆起は遺跡ではないことが判明した。瓜生野古墳群では、当初の調査対象は、瓜生野17～23号墳の7基であった。調査の進展にしたがい、盛土を持たないものなどを確認し、最終的には13基となった。またこれらは弥生時代の台状墓であることも判明した。これは後期古墳群である瓜生野古墳群とは内容等が異なるため、京都府教育庁指導部文化財保護課および園部町教育委員会と協議の上、今回の調査対象を狭間墳墓群と改称することとし、新たに北側から番号を付した。したがって、従来の瓜生野17号墳を狭間1号墓、18号墳を2号墓、19号墳を4号墓、20号墳を5号墓、21号墳を7号墓、22号墳を11号墓、23号墳を12号墓とした。なお、9号墓は、墳頂部が現里道と重なっており、また、10号墓も、昭和末期まで使用されていた墓地と重なるため、京都府教育委員会との協議により調査対象外となった。11月8日からは、中世山城跡の可能性のある地点3か所の試掘を開始した。調査地は、平山古墳状隆起がある丘陵頂部から北に延びる尾根上と、平山古墳状隆起北東の丘陵頂部、さらにそこから北側の小頂部に位置する。この内、最も北側の小頂部は、遺構・遺物ともに存在せず、遺跡でないことが判明した。ほかの2地点では遺構を検出したので、発掘調査を行った。平山古墳状隆起北側尾根上からは方墳2基を検出し、南側に位置する古墳を平山1号墳、その北側に隣接する古墳を平山2号墳と仮称した。また、平山古墳状隆起北側丘陵頂部からは楕円形墳1基を検出し、平山3号墳と仮称した。調査の結果、平山1・2号墳は古墳時代中期に築造され、平山3号墳は古墳時代前期に築造され

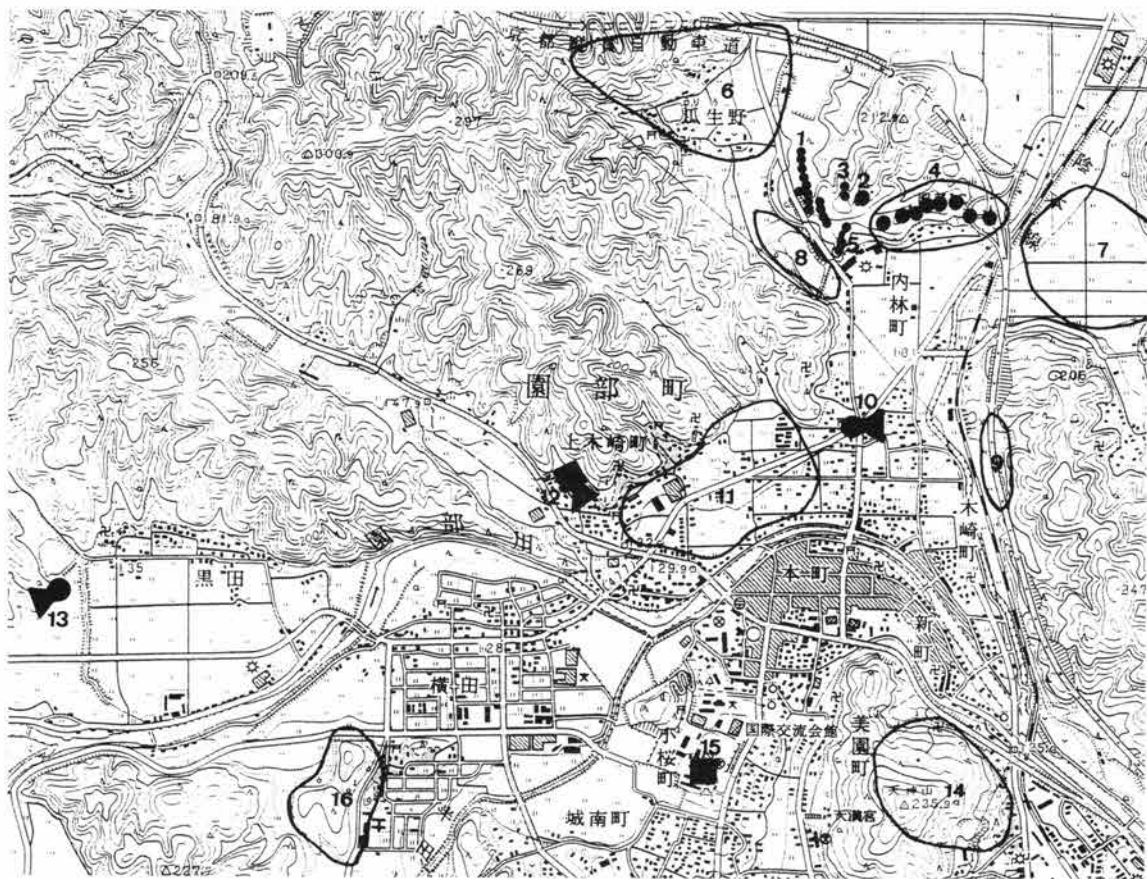
たことが分かった。これらの古墳は立地・内容等を異にしているので、関係諸機関と協議の上、平山1・2号墳をカチ山北古墳群、平山3号墳を平山古墳と改称した。また、次年度調査予定の今林古墳群試掘調査の追加依頼があり、平成12年1月26日から開発対象の今林6～8号墳の試掘を開始した。その結果、すべての古墳から埋葬主体部を確認した。すべての調査が終了したのは平成12年3月3日である。

平成12年度の調査は、今林6・7・8号墳の古墳3基と今林遺跡約2,000㎡を対象として実施した。調査は、平成12年4月11日から開始した。また4月23日に昨年度調査分の現地説明会を実施した。今林6号墳では大規模な主体部を掘削し、多数の遺物が出土した。7号墳は古墳時代中期の築造であることが判明した。8号墳では、第1主体部から銅鏡や鉄製品などが出土した。今林遺跡の調査では、弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡を検出した。9月9日には、平成12年度調査の現地説明会を実施し、9月26日に発掘調査を終了した。(引原茂治)

### 3. 位置と環境

#### (1) 地理的環境

今回調査を行った平山遺跡群は京都府船井郡園部町瓜生野・内林町に所在する通称「平山」と呼ばれる独立丘陵上に立地する。園部町は丹波高原の南端に大堰川水系の園部川、半田川などの小



第1図 調査地位置図

- |            |            |            |               |           |           |
|------------|------------|------------|---------------|-----------|-----------|
| 1. 狭間墳墓群   | 2. 平山古墳    | 3. カチ山北古墳群 | 4. 今林古墳群・今林遺跡 | 5. カチ山古墳群 | 6. 瓜生野古墳群 |
| 7. 曾我谷遺跡   | 8. 金ヶ沢遺跡   | 9. 善願寺遺跡   | 10. 園部垣内古墳    | 11. 宮ノ口遺跡 | 12. 中畷古墳  |
| 13. 園部黒田古墳 | 14. 天神山古墳群 | 15. 小桜古墳群  | 16. 温井古墳群     |           |           |

河川によって形成された沖積平野、通称「園部盆地」を中心に構成されている。この盆地を形成した小河川は、亀岡盆地の北部で大堰川・桂川となって山城盆地へと進み淀川に合流して大阪湾へと注ぐ。園部盆地は淀川水系の最深部にあるといえる。

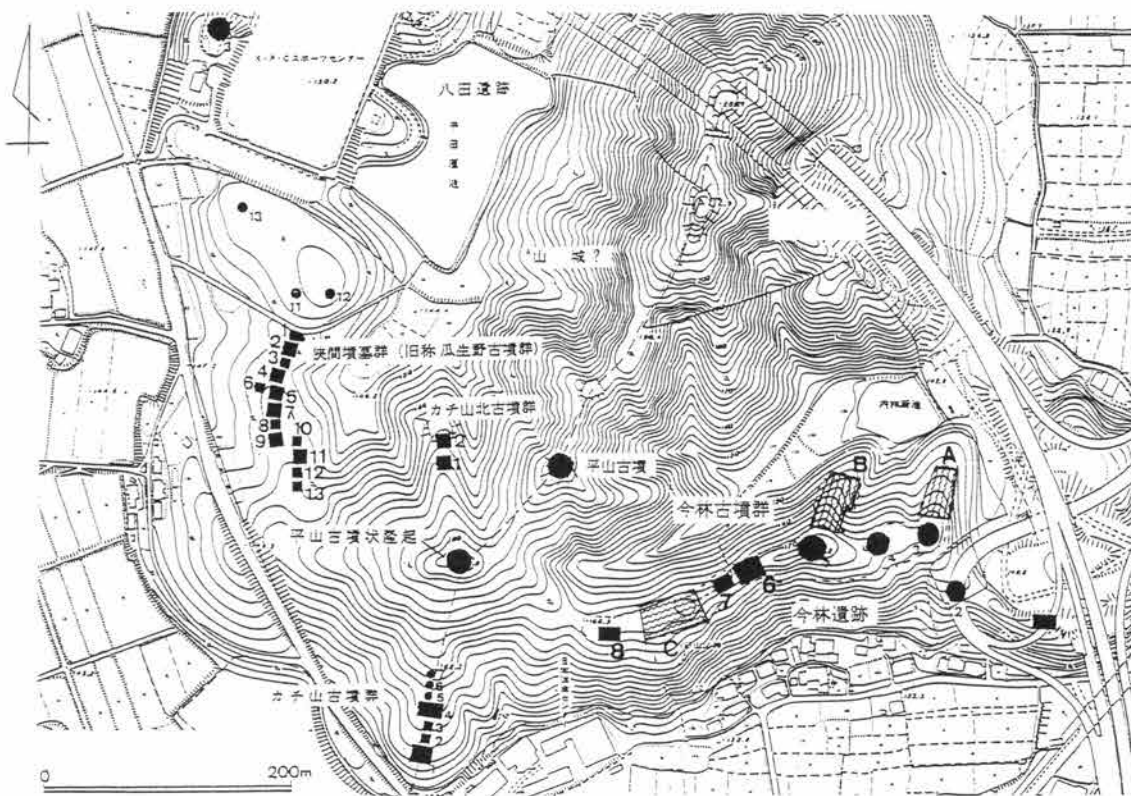
(2) 歴史的環境(園部町の弥生～古墳時代)

弥生時代の遺跡としては、曾我谷遺跡<sup>(注2)</sup>・半田遺跡<sup>(注3)</sup>・宮ノ口遺跡<sup>(注4)</sup>・今林遺跡<sup>(注5)</sup>・善願寺遺跡<sup>(注6)</sup>において建物跡などが確認されている。宮ノ口遺跡第4次調査では弥生時代中期の遺構と土器が検出されている。弥生後期の高地性集落遺跡である今林遺跡のすぐ南東の扇状地上に曾我谷遺跡がある。この遺跡からは庄内式併行期の溝などが発見されている。庄内式併行期の黒田古墳<sup>(注7)</sup>は全長約52mの前方後円形の墳墓である。出土遺物は破砕した双頭龍鳳文鏡や管玉・鉄鍬・塗漆製品などがある。長辺12mの今林1号墳<sup>(注8)</sup>もこの時期の墳墓である。

古墳時代に入り、中畷古墳<sup>(注9)</sup>・園部垣内古墳<sup>(注9)</sup>が築造される。中畷古墳は全長64mの前方後方墳である。筒形銅器・埴輪の出土が伝えられる。園部垣内古墳は葺石・埴輪・周壕を備えた全長約84mの前方後円墳である。高野槨を使った木棺の内外からは三角縁神獸鏡・三角縁仏獸鏡などの鏡のほかにも多数の玉類・石製腕飾類・方形板革綴短甲・武器・農具などが出土している

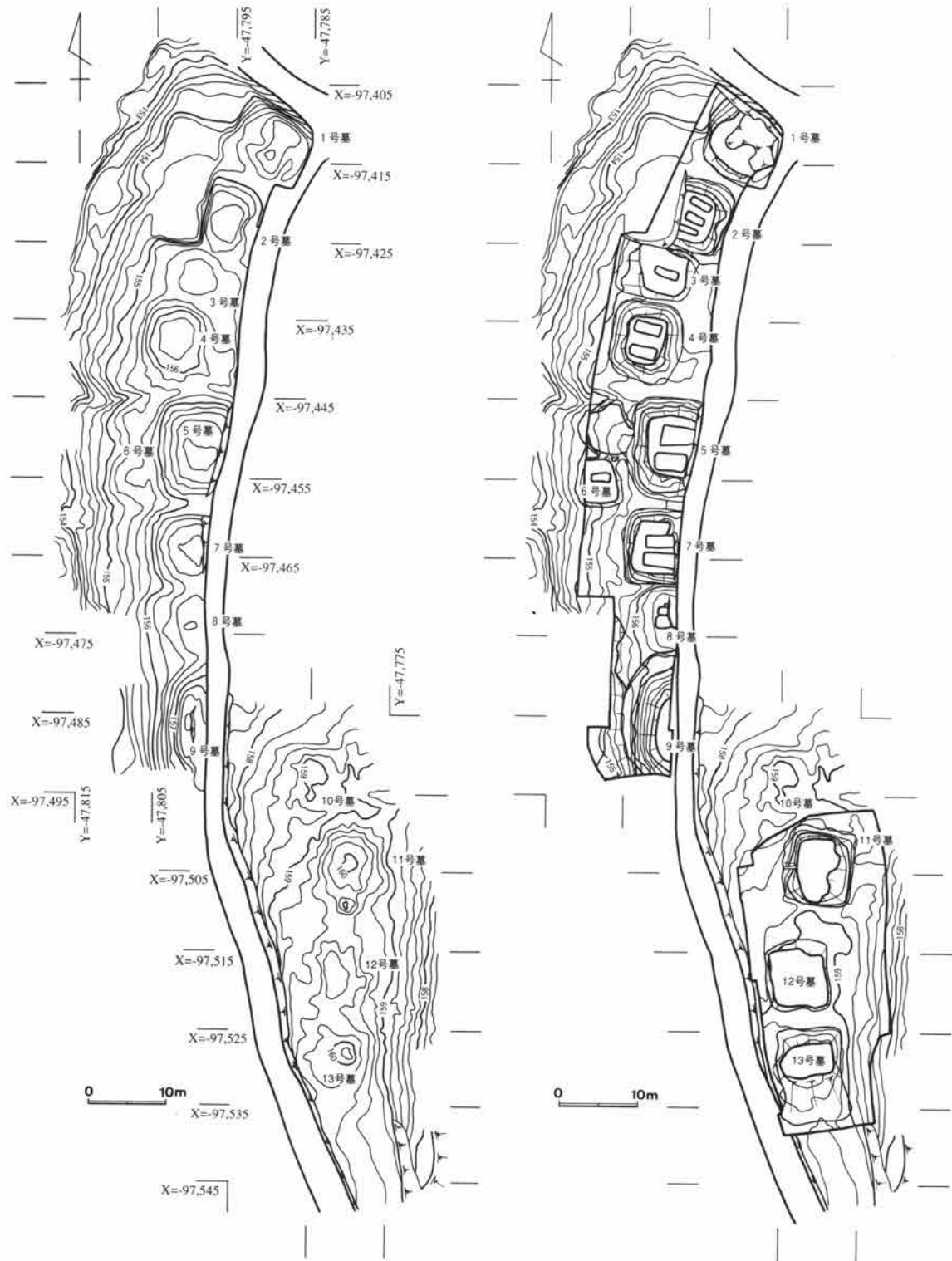
古墳時代中期になると大規模な前方後円墳は姿を消し、径28mの楕円形を呈する岸ヶ前2号墳<sup>(注10)</sup>、徳雲寺北1号墳<sup>(注11)</sup>や今林6号墳<sup>(注12)</sup>、小桜古墳群<sup>(注12)</sup>のような一辺が20mほどの方墳などが築かれるようになる。これらの特徴は小規模古墳であるにもかかわらず、豊富な副葬品を持つことや、方墳を2基近接して築造するという共通性が見られる。

古墳時代後期になると黒田北古墳群<sup>(注13)</sup>・町田東古墳群<sup>(注14)</sup>・温井古墳群<sup>(注15)</sup>、園部天神山古墳群<sup>(注16)</sup>、瓜生野



第2図 調査地点配置図

古墳群などが造営される。これらは15m内外の円墳で構成されている。木棺直葬で鉄製楕円形鏡板付轡などの多くの鉄器類とともに須恵器が出土した今林2号墳などを除いてそのほとんどが横穴式石室を持つと推定される。また古墳時代後期の園部盆地の特色として須恵器窯がある。南側の丘陵部に約30基の須恵器窯が壺の谷・桑ノ内・高杭・大向の4支群に分かれて形成される。これらは5世紀末に開窯された最古の地方窯の1つと考えられる。<sup>(注17)</sup> (重松朋孝)



第3図 狭間墳墓群配置図(左：調査前、右：調査後)

## 4. 調査概要

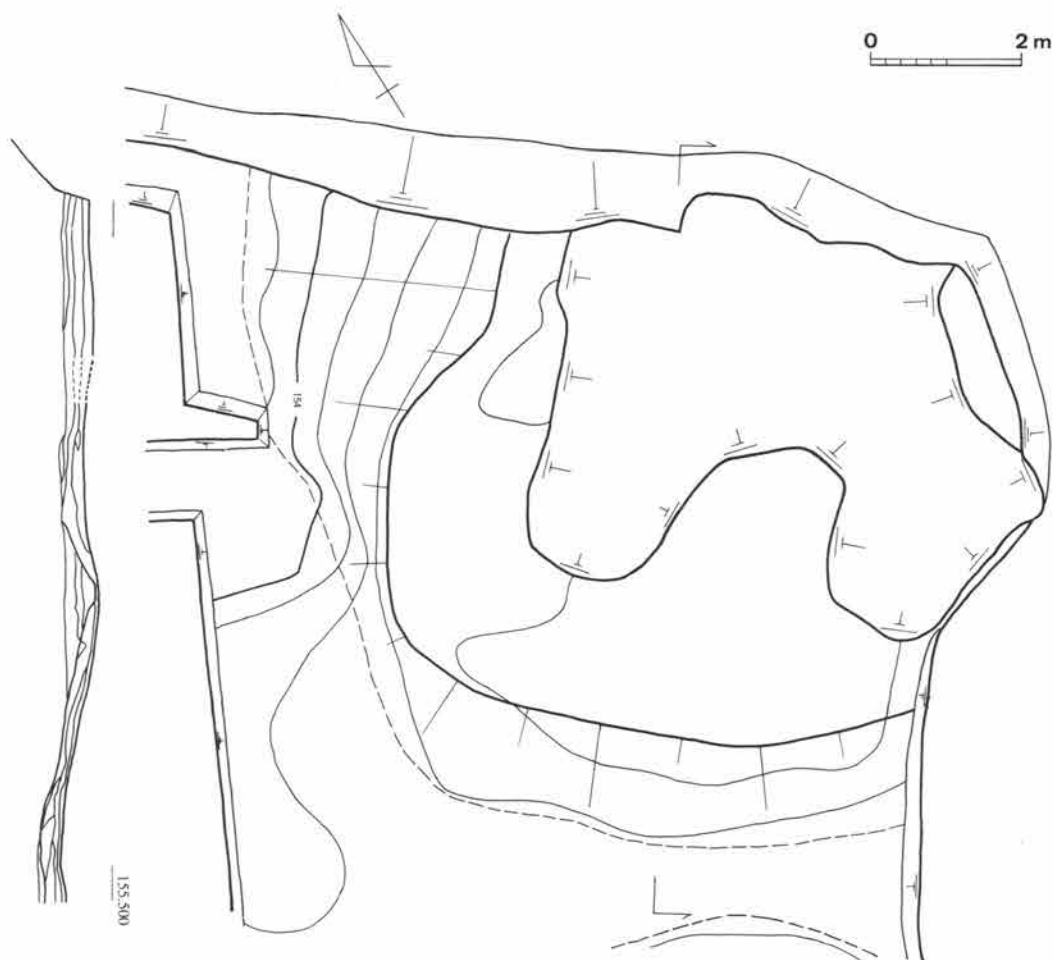
### (1) 狭間墳墓群

#### A. 検出遺構

当墳墓群は平山丘陵西端の南北に伸びる尾根上に立地し、尾根線上最高所に接続して築かれている。1～9号墓と10・11号墓は列を若干ずらして形成される。狭間墳墓群の表土および周溝埋土上層からは古墳時代後期の須恵器が出土したが、これに伴う遺構は検出されず、性格は不明である。また、里道の東側は中・近世墓群、および現代墓(両墓制の埋墓という)によって大きく削平を受けており、旧状をとどめてはいない。

#### ① 狭間1号墓(旧称瓜生野17号墳)

墳丘 里道によって北辺と東辺を削平され、南辺を後世の造成により削平されているため、本来の墳丘の状況を残している部分は少ない。唯一南辺は2号墓との間に周溝を共有している状況が分かるのみである。また墳丘上も盛土のほとんどと、盛土下の旧表土の多くを削平によって失っており、主体部を検出することはできなかった。また、墳丘北側には地震に伴う亀裂の痕跡が見られ、北半は大きく破壊されている状況が見られる。こうした状況から埋葬施設は検出できなかった。したがってこの高まりが墳墓でない可能性もあるが、墳丘上に乱掘坑があり、ここからスタンプ文のある弥生土器片が出土したことから墳墓であった可能性も否定できず、1号墓とす

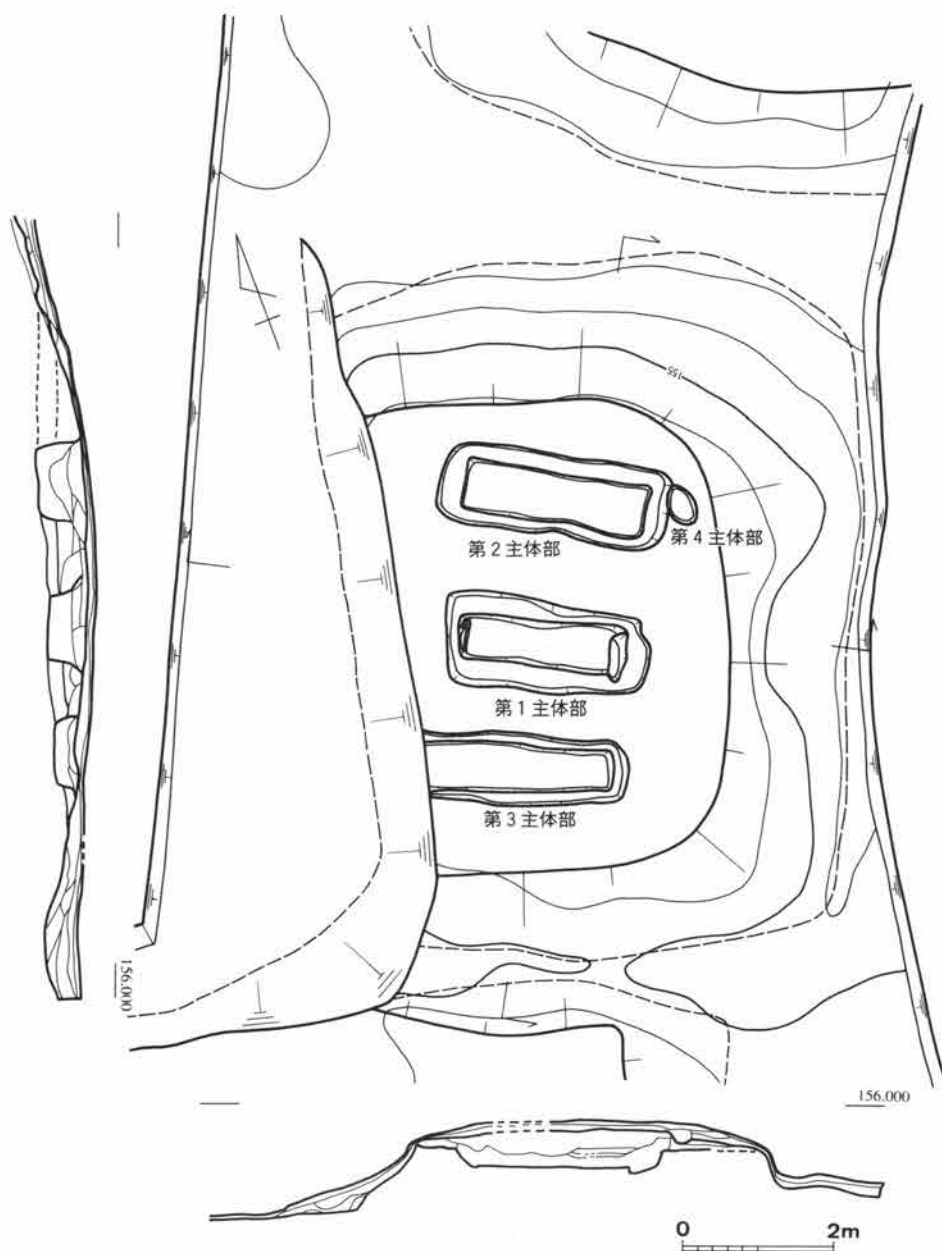


第4図 狭間1号墓平面・断面図

ることとした。墳丘が残存している部分の規模は東西11m・南北9.2mを測る。

②狭間2号墓(旧称瓜生野18号墳)

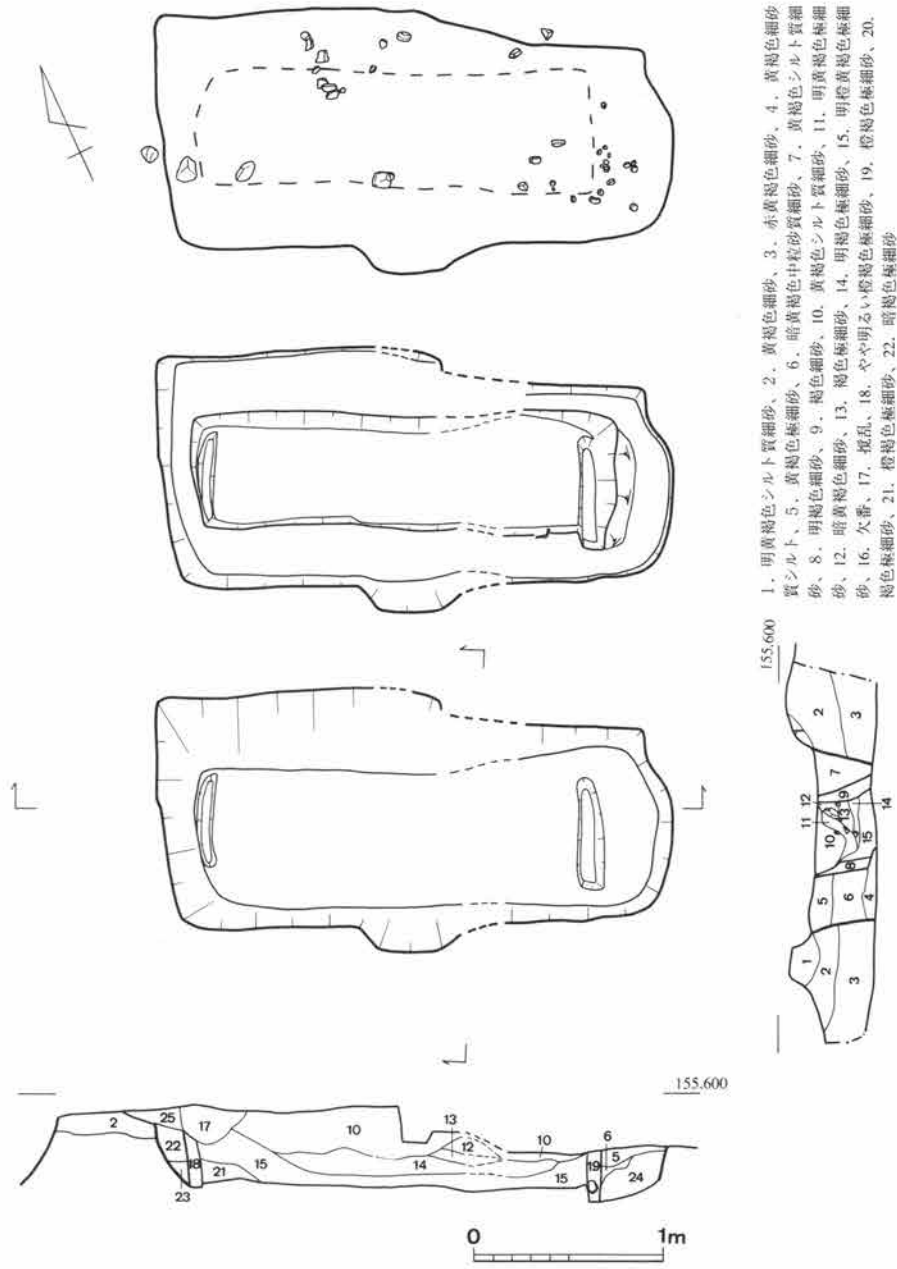
**墳丘** 墳丘は東辺が里道によって、西辺が造成によって削平されている。また、東・南・北の3辺は溝によって区画されている。墳丘が残存する部分の状況から方形の墳丘であると考えられる。溝の墳丘側下端によって南北を測ると、9.2mを測る。墳高は溝底から1.1mを測る。墳丘は旧表土を含め、80cmほど墳丘周囲を削平し、30cm前後の盛土を行って整形している。周溝内には供献土器として転落した弥生土器や、周溝が埋没する過程で遺棄された須恵器が出土した。主体部は墳丘上平坦面に4基並設され、木棺直葬の3基は主軸を東西方向にとる。中心の主体部を第1主体部、北側を第2主体部、南側を第3主体部と呼ぶ。第4主体部は小型の土壙墓で、第2主体部の東辺を切っている。



第5図 狭間2号墓平面・断面図



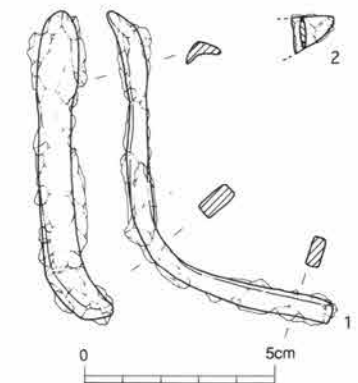
主体部 第1主体部は長軸2.73m・短軸1.40m・深さ43cmを測る長方形の墓壇に、長軸2.07m・短軸0.48mを測る木棺を直葬している。墓壇底には東側に長さ60cm・幅10cm・深さ5cm、西側に長さ50cm・幅50cm・深さ5cmの小口溝を検出した。したがって木棺形式は「H」形の組合式箱形木棺である。墓壇の断面形態は1段墓壇である。棺内には西側棺側に棺底から6cmほど浮いた状態で、折り曲げられた鉞(第7図)が1点出土した。これは棺上に置かれたものが腐朽に



- 1. 明黄褐色シルト質細砂、2. 黄褐色細砂、3. 赤黄褐色細砂、4. 黄褐色細砂質シルト、5. 黄褐色極細砂、6. 暗黄褐色中粒砂質細砂、7. 黄褐色シルト質細砂、8. 明褐色細砂、9. 褐色細砂、10. 黄褐色シルト質細砂、11. 明黄褐色極細砂、12. 暗黄褐色細砂、13. 褐色極細砂、14. 明褐色極細砂、15. 明黄褐色極細砂、16. 欠番、17. 攪乱、18. やや明るい橙褐色極細砂、19. 橙褐色極細砂、20. 褐色極細砂、21. 橙褐色極細砂、22. 暗褐色極細砂

第6図 狭間2号墓第1主体部平面・断面図  
上段は墓壇・棺表示礫検出状況、中段は木棺掘形検出状況、下段は完掘状況

伴って棺内に転落したものと考えられる。棺内の埋土上部から拳大の礫を多数検出した。これは舞鶴市川向2・3号墳、野田川町・宮津市霧ヶ鼻1号墳で見られた棺表示礫であると考えられる。棺蓋を閉じた後、ある程度埋め戻した段階で棺上に当たる部分に礫を置いたものが、棺の腐朽に伴って棺内に転落したものと考えられる。なお、木棺崩壊過程で、北側の長側板が内側に倒れた状況が土層断面から看取される。狭間墳墓群中で小口溝を検出したのはこの主体部のみである。



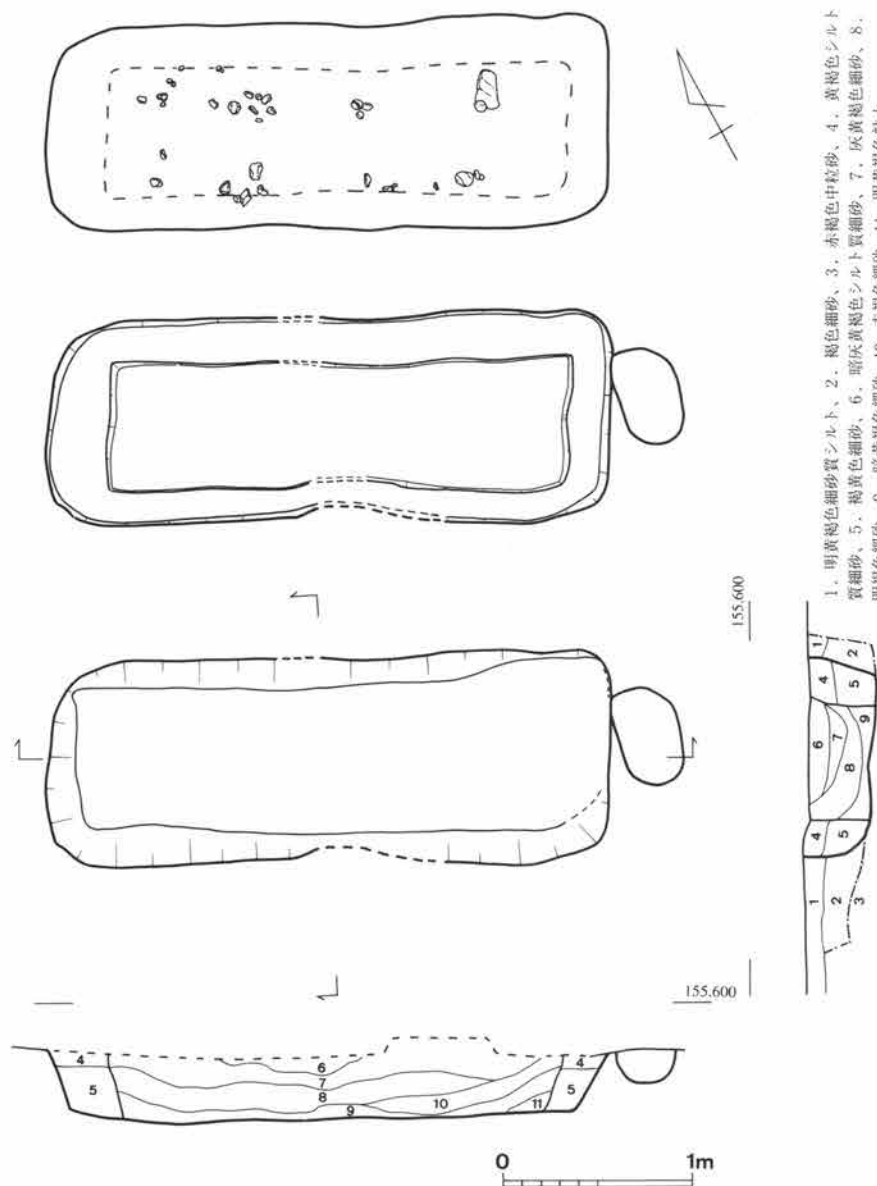
第7図 狭間墳墓群出土鉄器実測図

第2主体部は長軸2.94m・短軸1.06m・深さ35cmを測る長方

形の墓壙に、長軸2.35m・短軸0.56mを測る木棺を直葬している。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壙の断面形態は1段墓壙である。副葬品はなく、木棺埋土上層から棺表示礫が出土した。

第3主体部は長軸2.75m以上・短軸0.93m・深さ27cmを測る長方形の墓壙に、長軸2.5m以上・短軸西側0.57m・東側0.44mを測る木棺を直葬している。木棺掘形と土層断面の状況から木棺形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壙の断面形態は1段墓壙である。副葬品はなく、木棺埋土上層から棺表示礫が出土している。(福島孝行)

第4主体部は墳頂部北東側で第2主体部と一部重複する。切り合い関係からみて第4主体部が後に造られている。墓壙は56cm×36cmの南北に長い隅丸長方形の平面プランをもつ。木棺痕跡は認められないが、墓壙配置から主体部と考えられる。墓壙底は南半が若干低く、中央がさらに深く掘り込まれる。墓壙底から浮いた状態で壺上半部片が出土した。土壙墓に供献されたものか、



被葬者の遺体を覆うように設置されたもの、もしくは置土の上に設置された土器棺の可能性がある。土器は内面の器壁の荒れが確認できる。人骨・副葬品・着装品の類は検出されなかった。土器は1個体の破片のみであった。土器棺であれば、無蓋か、有機質の蓋を用いたと考えられる。底部付近は検出されなかったが、削平を受けたと考えられる状況であり、その過程で失われたのか、当初から備えないのか判然としない。

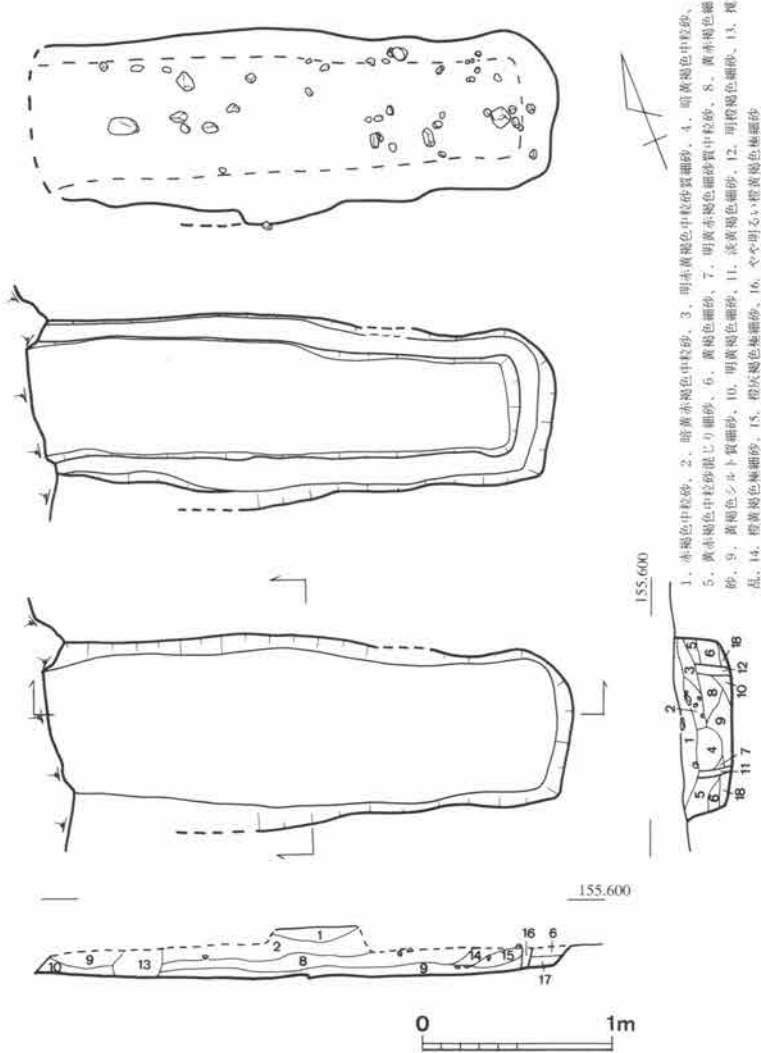
(三好 玄)

第8図 狭間2号墓第2主体部平面・断面図  
上段は墓壙・棺表示礫検出状況、中段は木棺掘形検出状況、下段は完掘状況

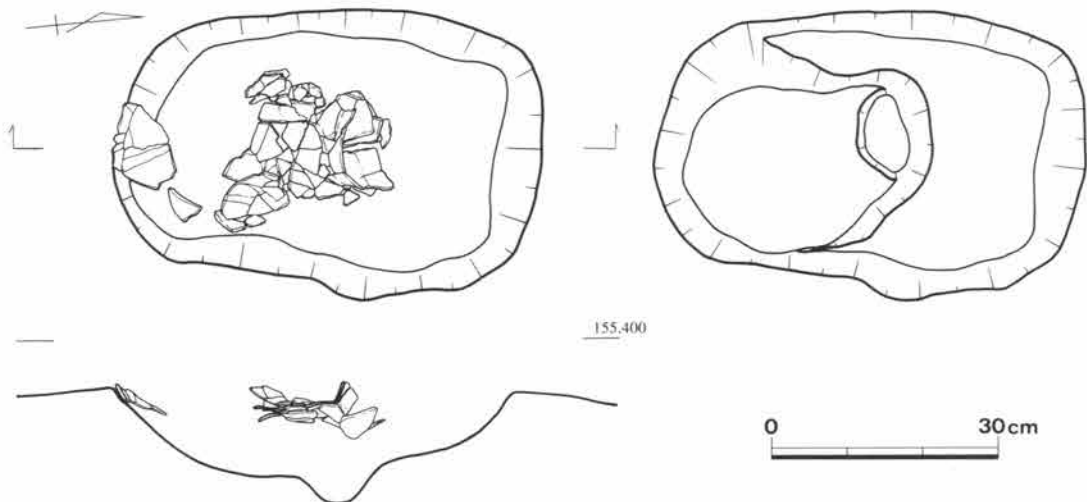
③狭間3号墓

**墳丘** 墳丘は北側を2号墓に、南側を4号墓に削られた残丘を利用し、削り出し・盛土ともに行っていないと思われる。しかし主体部は南北の溝の中間に設けられているため、この空閑地を墓域として意識していることは明らかである。そう考えると、墓域の南北は6.7mを測る。墓域の東側は若干低くなり、平坦地が広がっているため、東側については若干の削り出しを行っている可能性もある。この墓域の表土から弥生土器底部片が出土した(第38図3・4)。

**主体部** 主体部は長軸3.15m・短軸1.23m・深さ37cmを測る長方形の墓壇に長軸2.97m・短軸0.54mを測る木棺を直葬している。木棺掘形が墓壇小口まで到達していること、および土層断面の状況から木棺の形式は「H」形の組



第9図 狭間2号墓第3主体部平面・断面図  
上段は墓壇・棺表示礫検出状況、中段は木棺掘形検出状況  
下段は完掘状況



第10図 狭間2号墓第4主体部平面・断面図

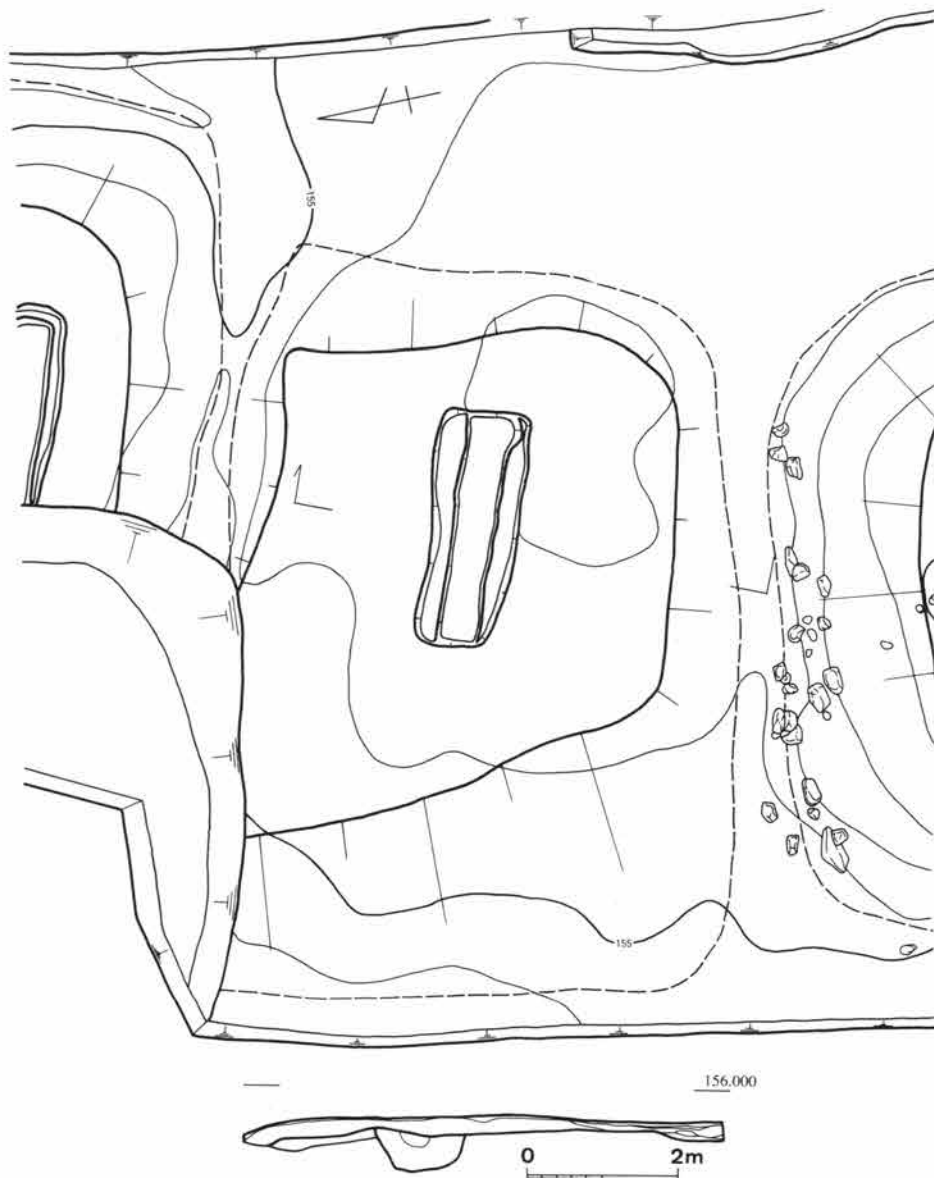
合式箱形木棺であると考えられる。墓壙は1段墓壙である。副葬品はなく、木棺埋土上層から棺表示礫が出土した。

④狭間4号墓(旧称瓜生野19号墳)

**墳丘** 4号墓は主軸を南北にとり、長軸10m・短軸9mを測る隅丸長方形の墳丘で、墳高は1.3mを測る。墳丘は旧表土を含め、削り出しによって高さ約1mの墳丘を作り、その上に約30cmの盛土を行って整形している。明らかに溝を掘っている部分は北辺と南辺のみで、東辺と西辺は削り出しを行うのみで溝の立ち上がりは見られない。また、南東部に地山を削り残した部分があり、削り残しと墳丘が接する部分に後述する貼石の1石が残存することからこの削り残しは意図的に行われたものであると判断される。そうであるならば、この部分は墓道である可能性もある。主体部は墳丘上平坦面に主軸を東西に揃えて2基設けられ、この内、南側の第1主体部の東辺を一部切って土器棺墓である第3主体部が設けられている。

外表施設

4号墓の墳丘裾から貼石の残欠と考えられる小児人頭大～人頭大の角礫が検出され、その転落石も見られる。石材はこの丘陵を構成する岩石と同じもので、丘陵内で採取できるものである。貼石は北辺と西辺で残りがよく、北辺には最大3段残っている部分がある。この貼石は日本海沿岸に弥生中期に広がり、後に四隅



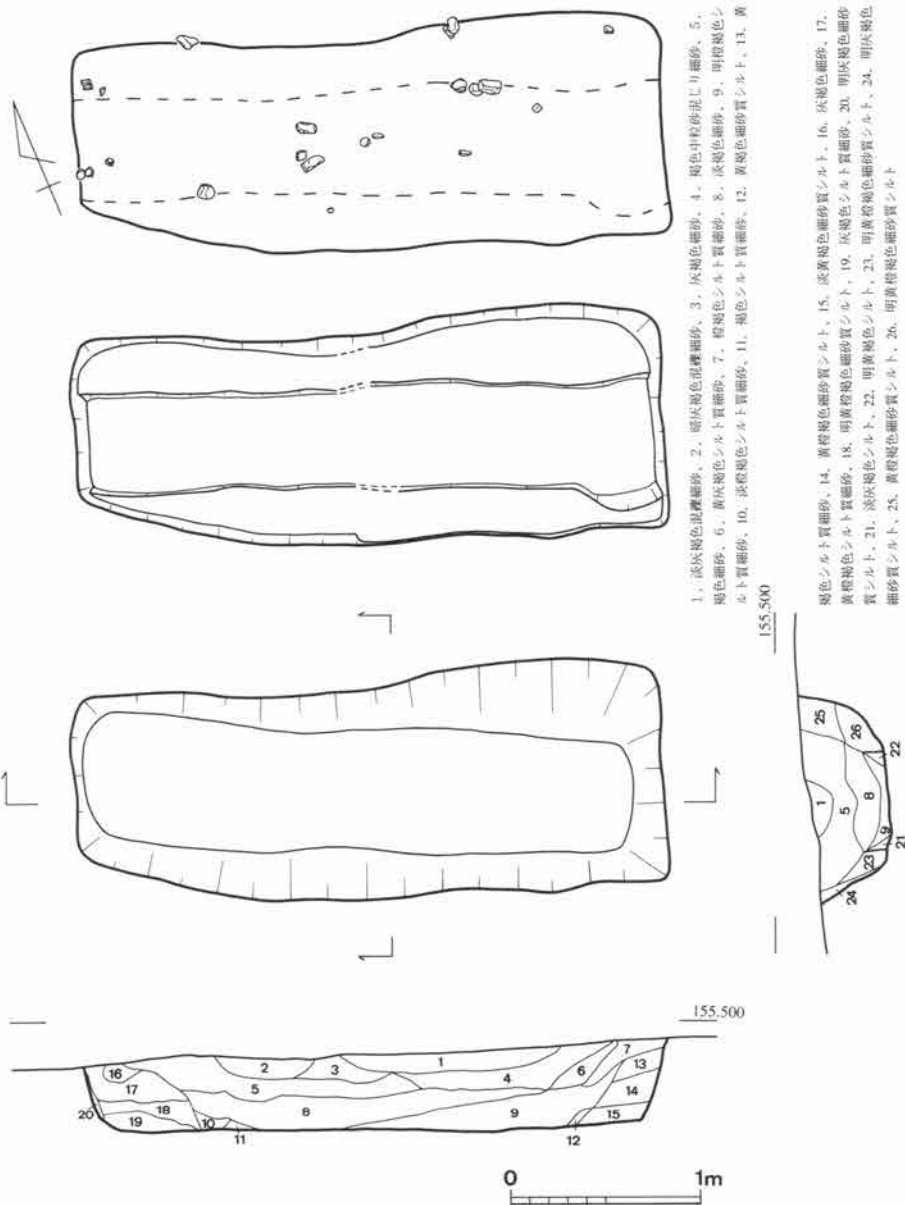
第11図 狭間3号墓平面・断面図

突出墓に受け継がれる貼石とは用いる石材が異なっており、むしろ兵庫丹波の鉄砲山墳墓や播磨の井の端墳墓群に見られる、弥生時代終末期の塊石を用いた貼石の影響を受けたと考えられる。

**主体部** 第1主体部は長軸3.51m・短軸1.62m・深さ48cmを測る長方形の墓壇に長軸2.34m・短軸0.77mを測る木棺を直葬している。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壇の断面形態は1段墓壇である。副葬品はない。墓壇内南東部、裏込めの上面に供献土器を検出した。甕の体部片である。完形にはならず、ごく一部だけが土圧で押しつぶされていた。甕の内面を上側に向けていた。墓壇上に置かれていたと見られる拳大の礫を木棺の東端、棺床から30cmほど浮いたレベルで検出した。石材はこの丘陵から採取可能なチャートである。さらに木棺中央部、初期流入土の直上で、人頭大の礫を検出した。これはそのレベルから棺蓋上から蓋材の腐朽に伴って転落したものと考えられる。石材はチャートである。両者は標石と考えられ

るが、特に後者は棺蓋上に置かれたと見られ、墓壇を掘り起こさない限り目に触れないものであるため、棺表示礫の一種と考えられる。

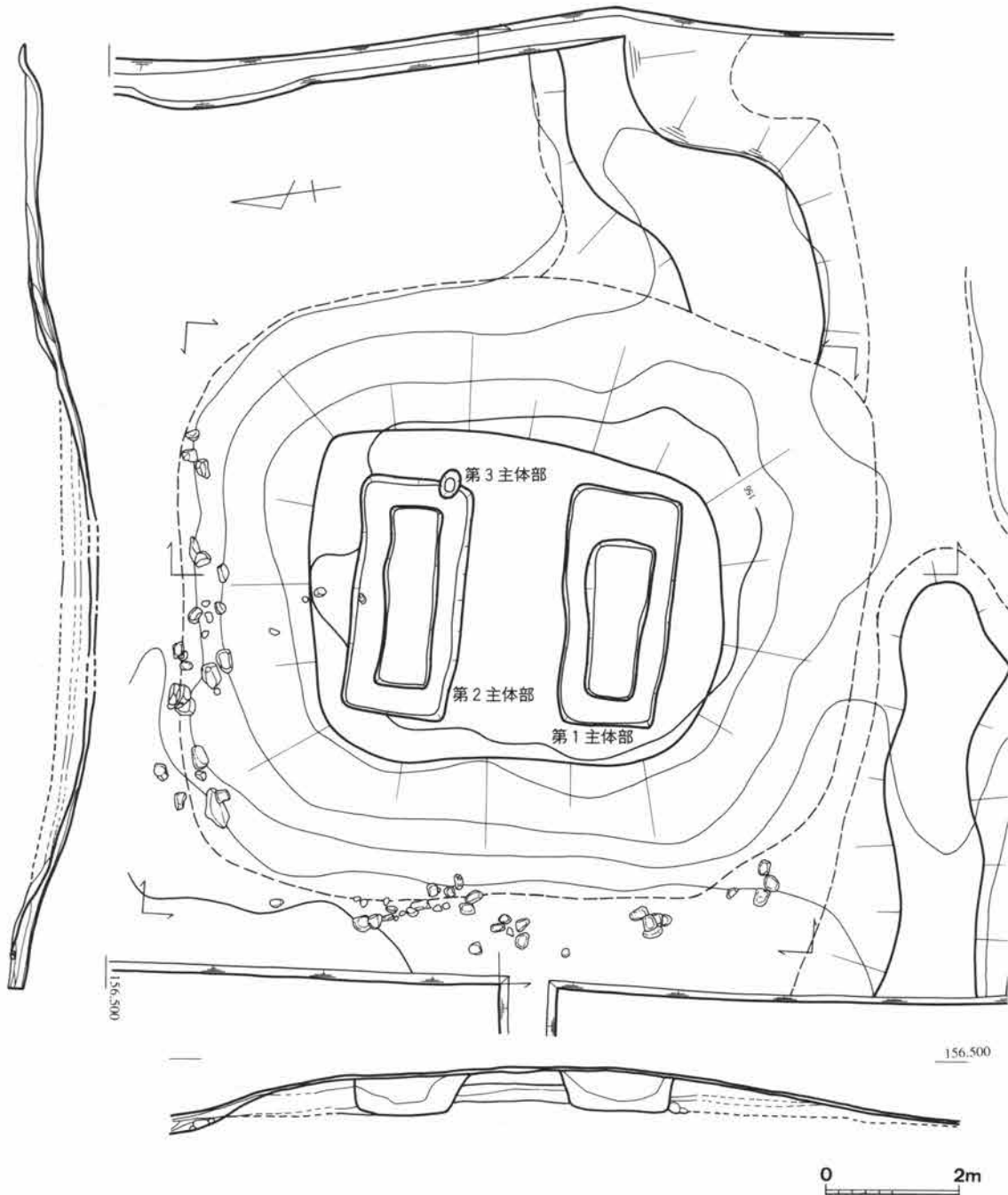
第2主体部は長軸3.53m・短軸1.61m・深さ51cmを測る長方形の墓壇に、長軸2.49m・短軸0.53mを測る木棺を直葬している。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壇の断面形態は1段墓壇である。副葬品はない。墓壇内中央部から西側にかけて最上層から供献土器が多数出土した。器種は壺・高杯・器台



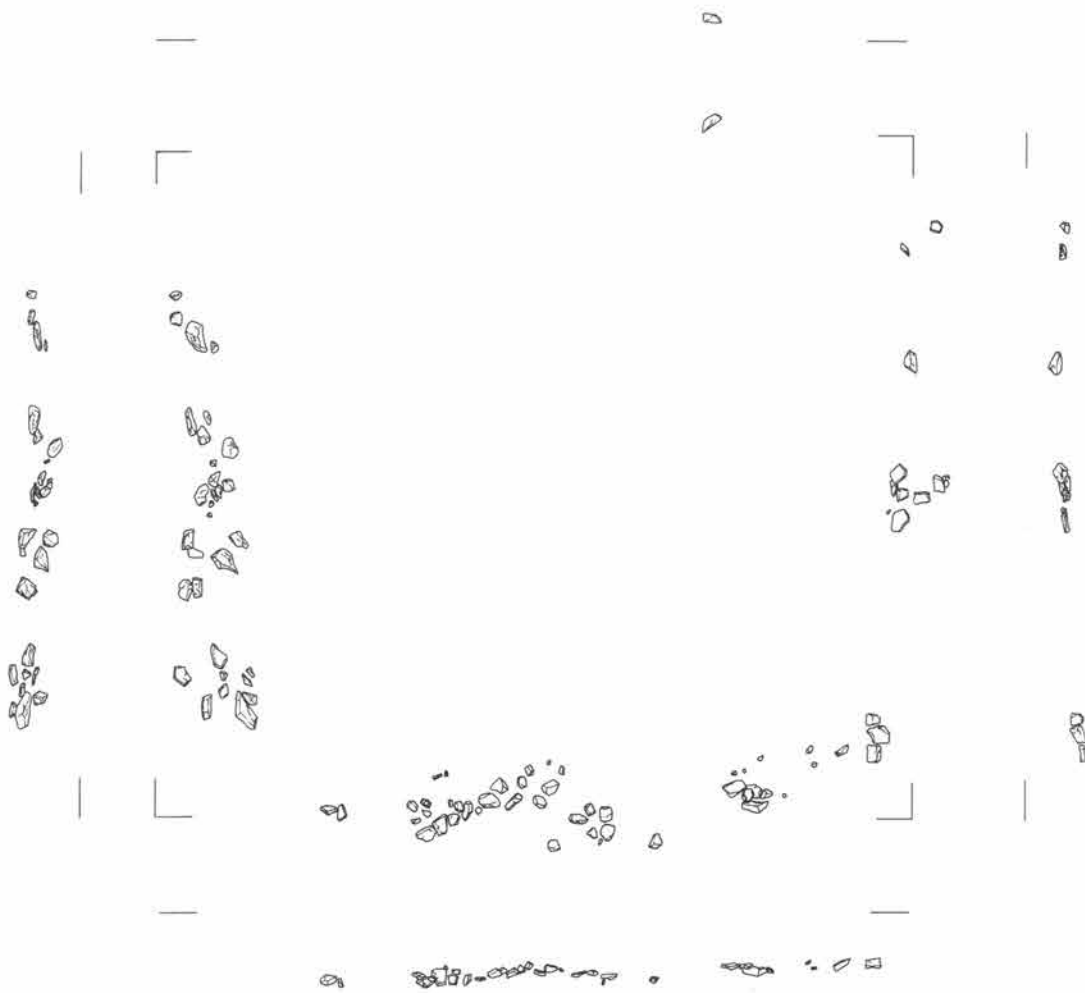
第12図 狭間3号墓主体部平面・断面図

である。土器は赤褐色で、その他の土器が淡橙色ないし淡褐色であることと対照的である。完形に組み上がるものはないが、最上層は木棺の腐朽・陥没に伴う陥没坑に堆積した二次堆積土であるため、これらの土器は墓壙上に置かれていたと判断される。したがって当初から細片化していたかは不明であり、たとえ細片化していたとしても最も類似しているのは峰山町赤坂今井墳丘墓第1主体部などで見られる墓壙上に細片化した土器を置くものであろう。墳丘周辺からも墓壙上から転落したと見られる赤褐色の土器片が出土した。(福島孝行)

第3主体部は墳頂部東側第2主体部と一部重複して位置する、土壙内に土器を設置した主体部

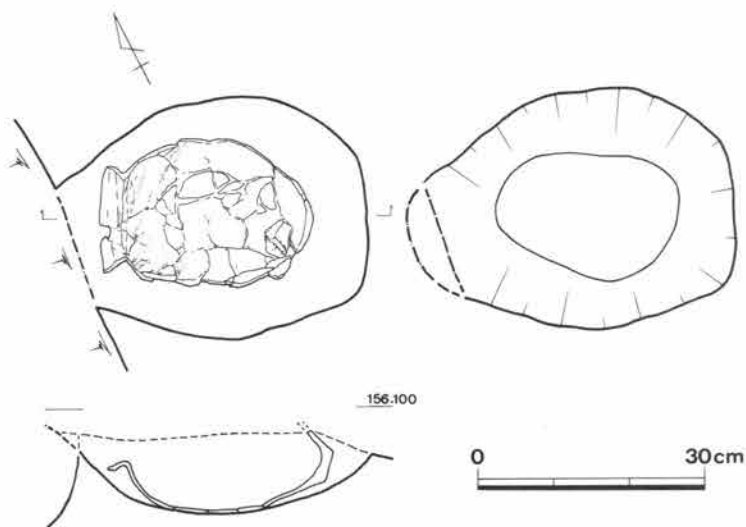


第13図 狭間4号墓平面・断面図



第14図 狭間4号墓貼石平面・断面図

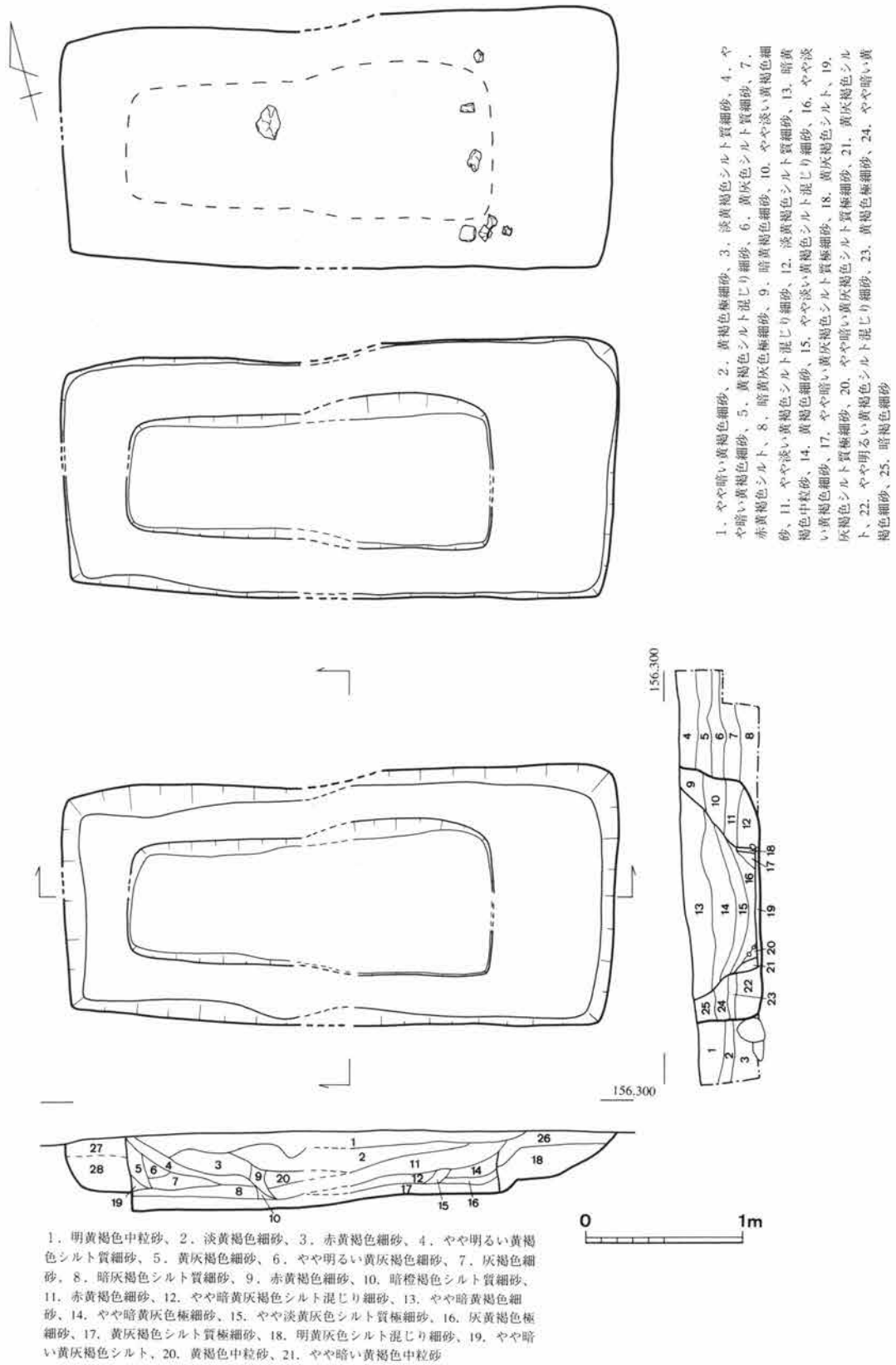
である。切り合い関係からみて第3主体部が後に造られている。墓壙は0.39m以上×0.31mの東西に長い楕円形の平面プランをもつ。甕の口縁部を西に向け、横倒しにして据える。人骨・副葬品・着装品の類は検出されなかった。上半は削平されていたが、下半は比較的良い状態であった。遺存する部分には意図的な穿孔、口縁部の打ち欠きなどは認められない。土器は



第15図 狭間4号墓第3主体部平面・断面図

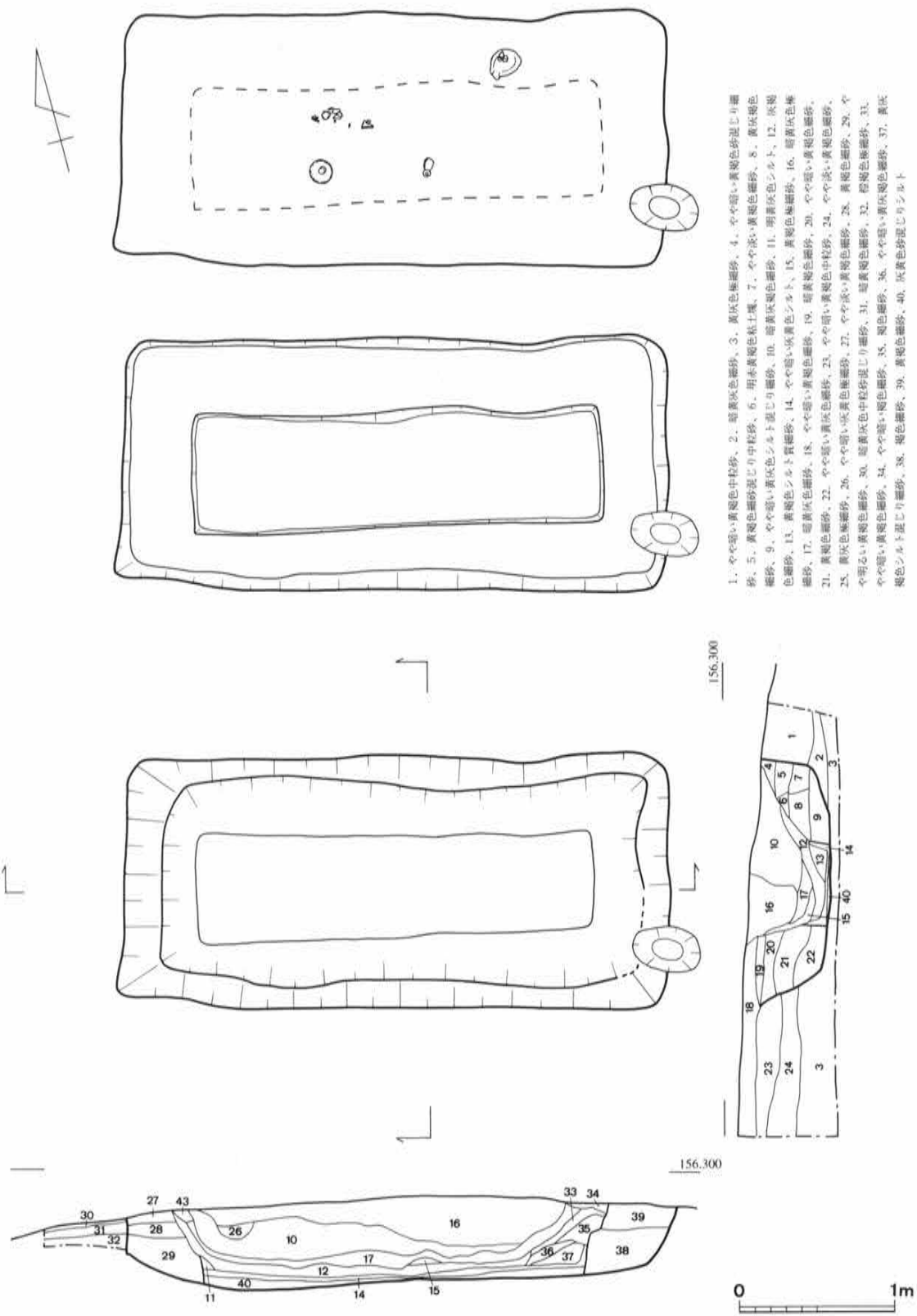
一個体の破片のみであった。無蓋か、有機質の蓋を用いたと考えられる。墓壙配置と土器内面の器壁の荒れが確認でき、土器を棺に用いたと考える。

(三好 玄)

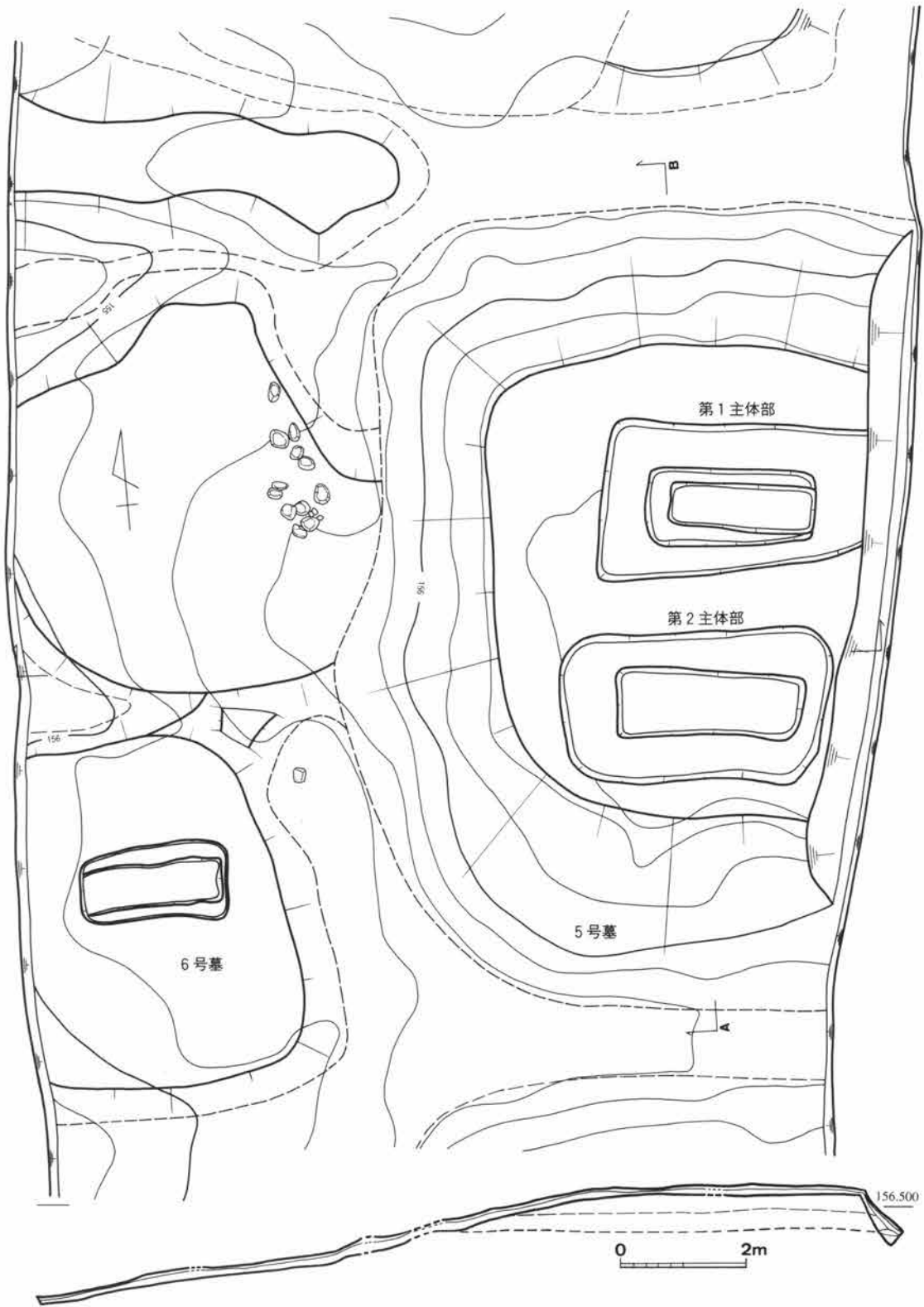


第16図 狭間4号墓第1主体部平面・断面図  
(上段：棺表示礫・土器検出状況、中斷：木棺掘形検出状況、下段：完掘状況)





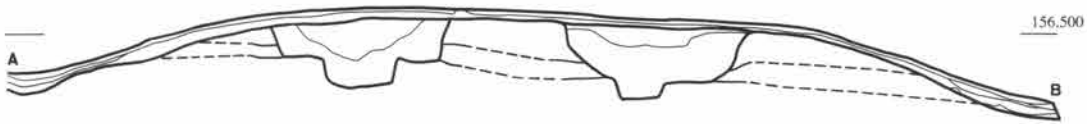
第17図 狭間4号墓第2主体部平面・断面図  
(上段：棺表示礎・土器検出状況、中断：木棺掘形検出状況、下段：完掘状況)



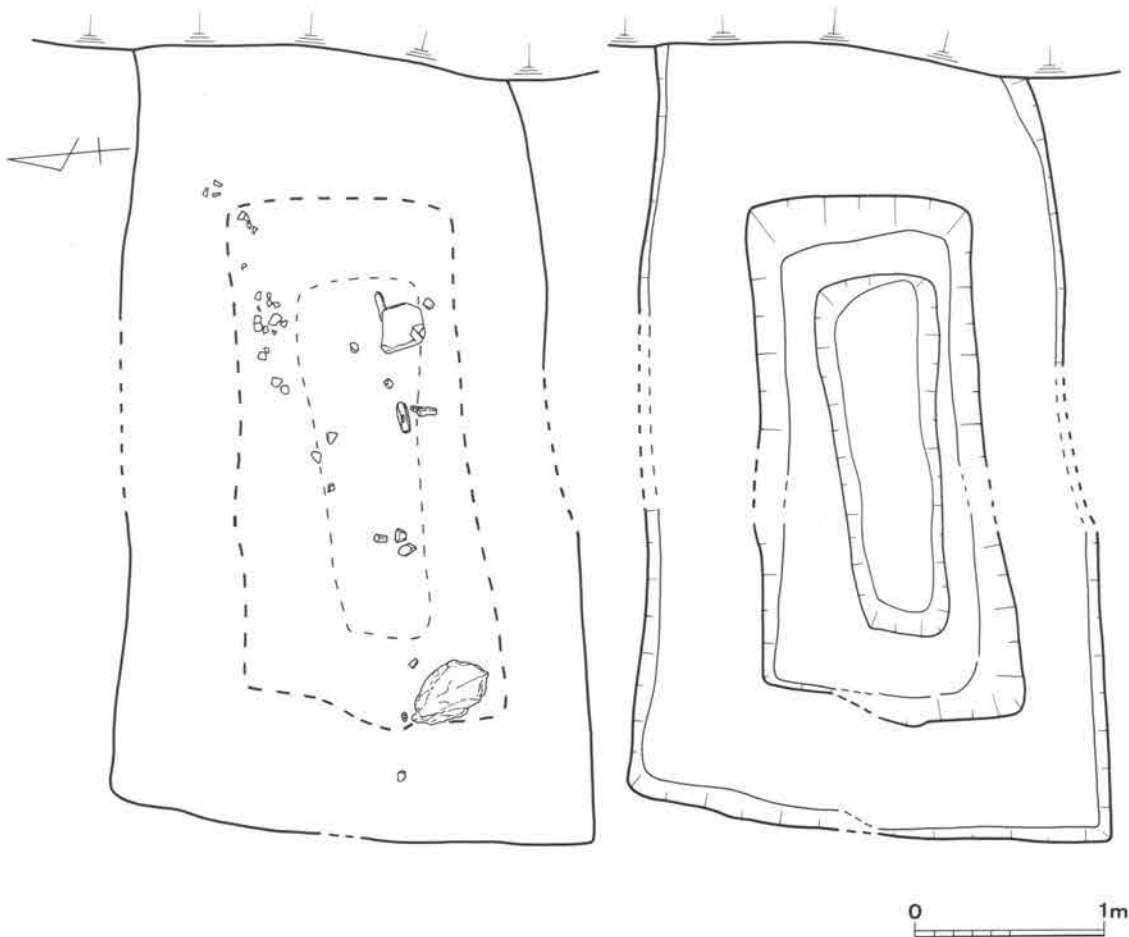
第18図 狭間5・6号墓平面・断面図

⑤狭間5号墓(旧称瓜生野20号墳)

墳丘 5号墓は東辺を里道により削平されている。主軸を南北にとり、長軸13.5mを測る隅丸長方形の墳丘で、墳高は1.4mを測る。狭間墳墓群中、9号墓に続く2番目の規模を誇る。墳丘は旧表土を含め、削り出しによって高さ約1.15mの墳丘を作り、その上に約25cmの盛土を行って整形している。明らかに溝を掘っている部分は北辺と南辺のみで、西辺は削り出しのみで溝の立ち上がりは見られない。また、西辺中央部に傾斜がややゆるく、突出するかに見える部分もあって、6号墳の周溝の陸橋部に接続する墓道を意識した造作である可能性がある。主体部は墳丘上平坦面に主軸を東西に揃えて2基設けられている。この内、北側の主体部を第1主体部、南側を第2主体部と呼ぶこととする。なお、墳丘西裾に弥生土器の壺を斜位に埋設した遺構を検出した。



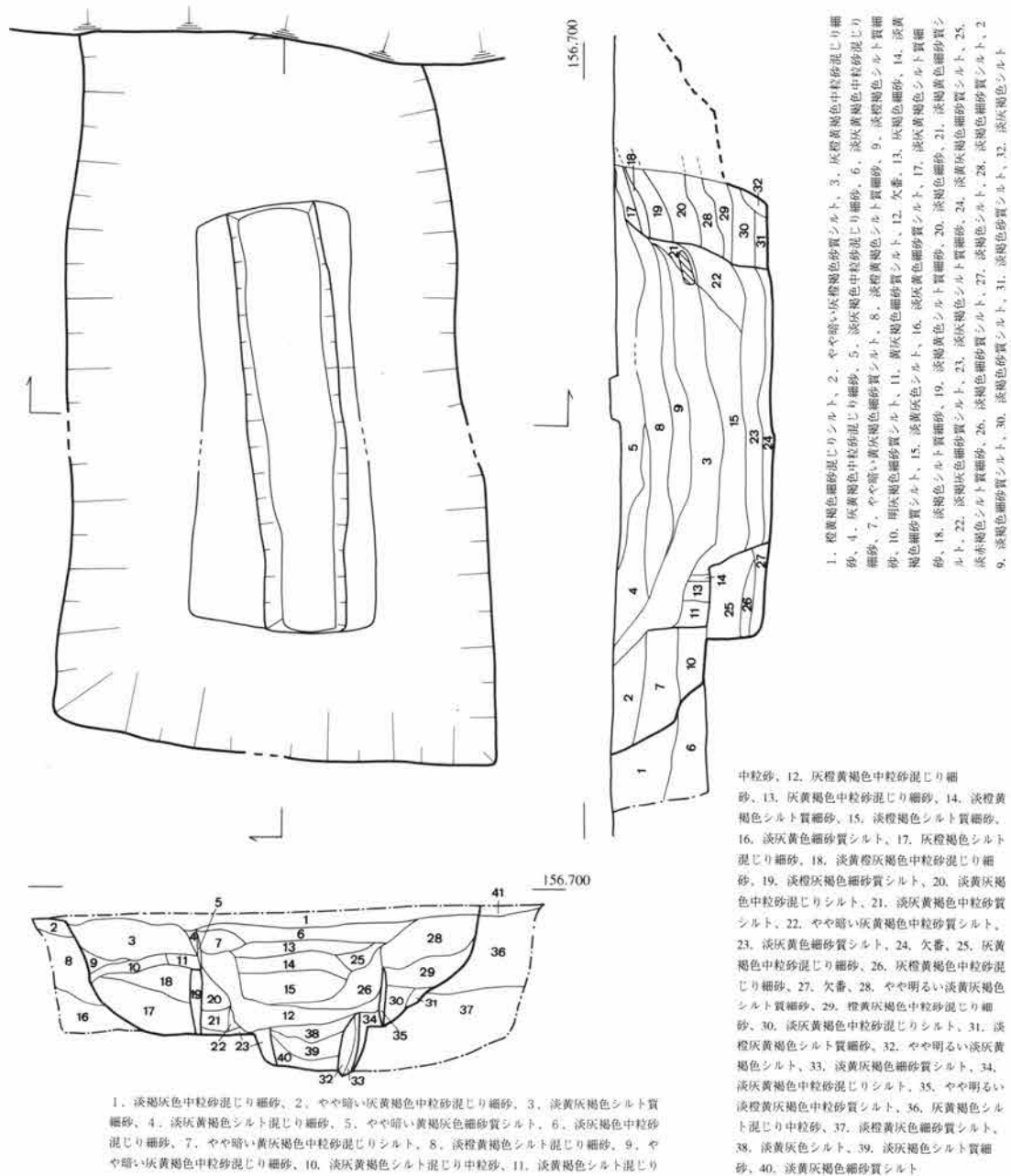
第19図 狭間5号墓断面図



第20図 狭間5号墓第1主体部平面図  
(左：墓壙上標石・供献土器出土状況図、右：棺内完掘状況)

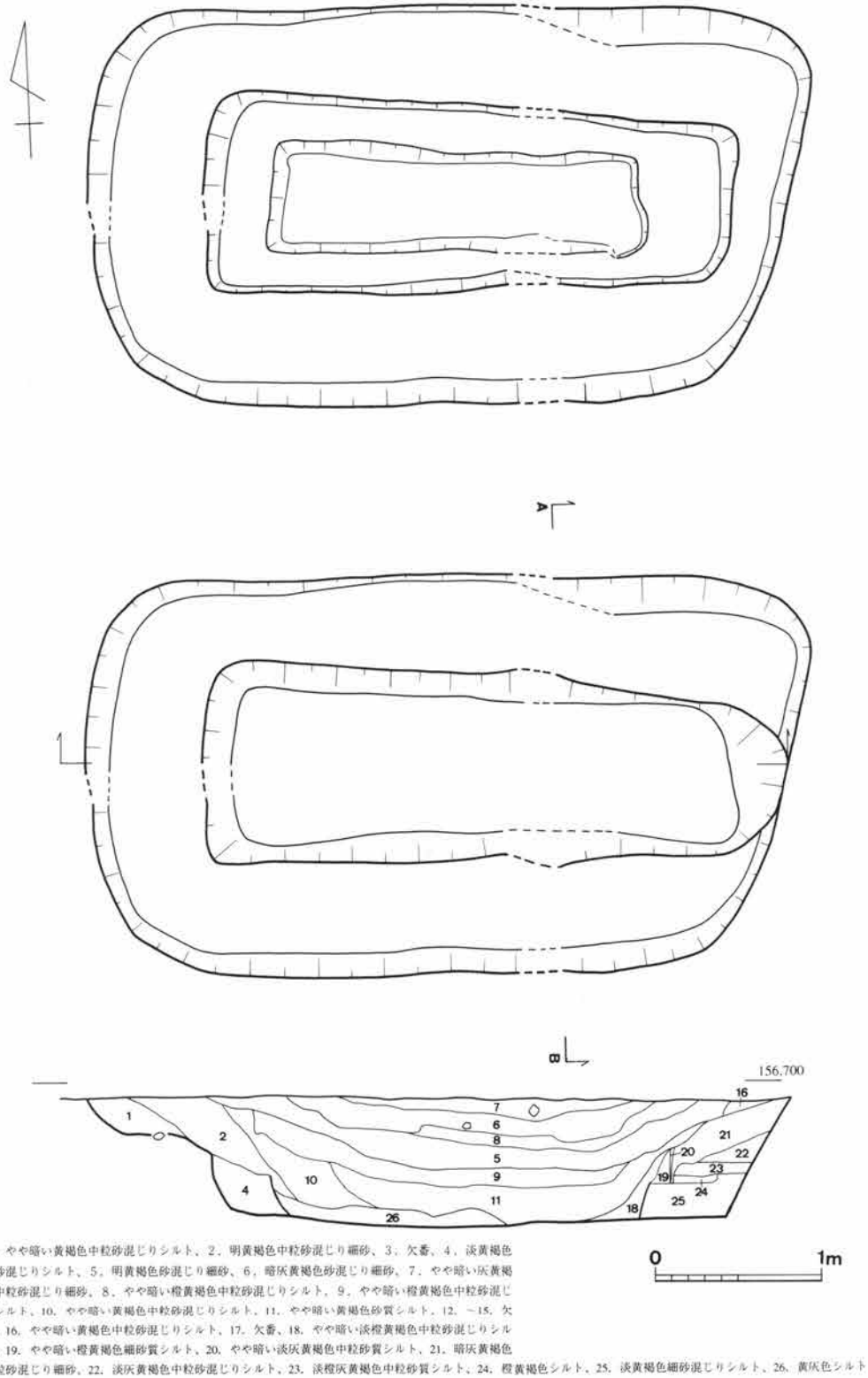
これも土器棺墓になる可能性がある。

**主体部** 第1主体部は長軸4.15m以上・短軸2.38m・深さ92cmを測る長方形の2段墓壙を持つ。第1段目の底部には長軸2.45m・短軸1.1mを測る範囲に板材による囲いを施し、長軸2.4m・短軸0.60mを測る2段目には長軸1.57m・短軸0.58mの木棺を設置する。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられるが、木棺の東西に東側で40cm、西側で50cm分の裏込めがあるため、木棺痕跡は検出できなかったものの「H」形になる可能性がある。副葬品はない。木棺北辺の棺床から35cmほど浮いた面で、供献土器片を検出した。これは南北断面の12層中であり、旧状を復原すると板材による囲いの蓋上に当たる位置から転落した可能性が高い。また墓壙内東半部、板材による囲いからその裏込め上にかけて供献土器を検出した。弥生土器の高杯・器台片である。完形にはならず、ごく一部だけが土圧で押しつぶされていた。

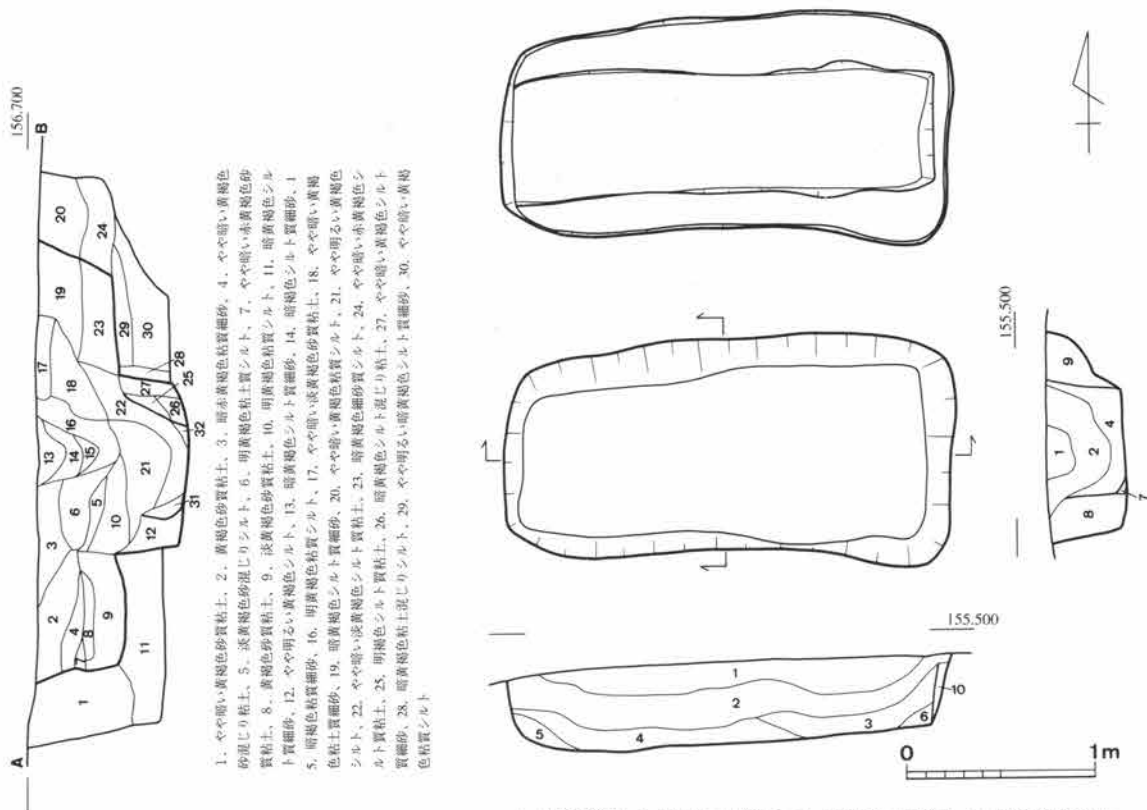


第21図 狭間5号墓第1主体部完掘状況平面・断面図

これらは6・7層に含まれ、7層は旧状を復原すると墓壙上に盛り上げられた蒲鉾状のマウンド上にあたり、土器はこの上に置かれたと考えられる。また、6層は板材による囲いの裏込め上面に堆積している。したがってこちらは裏込め上に置いたものと判断される。さらに板材による囲



第22図 狭間5号墓第2主体部平面・断面図  
(上段：棺内完掘状況、下段：完掘状況)



第23図 狭間5号墓第2主体部断面図

第24図 狭間6号墓平面・断面図

いの内部に落ち込んだ状態で、25cm四方の石材を検出した。また南西隅で長軸50cm・短軸40cmの石材を検出した。こちらは棺内側に傾斜し、木棺および板材による囲いの腐朽に伴って陥没した墓壙内に、転落しかけた状態であると解釈できる。双方ともチャートの角礫で、26層の上面であり、墓壙上の蒲鉾状マウンドの脇に置かれたと考えられる。この両者は標石と考えられる。

第2主体部は長軸4.34m・短軸2.38m・深さ76cmを測る長方形の2段墓壙である。第1段目の底部に長軸3.50m・短軸0.95mを測る範囲に板材による囲いを施し、長軸3.50m・短軸0.95mを測る2段目には長軸2.10m・短軸0.60mの木棺を設置する。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられるが、木棺の東西に東側で50cm、西側で35cmの裏込めがあるため、木棺痕跡は検出できなかったものの「H」形になる可能性がある。第1主体部では2段墓壙の2段めの幅いっぱい木棺を納めていたが、第2主体部では二段目を広く作り、木棺の長側板の外側に裏込めを施す。棺内に副葬品はなく、墓壙埋土、南北土層断面6層から鉄片が出土した。この鉄製品が何であるかは不明であるが、墓壙を埋め戻した後に置いたと考えられる。供献土器は墓壙上の陥没坑と考えられる層位中(13~15層)から細片となって出土した。

⑥狭間6号墓

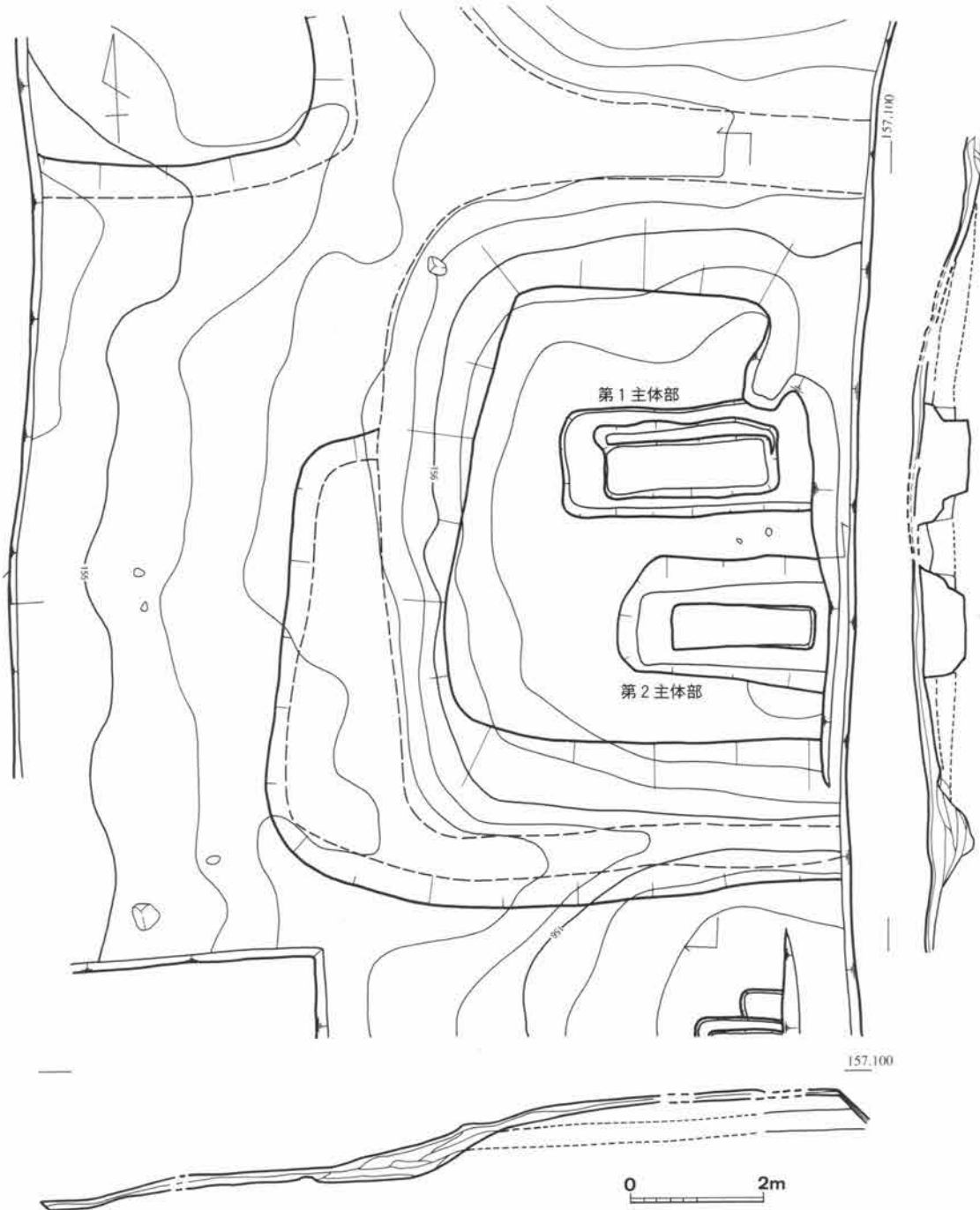
墳丘 6号墓は西辺が調査区外に伸びるため、東西の規模は不明であるが、南北6.3mを測る隅丸方形の墳丘で、墳高は20cmほどである。墳丘は削り出しによって整形している。盛土は行っていない。観察できる南北・東辺は溝を掘っている。また、周溝の北東隅に削り残した部分があ

り、この部分は墓道を意識した可能性がある。主体部は墳丘上平坦面に1基設けられている。

**主体部** 長軸2.35m・短軸1.12m・深さ41cmを測る隅丸方形の1段墓壇に長軸2.22m・短軸57cmの組合式箱形木棺を納める。墓壇の南辺は一部テラスを造り出す。遺物は出土しなかった。

⑦狭間7号墓(旧称瓜生野21号墳)

**墳丘** 7号墓は東辺を里道により削平されている。南北10.1mを測る隅丸方形の墳丘で、墳高は約1mを測る。墳丘は旧表土を含め、削り出しによって高さ約60cmの墳丘を作り、その上に約40cmの盛土を行って整形する。北辺は5号墓と溝を共有し、南辺から西辺の南半分まで、溝を掘

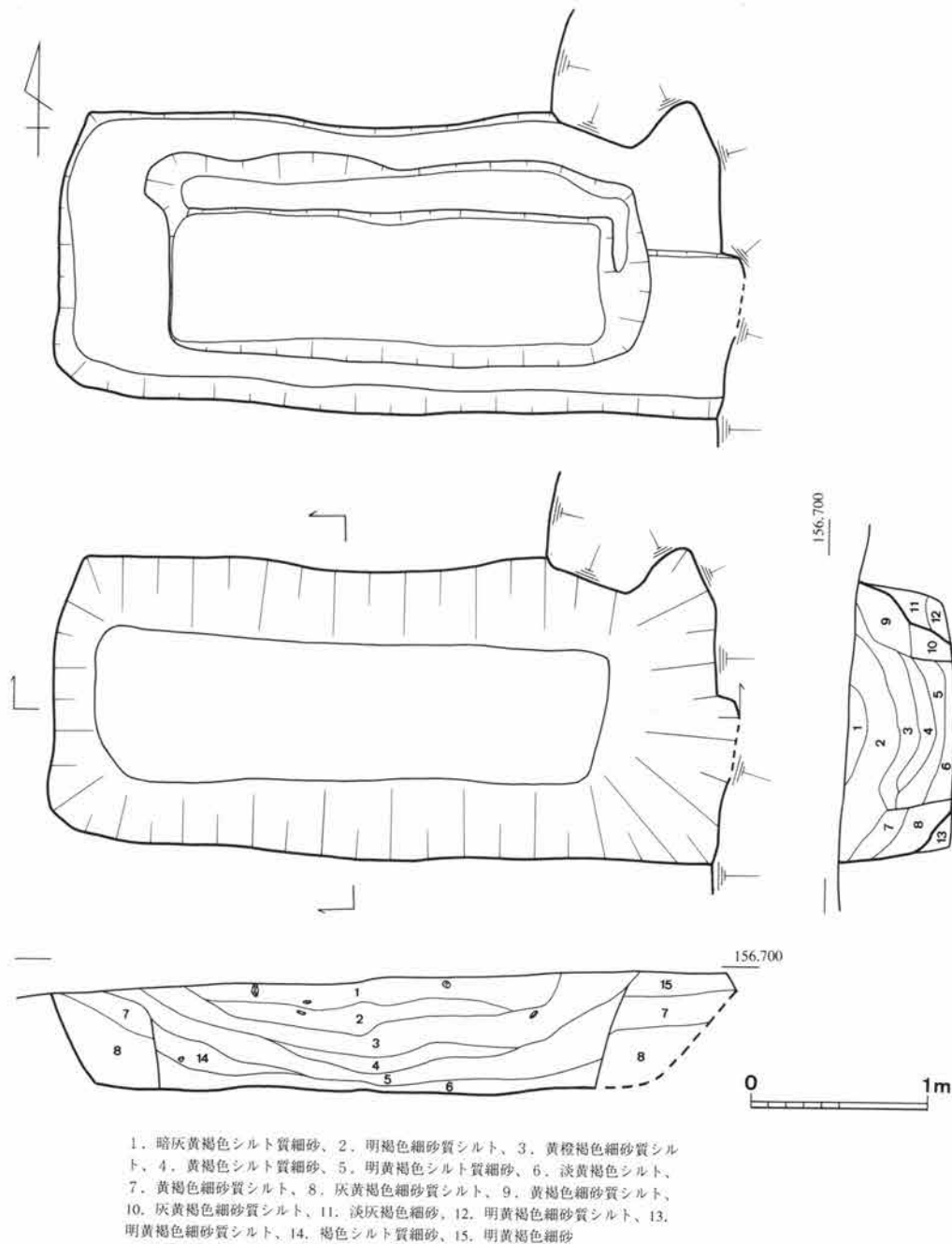


第25図 狭間7号墓平面・断面図

る。西辺の溝は北へ行くほど浅くなり、北半は削り出しのみの整形となる。主体部は墳丘上平坦面に主軸を東西に揃えて2基設けられ、北側の主体部を第1主体部、南側を第2主体部と呼ぶ。

**主体部** 第1主体部は長軸3.8m以上・短軸1.6m・深さ65cmを測る長方形の墓壇に、長軸2.47m・短軸0.77mを測る木棺を直葬する。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壇の断面形態は1段墓壇である。副葬品はない。

第2主体部は長軸3.65m以上・短軸1.8m・深さ62cmを測る隅丸長方形を呈する2段墓壇である。長軸2.10m・短軸1.07mを測る2段目には、長軸2.0m・短軸0.68mを測る木棺を直葬して



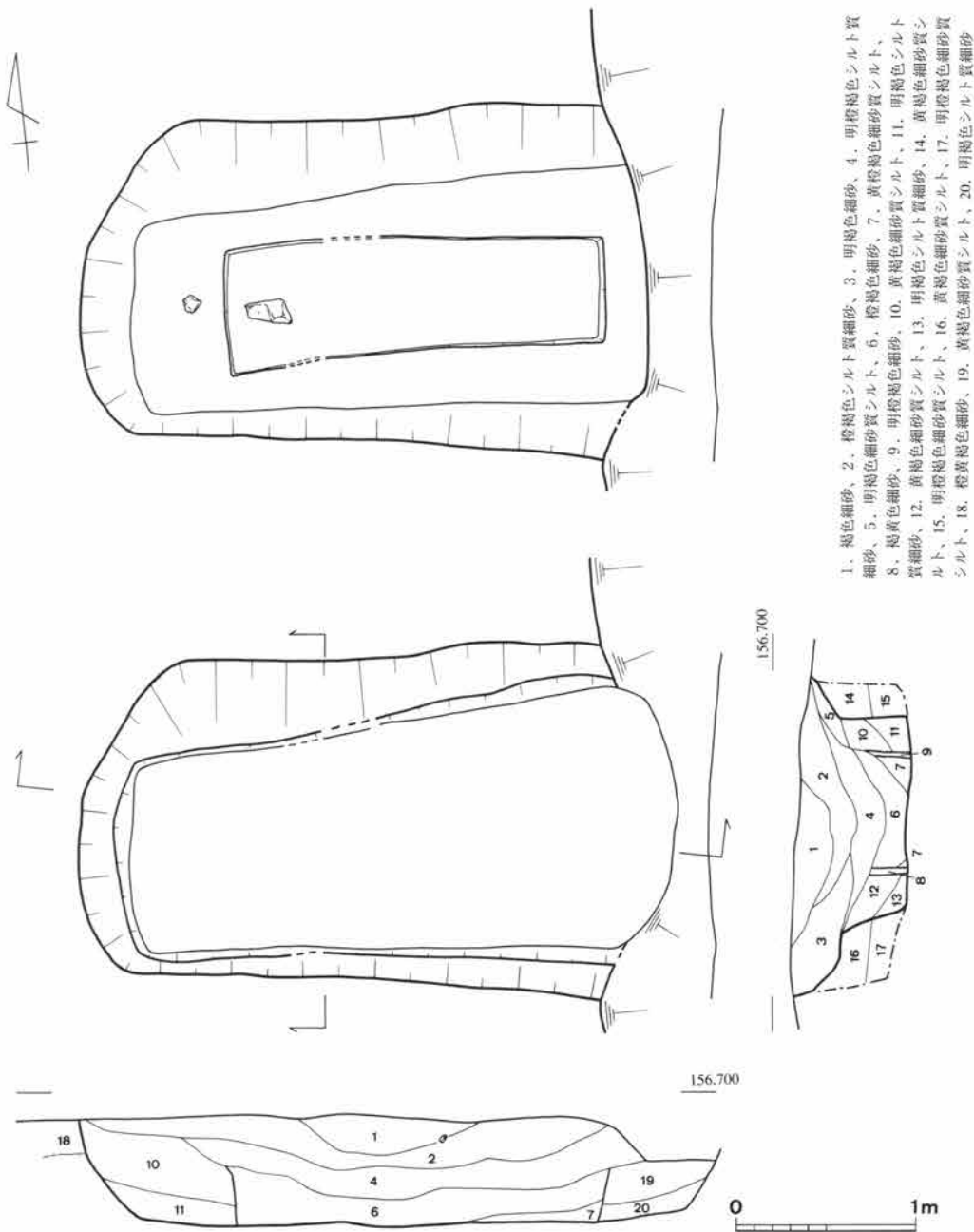
第26図 狭間7号墓第1主体部平面・断面図  
(上段：木棺掘形検出状況、下段：完掘状況)



いる。土層断面の木棺痕跡から、木棺幅の内法は0.62mであったと考えられる。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。副葬品はない。墓壙上や西寄りに人頭大の角礫を検出した。石材はチャートで、標石であると考えられる。

⑧狭間8号墓

墳丘 8号墓は7号墓と9号墓の溝の間に残された空闲地を墳丘として利用したものであり、盛土を持たない。しかし、墓壙はこの空闲地の中心を占めるように位置していることから空闲地を墓域として意識していることは間違いない。墓域の南北の長さは8.5mである。墳丘の中央には主軸を東西にとる主体部が3基切り合っており、南側から第1～3主体部と呼ぶ。切り合いも、

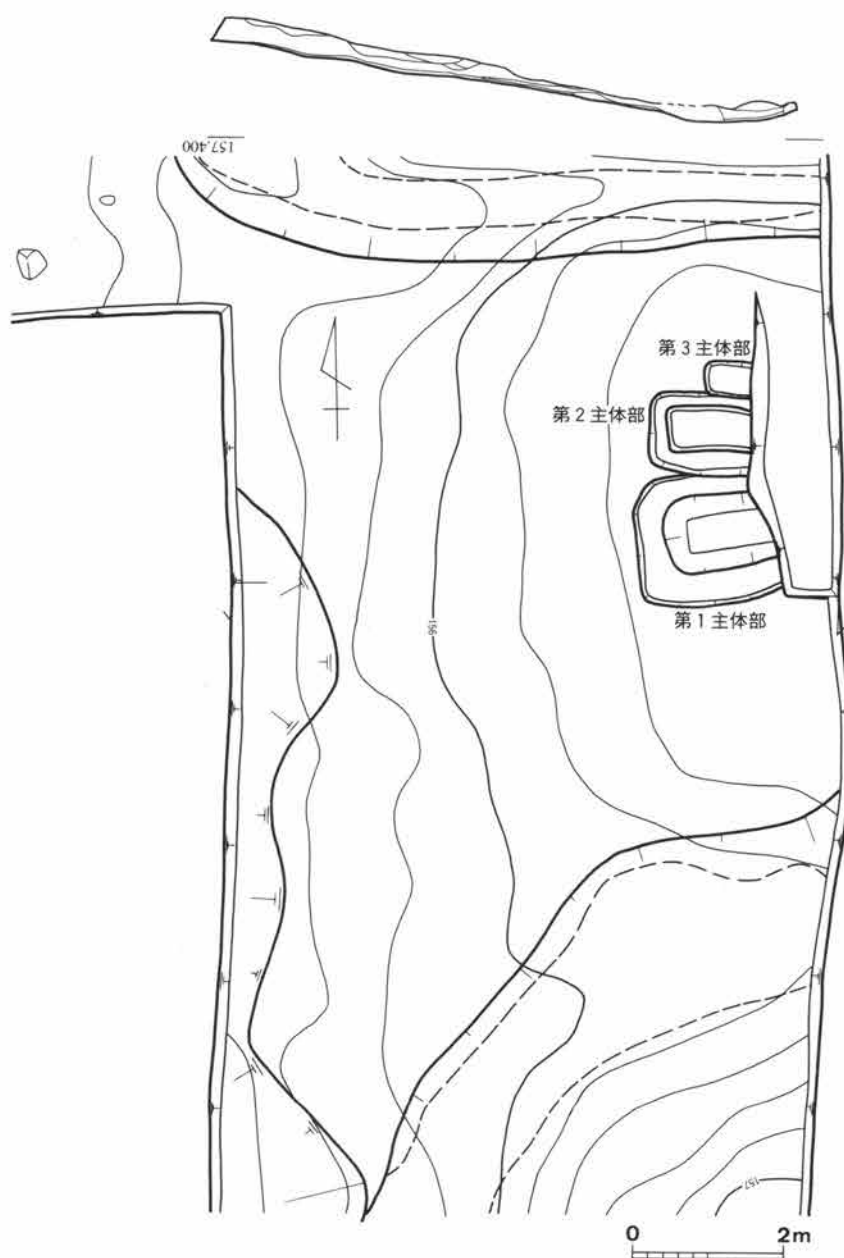


第27図 狭間7号墓第2主体部平面・断面図  
(上段：木棺掘形検出状況、下段：完掘状況)

第1・2・3主体部の順に新しい。第3主体部からは土器片が底面から出土した。また、墳丘の東側を大きく里道が占めているため、主体部の東半分は調査できなかった。

**主体部** 第1主体部は長軸2.1m以上・短軸1.67m・深さ70cmを測る隅丸長方形の墓壇に長軸1.9m以上・短軸0.46mを測る木棺を直葬している。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壇の断面形態は1段墓壇である。副葬品はない。

第2主体部は長軸1.57m以上・短軸1.07m・深さ40cmを測る長方形を呈する墓壇に、長軸1.26m以上・短軸0.40mを測る木棺を直葬している。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壇の断面形態は一段墓壇である。副葬品はないが、墓壇上面から壺の口縁部片(第39図34)が出土した。(福島孝行)

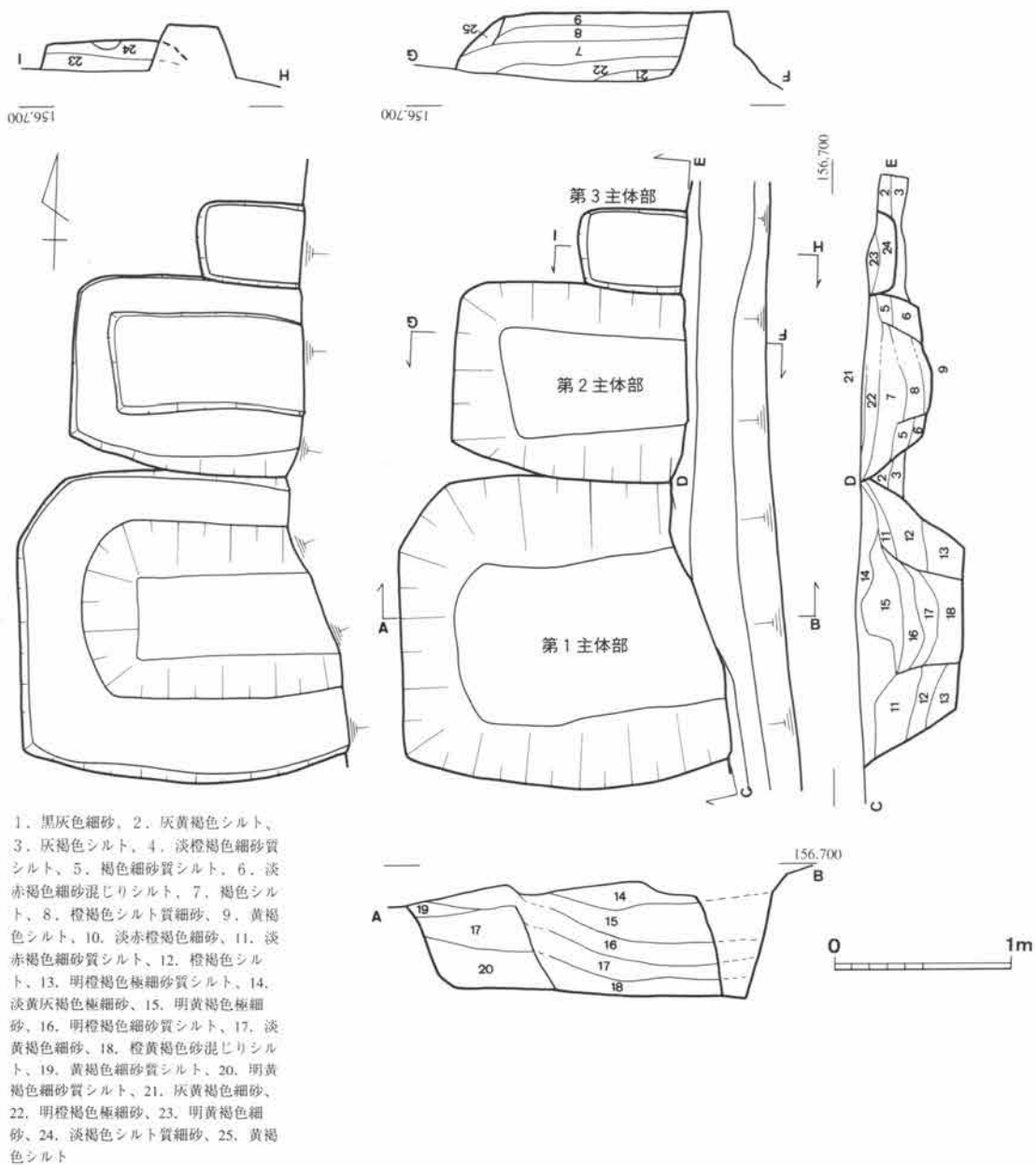


第28図 狭間8号墓平面・断面図

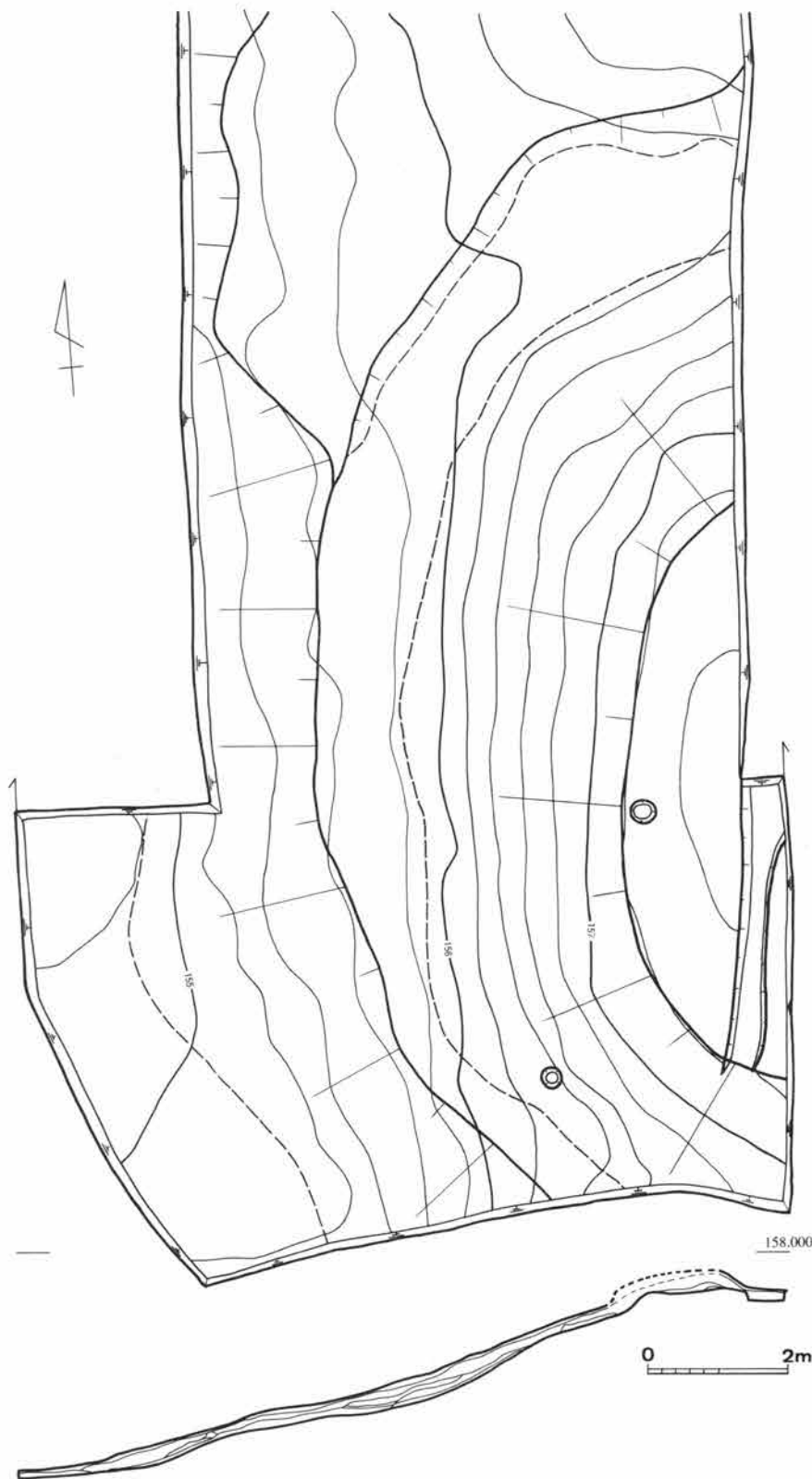
第3主体部は墳頂部北側に位置し、長軸は現存する部分で57cm、短軸は48cmを測る。木棺痕跡は認められなかった。人骨・副葬品・着装品の類は検出されなかった。墓壙配置から主体部と考えられる。墓壙底から壺の肩部片が出土した。被葬者の遺体を一部覆うためか、もしくは墓壙内破碎土器供献に用いられた可能性があるが、他に破碎土器供件事例が無いことから、前者の蓋然性が高い。(三好 玄)

⑨狭間9号墓

墳丘 墳丘の東側の大半が調査対象地外へ伸び、西側の1/3が調査できたに過ぎない。墳丘は復元的に計測すると、長軸15mほどを測る隅丸長方形となり、墳高は1.6mを測る。これは狭間墳墓群中では最大規模となり、文化財保護課が立会調査を行うこととなった。周溝は北西側にの



第29図 狭間8号墓主体部平面・断面図



第30図 狭間9号墓平面・断面図

み見られ、南半分は削り出しにより墳丘下半を整形する。墳丘上部は盛土を行う。墳頂平坦面はわずかしか調査できず、主体部の検出には至らなかった。溝内から弥生土器片が少数出土した。

⑩狭間10号墓

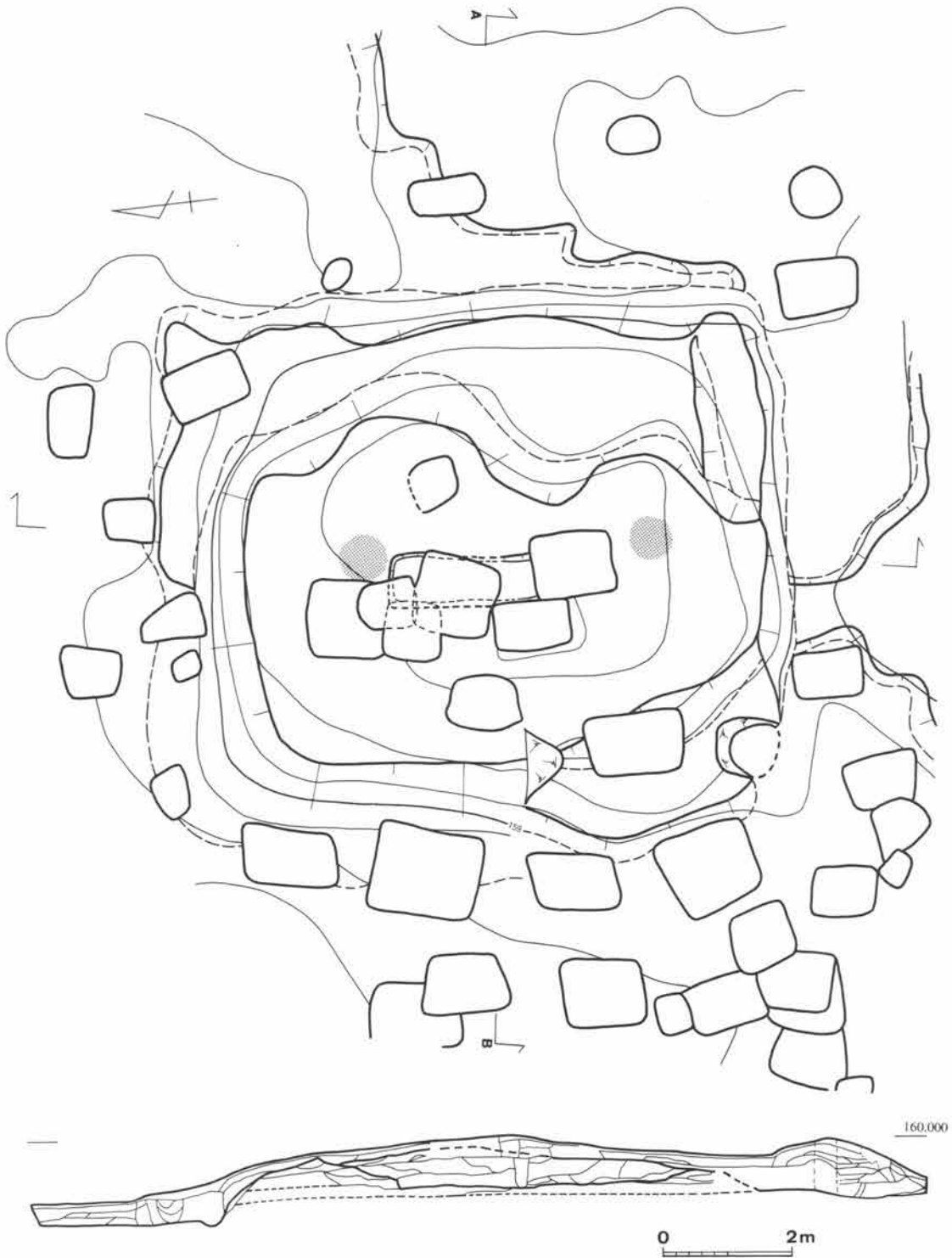
墳丘 10号墓は現代の墓地である瓜生野墓地の改葬のため、調査対象地外となった。したがって、ここでは現況から観察される状況について触れる。墳丘は一辺10m前後と推定され、現状での墳高は70cm程度である。この墳丘上には近世墓の陥没によると見られる凹地が多数見られ、舟形板碑が1点立っていた。

⑪狭間11号墓(旧称瓜生野22号墳)

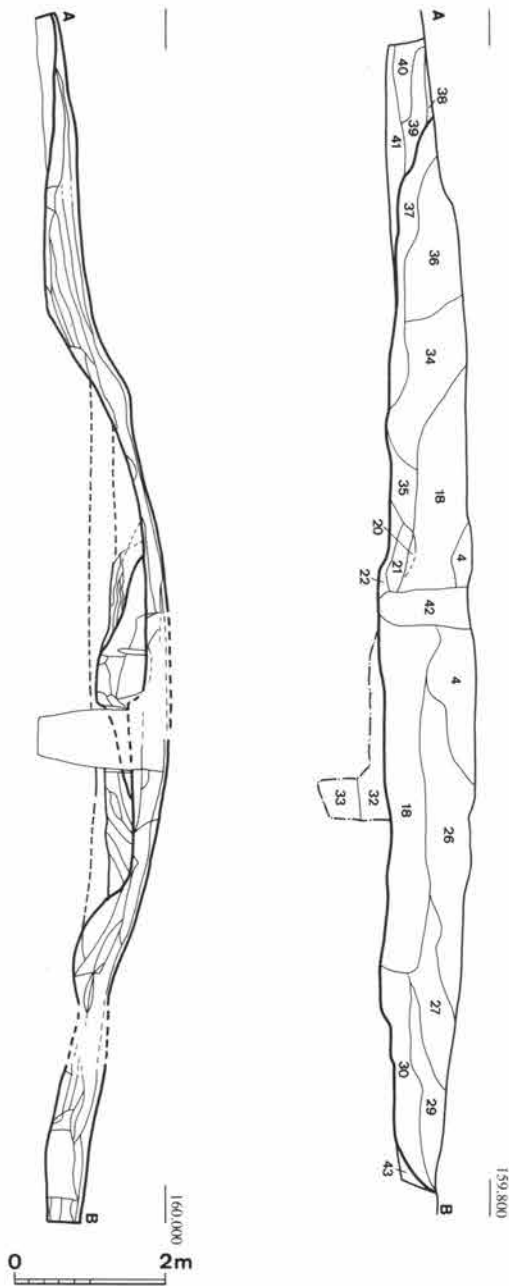
墳丘 11号墓は南北辺が10m、東西辺が9mを測る長方形の墳丘で、

墳高約1mを測る。墳丘上は中世の壺棺墓と近世の土壙墓でかなり激しい削平を受けている。また、墳丘の南側には近世墓のマウンドが取り付く。墳丘の下半を削り出しによって整形しているが、上半は以下のような工程で構築されている。

1. 削り出しにより墳丘下半を台状に整形し、上部平坦面の縁に沿って盛土で堤を形成する。



第31図 狭間11号墓平面・断面図  
(アミは土器出土位置、左が1群、右が2群)



第32図 狭間11号墓断面図 第33図 狭間11号墓主体部断面図

東西の一辺が8.5mを測る方形の墳丘で、墳高は80cmを測る。墳丘はほとんどを削り出しによって築かれ、一部盛土も見られる。また、墳丘南側および西側裾部は溝状に掘られている。12号墓の墳丘は、後世に西側を主体部の西端が失われるほど大きく削平されている。また墳丘上および墳丘周辺部に近世の土壙墓が数多く掘り込まれ、墳丘の残存状態は非常に悪い。墳丘の削平に伴って流出したと見られる弥生土器片が北側・西側斜面を中心に出土した。

**主体部** 主体部は東西方向に主軸をとる2基を検出した。北側のものを第1主体部、南側のものを第2主体部と呼ぶこととする。

2. 次に堤の内側に墳丘の中心に向かって傾斜する斜面を形成するように盛土を行う。

3. 斜面が完成した段階で墳丘の中心部をわずかに掘りくぼめ、木棺を安置する。

4. 木棺の上面まで盛土を行う。

5. 木棺に蓋をした後、完全に埋め戻し、供献土器を置く。

こうした工程の復原から、11号墓は構築墓塚の一種であると判断される。

また削り出しにより墳丘の南側は溝状に掘削されているが、墳丘南辺の中央部分に浅く掘り残されている部分があり、陸橋を意識していると考えられる。

**主体部** 主体部は上述したように構築墓塚の一種であり、主軸を南北にとる。近世墓による削平のため、木棺部分はほとんど残っていなかったが、部分的に残る土層断面から箱形木棺を直葬したものであると考えられる。規模は南北の長軸が2.2m以上、短軸が7.2mを測る。副葬品は出土しなかった。供献土器は木棺北辺の上部に当たる墓塚上と墳丘上平坦面南東隅の墓塚上から近江の影響を強く受けた甕、在地の壺が出土した。

⑫狭間12号墓(旧称瓜生野23号墳)

**墳丘** 12号墓は南北の一辺が9m、

第1主体部は長軸3.3m以上・短軸1.2m・深さ55cmを測る隅丸長方形の2段墓壇で長軸2.2m・短軸0.45mを測る木棺を直葬する。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壇上面から弥生土器の壺の体部片(第39図38)が出土した。この土器は部分的に赤色顔料が残っており、供献土器であることが推定される。棺底東寄りにまともってガラス小玉340点以上が出土した。当初から玉の緒を切っていたらしく、連をなしている部分はない。

第2主体部は長軸3m以上・短軸0.98m・深さ43cmを測る長方形を呈する墓壇に、長軸2.15m以上・短軸0.50mを測る木棺を直葬している。木棺掘形および土層断面の状況から木棺の形式は組合式箱形木棺であると考えられる。墓壇の断面形態は1段墓壇である。副葬品はないが、墓壇上面から土器の細片が出土した。

### ⑬狭間13号墓

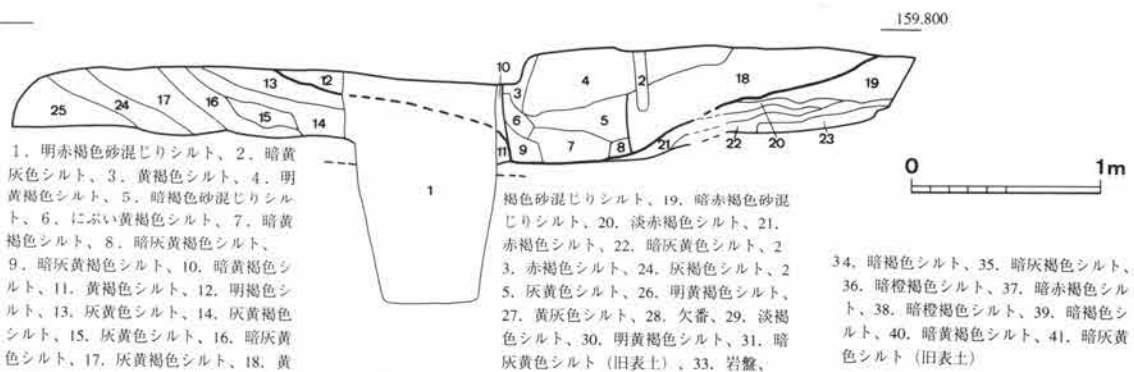
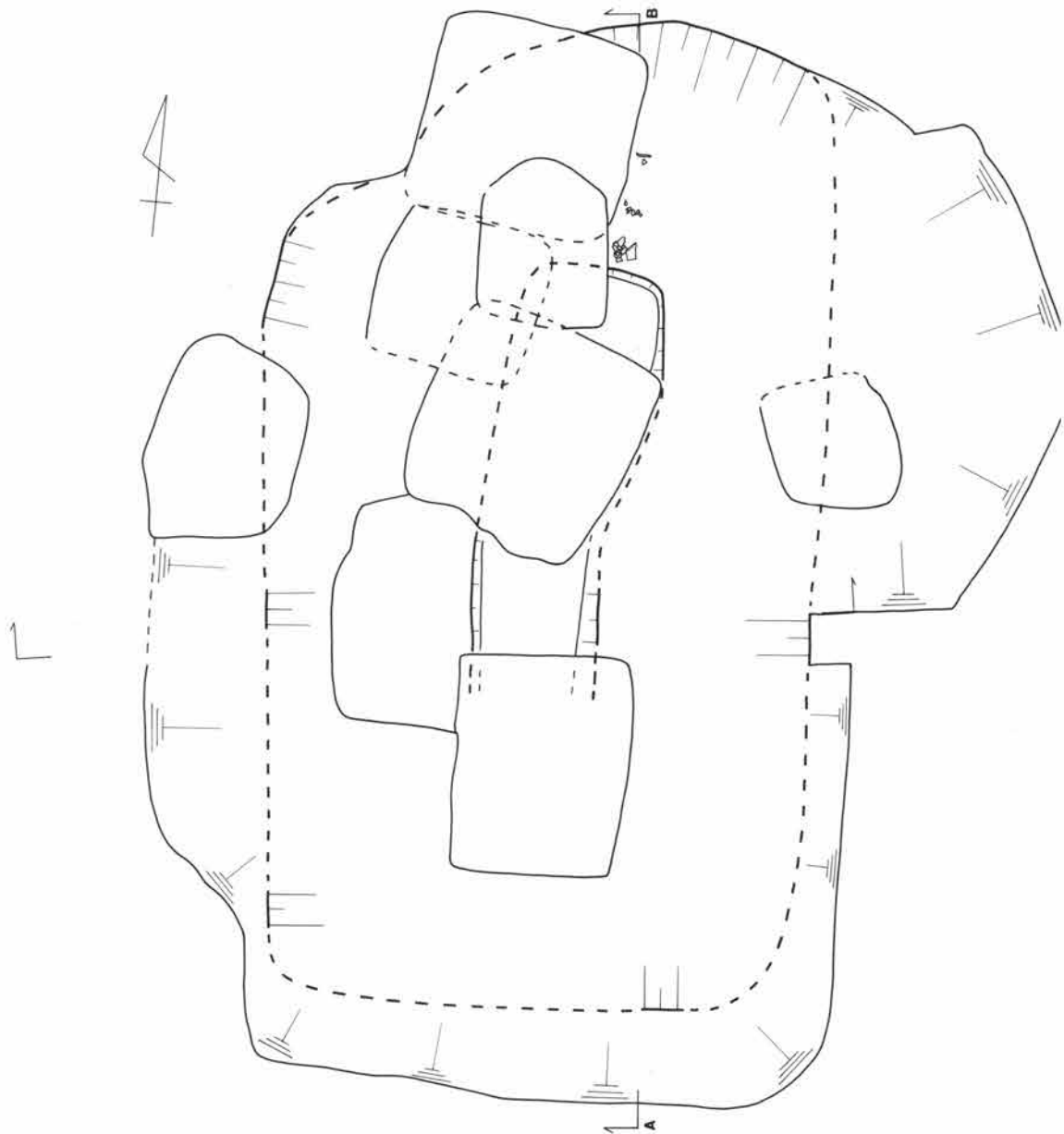
**墳丘** 13号墓は南北辺が12.5m・東西辺が8.0mを測る長方形の墳丘で、墳高は60cmを測る。墳丘は削り出しによって整形されている。13号墓の墳丘は、南側が失われるほど大きく削平されている。特に墳頂部には水輪などを埋めたマウンドを持つ近世墓が構築されていたため激しい破壊を受けている。また墳丘そのものも盛土のほとんどすべてが削平され、主体部は残存していない。墳墓であることを疑問視する意見もあるが、墳丘の東側および西側の北半分の裾部と、北辺で削出による地山の整形が見られることと、墳丘に貼り付くように弥生土器片が出土していることから、台状墓であると判断した。

## B. 出土遺物

### ①土器

1は1号墓墳頂北東出土土器である。器台の口縁部と思われる。口縁部内面に渦文のスタンプ文を施す。胎土は0.1~1.5mm大の黒色砂粒をわずかに含む。色調は橙褐色、焼成はやや軟である。2は2号墓第3主体部の棺として用いられた壺である。全体に土圧で潰された状況で細片化した部分が多く、体部片の接合には至らなかった。穿孔の有無なども確認できない。短く直に立ち上がる口頸部をもち、口縁端部は丸くおさめる。口径11.4cmを測る。体部の器壁は薄く仕上げられ、磨滅が著しいが、内外面ともにハケをとどめる。胎土は1.0~2.0mm大の白色砂粒・黒色砂粒を少し含む。色調は淡赤褐色、焼成はやや軟である。内面に器壁の荒れが確認できる。頸部内径は9.6cmを測る。3・4は2・4号墓間(3号墓)から出土した底部である。3の胎土は0.1~0.5mm大の白色砂粒・褐色砂粒を含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。4は上げ底である。胎土は1.0~2.0mm大の灰色砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成はやや硬である。後述する4号墓出土土器6~12とよく似た胎土・色調を呈することから4号墓に伴う土器と考えられる。5は4号墓第1主体部墓壇内に供献されていた甕である。タタキによって体部を成形した後に、外面はタテハケを施す。体部上半はナデによるが、一部にタタキ目が残る。内面はケズリ上げ、比較的薄い器壁に仕上げる。胎土は1.0~2.0mm大の赤褐色砂粒、青灰色砂粒をやや多く含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。6・7・9・12~17は4号墓第2主体部から出土した。8・10・11・18は4号墓北側周溝から出土した。6~11・18は壺である。口縁を垂下させ、端部に擬凹線を施

した後に竹管文のある円形浮文を貼り付ける。頸胴部界には突帯を貼付し、下半に刻み目の痕跡が残る。肩部に上から櫛描直線文、櫛原体による列点文、直線文、列点文の順に施文する。8の



第34図 狭間11号墓主体部平面・断面図

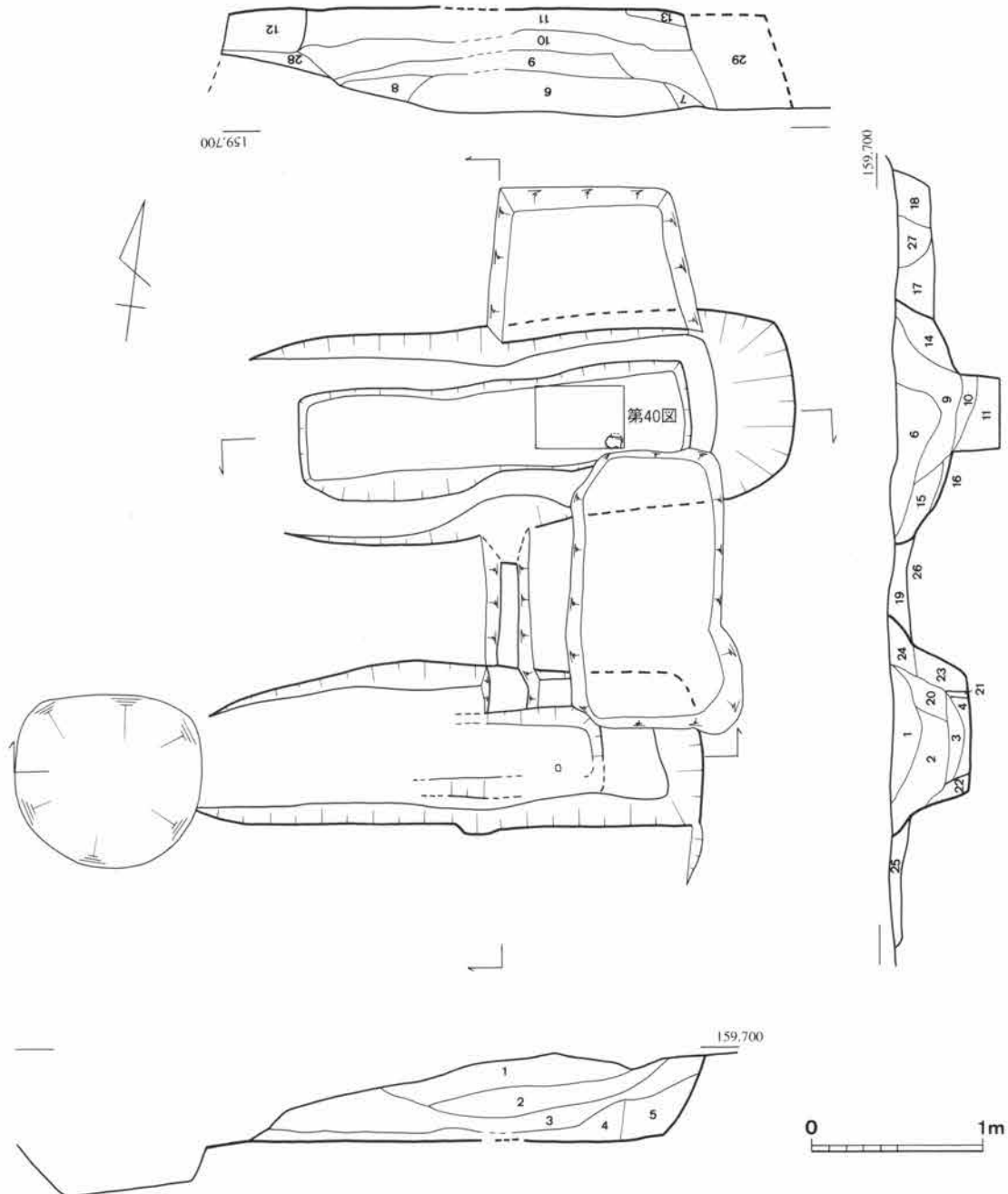


文様の上には円形浮文の剝離痕が認められる。9にも同様の加飾があった可能性がある。体部外面は縦方向のハケ後ミガキ、内面はハケを施す。文様の部分に下のハケが比較的多く残っていることから、文様のある部分にミガキが及んでいないか、文様を施してからミガキが行われている可能性がある。18は底径4.1cmを測る。以上7点、外面の色調はそれぞれよく似た赤褐色、0.1～



第35図 狭間12号墓平面・断面図

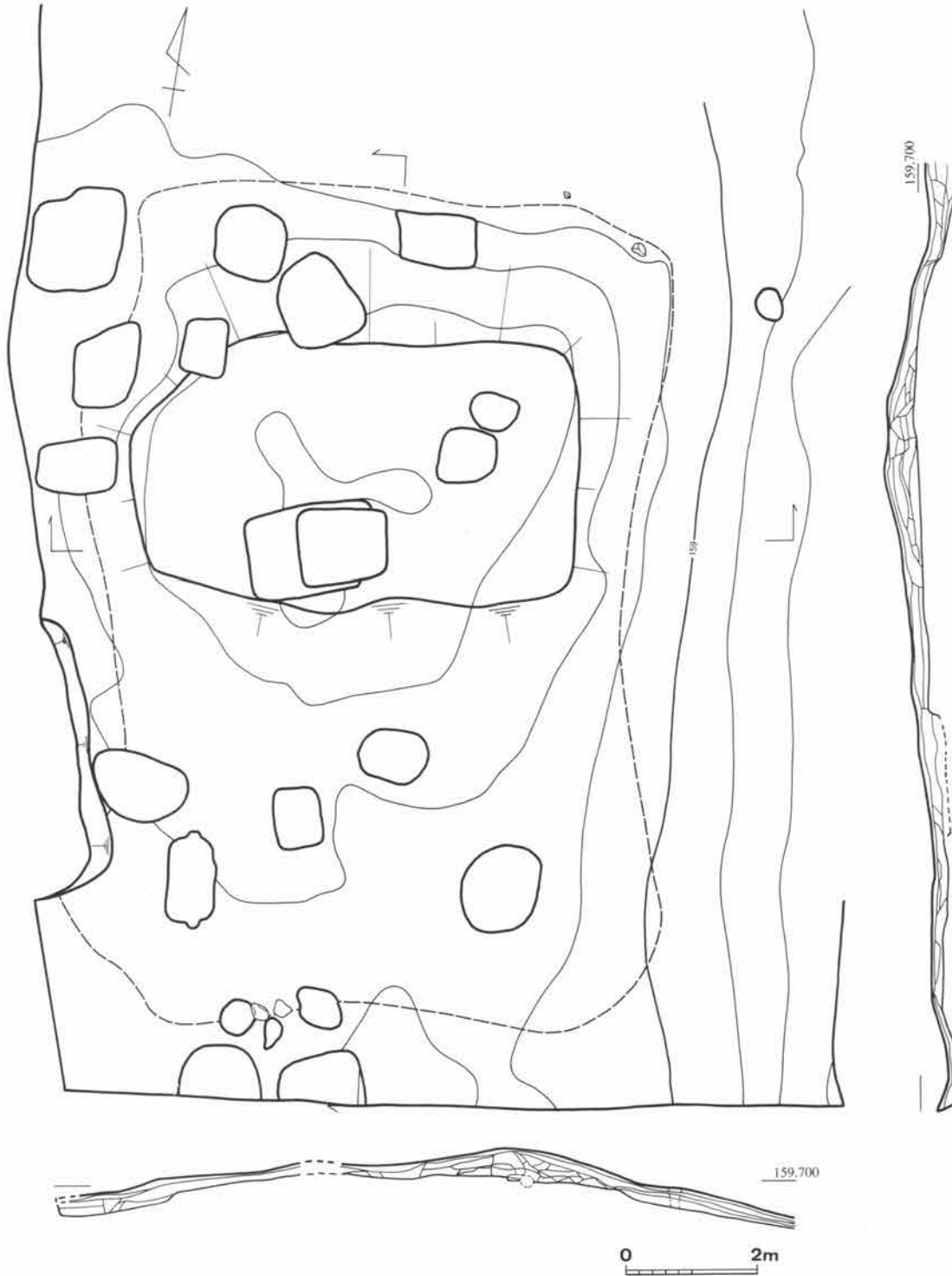
0.3mm大の白色砂粒をわずかに含む。いずれも焼成はやや硬である。10・11は内面の色調や胎土から、同一個体と思われる。8・10・11は周溝から出土しているが、第2主体部からこの特徴的な色調をもつものが出土していること、他の主体部からはこの色調の土器は出土しないことから、



1. 灰黄色シルト、2. 暗褐色シルト、3. 暗灰褐色シルト、4. 暗黄褐色シルト、5. 暗褐色シルト、6. 暗灰黄色シルト、7. にぶい黄褐色シルト、8. にぶい黄褐色シルト、9. 暗黄褐色シルト、10. 褐色シルト、11. 暗灰黄色シルト、12. 暗黄褐色シルト、13. 暗黄褐色粘土、14. 褐色砂混じりシルト、15. 褐色砂混じりシルト、16. 橙褐色シルト、17. にぶい黄褐色シルト、18. にぶい黄褐色シルト、19. にぶい黄褐色シルト、20. にぶい黄褐色砂混じりシルト、21. にぶい黄褐色シルト、22. 暗黄褐色シルト、23. 暗黄褐色砂質シルト、24. 暗灰黄色砂混じりシルト、25. にぶい黄褐色シルト、暗灰黄褐色シルト

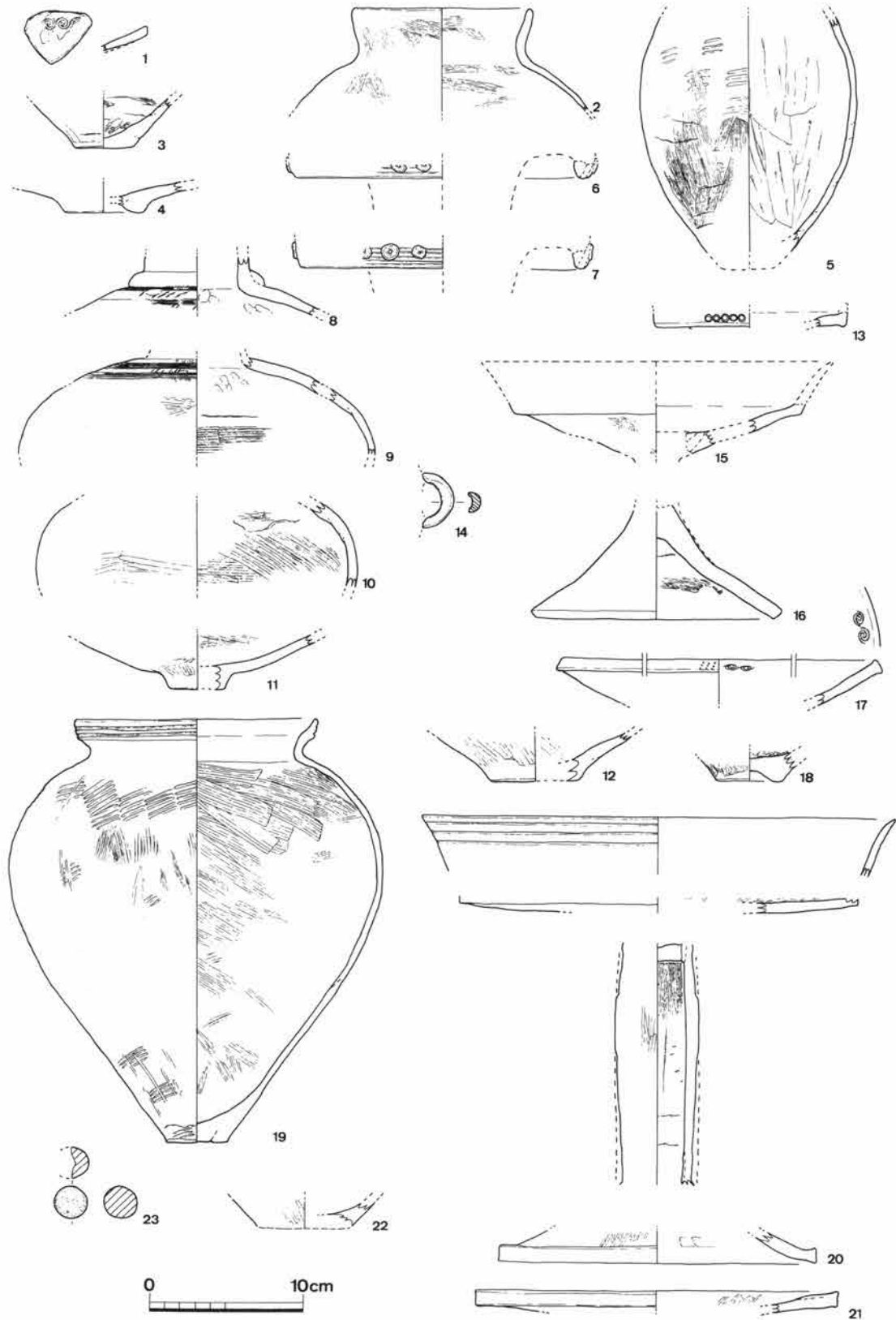
第36図 狭間12号墓主体部平面・断面図

8・10・11も第2主体部に伴う可能性が高い。13は壺の口縁部である。口径12.6cmを測る。上方に拡張されたと思われる部分は接合した面から剥離している。端部に竹管文を施す。0.5～1.5mm大の褐色砂粒・灰色砂粒をわずかに含む。色調は橙褐色、焼成はやや硬である。14は把手である。どの土器に伴うものかは不明である。胎土・色調・焼成は6～11と同様である。15・16は高杯である。脚裾部径15.6cmを測る。挿入付加法によって杯部と脚部の接合を行う。接合部から直接



第37図 狭間13号墓平面・断面図

「ハ」の字状に開く脚部をもつ。全体に器壁の磨滅が著しいが、外面の一部にミガキを確認することができる。内面は横方向のハケを施す。前述した壺6～12と相似した胎土・色調・焼成の具合をもつ。17は器台の口縁部と思われる。面をもたせた口縁端部に櫛状工具による列点を施す。



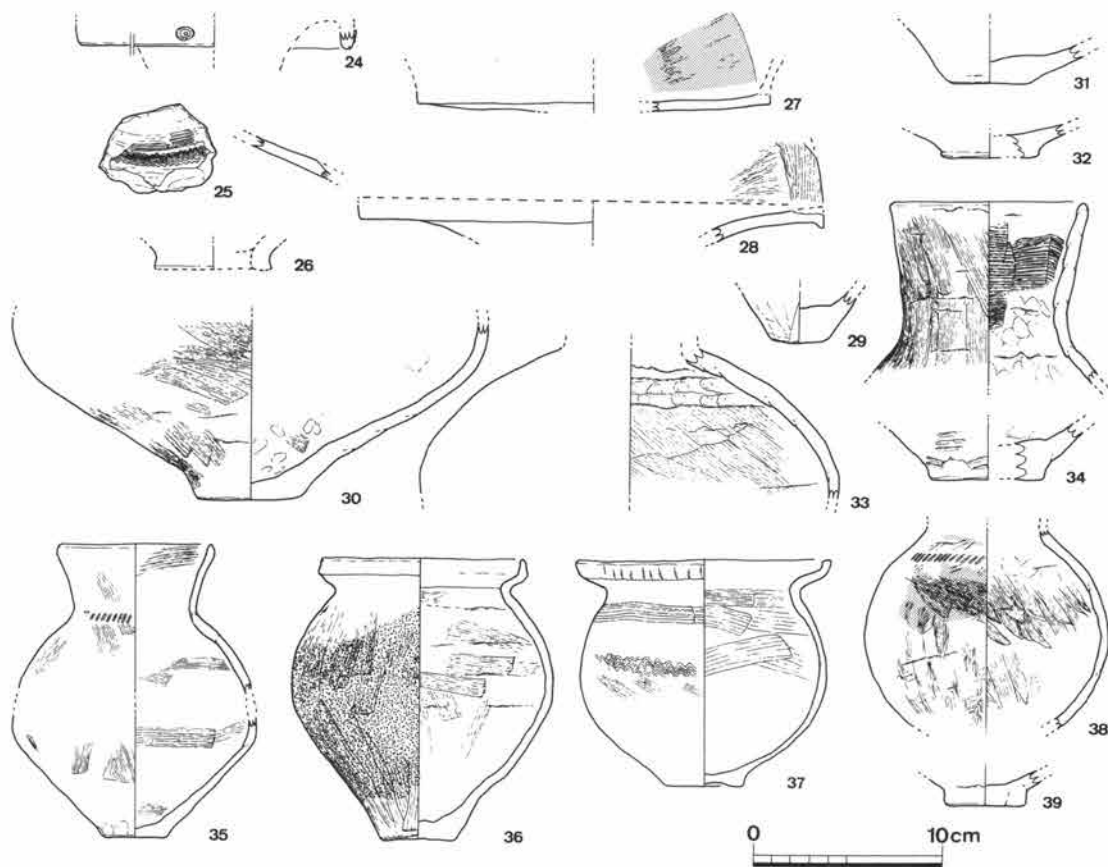
第38図 狭間墳墓群出土土器実測図(1)

内面の口縁部近くにスタンプ文を施文する。胎土は0.1~1.5mm大の黒色砂粒をわずかに含む。色調は橙褐色、焼成はやや軟である。12は壺の底部である。底径5.6cmを測る。成形は底部輪台技法によると思われる。内外面とも粗いハケを施した後、ナデによって器壁を整える。胎土は0.5~1.0mm大の白色砂粒・黒色砂粒を少し含む。色調は黄褐色、焼成はやや硬である。19は4号墓第3主体部の棺として用いられた甕である。口径15.8cm・底径4.1cm・器高27.4cmを測る。口縁部は短く立ち上がる複合口縁状を呈し、側面に2条の擬凹線を施す。体部最大径は上半にあり、よく張った肩部から小さな平底へと直線的に移行する。輪台技法による底部からタタキを用いて成形する。外面はタタキ目の一部をハケによって消し、粗いミガキも確認できる。内面はハケを施す。胎土は1.0~2.0mm大の白色砂粒・灰色砂粒をわずかに含む。色調は黄褐色、焼成はやや硬である。煤の付着や器壁の赤変は確認できない。2号墓第3主体部から出土した土器と同様に内面には土器棺に使用された土器特有の器壁の荒れが認められる。遺存する部分には意図的な穿孔、口縁部打ち欠きは認められない。頸部内径は12.6cmである。20~23は5号墓第1主体部出土土器である。20は高杯である。口径30.9cm、脚裾部径20.8cmを測る。水平に開く杯部からやや外反する口縁部がのびる。口縁部側面上半に3条の擬凹線を施す。柱状の脚部との接合は円盤充填法による。外面調整・杯部内面調整はミガキが認められる。脚柱部内面調整は横方向のケズリが認められ、接合部付近には縦ミガキ様の工具痕が残る。21は器台の口縁部である。口径20.8cmを測る。内面にミガキが確認できる。20と21の胎土は0.5~2.0mm大の黒色砂粒・白色砂粒をわずかに含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。22は底部である。0.1mm大の黒色砂粒をごくわずかに含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。23は玉形土製品である。24~29は5号墓第2主体部から出土した。24は壺の口縁部である。竹管文を施した円形浮文を貼り付ける。25は壺肩部である。櫛描直線文の下に櫛描波状文を施す。ミガキとの前後関係は不明である。26は底径6.0cmを測る。24~26は、それぞれ0.2~1.0mm大の白色砂粒、黒色砂粒をごくわずかに含む。色調は黄褐色、焼成はやや軟であり、同一個体の可能性もある。27は高杯杯部である。内面にミガキをとどめる。内外面ともに赤色顔料が塗布される。0.1~0.2mm大の白色砂粒・褐色砂粒をわずかに含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。28は器台である。口径24.4cmを測る。内外面にミガキが認められる。面をもたせた端部が接合痕の部分から剝離し、粘土を貼り付ける前に粗い横ハケで器壁を整えている。29は底部である。底径2.8cmを測る。0.5~2.0mm大の白色砂粒・褐色砂粒を少し含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。30は5号墓西裾に埋設された壺である。強く張った胴部に小さな平底が特徴的である。底径5.7cmを測る。外面調整はハケ、内面はハケ後ナデが主体である。0.5~1.5mm大の白色砂粒、黒色砂粒を少し含む。淡橙~黄褐色、焼成はやや硬である。31・32は7号墓西側裾から出土した底部である。胎土は1.0~2.0mm大の白色砂粒を少し含む。色調は黄褐色、焼成はやや硬である。31は底径4.1cm、32は底径5.2cmを測る。33は8号墓第3主体部から出土した壺である。34は8号墓第2主体部出土の壺である。直行する口頸部にしっかりした平底をもつ。口径10.4cm・底径6.0cmを測る。胴部外面はタタキ後ナデ、口径部内外面はハケを施す。33・34は0.5~1.5mm大の白色砂粒・褐色砂粒を含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。35~37は11号墓主体部から出土した。35は体部最大径を胴部中位より

やや下がった場所にもち、ゆるく屈曲しわずかに外反する口頸部へとつながる壺である。口径8.4cm・底径3.5cmを測る。頸部にハケ原体による列点を施す。内外面ともハケが認められる。1.0~3.0mm大の白色砂粒・黒色砂粒を含む。色調は淡黄褐色、焼成はやや硬である。36は受口状口縁をもつ甕である。口径10.6cm・底径3.9cm・器高15.0cmを測る。内外面ともハケを残す。体部から口縁部にかけて煤の付着がみられ、底部付近には、赤変が確認できる。37は鉢である。短く立ち上がる受け口状口縁に球形の体部、上げ底の底部が特徴的である。口径13.6cm・底径3.9cm・器高12.0cmを測る。口縁部側面に刻み目、肩部に櫛描直線文、胴部最大径付近に櫛描波状文を施す。調整は内外面ハケ後ナデである。36・37とも0.2~0.5mm大の白色砂粒を含み、表面の色調は淡黄~淡灰褐色、断面は黒色を呈す。焼成はやや硬である。器形・胎土から、双方とも近江か山城からの搬入品と考えられる。38は12号墓第1主体部出土の壺である。体部は最大径13.0cmを測り、受け口状口縁をもつ。タタキで成形し、内外面ともハケを施し、外面の一部にはミガキも認められる。肩部に櫛原体による列点をもつ。外面には赤色顔料が塗布される。1.0~2.0mm大の白色砂粒、黒色砂粒をわずかに含む。色調は黄褐色、焼成はやや硬である。39は12号墓西斜面出土の底部である。底径4.2cmである。0.3~0.5mm大の白色砂粒をわずかに含む。淡黄褐色を呈し、焼成はやや硬である。 (三好 玄)

②鉄器(第7図)

a. 鉄鉈 1は狭間2号墓第1主体部から鉄鉈が出土した。全長11.8cm・刃部最大幅1.1cm・軸部最大幅0.9cm・最大厚0.5cmを測る。刃部は裏すきを作り、断面形態は弧状を呈する。軸部の



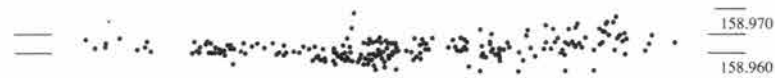
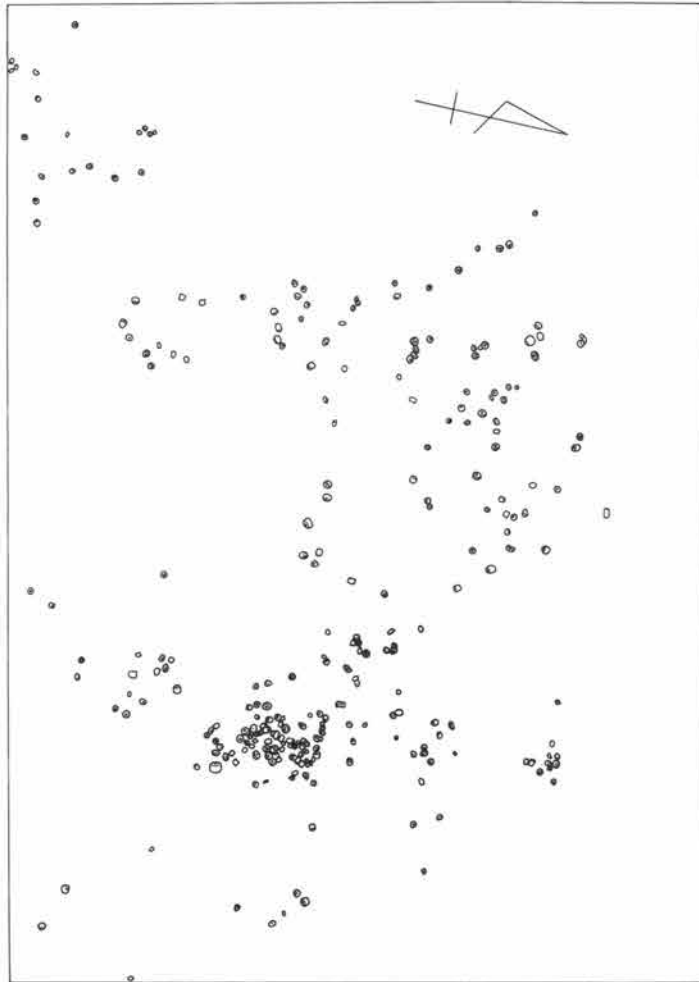
第39図 狭間墳墓群出土土器実測図(2)

ほぼ中央で約90°に折れ曲がり、おそらく意図的に折り曲げられて副葬されたと考えられる。

b. 不明鉄片 2は長さ1.1cm・最大幅0.9cmを測る、三角形の微小な鉄片である。刃部などは認識できないが、その形状から刀子の切先の可能性がある。(壱岐一哉)

③玉類

12号墓第1主体部の棺床面から出土したガラス小玉である。出土した小玉の総数は340余りである。色調は、ほとんどのものがスカイブルーであり、7・68・127のみがコバルトブルーである。製作法は気泡の観察から管切り法であると推定される。ただし、192・236・aは切り離し後の再加熱を受けていないと見られ、管状の形態をとどめている。材質はカリガラスと推定される。(福島孝行)



第40図 ガラス小玉出土状況図

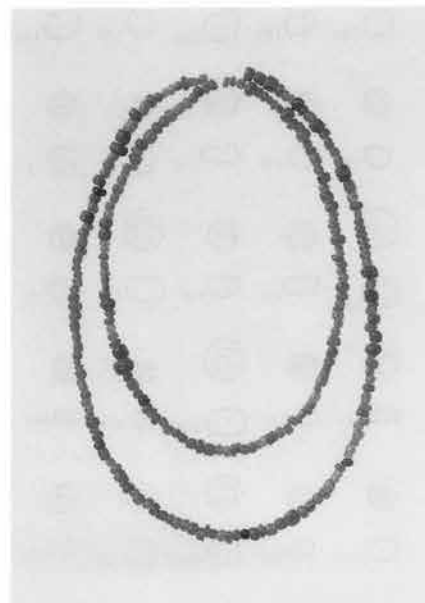
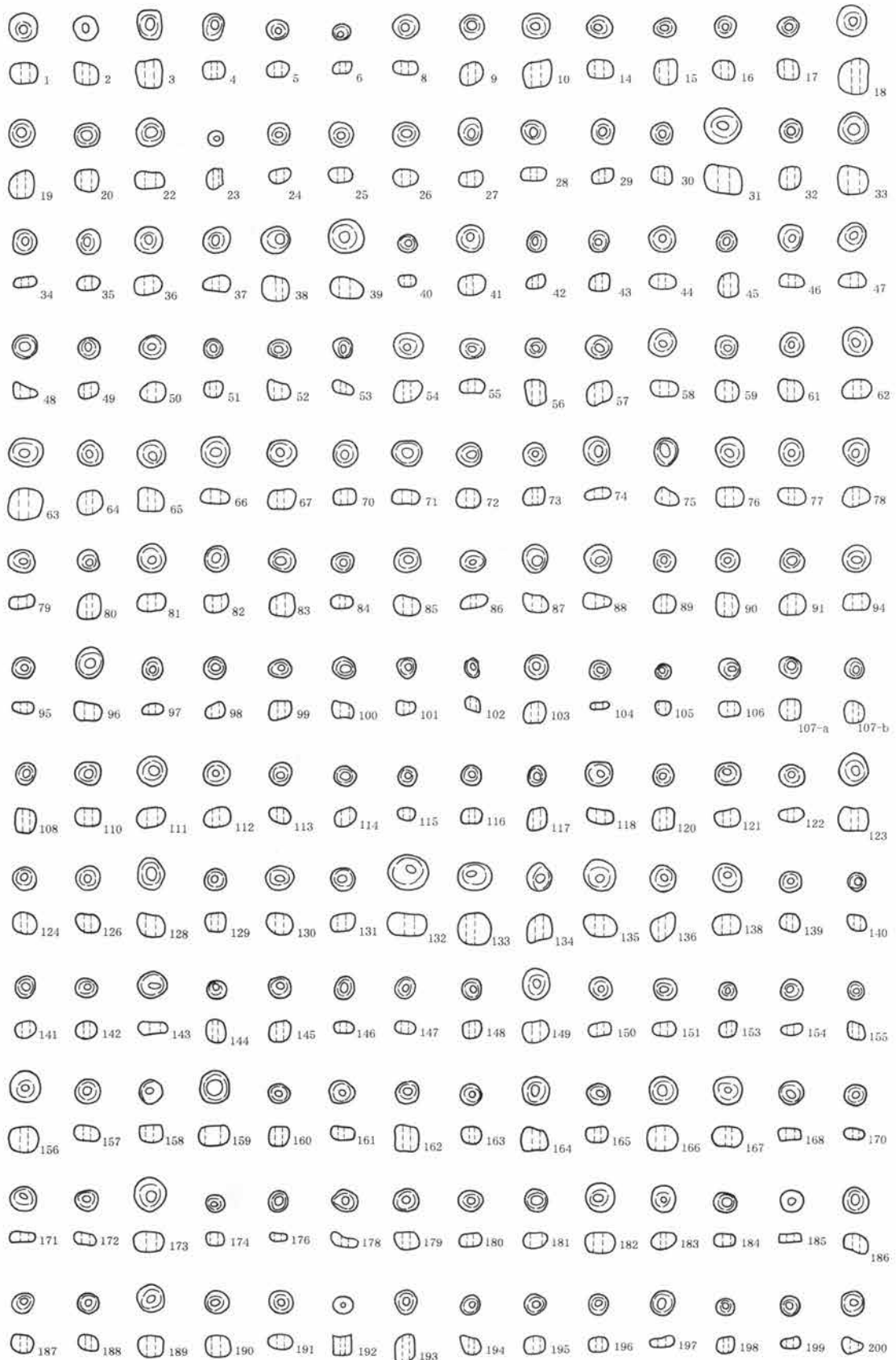
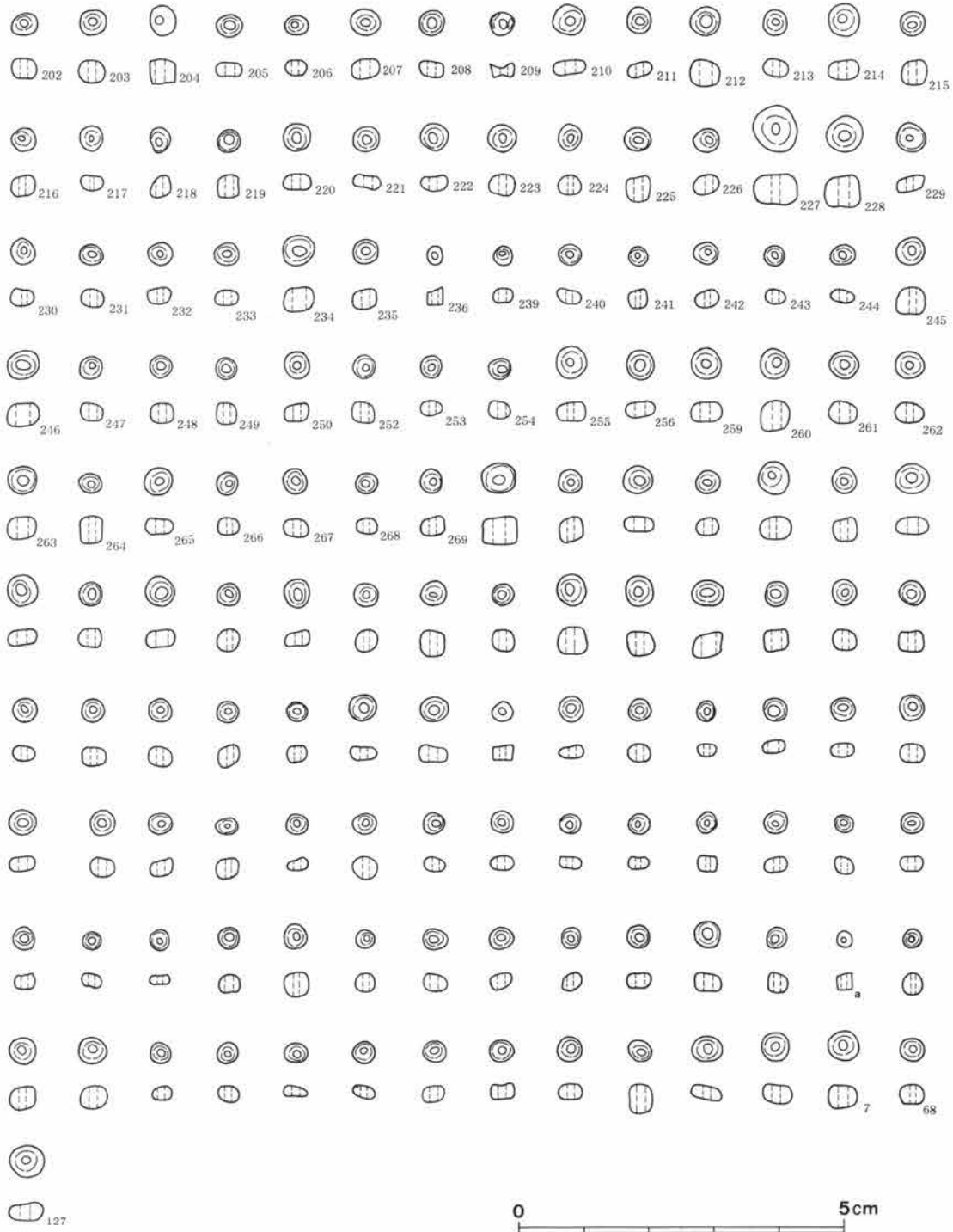


写真1 狭間墳墓群出土ガラス玉



第41図 狭間墳墓群出土ガラス小玉実測図 (1) (数字は取り上げ番号)



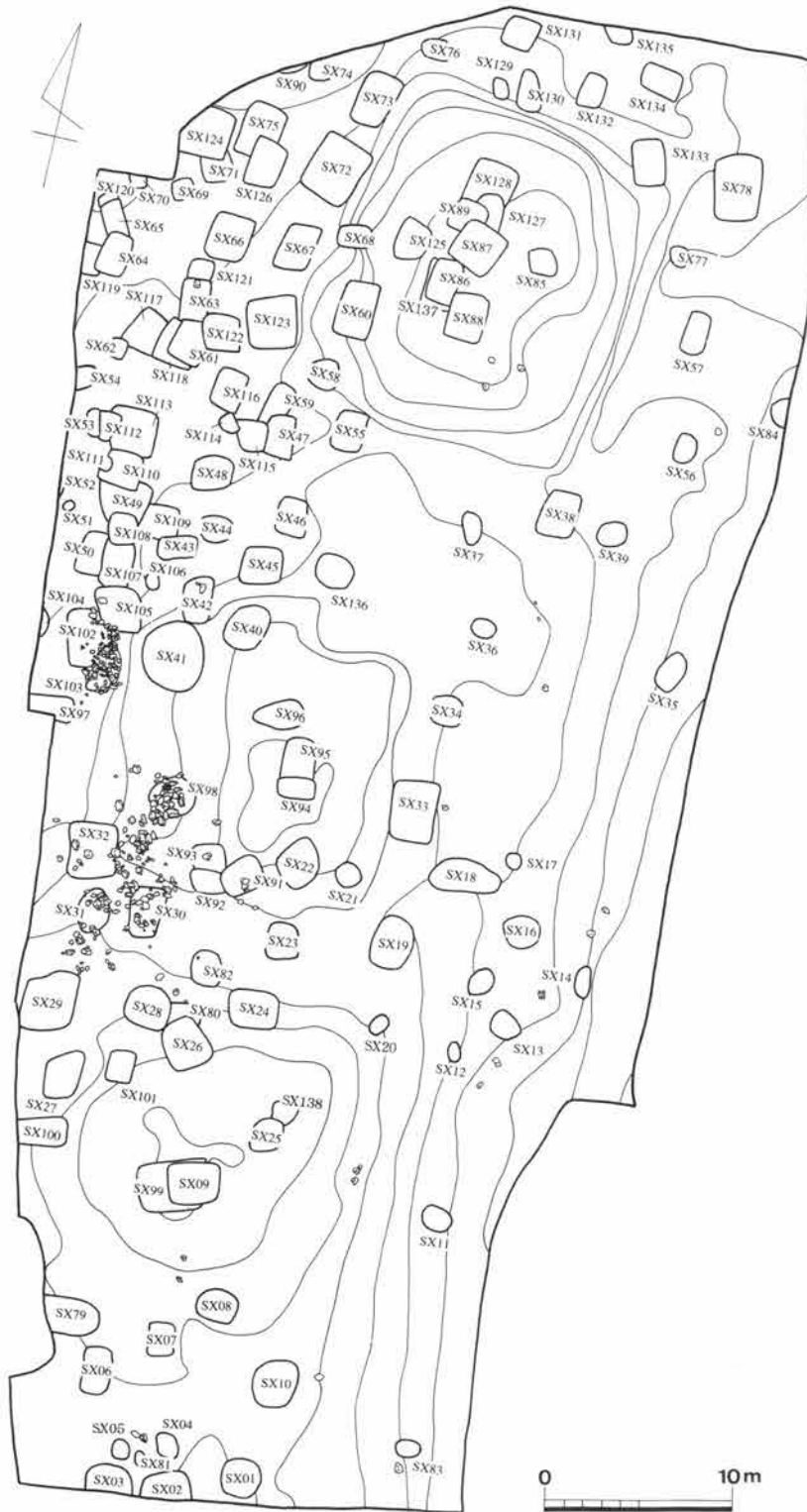


第42図 狭間墳墓群出土ガラス小玉実測図 (2)  
 (数字は取り上げ番号、番号無しは検出時の遊離遺物)

(2) 狭間中・近世墓群

A. 検出遺構(第43・44図)

弥生墳墓を削平する形で、中世墓および近世墓を検出した。なお遺構は弥生墳墓第11～13号墓の調査区において検出した。遺構は、調査区の広範囲に分布が認められ、計140基以上にのぼる。



第43図 狭間中・近世墓群配置図

なお限られた調査期間等の関係上、全ての遺構の調査を行うことは不可能と判断し、うち30基を完掘し、17基についてのみ略測を行った。

遺構は、掘形の平面形が円形と方形(方形に近い楕円状を呈するもの)とに大きく2形態の土壇に分類できる。円形のもの掘り下げが比較的浅く、土壇墓と推測される。方形の大型のものは調査区北西部で多く切り合いをもって分布し、比較的深く垂直に掘り下げられており、掘形からみて桶等を用いた近世の座棺墓であると推測される。方形で小型のものは、掘り下げが比較的浅いものが多い。

第11号墓頂部付近で甕棺墓SX85を検出した。構造は円形の堀形内に中世の丹波焼の甕を横位置に埋めたもので、甕内より少量の骨片を検出した。また第13号墓墳丘頂部・第12号墓北西墳丘裾・第11号墓南墳丘裾付

近・第11号墓南墳丘斜面でそれぞれ盛土を伴った土壙 S X 25・41・55・59の4基を検出し、うち S X 41は火葬集骨墓であり、S X 55では盛土上から土師皿4点が出土し、また S X 25では土壙脇の地山面で五輪塔の水輪・自然礫数個を埋めた状態で検出した。他に調査区南・東部で焼成のみられる土壙 S X 02・03・18を、また調査区西部で集石を伴う遺構 S X 30・31・98・103を検出した。さらに、第11号墓北西部で地輪・関東碗を検出し、加えて調査区外ではあるが、第10号墓頂部付近で「南無阿弥陀佛□宗定禪定門」の銘のある舟形板碑を認めた。以上のうち実測を行った遺構についてのみ以下に記す(第44図)。

S X 04 調査地区最南端部に位置している。方形の平面形態を持つ土壙であり、深さ50cm。最上層より土師皿が1点出土している。

S X 05 調査区最南端に位置している。円形の平面形態を持つ土壙であり、深さ20cmと浅い。出土遺物は無い。なお以上2基の遺構に伴うものとして、標石と推測される石を3個検出した。

S X 06 調査区の南西隅に位置している。方形の平面形態を持つ土壙であり、最深部で10cm弱と非常に浅い。また土壙内に石が落ち込んでいる。供伴遺物として土師皿が1点出土している。

S X 10 調査区南部に位置している。円形の平面形態を持つ土壙であり、深さは30cm。供伴遺物として少量の骨片が出土している。

S X 19 第12号墓南東裾付近に位置している。方形に近い楕円状の平面形態を持つ土壙であり、深さ1.5m弱で、ほぼ垂直に掘り下げられている。また土壙内に石が落ち込んでいる。

S X 27 第13号墓北東墳丘裾に位置している。方形の平面形態を持つ土壙であり、深さ60cmで掘形はレンズ状を呈する。出土遺物は最上層より土師皿が1点出土している。

S X 79 S X 06と同じく調査区南西隅に位置し、方形の平面形態で、最深部で5cm弱と非常に浅い。出土遺物は無い。

#### B. 出土遺物(第45図)

土師皿(第45図1~29) 口径が8.5cm以下、9~11cm、12cm以上のものに分類できるが、それぞれの器高は一定しない。調整は内面底部に一方向ナデ、内面体部から口縁端部にかけて横ナデ、外面体部に指頭圧痕がみられるものが多く、また内面の立ち上がり部分の凹線状圏線が明瞭なものが多い。

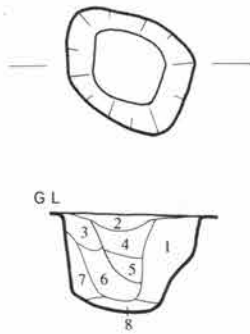
甕(第45図33) S X 85より出土。中世の丹波焼の甕。口径27.0cm・器高30.5cm、胎土は密で、内面は褐色、外面は赤褐色で自然釉がみられる。内面接合部分に指頭圧痕と削りが認められる。また肩部にヘラ描きで線刻されている。

徳利(第45図32) S X 136より出土。近世の丹波焼の徳利。口径2.5cm、胎土は密で、内面は暗灰色、外面全体に褐色の施釉と口縁部に自然釉がみられる。ロクロ成形である。張付け文字がみられるが判読できない。

銅銭(第45図30・31) S X 10・28・46・91より出土。いずれも「寛永通寶」であり、なお S X 91では6点重なって出土している。

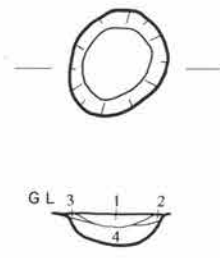
釘 S X 86~88より出土。座棺の桶に用いられたものと推測される。

骨片 S X 10・41・64・85・141より出土。S X 41のものは焼成をうけており、S X 64では頭



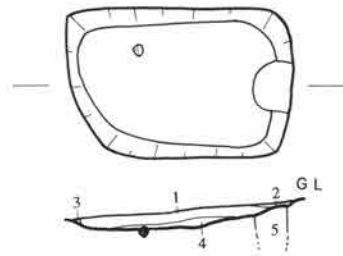
SX04

1. 黄褐色中粒砂 (しまりが悪く、3cm程度の礫を含む)
2. 灰褐色細砂
3. 黄褐色細砂 (しまりが悪い)
4. 暗黄褐色シルト質細砂
5. 暗褐色シルト
6. 黄灰褐色シルト
7. 黄褐色中粒砂 (しまりが悪く、3cm程度の礫を含む)
8. 黄赤褐色細砂 (しまりがよい)



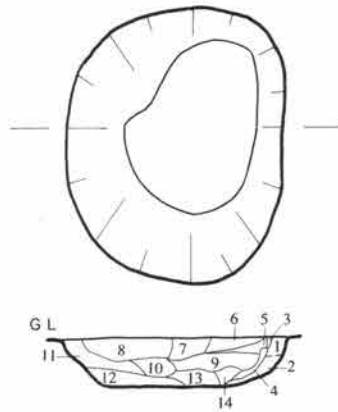
SX05

1. 黒褐色腐植土
2. 灰褐色細砂 (3cm以下の礫を含む)
3. 灰褐色細砂
4. 灰褐色シルト質細砂



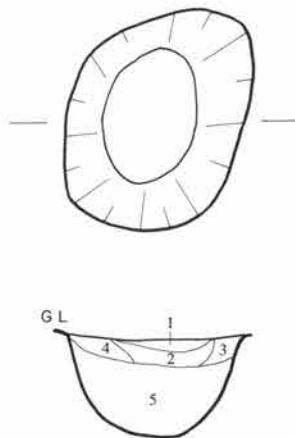
SX06

1. やや暗褐色シルト質細砂
2. 暗褐色シルト質細砂
3. 暗褐色シルト質細砂
4. 黒褐色シルト混じり細砂
5. 黒褐色腐植土



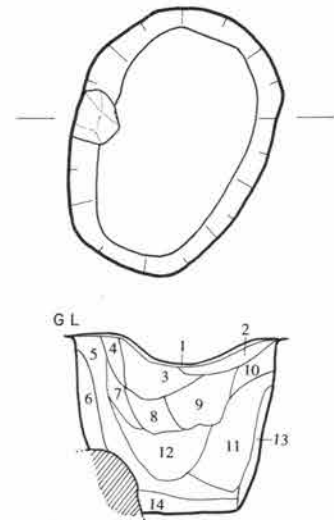
SX10

1. 黄褐色中粒砂 (しまりが悪い)
2. 暗黄褐色シルト質細砂
3. 暗黄褐色細砂
4. 黒褐色細砂 (しまりが悪い)
5. 暗黄褐色シルト質細砂 (しまりが悪い)
6. 黄灰褐色細砂
7. 黒褐色細砂
8. 暗褐色シルト質細砂
9. 暗褐色シルト
10. 黄褐色シルト
11. 黄褐色中粒砂 (しまりが悪い)
12. 暗黄褐色シルト質細砂
13. 暗黄褐色シルト
14. 暗黄褐色シルト混じり細砂



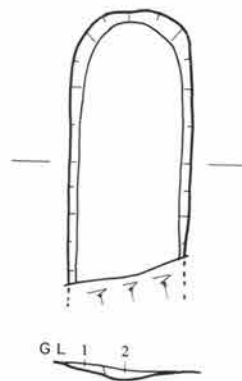
SX27

1. 暗黄褐色細砂(土師皿出土)
2. 黒褐色細砂 (しまりが悪い)
3. 黄褐色細砂
4. 黄褐色細砂
5. 暗黄褐色シルト



SX19

1. 暗褐色シルト混じり細砂
2. 褐色細砂
3. 黄褐色シルト
4. 橙褐色細砂 (赤褐色の粘土粒を時に含む)
5. 暗橙褐色細砂 (5cm以下の礫を少量含む)
6. 赤褐色シルト混じり細砂 (しまりが悪く、2cm未満の礫を含む)
7. 暗黄褐色中粒砂 (赤褐色の粘土塊を含む)
8. 暗黄褐色シルト
9. 黄赤褐色シルト (しまりがやや悪く、5cm未満の礫・赤褐色の粘土粒を含む)
10. 赤褐色細砂 (1cm以下の礫を少量含む)
11. 暗黄褐色シルト質細砂 (しまりがやや悪い)
12. 赤褐色中粒砂 (5cm未満の礫を少量含む)
13. 赤褐色シルト混じり細砂中粒砂 (しまりが悪い)
14. 明赤褐色中粒砂 (赤褐色の粘土塊を比較的多く含む)

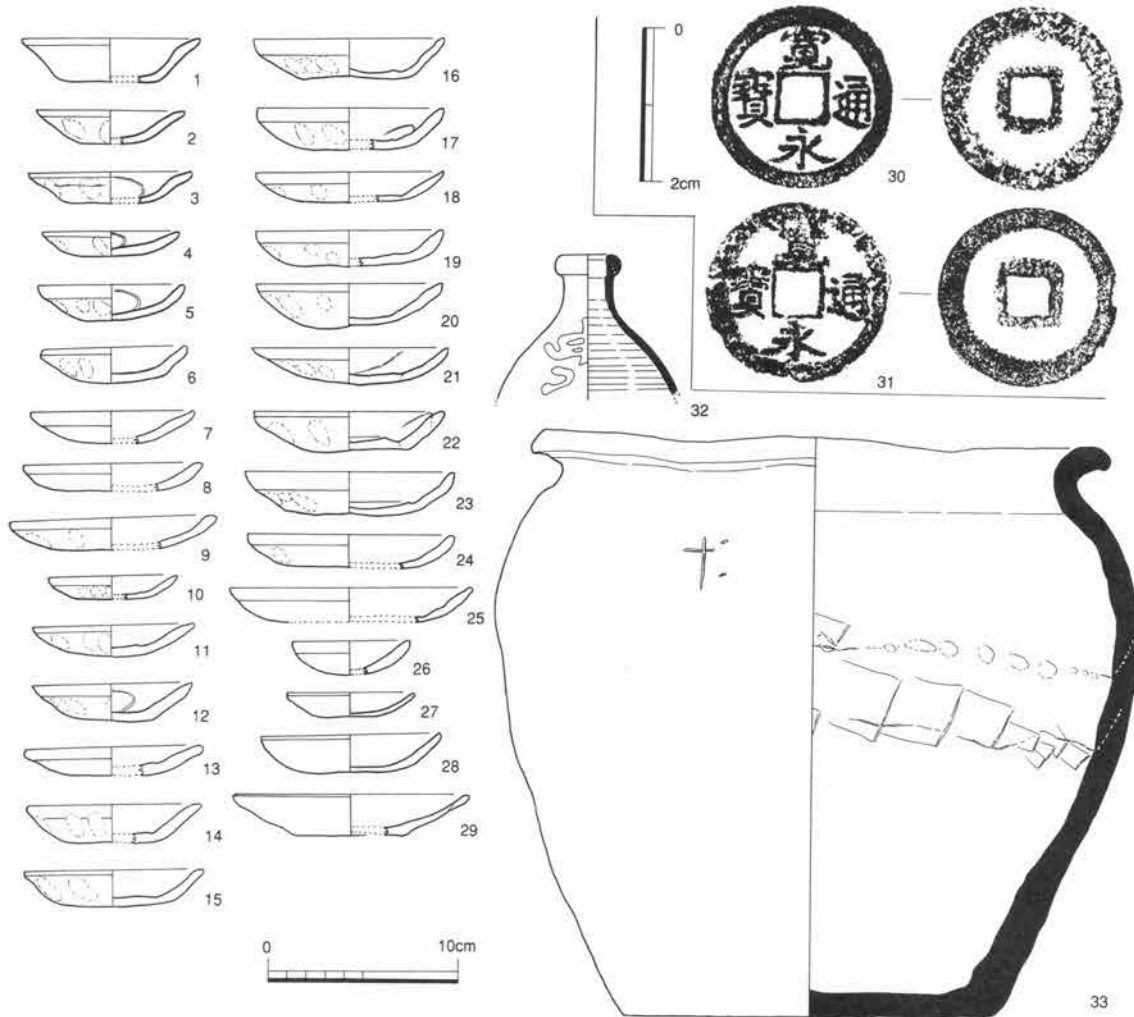


SX79

1. やや暗褐色シルト質細砂
2. 暗褐色シルト質細砂



第44図 狭間中・近世墓群平面・断面略図



第45図 狭間中・近世墓群出土遺物実測図

- |                |          |            |            |               |              |          |
|----------------|----------|------------|------------|---------------|--------------|----------|
| 1~29土師器皿       | 1. SX57  | 2. SX41    | 3. SX41    | 4. 13号墓北東部    | 5. 12号墓北斜面   | 6. SX06  |
| 7. 11号墓西裾      | 8. SX32  | 9. SX26    | 10. SX32上面 | 11. SX22      | 12. SX55中部   | 13. SX28 |
| 14. 13号墓北東部    | 15. SX63 | 16. SX55下部 | 17. SX41   | 18. SX66北     | 19. SX04上面   | 20. SX22 |
| 21. 11号墓北東部    | 22. SX84 | 23. SX55上部 | 24. SX66南  | 25. SX27最上部   | 26. SX63     |          |
| 27. 12号墓北東部掘削中 |          | 28. 11号墓西裾 | 29. SX32   | 30・31. 銭 SX10 | 32. 德利 SX136 |          |
| 33. 甕          | SX85     |            |            |               |              |          |

蓋骨の一部とみられる骨片が出土している。いずれも少量であり、図化不可能であると判断した。この他にS X 18から磁器の杯3点と楕円環状の鉄製品1点、S X 83から陶器の筒形杯1点、S X 90から磁器の碗1点と銅製キセル1点などが出土している。(山口裕一)

### (3)平山古墳

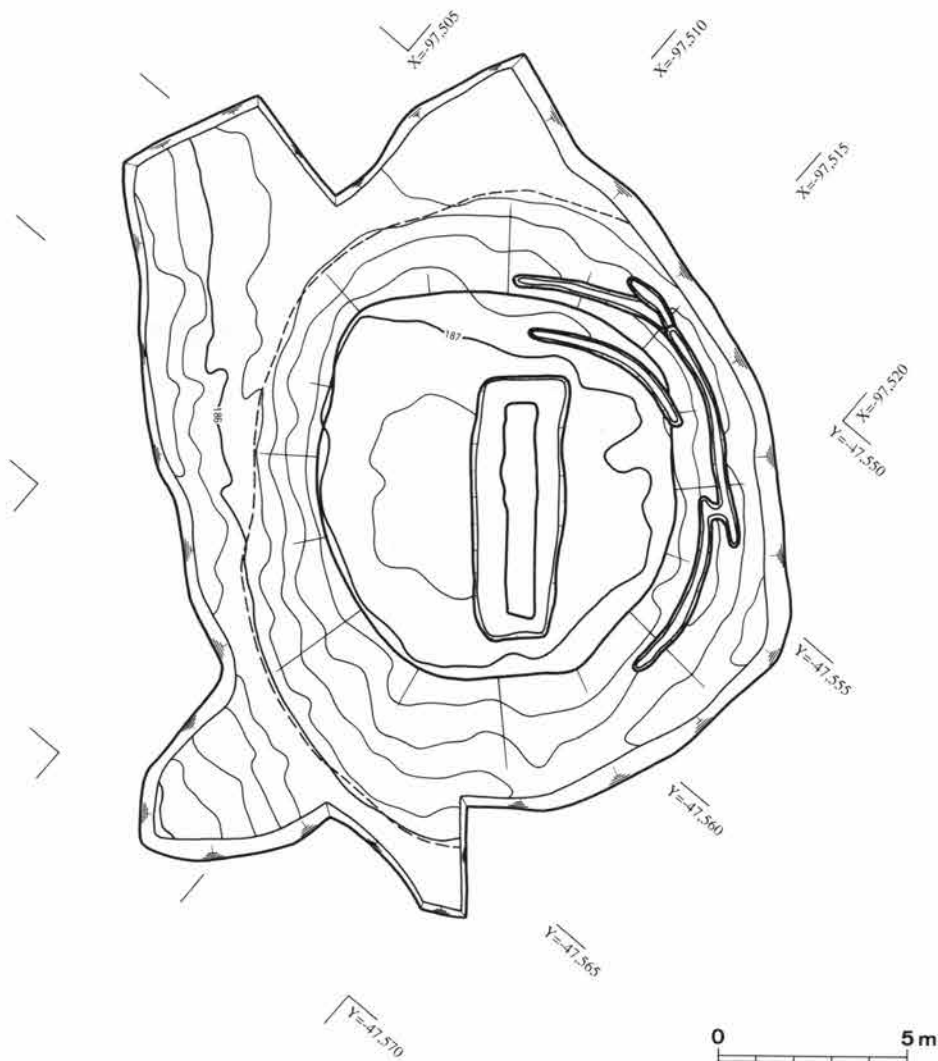
#### A. 検出遺構

平山古墳は試掘調査によって検出された新規の遺跡である。周知の遺跡である平山古墳は、調査の結果自然地形であったため、平山古墳状隆起と改称した。

**墳丘** 平山古墳は平山古墳状隆起から北東に伸びる尾根上に位置し、カチ山北古墳群が位置する尾根と、今林古墳群が位置する尾根とに挟まれた位置にある。平山古墳は尾根のやや高まった部分を利用し、削り出しによって墳丘を成形しており、尾根上の自然地形になるくぼみには盛土

を行って整形している。平面形態は北東-南西に主軸を持つ楕円形であり、規模は主軸方向で17m、短軸方向で14mを測る。墳高は1.0mを測る。段築は認められず、墳丘の東側に2~3重の浅い溝が等高線に沿う形で半円形状にめぐっている。この溝は西側には続かない。墳丘北東側は尾根に続く部分となり、溝によって切り離しているが、一部で陸橋状に削り残されている部分がある。北東側墳丘裾の溝内からは墳頂に供献されていたと思われる土器の胴部片が3点出土した。墳頂部では東西方向に主軸を持つ主体部を検出した。

**主体部** 墳頂部で検出した主体部は東西7m・南北2.5mを測る平面形が隅丸長方形の墓壇で、断面形が2段になる2段墓壇である。2段目の規模は南北0.80m・東西5.65mを測り、断面形態はやや角張った半円形を呈する。木棺形式は木棺痕跡が断面半円形であることと墓壇の断面形態から割竹形木棺であると考えられる。ただし墓壇西端に小口溝があり、土層の観察からここに小口板が立つと考えられる。東側にも黄褐色シルトの立ち上がりが見られることから、東側にも小口板が立っていた可能性が高い。そうだとすれば、棺身は横断面半円形の木槨のような形態をし



第46図 平山古墳平面図

ていたと考えられる。検出面から墓壙底までの深さは58cmを測る。棺底面では東側を中心に赤色顔料がわずかに認められた。また、小口溝底にも棺底面で最も赤色顔料が認められた東側に匹敵する密度で赤色顔料が認められた。まかれていた顔料の科学分析は行っていないが、色調が不鮮明であるため、ベンガラであることが推定される。頭位については鏡や玉が比較的西寄りにあることを考えると西頭位であろうと思われる。

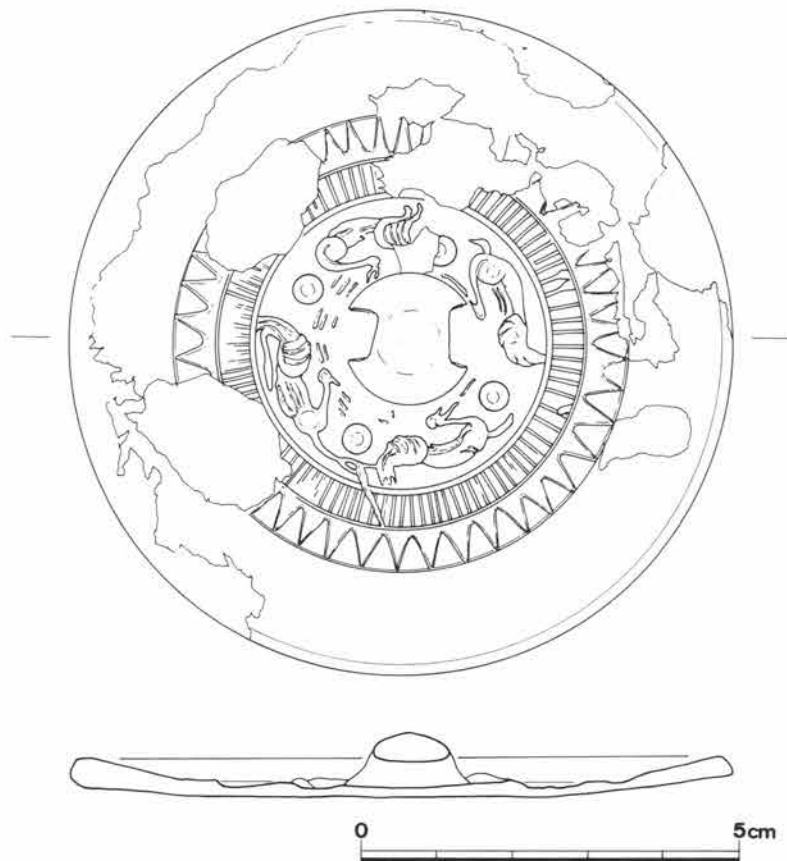
**遺物出土状況** 墓壙埋土上層から二重口縁壺の口縁部(第51図6)が出土した。出土位置は墓壙中央部東寄りで、木棺の上部に当たる。副葬品は北群と南群とに分かれて出土した。北群は墓壙1段目の底面西寄りから木棺の裏込め土上にかけて、鳥頭四獣鏡・勾玉・小型の鉈1・刀子形鉄製品・針が出土した。勾玉が最も東寄りで、続いて鉈(第51図5)・刀子形鉄製品が西側に置かれており、鏡が鉄製品の西端に重ねられていた。南群は北群より中央寄りの墓壙1段目の底面から木棺の裏込め土上にかけて大型の鉈(第51図4)と袋状鉄斧が出土した。この鉈は鋒を東に向けて置かれ、鉄斧はその西端に重ねて刃部を東に向けて置かれていた。棺内出土遺物はない。

## B. 出土遺物

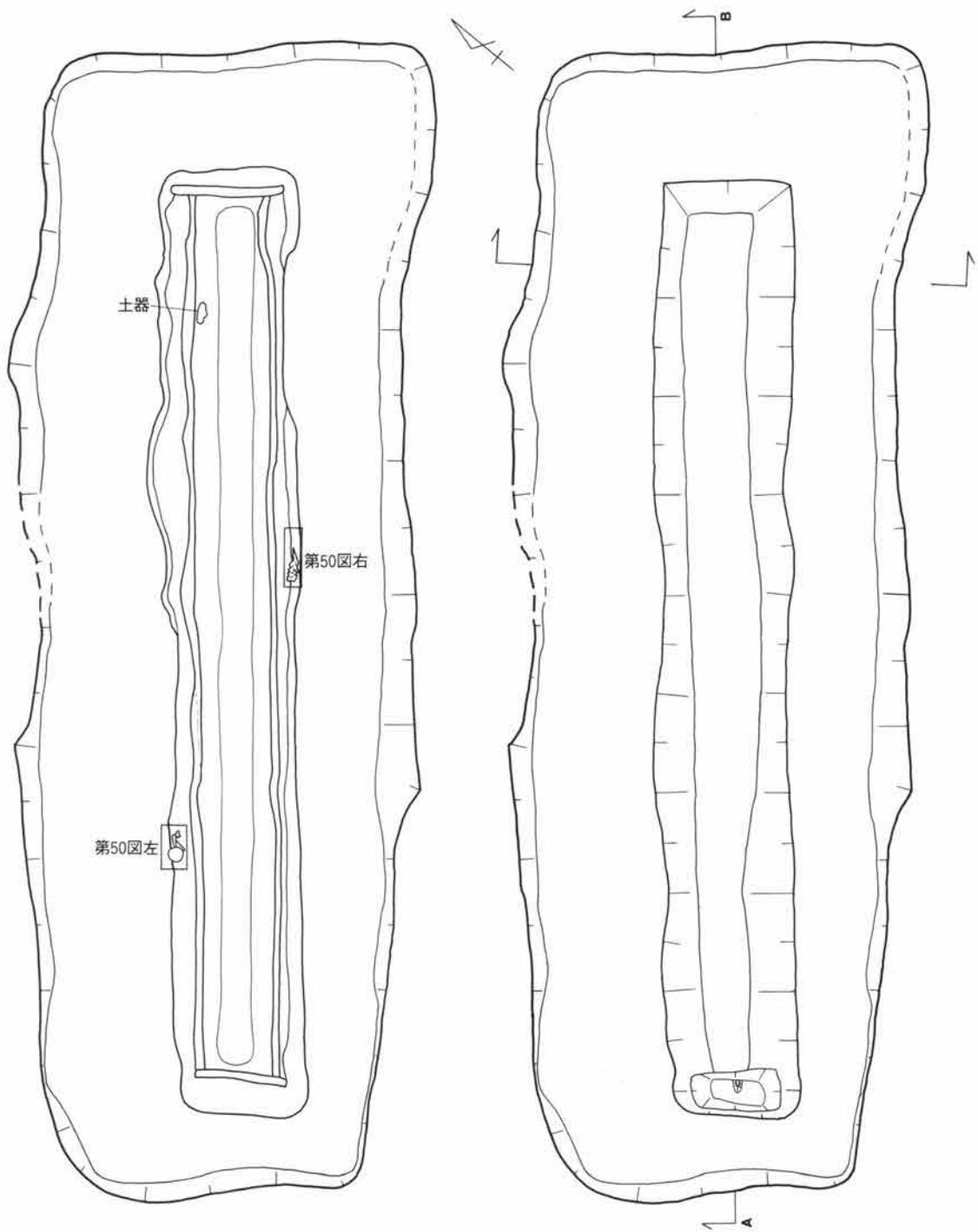
①土器 第51図6は木棺腐朽に伴う落ち込みから出土した壺口縁部である。口径18.2cmを測る。直立気味に立ち上がる頸部から、やや斜め上方にのびる1次口縁を経て、ゆるやかに外反する2次口縁にいたる。1次口縁と2次口縁の接合部は、わずかに下方に垂下する。胎土は0.5mm大の白色砂粒、1.0~2.0mm大の灰色砂粒をわずかに含む。色調は短黄褐色、焼成はやや硬質である。

②鏡 小型の仿製鏡である。

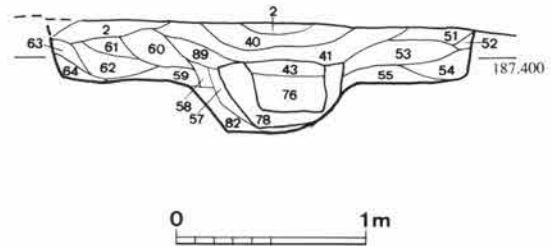
北群の副葬品に含まれる。面径8.8cmを測り、縁は平縁で、鈕は半球形、鈕孔は長方形で、内区面よりわずかに高い位置に穿孔している。外区はやや幅の広い鋸歯文の内側に1段下がって櫛歯文という構成である。内区は4個の半球形の乳に区切られた空間に鳥頭の獣文を4頭配している。獣文は半肉彫りで、体毛の表現はあるものの明確な後脚の表現は見られず、森下章司氏の型式分類によると鳥頭四獣鏡系2式に当たると考えられる。<sup>(注20)</sup>なお、内区面の地の文様は同心円状にめぐる細線がある。色調はやや緑がかった黒色で、



第47図 平山古墳出土鳥頭四獣鏡実測図



60. 淡褐色砂混じり細砂、61. 淡灰褐色砂混じり細砂、62. 淡灰黄褐色砂混じり細砂、63. 淡橙黄色細砂、64. 淡灰黄褐色シルト質細砂、65. 岩盤、66. 明橙灰色細砂、67. 褐灰色細砂、68. 暗褐灰色細砂、69. 黄褐色シルト、70. 暗灰褐色シルト質細砂、71. 暗黄灰褐色シルト質細砂、72. 暗灰褐色細砂質シルト、73. 明褐色細砂、74. 淡褐色細砂質シルト、75. 明褐色シルト質細砂、76. 淡褐色シルト質細砂、77. 褐色細砂質シルト、78. 黄褐色シルト、79. 褐色細砂、80. 淡褐色細砂質シルト、81. 淡黄褐色シルト、82. 暗灰褐色細砂、83. 明褐色シルト、84. 明赤褐色シルト質細砂、橙褐色シルト



第48図 平山古墳主体部平面・断面図



周縁を中心にブロンズ病が認められる。

(福島孝行)

③鉄器

鉈 第51図4は基部を欠損する。残存長15.5cm・刃部最大幅1.1cm・軸部最大幅0.9cm・最大厚0.4cmを測る。刃部は裏すきを作り、断面形態は弧状を呈する。5は全長11.1cm・刃部最大幅1.0cm・軸部最大幅0.8cm・最大厚0.4cmを測る。刃部は裏すきを作り、断面形態は弧状を呈する。基部は台形を呈する。

刀子状鉄製品 1は一部を欠損しておりその全体像は不明であるが、断面形態を観察した際に片側に刃部を、その反対側に背を作り出していると認識されることと、平面形態に関状を呈する部分が存在すること、その反対側において幅が切先状に狭くなることから、刀子の可能性が高いと考えられる。ただし、刃部は非常に薄く、実用に耐えるものではない。残存長7.4cm・最大幅2.0cm・最大厚0.3cmを測る。

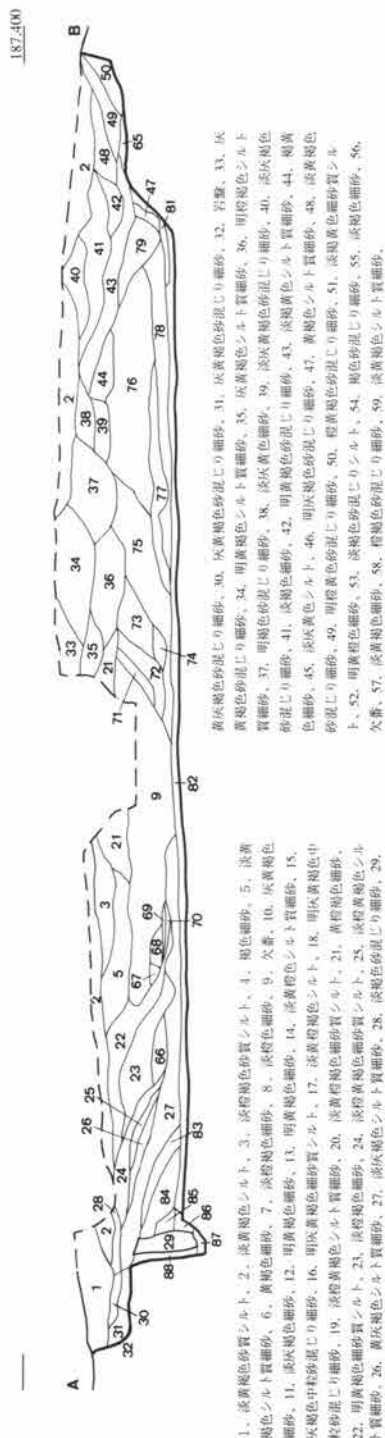
鉄針 2は全長2.9cm・最大幅0.3cm・最大厚0.1cmを測る。全体を包むように木質が付着しており、木製の容器に収められて副葬されたものと考えられる。

無肩鉄斧 3は全長14.0cm・刃幅4.3cm・最大厚1.3cm・袋部長径4.1cm・袋部短径2.8cmを測る。綴じ合わせは、刃部側でやや開く。刃部はゆるやかな弧状を呈する。

(壺岐一哉)

④玉類 第51図7はやや白色を呈す、半透明の瑪瑙製と思われる勾玉である。全長4.1cm・直径1.25cmを測る。全体の形状は「C」字形を呈し、穿孔は片面穿孔である。

(福島孝行)



第49図 平山古墳主体部土層断面図

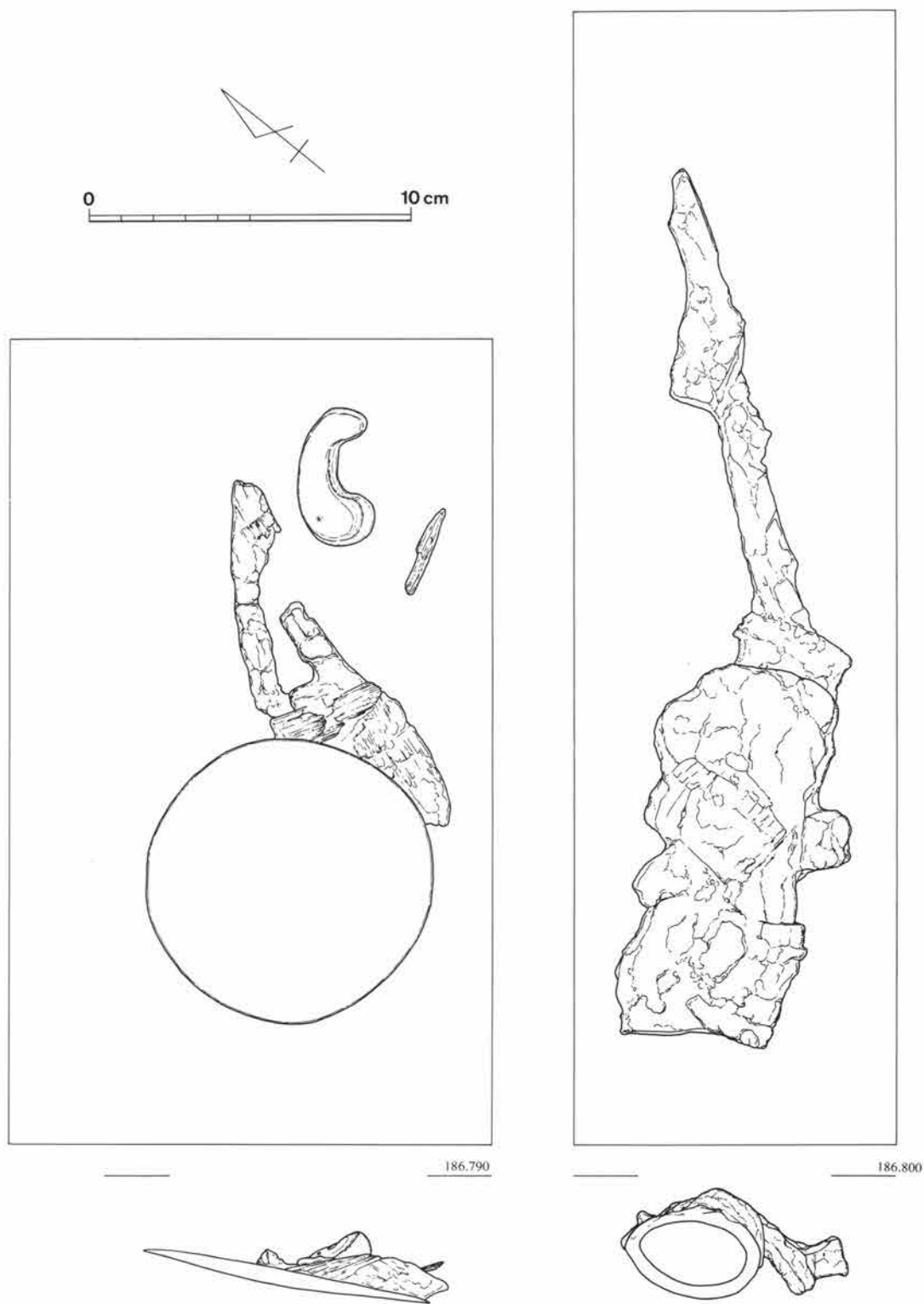
(4)カチ山北古墳群

A. 検出遺構

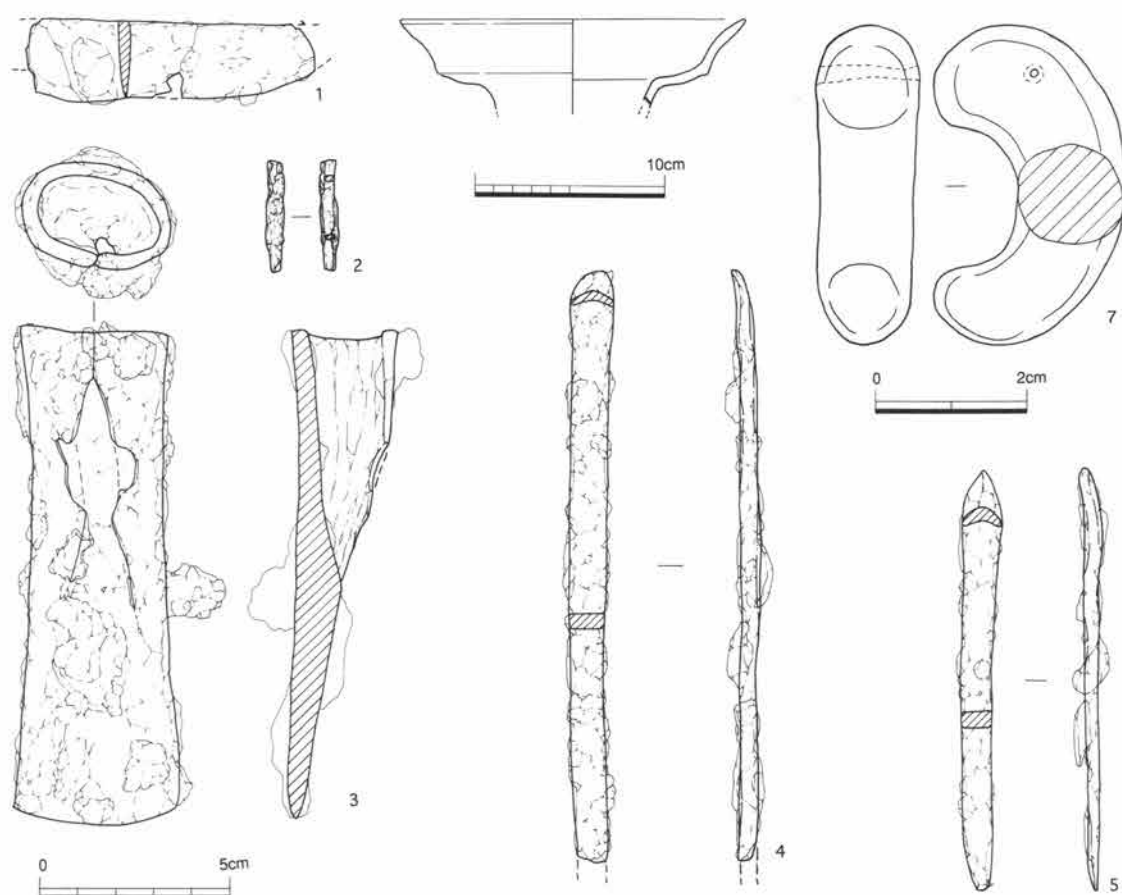
カチ山北古墳群は、試掘調査によって確認した古墳群である。この古墳群では、2基の古墳が南北に並列して築かれており、南側の高所に位置するのが1号墳、その北側が2号墳である。

①カチ山北1号墳

墳丘 南北11.4m・東西9.1mの方墳である。南北両端は、地山の岩盤を掘り込んで尾根線に直交する直線的な溝を設け、墳丘を区画する。東西側面は、地山を直線的に削り出して若干の整形をする。盛土は、墳丘南半部にはほとんど残存していない。北半部には地山の軟質岩盤片を多く含む盛土が残存する。墳丘南裾部はほぼ中央から、供献土器とみられる土師器が出土した。椀形高杯2個体、大形高杯・杯・甕それぞれ1個体の5個



第50図 平山古墳主体部遺物出土状況図



第51図 平山古墳出土鉄器・土器・玉類実測図

体から成る土器群である。高杯脚部は立った状態であり、甕は地山をわずかに掘りくぼめて据えた状態である。供献時の位置を保っているものとみられる。

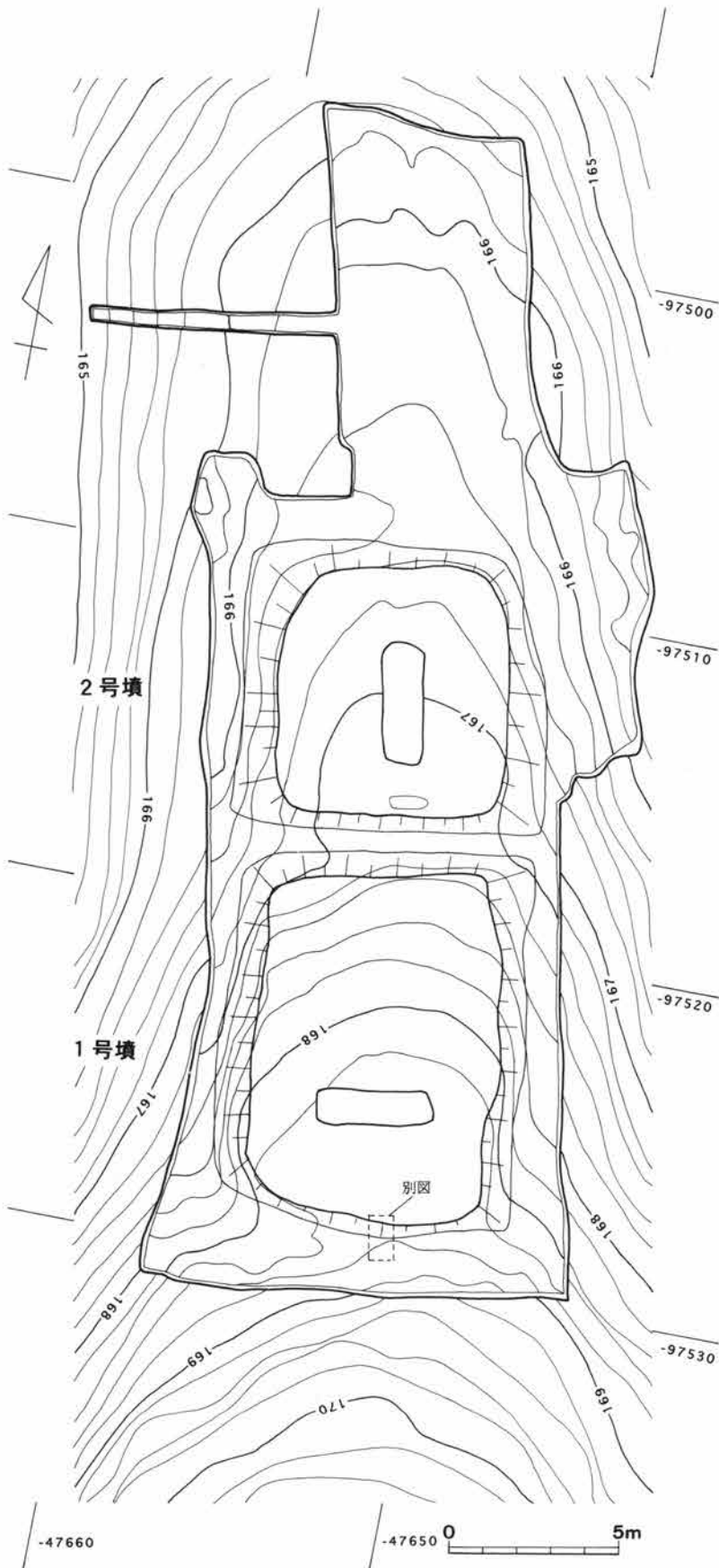
**主体部** 墳丘南寄りに1基の主体部を設ける。主軸方向はN78°Eで、ほぼ東西方向である。墓壇は南側を2段、北側を1段に掘り込む。東西3.5m・南北1.1mを測る。棺は、墓壇底部の形状から、箱形木棺とみられる。棺は、2.9m×0.65mを測る。棺底西半部北寄りから鉄刀1振が出土した。切っ先方向は西側であり、遺体の頭位は東側であったものと考えられる。

#### ②カチ山北2号墳

**墳丘** 南北8.6m・東西9mのほぼ正方形を呈する方墳である。墳丘整形は、1号墳とほぼ同様であり、南側溝は1号墳と共有する。この古墳では、表土の腐植土直下で地山の岩盤を検出しており、盛土は残存していない。また、この古墳に伴うとみられる土器などは出土していない。

**主体部** 墳丘ほぼ中央に1基の主体部を設ける。主軸方向はN12°Wで、ほぼ南北方向である。墓壇は2段に掘り込んでおり、南北3.4m・東西1.2mを測る。棺は、墓壇底部の形状から、箱形木棺とみられる。棺は2.8m×0.6mを測る。棺底西辺中央やや南寄りから鉄刀1振、その北側0.4mから袋状有肩鉄斧1点出土した。鉄刀の切先方向は北側であり、遺体の頭位は南側であったと考えられる。

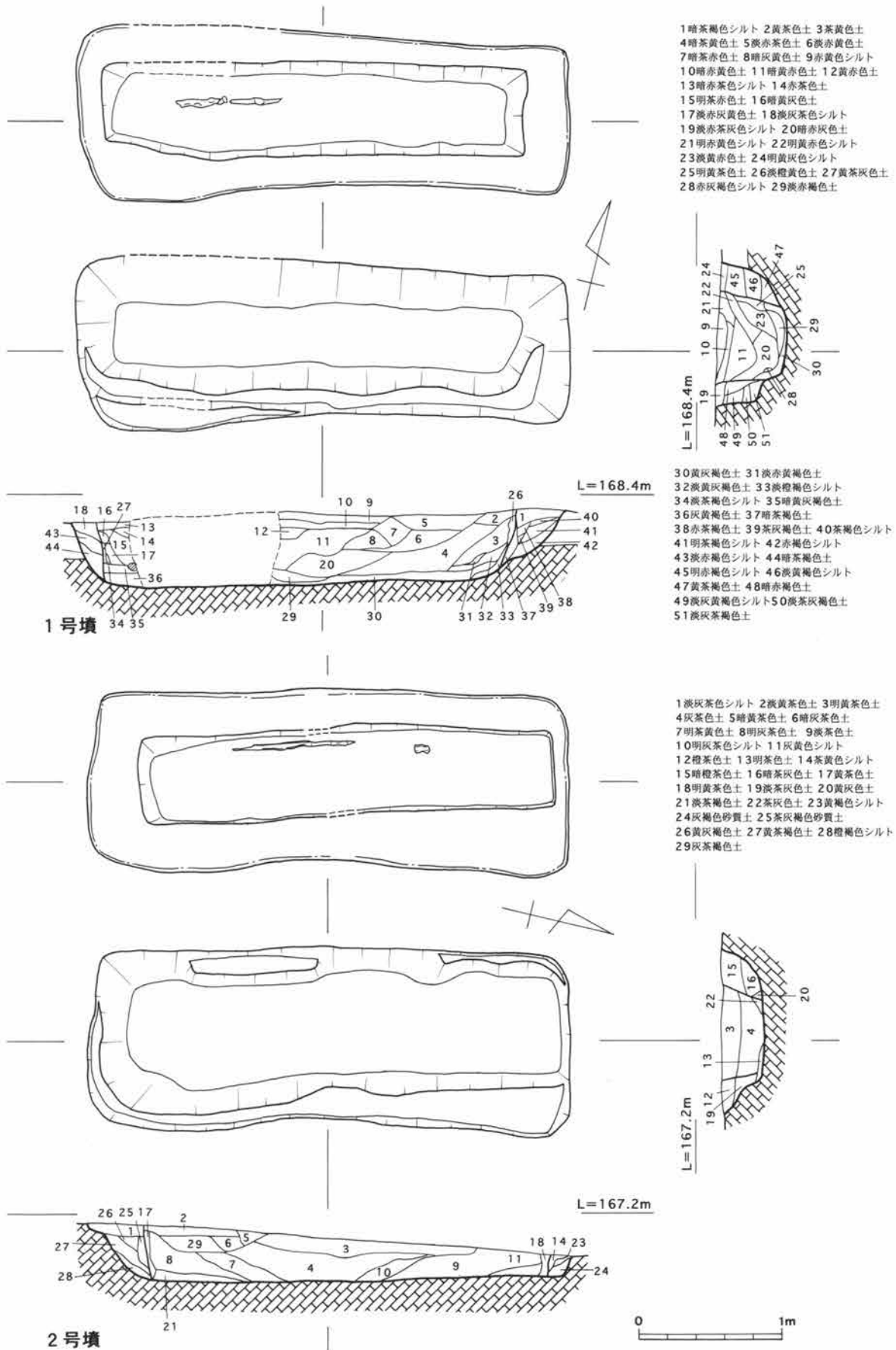
(引原茂治)



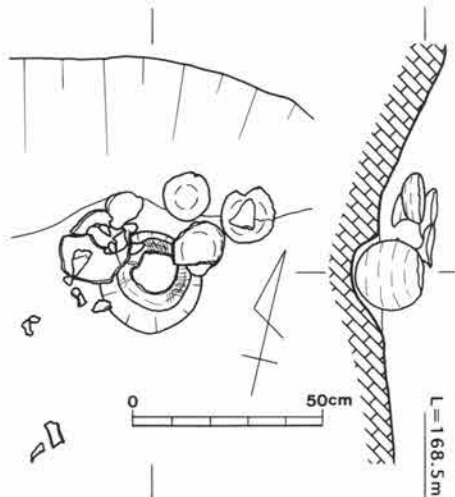
第52図 カチ山北古墳群平面図

B. 出土遺物

①土器 1～5はカチ山北1号墳南側区画溝出土土器である。高杯は1～3の3個体である。大形で杯部と口縁部の境に稜をもつ1と、やや小さく碗形の杯部をもつ2・3とがある。1は脚裾部径14.4cmを測る。杯部と脚部の接合は円盤充填法による。杯部は内外面縦ハケ後ナデを施し、脚部内面は横方向のケズリを用い、厚さを減じる。2は口径14.7cm・脚裾部径9.2cm・器高10.8cmを測る。3はそれぞれ14.2cm・9.5cm・10.0cmを測る。磨滅が著しいが、脚部内面に横方向のケズリが認められる。杯部と脚部は別づくりによるものと思われ、接合部分外面に接合に伴うハケをとどめる。4は甕である。口径13.8cm・体部最大径19.3cm・器高20.1cmを測る。丸底球形の体部に開きの弱い口縁部をもつ。外面はハケを施す。内面上半は頸部付近までケズリ上げ、その後ハケを施す。下半はハケが密でケズリは確認できない。また上半には少ない指頭圧痕が認められることから、下半はケズリを施していない可能性がある。指頭圧痕は粘土帯接合に伴うものがあるが、より多くとどめるのは底部付近で



第53図 カチ山北古墳群主体部平面・断面図



第54図 カチ山北1号墳南溝  
供献土器出土状況図

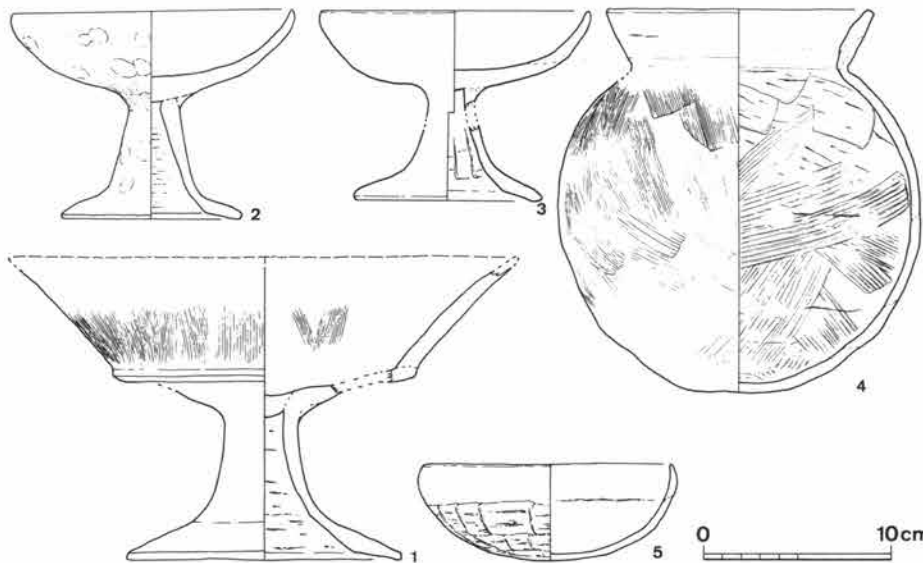
ある。5は鉢である。口径13.1cm・器高5.0cmを測る。下半は横ケズリによって薄く仕上げられる。1～5の胎土は0.5～4.0mm大の白色砂粒を少し含む。色調は橙褐色、焼成はやや軟である。以上の5点は亀岡市鹿谷遺跡における編年I b～II a期に属するものと考えられる。<sup>(注21)</sup> (三好 玄)

②鉄器

カチ山北1号墳主体部からは鉄刀と鉄鉈とが出土、2号墳では鉄刀と有肩鉄斧とが出土した。

**鉄刀** 1は全長75.2cm・身部長61.7cm・茎部長13.5cm・身部最大幅2.9cm・茎部最大幅1.9cm・身部最大厚0.7cm・茎部最大厚0.5cmを測る。関部の形状は不明。茎尻は一文

字尻。茎部に目釘穴が2孔確認できる。木質が残存しており、鞘に収められて副葬されたと考えられる。



第55図 カチ山北1号墳出土土器実測図

**鉄鉈** 第56図 3～5は鉈である。断片化し、正確な形状・法量・点数は不明である。

**鉄刀** 2は全長87.0cm・身部長70.9cm・茎部長16.1cm・身部最大幅3.2cm・茎部最大幅2.4cm・身部最大幅0.9cm・茎部最大厚0.6cmを測る。関部は斜関である。茎尻は隅切尻である。茎部に目釘穴が1孔確認できる。木質が残存しており、鞘に収められて副葬されたものと考えられる。

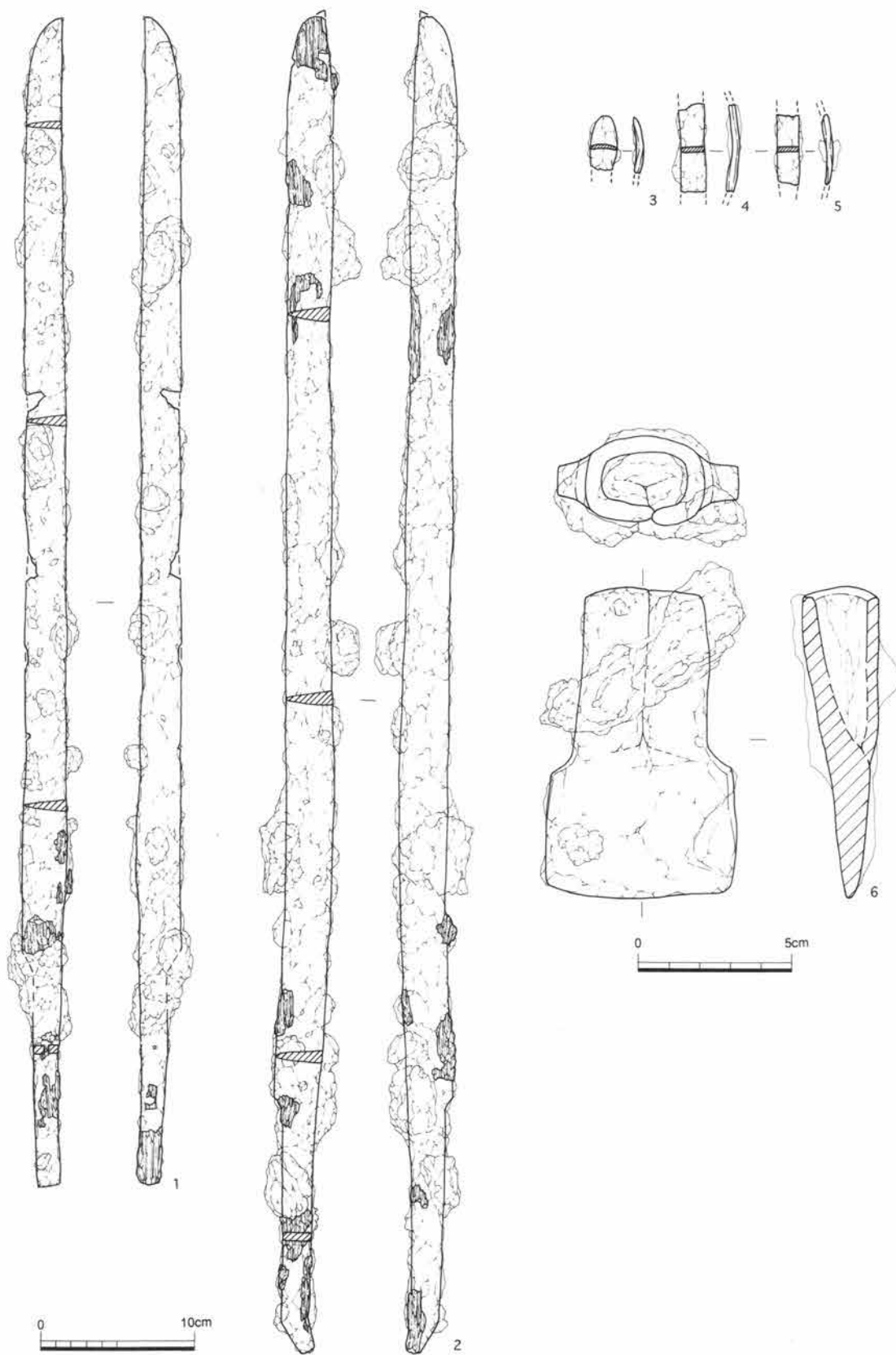
**有肩鉄斧** 全長10.0cm・刃幅6.3cm・最大厚1.3cm・袋部長径3.9cm・袋部短径2.9cmを測る。袋部は隙間なく綴じ合わされる。  
(壱岐一哉)

(5)今林古墳群

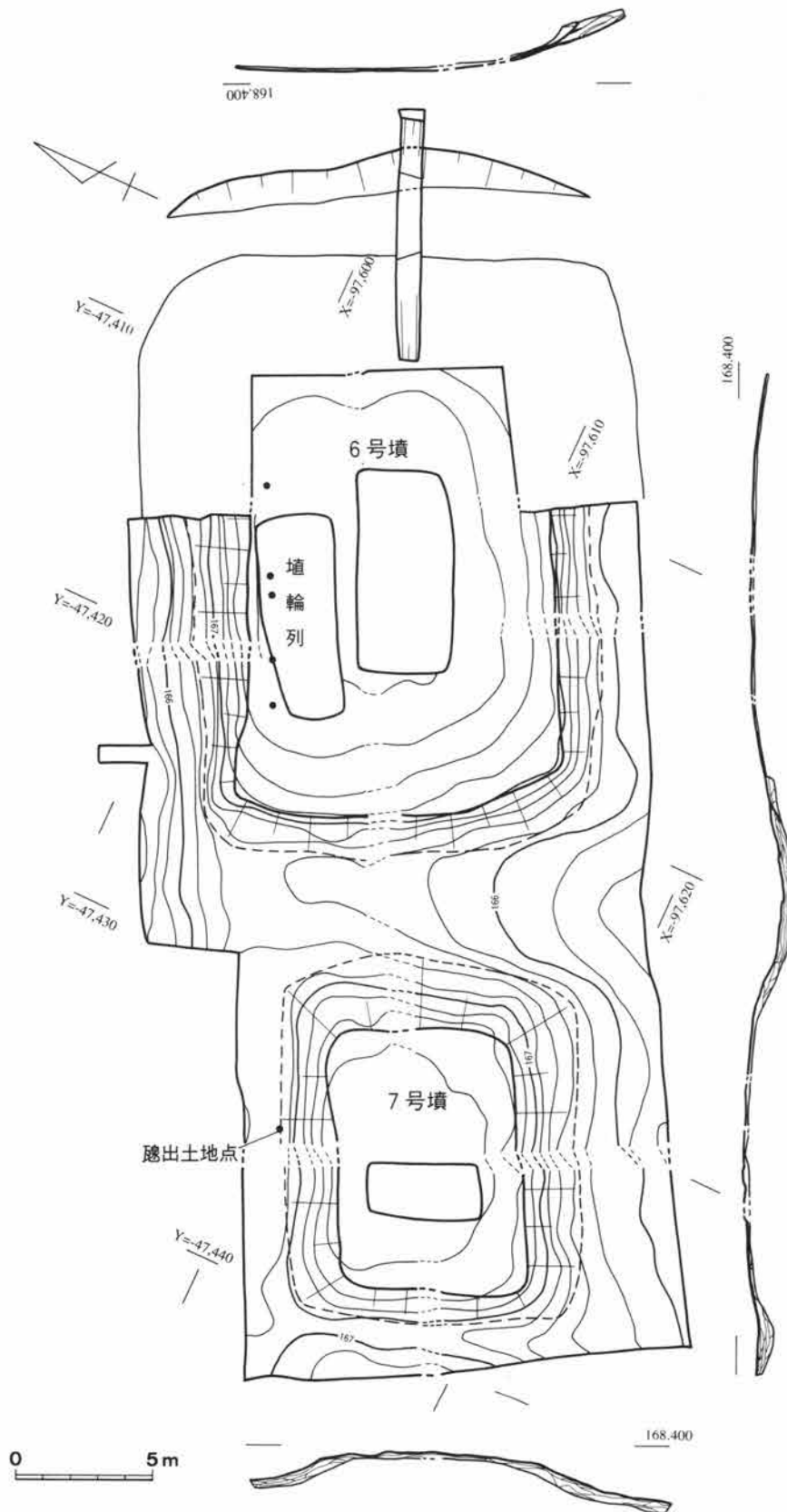
A. 検出遺構

①今林6号墳

**墳丘** 6号墳は平面長方形の方墳であり、東西22m・南北15m、墳高1.2mを測る。墳丘は東西に伸びる尾根に直行する2本の溝と南北斜面の若干の削り出し、および盛土によって成形される。段築はない。墳頂部には東西1.5m・南北1.0mの平坦面が存在し、平坦面の北辺に沿って埴

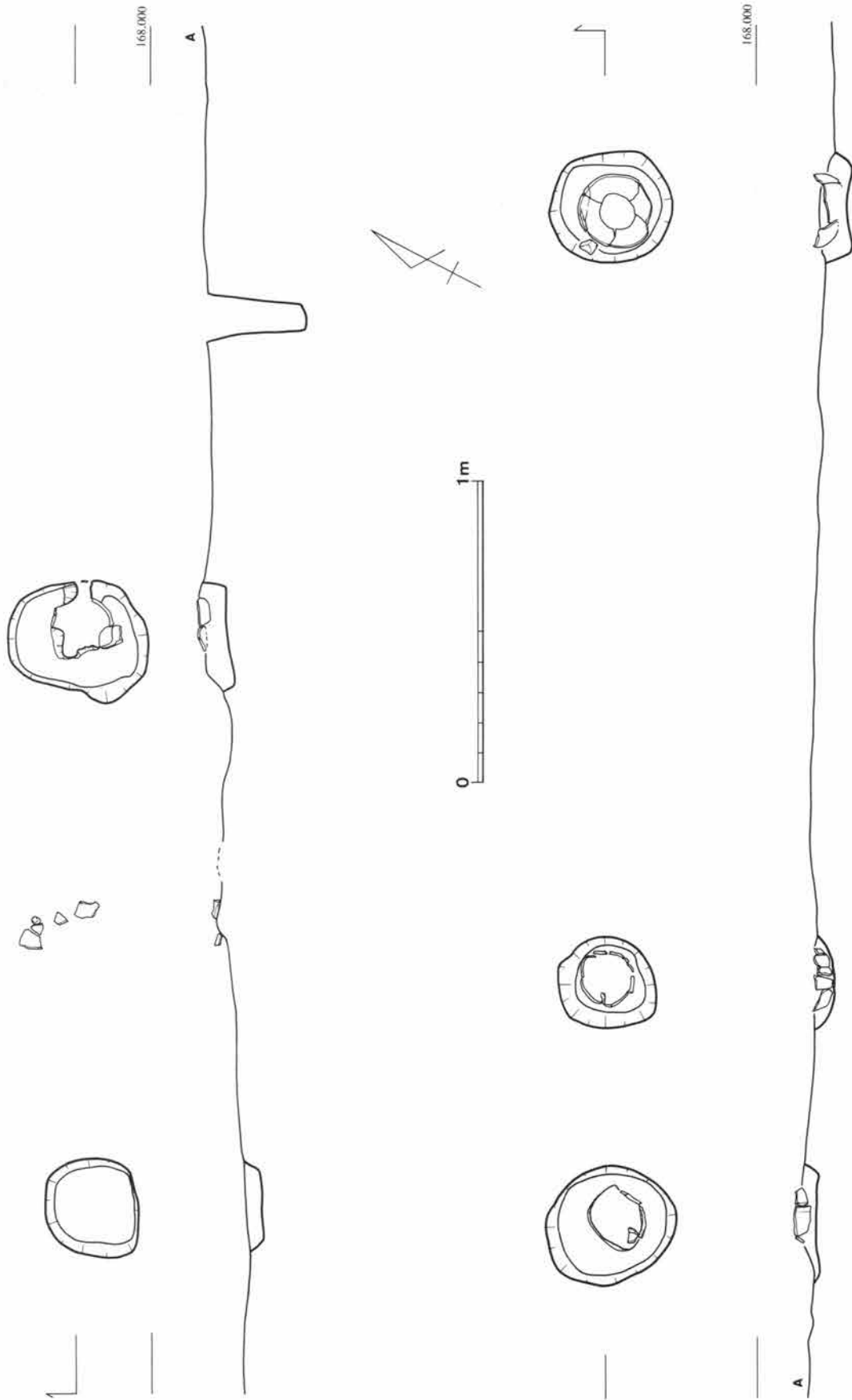


第56図 カチ山北古墳群出土鉄器実測図



第57図 今林6・7号墳平面・断面図



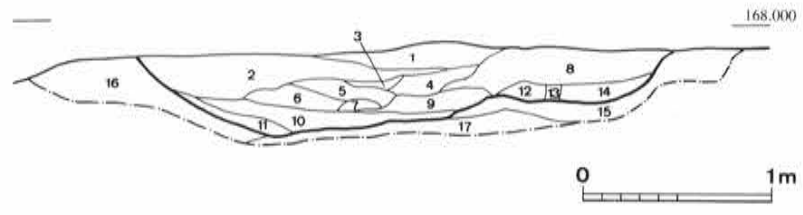
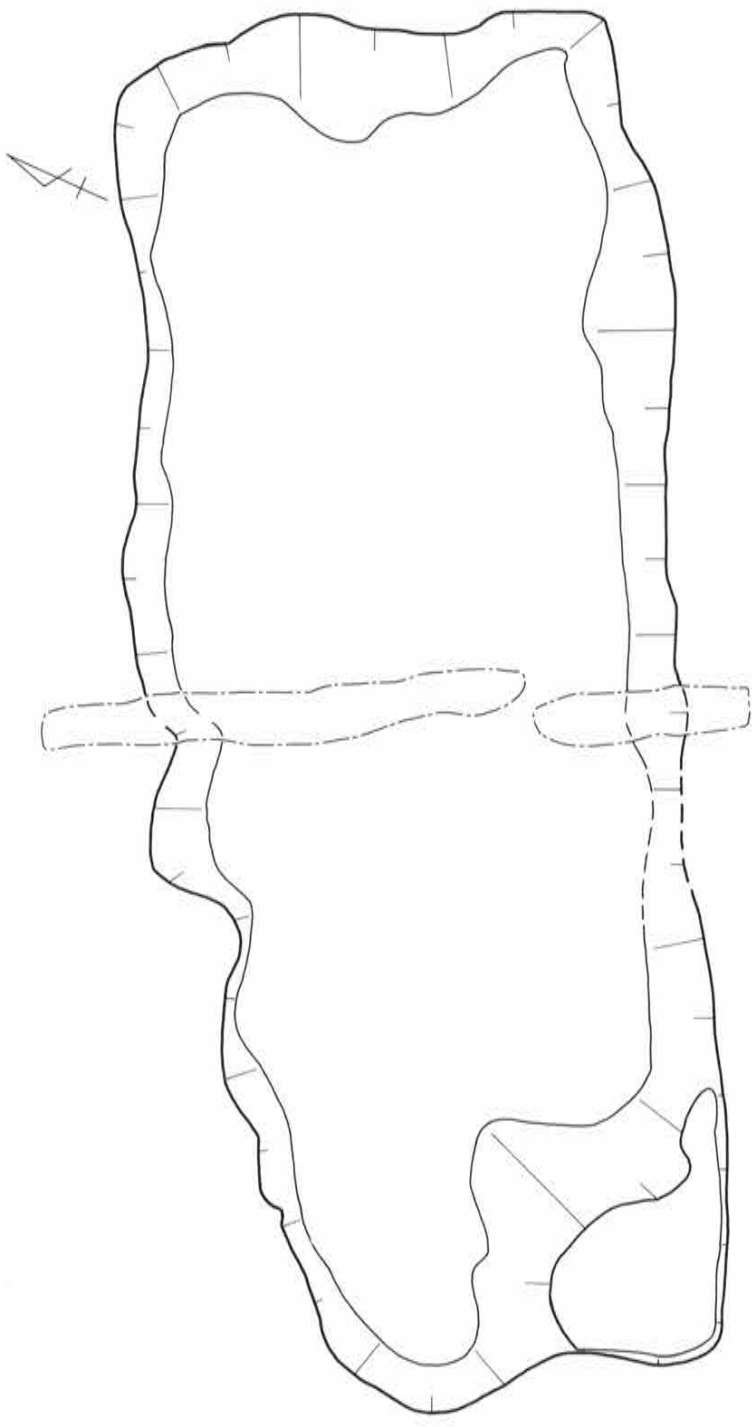


第58図 今林6号墳埴輪列平面・断面図

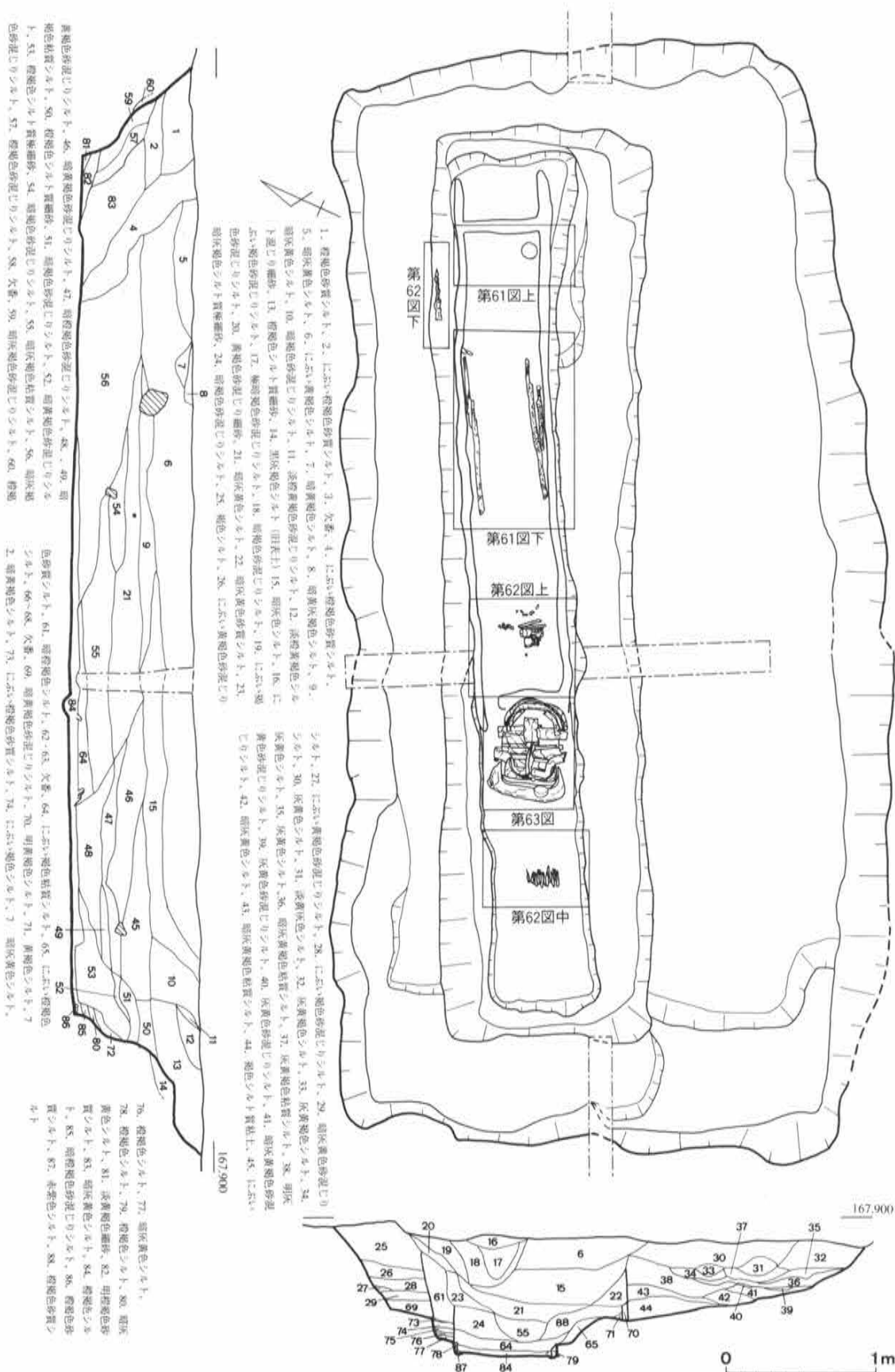
1. 1.5m 褐色砂混じりシルト、2. 暗灰褐色シルト、3. 暗褐色砂混じりシルト、4. 褐色砂混じりシルト、5. 暗灰褐色シルト、6. 暗褐色シルト、7. 暗褐色シルト、8. 褐色砂混じりシルト、9. 灰褐色砂混じりシルト、10. 暗褐色砂質シルト、11. 暗灰褐色シルト、12. 暗褐色砂混じりシルト、13. 暗褐色砂質シルト、14. 暗褐色砂混じりシルト、15. 暗褐色砂質シルト、16. 暗褐色砂質シルト（盛土）、17. 暗褐色シルト（旧表土）、18. 暗褐色砂質シルト、19. 1.5m 褐色砂混じりシルト

20. 暗褐色シルト、21. 暗褐色砂質シルト、22. 1.5m 褐色シルト、23. 暗褐色砂質シルト、24. 灰褐色砂質シルト、25. 暗褐色砂混じりシルト、26. 暗褐色シルト、27. 暗褐色シルト、28. 暗褐色シルト、29. 暗褐色砂質シルト（盛土）、30. 暗褐色砂混じりシルト、31. 褐色砂混じりシルト、32. 暗褐色砂質シルト、33. 暗褐色砂混じりシルト、34. 1.5m 褐色砂混じりシルト、35. 暗褐色砂質シルト

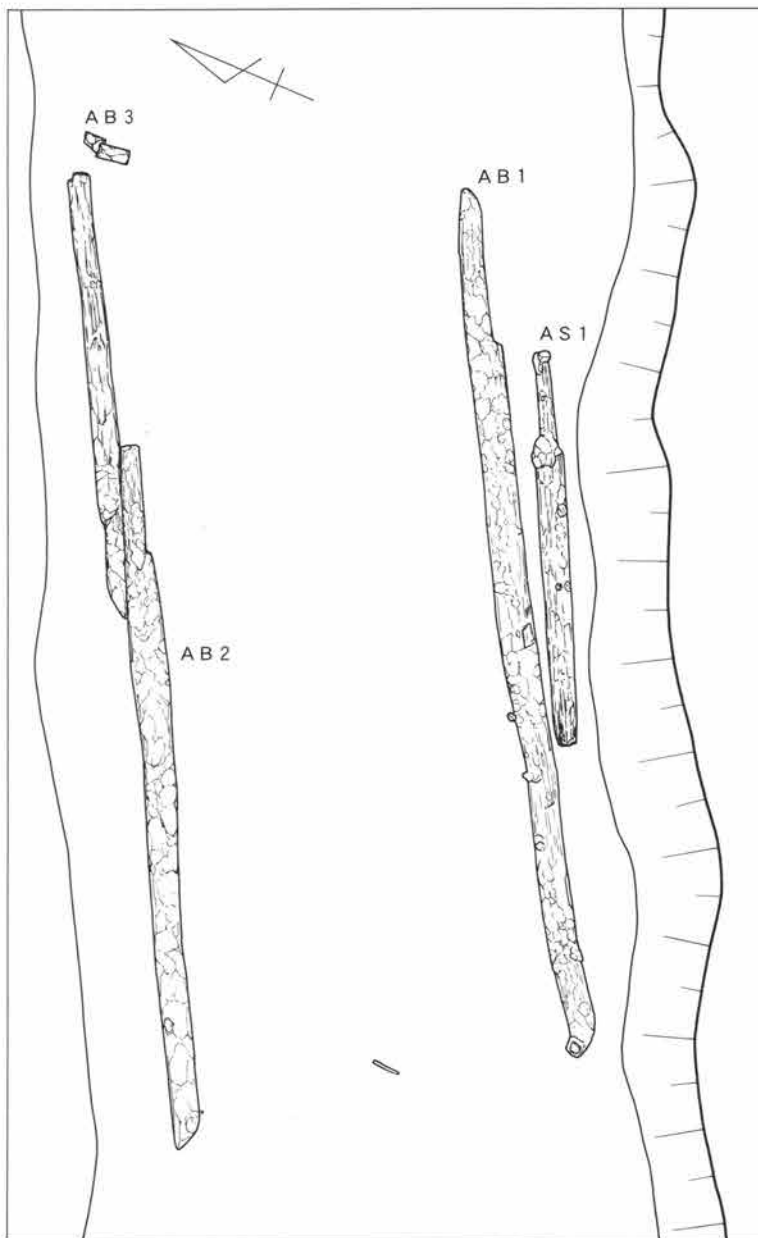
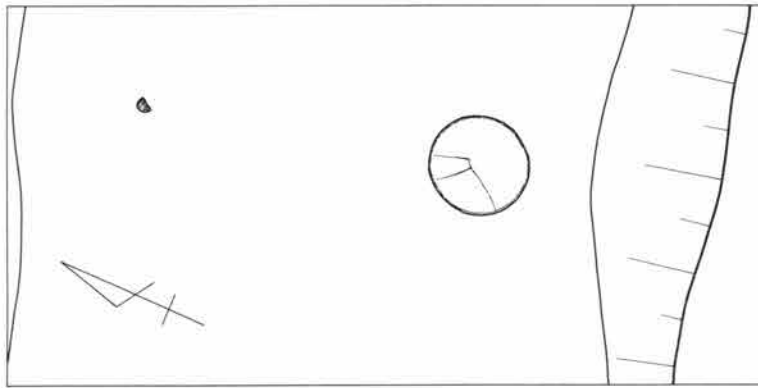
38. 暗褐色砂混じりシルト、39. 暗灰褐色砂混じりシルト、40. 暗褐色砂混じりシルト、41. 暗褐色シルト、42. 暗褐色シルト、43. 1.5m 褐色砂混じりシルト、44. 暗褐色砂質シルト、45. 暗褐色シルト、46. 暗褐色シルト、47. 暗灰褐色砂混じりシルト



第59図 今林6号墳不明土坑平面・断面図



第60図 今林6号墳主体部平面・断面図

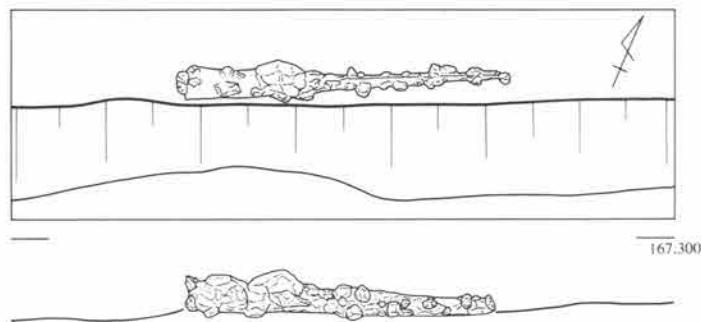
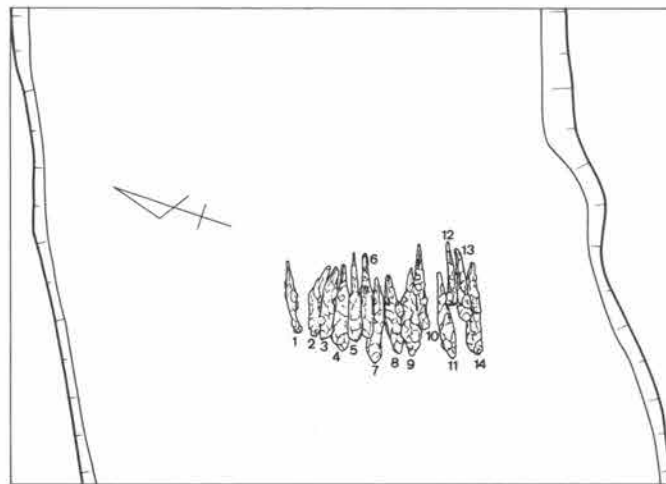
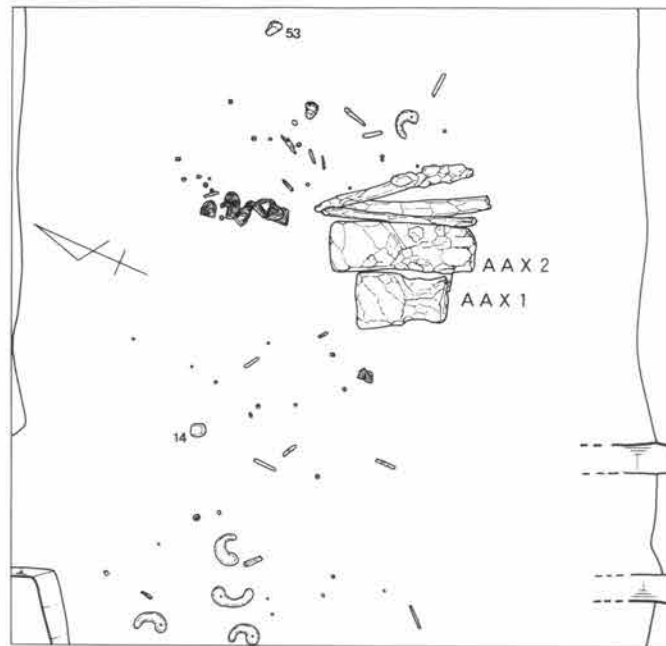


第61図 今林6号墳主体部遺物出土状況図(鏡・刀剣類 1/8)

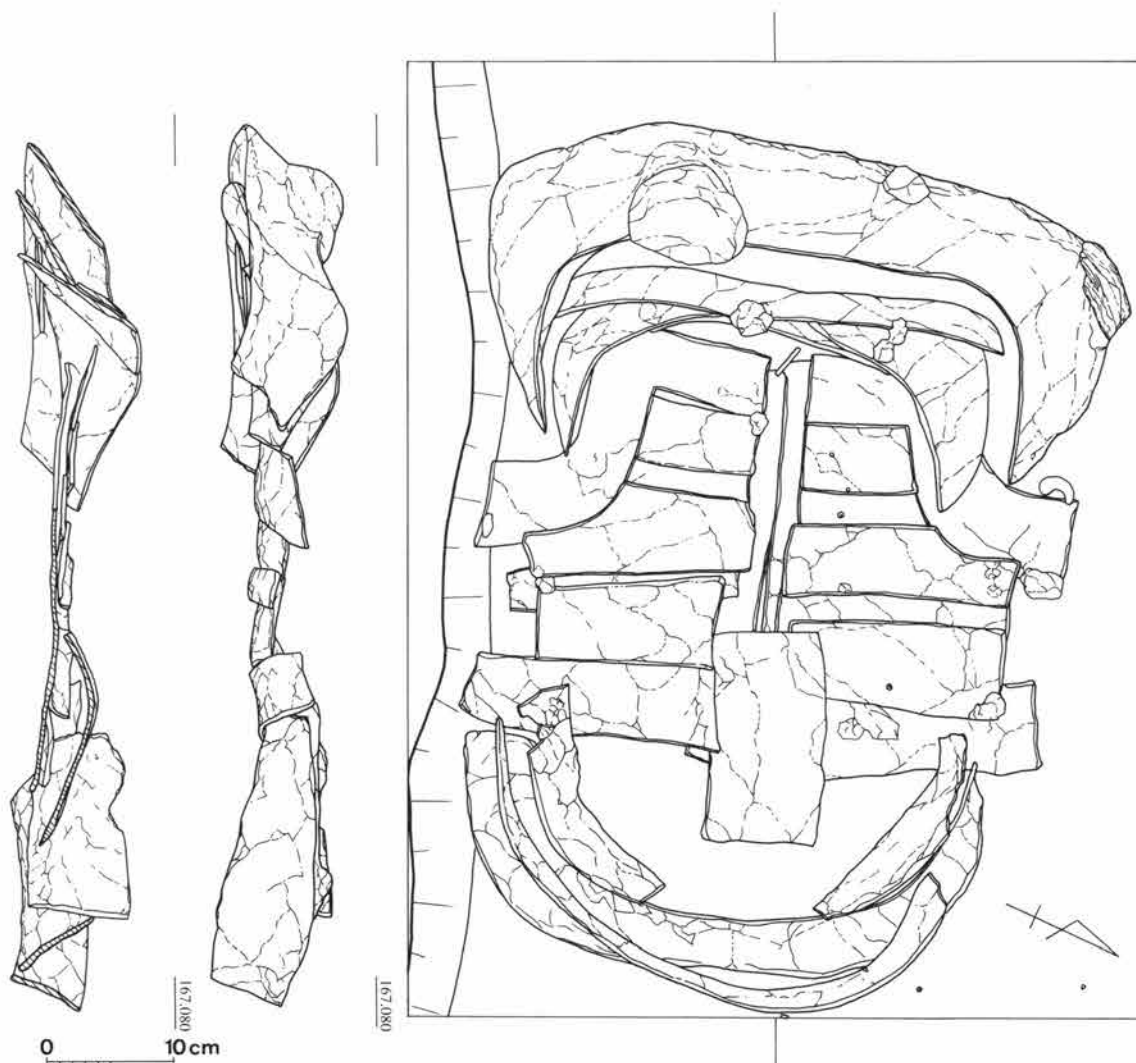
輪列が残存していた。原位置をとどめていたのは3個体分の円筒埴輪のみであり、それらも、底部の3cmほどがかろうじて残っていたに過ぎない。墳丘の各辺裾部の流出土からはまとまった量の埴輪片が出土しており、埴輪列は墳丘上平坦面の縁辺部を圍繞していた可能性が高い。また埴輪列の東、列の延長上に朝顔形埴輪の肩部を口縁部を打ち割り、倒立させて埋納した土壙を検出した。主体部は墳頂部平坦面中央南寄りに東西方向を主軸として検出した。またこれと平行した不明土坑を主体部の北側で検出した。土坑は浅く、いったん掘削したもののすぐに埋め戻されている。

主体部 墓壙は平面隅丸長方形の2段墓壙で、1段

目の規模は長さ7.45m・幅3.6m、検出面からの深さ37cmを測る。2段目は北側に偏り、南側には広いテラスが存在する。2段目の規模は長さ6.07m・幅1.30m・深さ22cmを測る。さらに木棺据え付けのための浅い掘り込みがある。規模は長さ5.7m・幅0.7m・深さ10cmを測る。土層断面によると2段目の壁に沿って黄褐色のシルトが立ち上がっており、その内側は上層からの落ち込み土によって充填されているが、その外側は水平な堆積が見られ、しかも黒色土と褐色土の互層を成している。したがって、この部分に木質の囲いおよび蓋があったことが推察される。3段目の墓壙底面には浅い溝状の掘り込みがあり、土層断面ではこの部分から褐色シルトが立ち上がる。したがってこの部分に箱形の木棺が推定される。墓壙底の掘り込みが「H」形であることから「H」形の木棺であると考えられる。掘り込みの位置から、木棺は3段目の東側に寄せて据えられていたと考えられる。



第62図 今林6号墳主体部遺物出土状況図(鉄鎌、農工具、矛 1/8)  
(鉄鎌の番号は取り上げ番号)



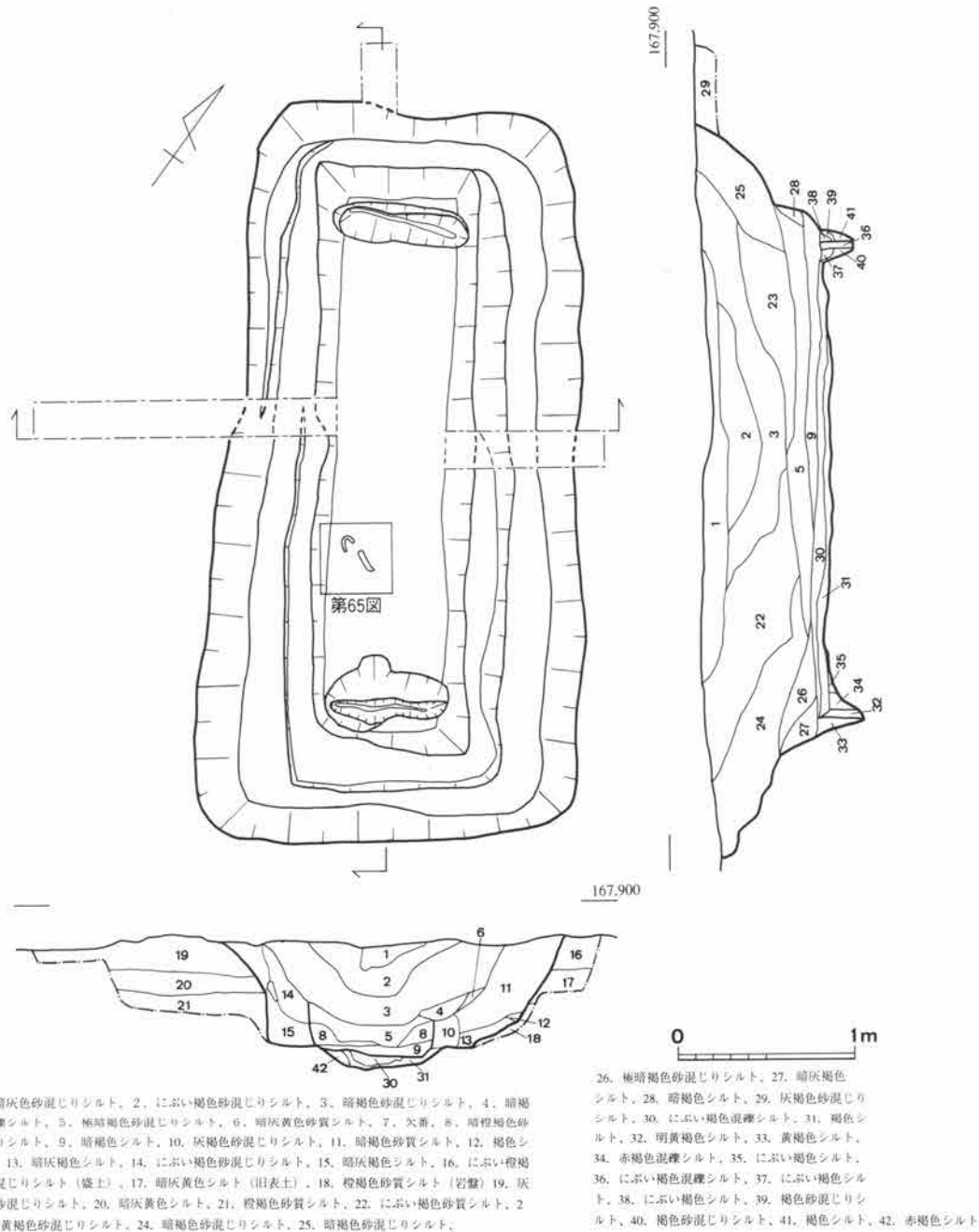
第63図 今林6号墳主体部短甲出土状況図 (1/6)

遺物出土状況 墓壙3段目を掘り進める過程でやや西寄りの位置から短甲が出土した。短甲は前胴を下に後胴を上にして出土した。後胴は上半と下半に分裂しており、前胴の上端と下端にそれぞれ折り重なっていた。前胴の上には緑色凝灰岩製の管玉1点とガラス小玉3点が乗っていた。棺底面の東端で鏡が出土した。鏡面を上にしており、鏡面には非常に細かい織りの布の痕跡が付着していた。鏡を取り上げると棺材の木質が残存していた。鏡の北側で竖櫛を2点検出した。鏡の西、3段目の北端で鉄剣1振と大刀1振が出土した。鋒・切先とも西側を向いており、大刀の刃は南を向いている。その向側、3段目の南端で鉄剣1振と大刀1振が出土した。鋒、切先とも西側を向いており、太刀の刃は南を向いている。刀剣類の西側で農工具類が出土した。袋状鉄斧2点が刃部を北へ向けており、この東側に鉋1点と刀子2点、鋸状鉄製品1点が折り重なって置かれていた。鉄斧の下に直刃鎌、その下に鉄錐が置かれていた。短甲と農工具類との間の空間を中心に玉類と竖櫛が出土したが、それらは棺底面から3cm程浮いているものや、鉄器の上に乗っているものもあり、当初棺蓋上に置かれていたものが木棺の腐朽に伴って転落したものと考えられる。短甲の西から鉄鏃が14本、鋒を西に向けて出土した。鉄鏃はまとまって出土しているため、14本の矢を束ねて置いてあったと考えられる。木棺の北側裏込め土中で鉄矛が出土した。刃部を

垂直に立て、鋒を東に向けて木棺と平行に置かれていた。矛の出土状態から裏込め土中の矛の出土面において、何らかの行為が行われていたことを示している。(福島孝行)

②今林7号墳

墳丘 7号墳は平面長方形を呈する方墳である。東西15m・南北12m・墳高1.2mを測る。旧表土を含め、墳高の1m分を削り出し、その上に20cm分の盛土を行っている。墳丘の東側は6号墳と溝を共有し、西側は溝によって尾根と切り離している。主体部は墳頂部平坦面に1基、主軸を南北にとって設けられているが、墳丘および平坦面の中央部から西側へ大きくずれた位置に、設けられている。結果的に墳頂平坦面の東側には広い空閑地が残されている。この部分にサブトレンチを入れて主体部の有無を確認したが、盛土・旧表土・岩盤ともに乱れは見られず、主体部



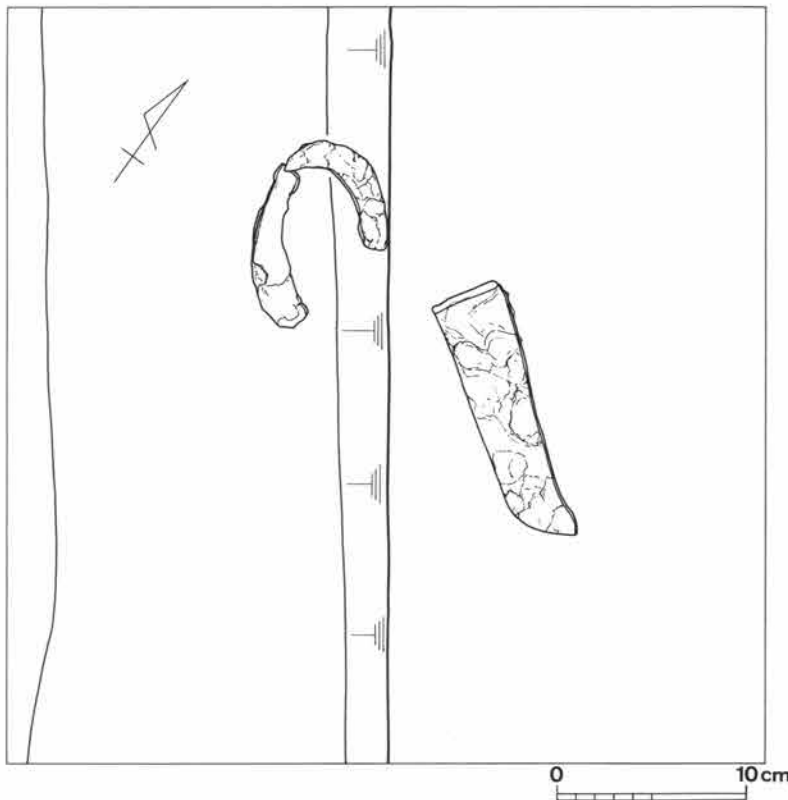
第64図 今林7号墳主体部平面・断面図

は存在しないと判断した。北側墳丘裾で完形の須恵器甕が出土した。墳丘裾の傾斜変換線付近で、正位で出土したため原位置を保っている可能性が高い。墳丘下の旧表土から弥生土器が出土した。今林古墳群は今林遺跡と重複していることから、7号墳の下層に遺物包含層があると考えられる。7号墳の調査終了後に墳丘を除去して精査を行い、柱穴を1基検出した。

**主体部** 平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸4.17m、短軸は南側で2.15m・北側で1.85mを測る。墓壙の横断面形態は逆台形を呈し、木棺安置部はさらに1段深く掘り込まれている。しかし墓壙底は凹凸があり、掘り込まれている部分は一定ではない。検出面から墓壙底までの深さは約36cmを測る。縦断面形態は2段に掘り込まれており、土層断面の観察から横断面で見られた掘り込みには埋土を行って棺床を平坦に整え、それから木棺を安置してしていると考えられる。墓壙底は北端と南端に小口溝が見られ、小口溝の断面形態は逆三角形状を呈している。小口溝の土層断面には明らかな小口板痕跡が見られる。これらの知見から、木棺の形状は小口板を墓壙底に埋め込む型式の組合式箱形木棺であると考えられる。木棺の規模は小口板痕跡の外法で2.68m、内法で2.60m、幅は外法で0.68mを測る。遺物は墓壙掘削中に墓壙中央部やや南寄り、2層の下面付近から「U」字形鍬・鋤先が出土した。さらにその下部で、3層の下面付近から直刃鎌が出土した。この層位は木棺蓋上かもしくは木棺を若干埋め戻した段階であると考えられる。棺底面からは何も出土しなかった。

### ③今林8号墓

8号墓は当初8号墳と呼ばれていたが、庄内式併行期の墳墓であることが明らかとなった。関係諸機関との協議の結果、8号墳は弥生時代の墳墓とみ、8号墓と改称することとなった。<sup>(注22)</sup>



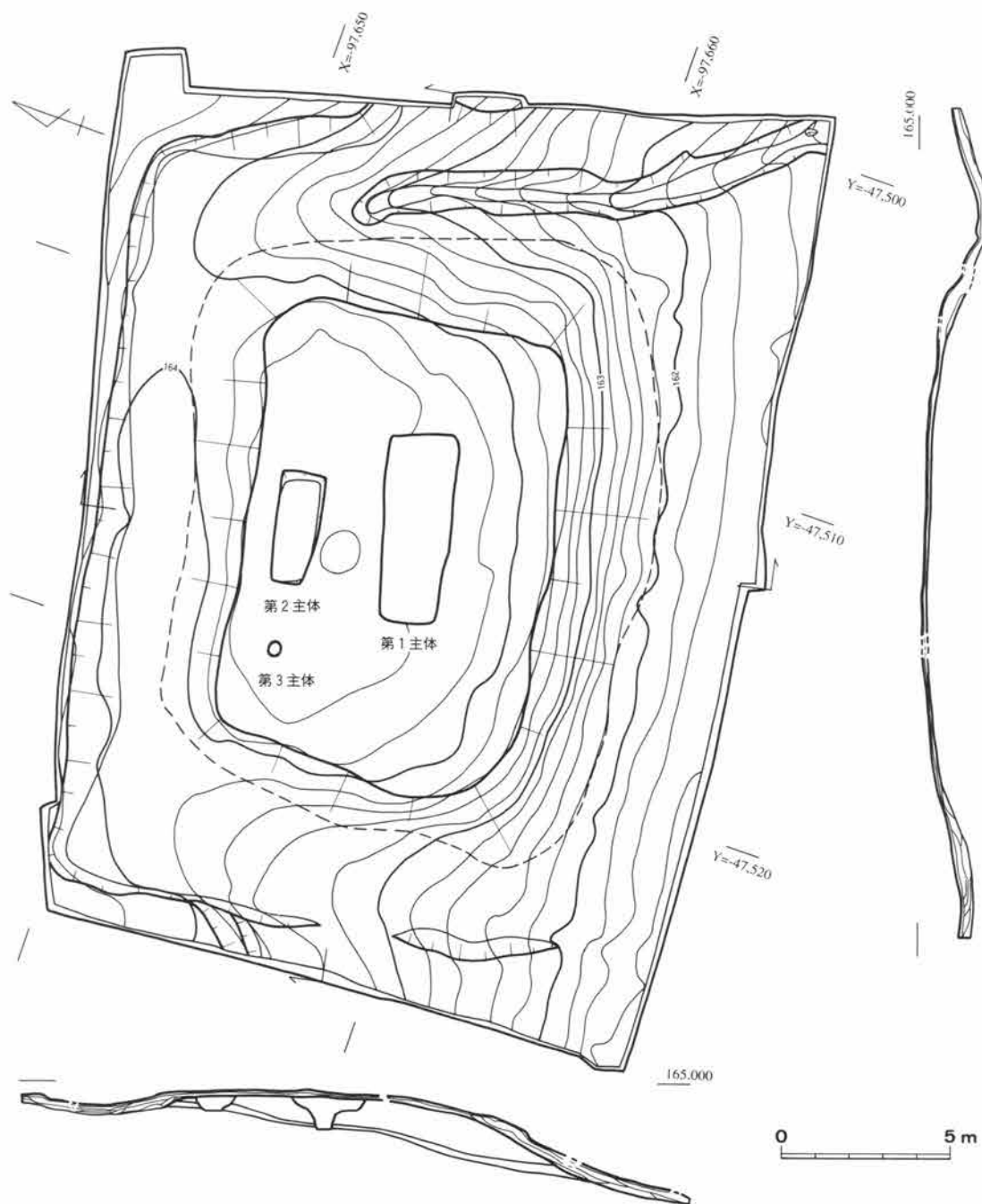
第65図 今林7号墳鉄器出土状況図

**墳丘** 平面形は隅丸台形を呈する墳丘墓である。長軸は墳丘の南側が最大で18.5m、北側が15mを測る。短軸は14mを測る。尾根の南斜面に立地し、北側は「コ」の字形にめぐらせた溝によって尾根から切り離し、南側は最大1mにも及ぶ盛土によって成形している。東側の溝底には8号墓に伴う溝の掘削以前に掘削され、埋め戻されたと考えられ



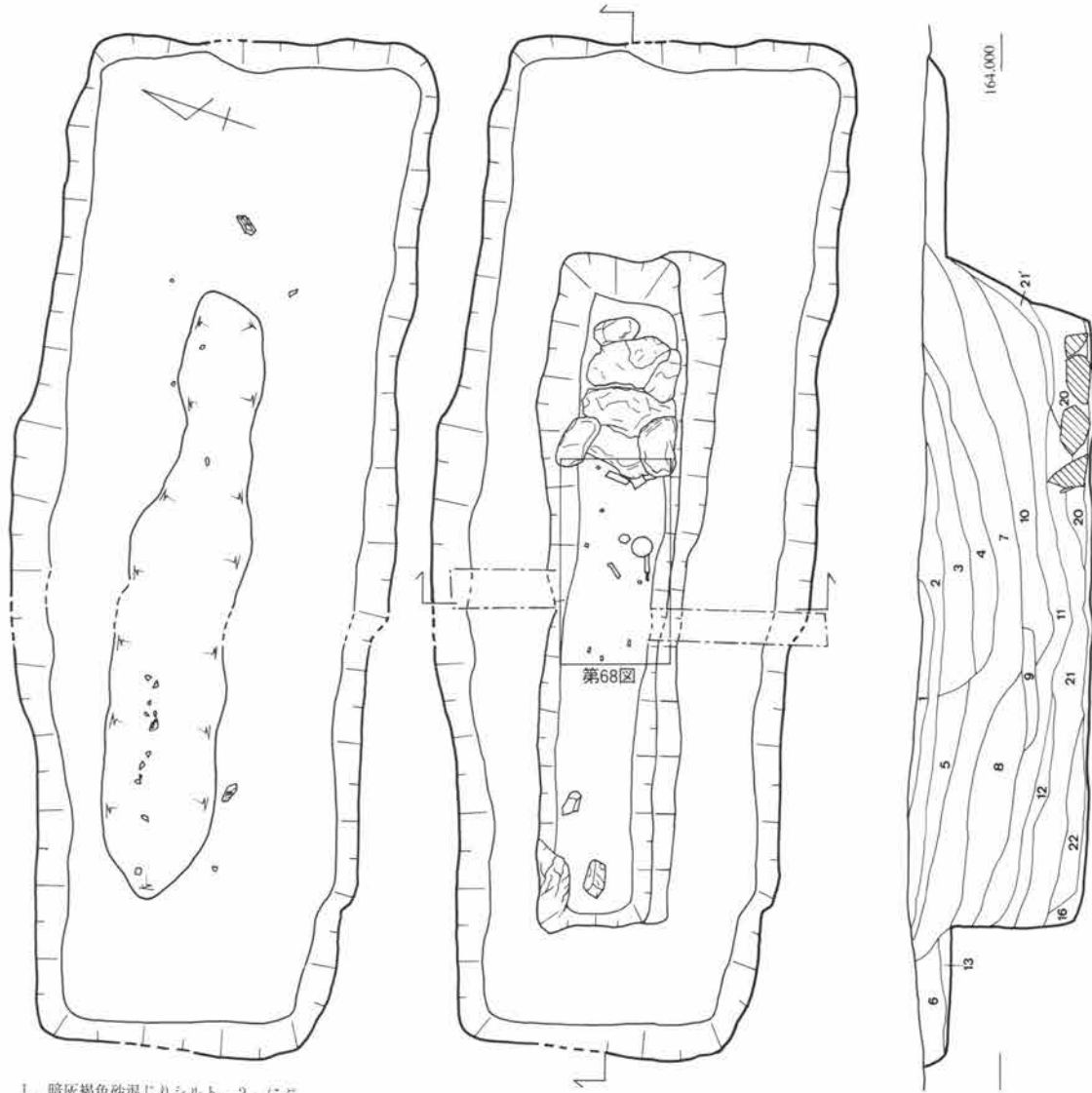
幅1.3mの溝が調査区外から標高164m付近まで続いている。今林遺跡と関係する可能性もあるが、出土遺物がないため確証はない。墳丘上には長軸13m・短軸9mの隅丸長方形を呈する平坦面があり、その中央部やや南寄りに主軸を東西にとる第1主体部、その北側に主軸を揃えて第2主体部を検出した。第2主体部の西に壺形土器が正位で埋納された土坑を検出したため、これを土器棺墓と判断し、第3主体部とした。墳丘南東裾部から供献土器と見られる土器群を検出したが、図化できるものはない。

**主体部** 第1主体部は平面形態が隅丸長方形を呈する2段墓墳である。1段目の規模は長軸5.50m・短軸2.1mを測る。1段目の底面の深さは検出面から10～20cmを測る。2段目は長軸

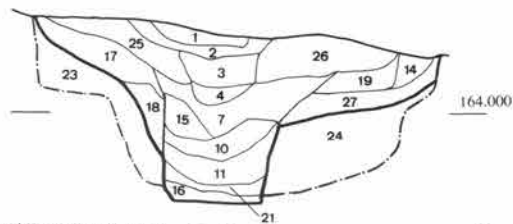


第66図 今林8号墓平面・断面図

3.68m、短軸は東側で1.00m、西側で0.90mを測る。検出面から墓壙底までの深さは83cmを測る。墓壙検出面で、木棺の上部に当たる部分で黒灰色の落ち込み土を検出し、この中から細片化した土器片が出土した(第66図)。木棺は土層断面においても観察できなかったが、副葬品の鏡の上下に残存する木質から、木棺を納めていたと判断される。木棺形式は墓壙の形状、棺内遺物のレベルが中央部より棺側部の方が6cmほど高いことから、刳抜式の木棺(舟底状か)であったと考えら



1. 暗灰褐色砂混じりシルト、2. にぶい黄褐色砂質シルト、3. 灰褐色砂混じりシルト、4. 黒褐色砂混じりシルト、5. 褐色シルト、6. 明褐色シルト、7. にぶい褐色シルト、8. 黄褐色シルト、9. 橙褐色シルト、10. にぶい橙褐色シルト、11. にぶい黄褐色粘質シルト、12. 灰黄褐色粘質シルト、13. 暗褐色シルト、14. にぶい黄褐色シルト、15. 明褐色シルト、16. 明黄灰褐色粘質シルト、17. にぶい橙褐色砂混じりシルト、18. 暗橙褐色シルト、19. にぶい橙褐色シルト、20. 暗灰黄色極細砂、21. 暗黄灰褐色粘質シルト、22. 暗黄灰褐色粘質シルト、23. 暗橙灰褐色混礫シルト、24. 暗橙灰褐色混礫シルト、25. 暗褐色シルト、26. 橙褐色シルト、27. 橙褐色シルト



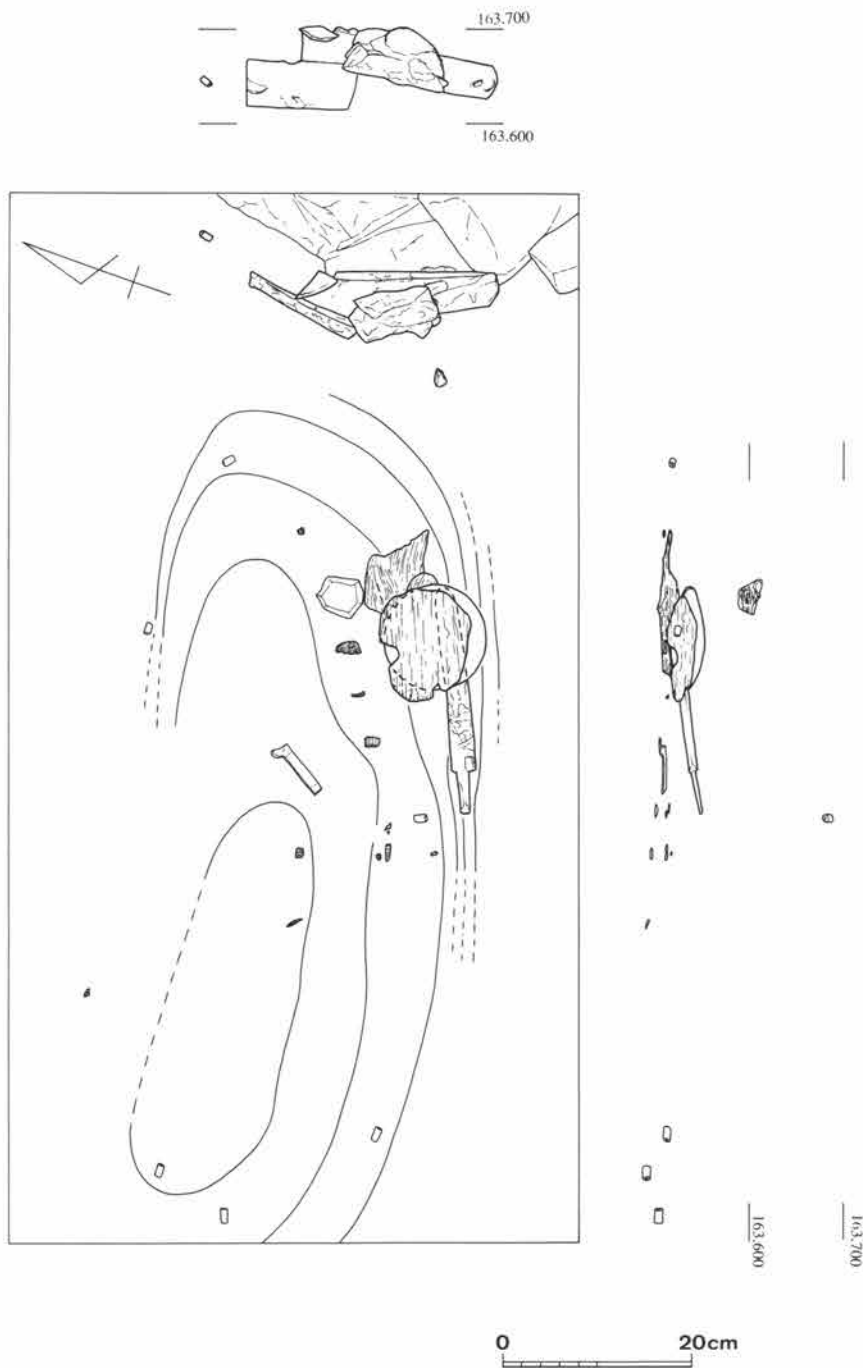
ト、24. 暗橙灰褐色混礫シルト、25. 暗褐色シルト、26. 橙褐色シルト、27. 橙褐色シルト

0 1m

第67図 今林8号墓第1主体部平面・断面図  
(左：陥没坑および土器出土状況、右：棺内完掘状況)

れる。棺底付近で木棺の東端に当たる部分から、7個の人頭大～50cm大のチャート角礫が出土した。この礫は土層断面との関係から、木棺蓋上に置かれていたものが、木棺の腐朽に伴って転落したものと判断される。この礫群の西に接して鉄器が出土した(第68図)。これらは破断して2つになったタビと方形刃先である。この2点の鉄製品は礫の上か東側に置かれていたものが、木棺の腐朽に伴い、転落してきたものであると考えられる。木棺の中央部分で土器底部片・鏡・鉄製ヤリ先・ガラス管玉・漆皮膜を検出した。土器は棺底面から10cmほど浮いて出土したため、棺蓋上から転落した

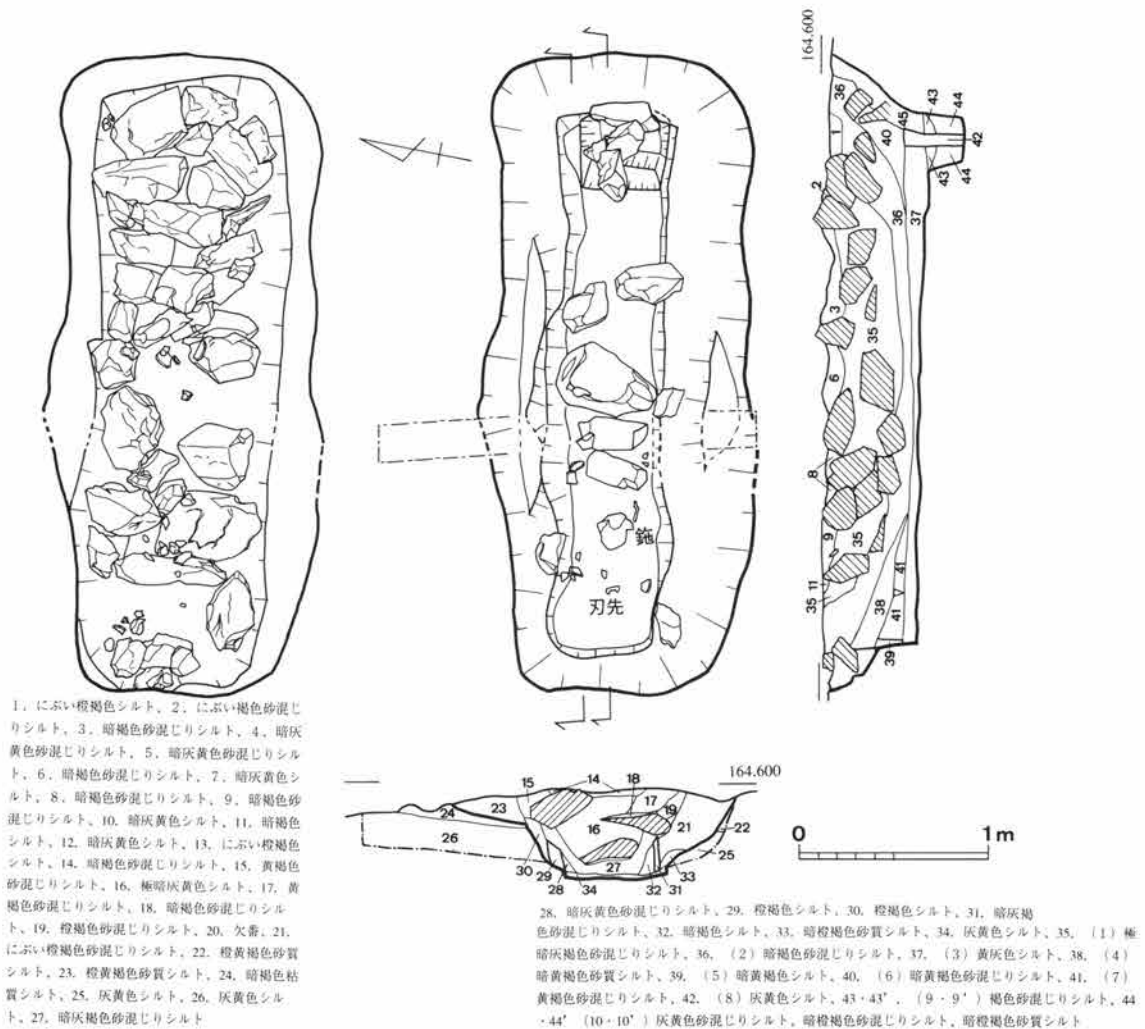
たものと考えられる。ヤリ先の基部は目釘穴の部分で破断して棺中央部に移動していた。ヤリ先は棺材に密着して鋒を東に向けて出土した。鏡はこのヤリ先の上に重ねて置かれており、鏡面を上にして置かれていた。鏡には上面にも下面にも木質が付着しており、下面の木質の上にもヤリ先が乗っている。ガラス管玉はAJ2・4・6・7など比較的棺底面に近いレベルのものもある



第68図 今林8号墓第1主体部遺物出土状況実測図  
(同心円は遺物のレベルから復元した棺底面の等高線)

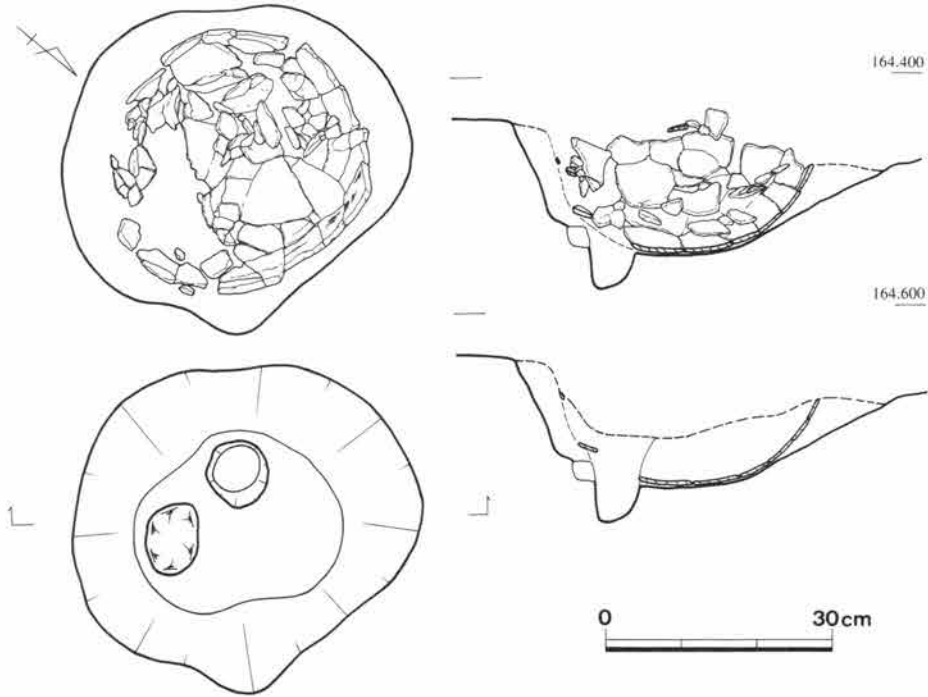
が、A J 1・3のように10cmほど高いレベルから出土するものもあり、前者は棺内に後者は棺上に置かれていたものである可能性が高い。漆皮膜は細片化した皮膜が棺底面に接して13点出土したが、網代もしくは筵状に編まれているものであることが分かる以外には詳細は不明である。木棺の西端から小児人頭大の角礫が2点出土した。西側のものは棺蓋上から転落したものと同一レベルから出土しているが、東側のものはやや上層からの転落と考えられる。

第2主体部は平面形が隅丸長方形を呈し、木棺を据える部分はさらに1段下がっている。墓壇の長軸は3.35m、短軸は1.35mを測り、墓壇底の検出面からの深さは46cmを測る。墓壇の北壁と南壁には、部分的にテラスが見られる。墓壇内には拳大から長さ1mにも及ぶ大型のものまで、チャートの角礫が50点ほど埋め込まれていた。これらの角礫は墓壇の側面に近いものほどレベルが高く、中心に近いものほど低いということが判明し、断面および礫を撤去する際の観察から、墓壇側面に近いものは、木棺の裏込め土の上に置いてあったものであることが判明した。一方、棺内に落ち込んでいるものは棺底面から10cmほど浮いており、棺蓋上に近い層位から転落したものであると考えられる。裏込め土上の礫の内、原位置を保っているものは立石状に立っているものが多く、原位置から動いているものは斜めに傾いていることから、本来、墓壇側面の裏込め土



第69図 今林8号墓第2主体部平面・断面図

上に置かれていた  
 礫は、皆立て並べ  
 られていた可能性  
 が高い。これら礫  
 群の隙間に土器片  
 が点在していた。  
 墓壙底は東側に小  
 口溝があり、土層  
 断面でも木棺痕跡  
 が認められること  
 から、東側に溝を  
 掘って小口板を固  
 定する形式の箱形  
 木棺であると判断  
 される。棺内から  
 は、棺底から10cm



第70図 今林8号墓第3主体部平面・断面図

ほど浮いた位置で「S」字に折り曲げた鉞、刃先を棺底に突き立てる形で方形刃先が出土した。どちらも棺上から転落したものと判断される。塊石を墓壙上に多量に置く例は、高知県奥谷南遺跡、福岡県平原遺跡などで類例が見られるが、当該地とはあまりに遠隔地であるため、直接の関係は不明である。  
 (福島孝行)

第3主体部は、第2主体部南西に位置する土壙内に土器を設置した主体部である。墓壙は46cm×40cmの楕円形の平面プランをもつ。棺身として壺を若干北に傾けて据える。人骨・副葬品・着装品は検出されなかったが、棺内土から体部片と別個体の壺の体部片が出土した。体部片のみで、口頸部片が伴わないことから、頸部付近より上を打ち欠いて使用されたと考えられる。別個体の破片は、蓋として用いられたものであろう。墓壙配置、土器内面の器壁の荒れ、蓋を有することから、土器を棺に用いた主体部と考える。  
 (三好 玄)

## B. 出土遺物

### (1) 今林6号墳出土遺物

① 埴輪 埴輪には普通円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。普通円筒埴輪は口縁端部を外方に直角に折り返し、端部に面を持たせている。体部は突帯間に2個の円孔を穿ち、各段間で千鳥配置にしている。突帯は断面台形、「M」字形である。1段目を除き、外面調整は縦ハケのみであり、黒斑を有する。1段目はナデ調整で平滑に仕上げている。内面調整はナデである。口縁部片は小片のため規模を復原できないが、底径は16.8~18.0cmを測る。朝顔形埴輪は体部が普通円筒と区別できないため、口縁部のみの記述になるが、直線的に外方に伸びる口縁部で、端部は水平になるように外反している。口縁部の中位に突帯を1条めぐらせている。

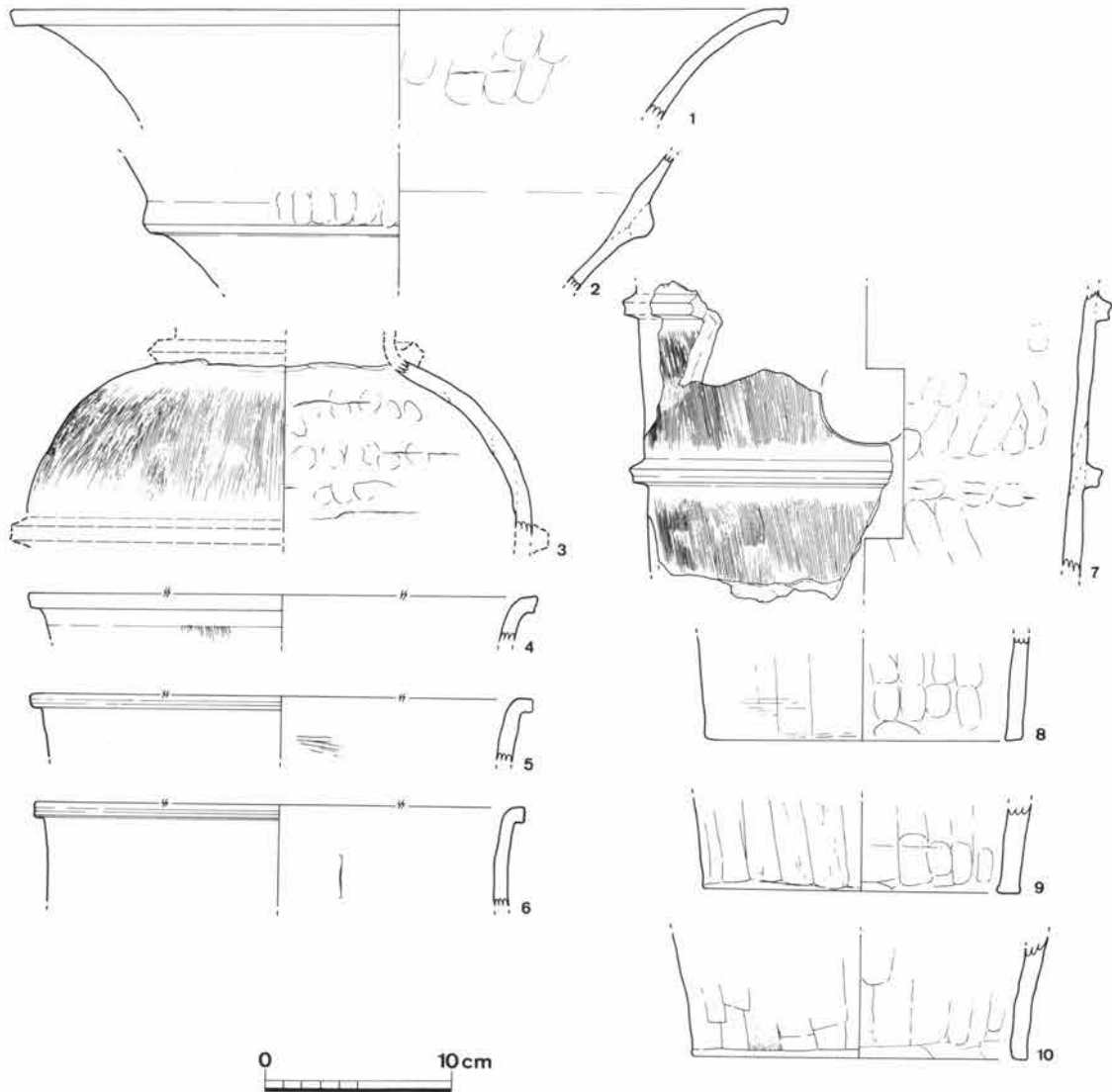
② 鏡 舶載の蝙蝠座鈕内行花文鏡である。面径10.6cmを測る。鈕座の蝙蝠文の間に「長宜子孫」

の銘をめぐらす。平縁で8個の花文をめぐらし、鈕座との間に圈帯を1条めぐらす。鈕孔はわずかに鈕座面より浮いて穿孔され、長期間の使用によると見られる磨滅により、鈕孔が広がっている。表面は全体的に非常に磨滅しており、縁と花文の境目の溝部分のみに本来の鑄上がりを見せる部分が残されている。このような鏡に対して、伝世鏡か踏み返し鏡かの議論があるが、磨きにくい部分に本来の鑄肌が残っていることから、伝世鏡といえる。<sup>(注23)</sup> 伝世鏡であるとすれば、この鏡の鑄造は岡村編年の漢鏡6期前半(2世紀前半)頃であると考えられる。<sup>(注24)</sup> この鏡が副葬されたのは5世紀前半頃であるから、3世紀にわたって伝世された鏡である。 (福島孝行)

③鉄器

鉄器の遺物番号は取上番号と一致する。

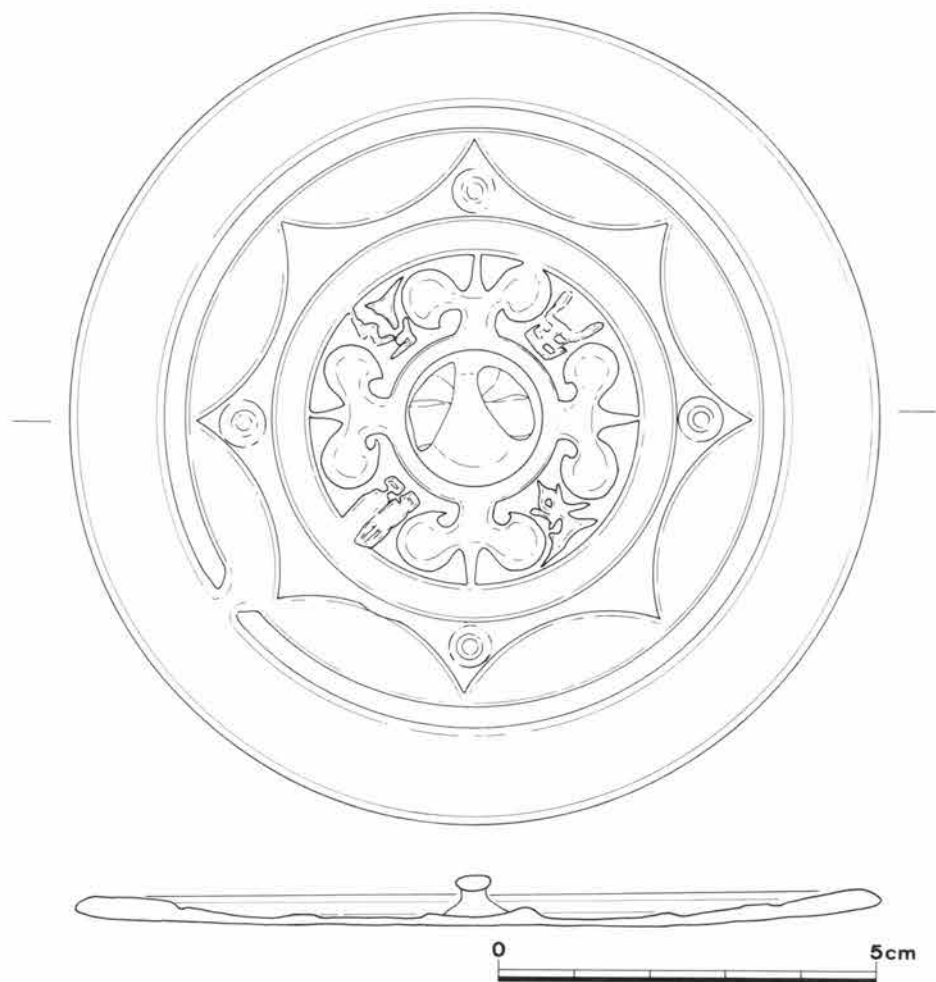
短甲 前胴・後胴ともに堅上3段・長側4段からなる7段構成の長方板革綴短甲である。前胴は左側・右側とも、基本的には全ての段が1枚の板により構成されるが、右前胴長側第3段の板のみ例外的に小型の板を補足的に用いている。引合板は左右とも1枚である。後胴は押付板・帯



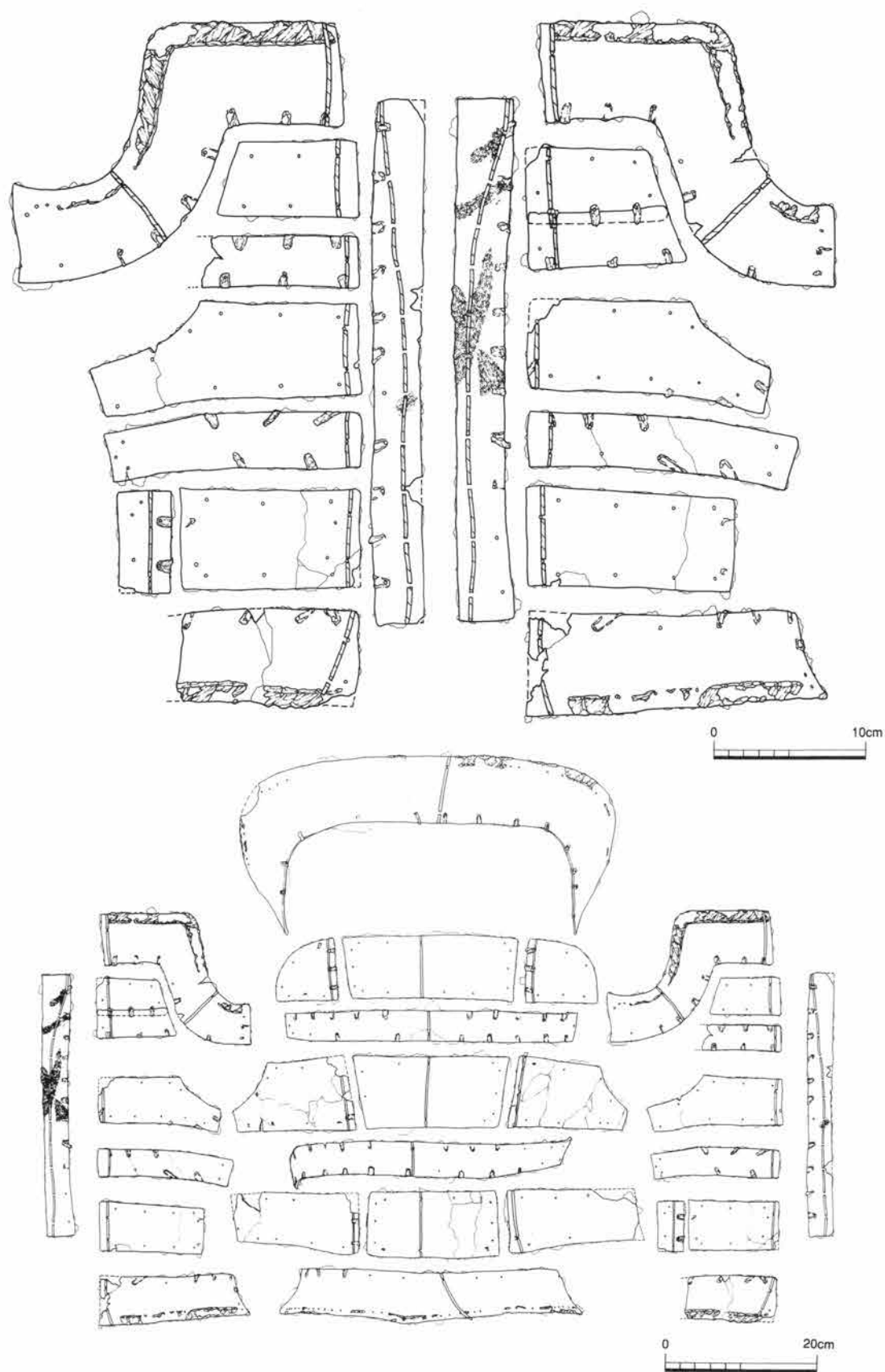
第71図 今林6号墳出土土埴輪実測図

金・裾板に1枚の板が用いられ、地板は3枚の板からなる。すなわち、全部で29枚の板により構成される。各板の連結には、孔の軸を合わせて板同志を重ね合わせ、綴じた際の革紐が表側ではI字状に、裏側では鋸歯状になる革綴第1手法を用いている<sup>(注25)</sup>。短甲の上下端部には、覆輪が施されている。全体的に遺存状態が悪く、わずかに観察可能な部分から復原すると、押付板においては、小孔1つおきに2本の革紐を交差させて通した後に、小孔に沿って革紐を通してゆく革紐II技法を用いていると考えられる<sup>(注26)</sup>。また、革紐の交差点は表側寄りになる。腰緒孔が、右前胴の長側第3段に認められる。また、引合板に繊維痕が紐状に残存しており、ワタガミ受緒である可能性が高い。これらの諸特徴からこの短甲は長方板革綴短甲のⅢb式であると考えられる<sup>(注27)</sup>。

鉄刀(第77図) AB1は全長93.3cm・身部長76.5cm・茎部長16.8cm・身部最大幅3.1cm・茎部最大幅2.5cm・身部最大厚0.7cm・茎部最大厚0.7cmを測る。関部の形状は斜関で、茎尻は隅切尻である。茎部に目釘穴が1孔確認できる。全体に木質が残存しており、鞘に収められて副葬されたものと考えられる。AB2は全長83.5cm・身部長67.6cm・茎部長15.9cm・身部最大幅3.1cm・茎部最大幅2.5cm・身部最大厚0.75cm・茎部最大厚0.7cmを測る。関部の形状は斜関で、茎尻は一文字尻である。茎部に目釘穴が1孔確認できる。全体に木質が残存しており、鞘に収められて副葬さ

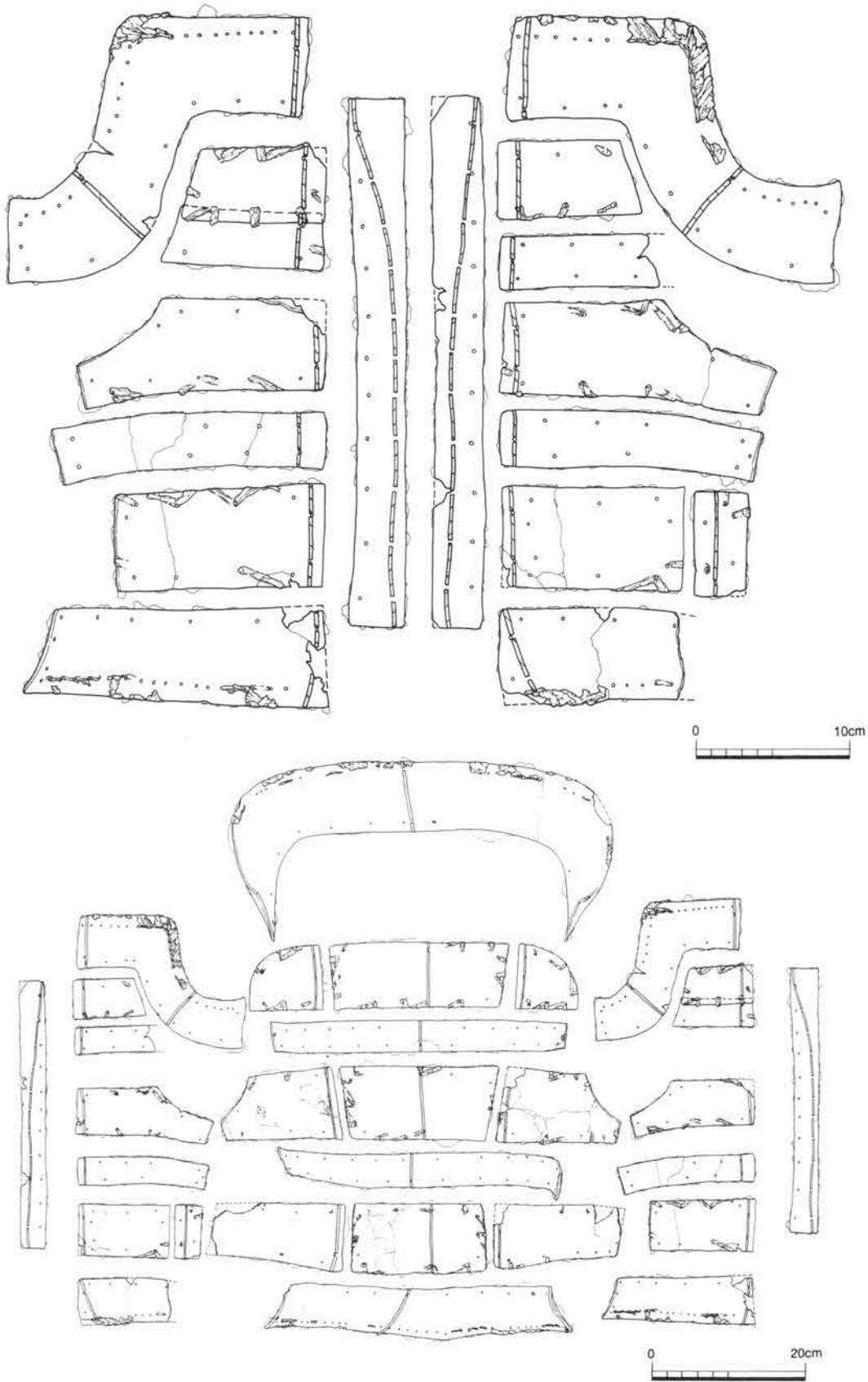


第72図 今林6号墳出土内行花文鏡実測図



第73図 今林6号墳出土短甲実測図(上：前胴外面、下：外面展開図)

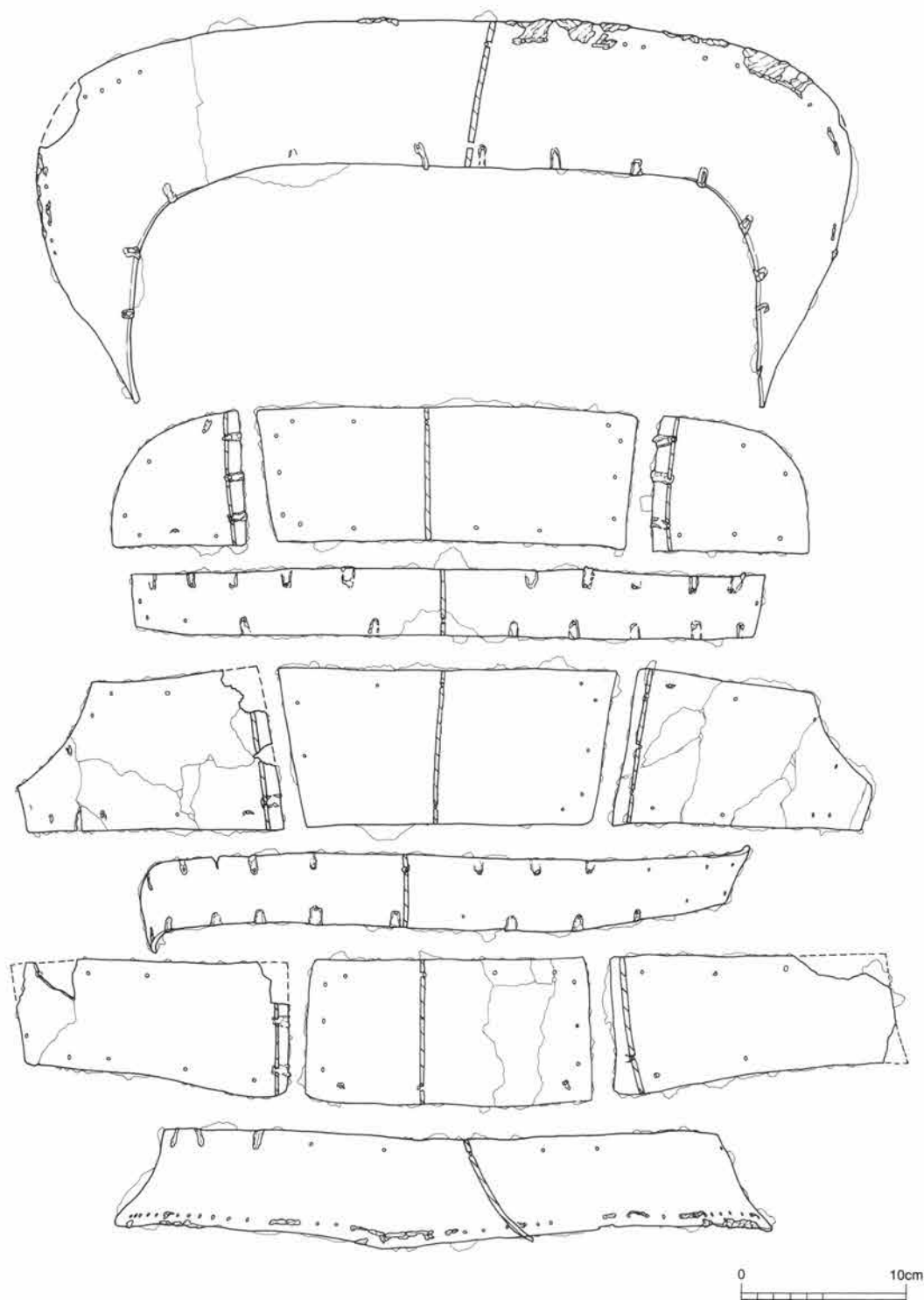




第74図 今林6号墳出土短甲実測図(上：前胸内面、下：内面展開図)

れたと考えられる。

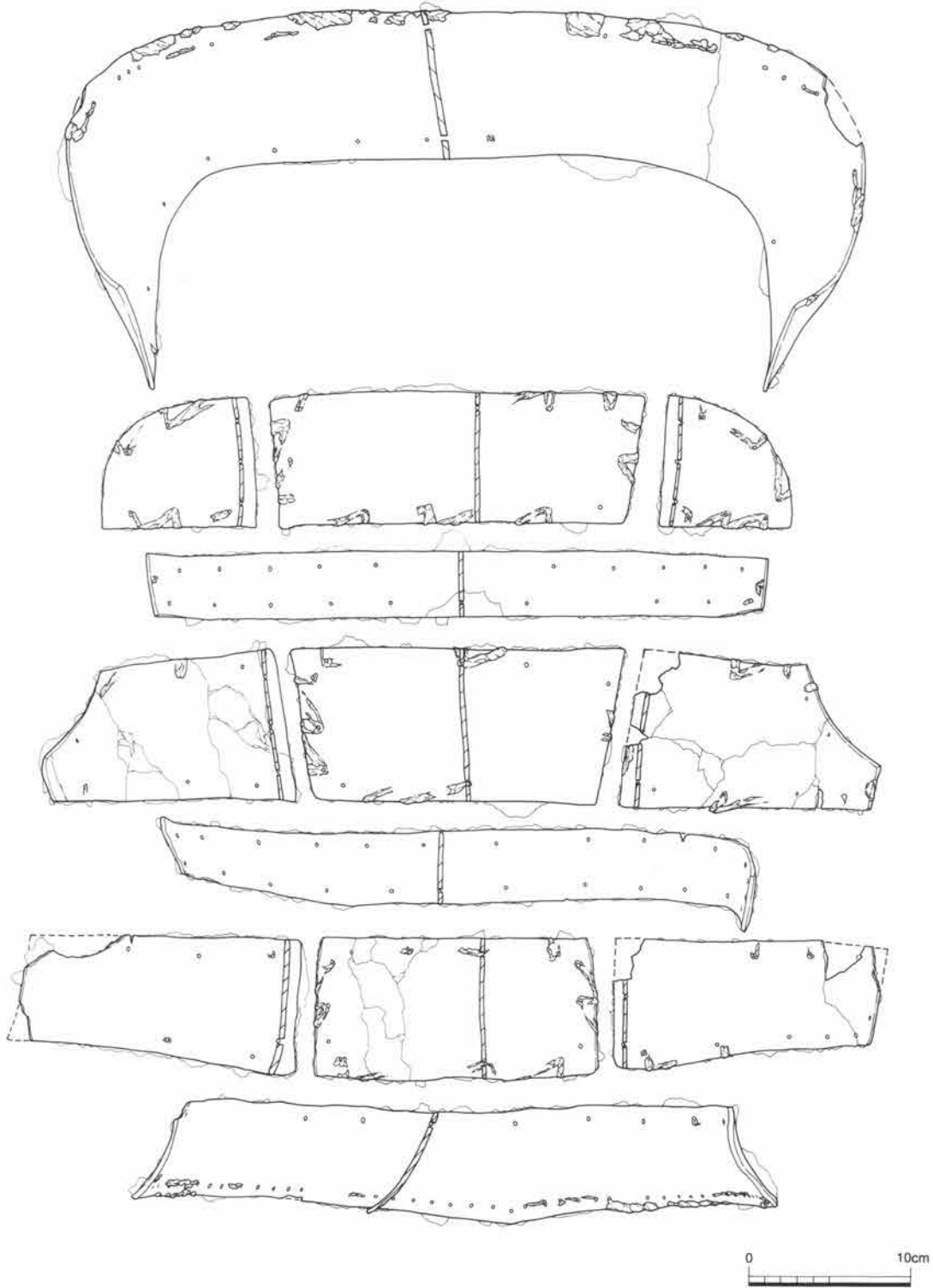
鉄剣(第77図) AS 1は残存長42.7cm・身部長34.9cm・茎部残存長7.8cm・身部最大幅2.9cm・茎部最大幅1.8cm・身部最大厚0.65cm・茎部最大厚0.45cmを測る。茎部の下端を欠損する。関部の形状は角関で、茎尻は一文字尻である。目釘穴は確認できない。全体に木質が残存しており、鞘に収められて副葬されたものと考えられる。AB 3は全長34.0cm・身部長24.5cm・茎部長9.5cm・



第75図 今林6号墳出土短甲実測図(後胴表)

身部最大幅2.5cm・茎部最大幅1.9cm・身部最大厚0.65cm・茎部最大厚0.4cmを測る。関部の形状は角関で、茎尻は一文字尻である。茎部に目釘穴が1孔確認できる。全体に木質が残存しており、鞘に収められて副葬されたものと考えられる。

**鉄鏃** 鉄鏃は14本が出土している。これらは、片刃式・三角式・二段関三角式の3形式に分類可能であり、紙幅の都合から、ここでは3形式それぞれの特徴について記述するにとどめる。



第76図 今林6号墳出土短甲実測図（後胴裏）



第77図 今林6号墳出土刀剣類実測図

片刃式(第78図1・3・4・7・9・10・11・13)は14本中8本を占める、この鍬群構成においても優勢的な形式である。鍬身部の片側に刃部を作りだす。切先の斜辺はほぼ直線を呈し、明確な屈曲点を有する。鍬身部の両辺はほぼ平行線をなし、鍬身関部は角関である。頸部は短頸で、平面形は方形を呈する。断面形は楕円形を呈し、関部は角関である。そこから、断面形が方形を呈する茎部が伸びる。法量の平均値を概数で示すと、全長約9.5cm・鍬身部長約5cm・頸部長約1.5cm・茎部長約3cm・鍬身部最大幅約1.3cm・頸部最大幅約0.9cm・茎部最大幅約0.4cmを測る。

三角式(第78図2・5)は、14本中2本を占める。鍬身部は三角形を呈し、ゆるやかな曲線を描く両斜辺に刃部を作りだす。鍬身関部は角関である。頸部は短頸で、平面形はやや台形を呈する。断面形は楕円形を呈し、関部は角関である。そこから、断面形が方形を呈する茎部が伸びる。法量の平均値を概数で示すと、全長約8.7cm・鍬身部長約2.5cm・頸部長約3.2cm・茎部長約3cm・鍬身部最大幅約1.5cm・頸部最大幅約0.8cm・茎部最大幅約0.4cmを測る。

二段関三角式(第78図6・12・14)は、14本中3本を占める。関部の形状が観察しづらいものも存在するため、二段関の可能性のあるものは全てこの形式に含めたことをあらかじめ断っておく。全体の形状は三角式と大差ないが、鍬身関部が二段関になることに加え、全長・頸部が若干短く、やや華奢な印象を受ける点が相違する。法量の平均値を概数で示すと、全長約8.2cm・鍬身部長約2.7cm・頸部長約2.5cm・茎部長約3cm・鍬身部最大幅約1.3cm・頸部最大幅約0.7cm・茎部最大幅約0.4cmを測る。

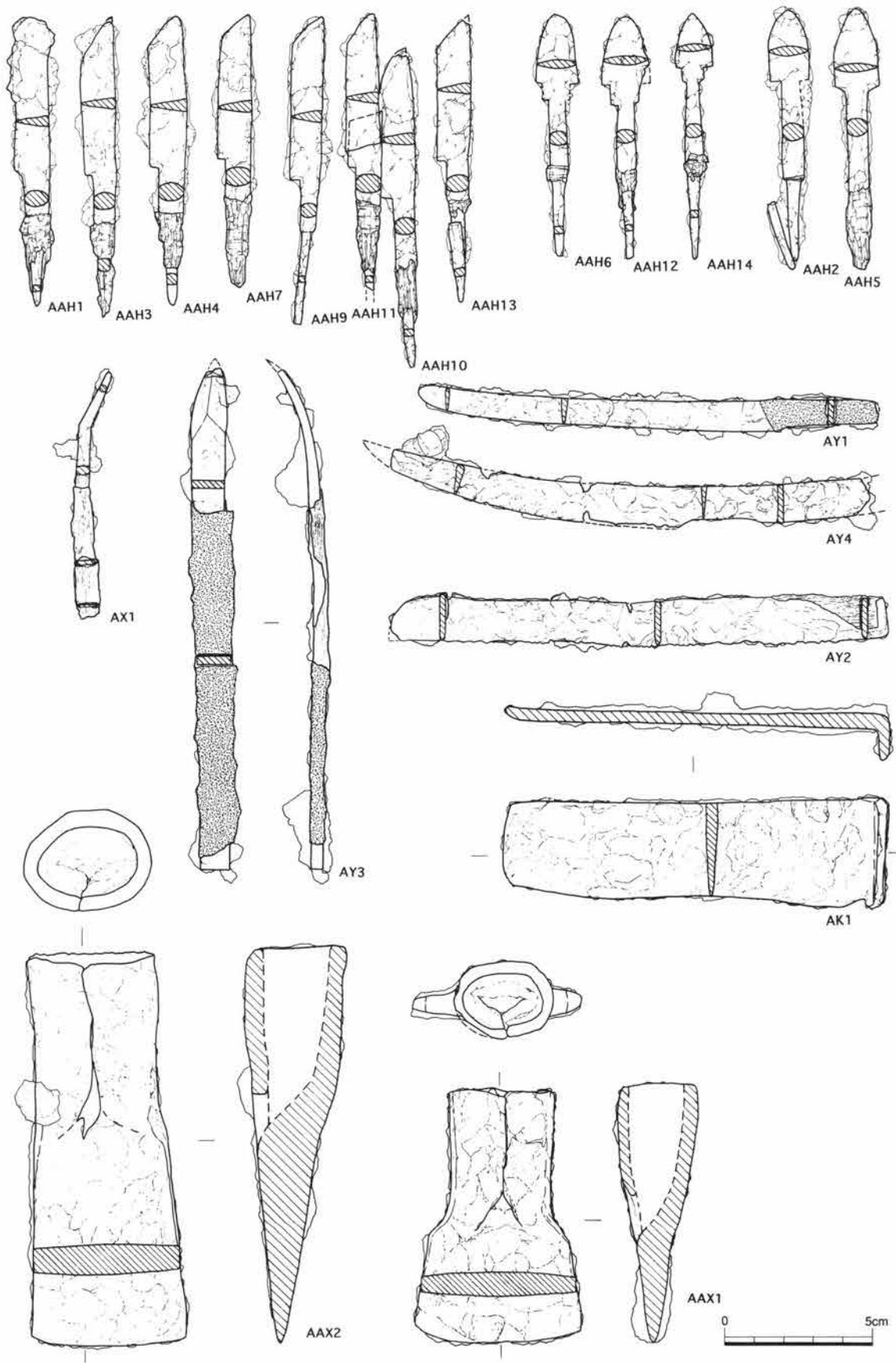
鍬群中には、茎部の周囲に矢柄と思われる木質が残存しているものも存在する。なお、文中で触れていない8の鉄鍬に関しては、崩壊が激しく、復原が困難であるため、その形式・法量は不明である。

**鉄矛** 全長32.4cm・身部最大幅3.1cm・身部最大厚1.0cm・袋部最大径3.0cmを測る。断面形は菱形を呈し、身部には明確な鑿が確認できる。袋部の中心線からややずれて切れ込みが入り、内部に柄とみられる木質が残存する。(壱岐一哉)

**鉄斧** AAX1は全長8.8cm・刃幅5.5cm・袋部幅3.5cmを測る。肩をゆるやかに造形する完形の有肩鉄斧である。刃先が弧を描き、身が薄く袋部の造りも華奢であることから、木材の加工に用いられた手斧と判断する。袋部は隙間なく、ていねいに綴じ合わされる。柄の痕跡は一切確認できない。AAX2は全長13.3cm・刃幅5.2cm・袋部幅4.3cmを測る。平面形態が左右対称になるほぼ完形の無肩鉄斧である。刃部が直に長く伸び、身が厚く袋部の造りが堅固である。刃先端が丸くすり減っていることから、実用に供されていた可能性を指摘できる。袋部はていねいに綴じあわされているが、若干隙間が認められる。柄の痕跡は一切確認できない。

**鉄鎌** 全長13.0cm・基部幅3.9cmを測る直刃鎌である。身部の造りは厚く、柄装着部の折り返しも身部から1cmほど突出し、明瞭に形成されている。柄の装着角度は直角で、木質の残存は確認されない。基部から先端にかけて、ゆるやかに鉄板の厚みが薄くなっている。また、平面形態は全体的に背に向かって微妙に反っている。この直刃鎌に特徴的なのは、刃中央部の広い範囲に研ぎ減りが認められることである。

**鍬** AY3は現長16.9cm・刃部最大幅1.2cm・身部幅1.0~1.1cmを計る。刃部先端が若干欠損す



第78図 今林6号墳出土鉄鋸および農工具実測図

るが、遺存状況は良好である。身部には厚みがあり、ほぼ全面に柄の木質が残存している。そして、その木質の上を、木質の範囲とほぼ重複するように、皮革状の物質が包んでいる。この物質は図化した表面と、側面の一部にのみ認められるが、本来は柄全体を包んでいたであろう。

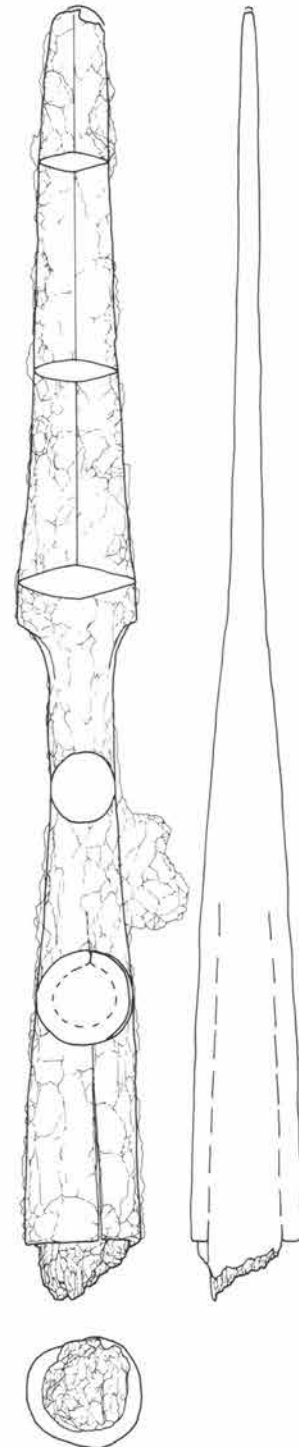
**鉄刀子** AY1は全長15.5cmを計る、完形の刀子である。刃部が12.3cmと長く、そして刃部幅が1.1cmと狭く、通例の刀子と比べて刃部が細長い。当該時期の刀と近似した形態である。茎部に木質の付着は確認されないが、その代わりに皮革状の物質によって覆われていて、それが刃部にも若干及んでいる。AY4は残存長15.1cmを測る。先端と茎の端部が欠損している。刃部幅が最大となるのは関部で、1.4cmを測る。刃幅が関部から先端にかけてゆるやかに収束する形態を呈し、通例の刀子と共通する。ただし、刃部が急激に背に向かって反る点で異なる。この刀子で最も特徴的なのは、刃部と茎部との間の刃側に認められる、長さ2.7cm・幅0.3cm程の抉りである。何らかの装具を装着する目的があるのかもしれないが、それに類する物質の残存は確認されず、現状ではその用途は不明である。

**鋸状鉄器** AY2は、全長16.8cm・刃幅1.4cmを計る。上部両側に身と平行方向に走る柄の装着痕が確認され、鋸である可能性が指摘できる。ただし遺存状況が比較的良好であるにも関わらず、鋸歯がほとんど確認できない。一部に歯かと思われる凹凸が認められるが、非常に微弱なもので、その幅も不均一である。片刃か両刃かの区別はつかず、目釘孔の存在も確認できない。現状からは鋸と断定はせず、その可能性を指摘するにとどめたい。

**鉄錐** AX1は完形品で基部の木質も良好に残っている。本来の全長は8.8cm、錐身部の長さは4.1cmに復原できる。基部が長大で、錐身部が比較的短小な割には厚みのある造りであることから、この錐は大きな孔を穿つ用途に供されていたと考えられる。身の断面形態は錐身部の先端で円形を呈するが、中央付近では楕円形となり基部との境付近では各辺が丸みを帯びた長方形となり、ゆるやかに扁平な形態へと移行する。この傾向は基部でも継続し、基部中央では断面形態は薄い長方形を呈す。そして端部に至って、幅0.7cm・厚さ0.1cmの板状になる。

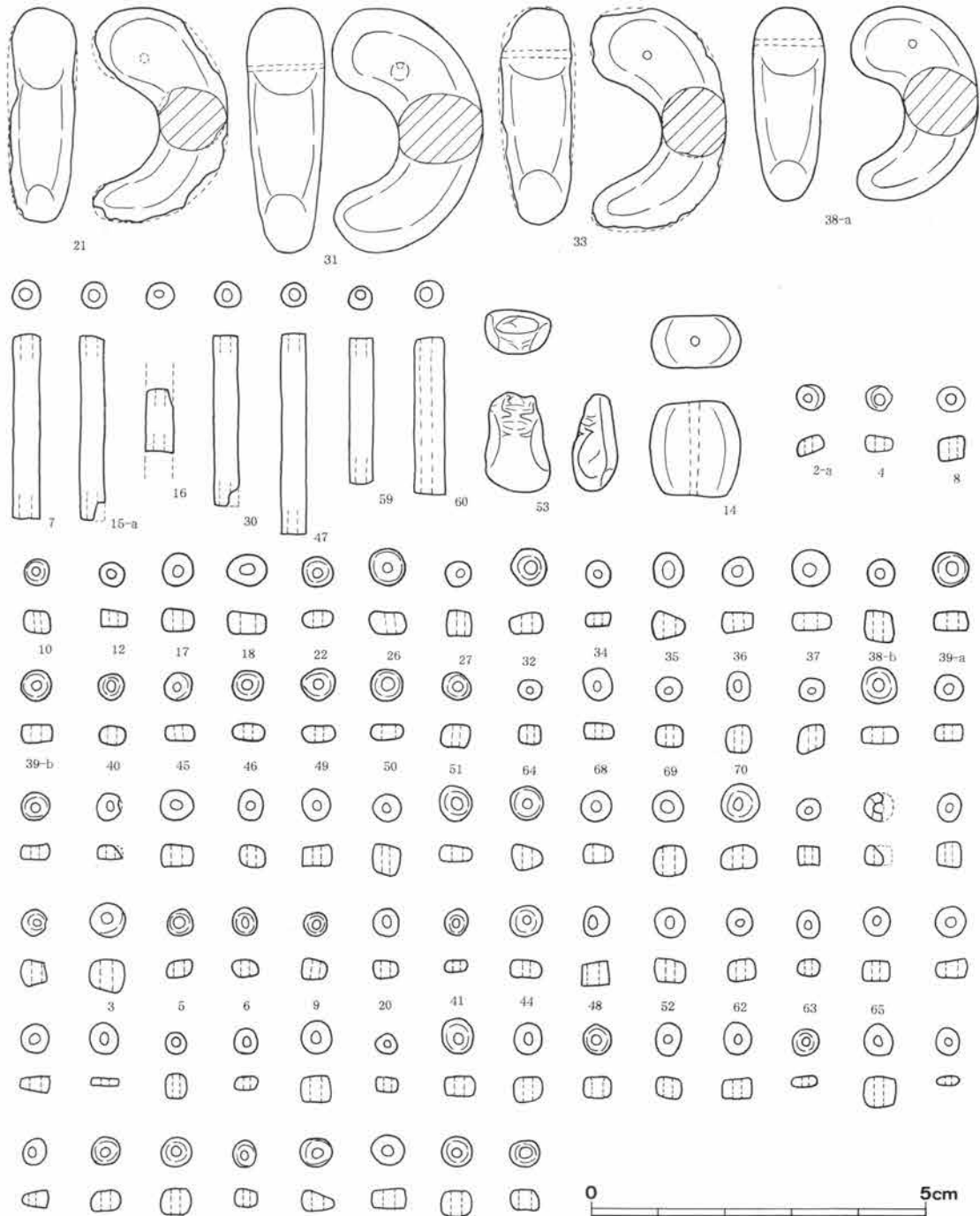
(古川 匠)

**玉類** 凝灰岩製勾玉4点、凝灰岩製管玉7点以上、凝灰岩製垂飾1点、ガラス製平玉1点、ガラス小玉77点以上が出土した。凝灰岩製勾玉は全長2.9～3.5cm・直径1.0～1.3cmを測る。形態は「C」字形であ



第79図 鉄矛実測図

る。凝灰岩製管玉は非常にもろいため、完形をとどめるものは少ない。全長2.2~3.0cmを測る。凝灰岩製垂飾は平面台形で、上端に紐を緊縛するための溝が彫られている。最大長1.4cmを測る。ガラス製平玉は側縁が膨らむ長方形で、透明度の非常に高いスカイブルーのカリガラスを使っている。気泡は、穿孔方向と併行に伸びている。こうした透明度の非常に高いガラスは、インド周辺で生産されているものである<sup>(注28)</sup>。長さ1.4cm・幅1.3cm・厚さ0.7cmを測る。ガラス小玉は77点中13点がコバルトブルーで、他はスカイブルーである。直径は3.5~5.7mm・長さ1.2~4.5mmを測る。



第80図 今林6号墳出土玉類実測図



**豎櫛** 実測可能な5点のみ図化した。この他に土ごと取り上げたものがあり、総数は20点余りである。ムネ幅が1.3~1.6cmの小型品(1・2・4・5)と2.2cm前後の中型品(3)とがある。製作手順は、小型品では6~7本のヒゴを中央部で縛り、結束点で折り曲げる。そして幅5~7mmほどの幅で带状に結束する。最後に添え木を歯の部分にして、糸で歯1本1本を縛って歯を分け、黒漆をムネ部に塗布している。

(2) 今林7号墳出土遺物

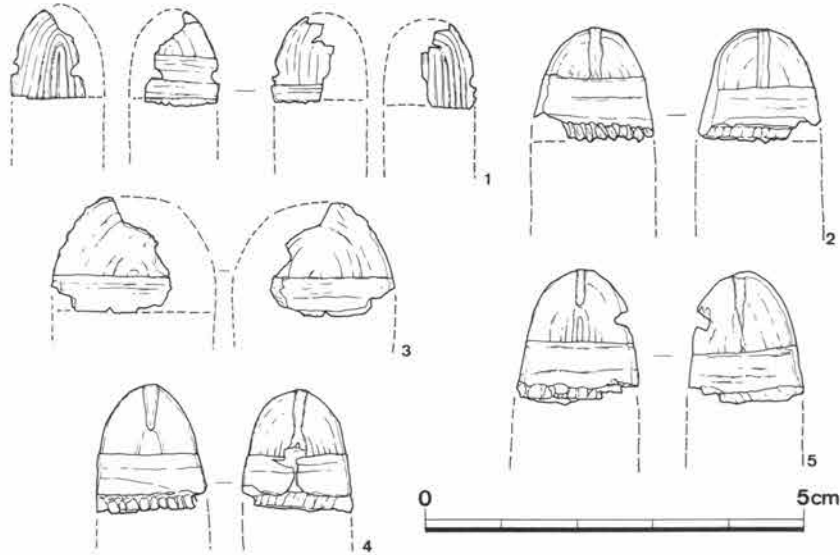
①**土器** 第81図は北側墳丘裾から出土した須恵器甕である。口径9.0cm・器高9.5cmを測る。最大径がやや上位にある扁球形の体部に短く外反する頸部を付し、口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。口縁下端に突帯をめぐらす。文様帯には崩れた波状文を施している。外面は回転ナデ調整を施し、底部のみ不整方向ナデを施す。焼成・胎土から阪南古窯址群(陶邑)の製品とは思われないが、高蔵寺(TK)208号窯型式併行期頃の産品であろう。(福島孝行)

②**鉄器**

**鍬・鋤先** 全長11.7cm・最大幅11.5cmを計る「U」字形鍬・鋤先である。通例のこの種の鍬・鋤先と異なり、刃先部の幅は1.9cmを測り、2.4cmの耳部よりも狭くなっている。柄を装着する溝も耳部のほうが深い。

**鎌** 全長13.1cm・基部幅3.5cmを計るほぼ完形の曲刃鎌である。柄装着部の折り返しは不明瞭で、また、折り返し部のみ厚みがない。柄の装着角度は直角で、木質の残存は確認されない。平面形態は、基部から先端部にかけてゆるやかに幅が狭くなっている。

(古川 匠)

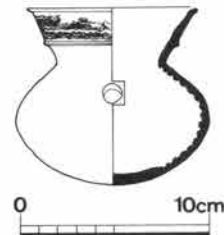


第81図 今林6号墳出土豎櫛実測図

(3) 今林8号墓出土遺物

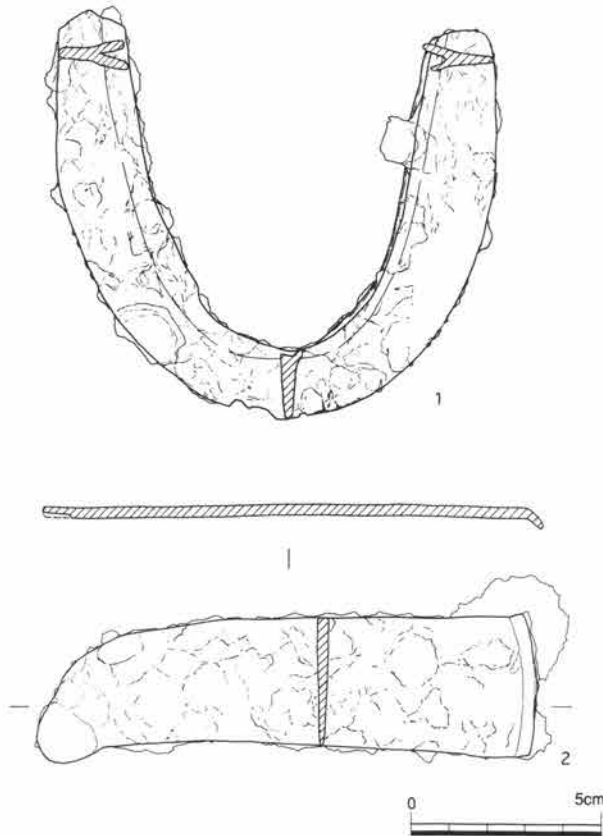
①**土器** 1~6は今林8号墓第1主体部出土土器である。6のみ棺蓋上

付近、他は墓壙上に置かれ、木棺腐朽に伴い落ち込んだものと考えられる。1は壺口縁部であろうか。薄い粘土帯を貼り付け、ミガキを施す。2は壺体部である。外面はミガキ、内面はハケを施す。3~5は高杯である。3の口縁部は接合面から剝離している。内外面にわずかにミガキをとどめる。4は椀形の杯部を備えたものと思われる。内外面にミガキを施す。5は短い脚柱部に、外方に強く開く脚裾部を備えたものと考えられる。外



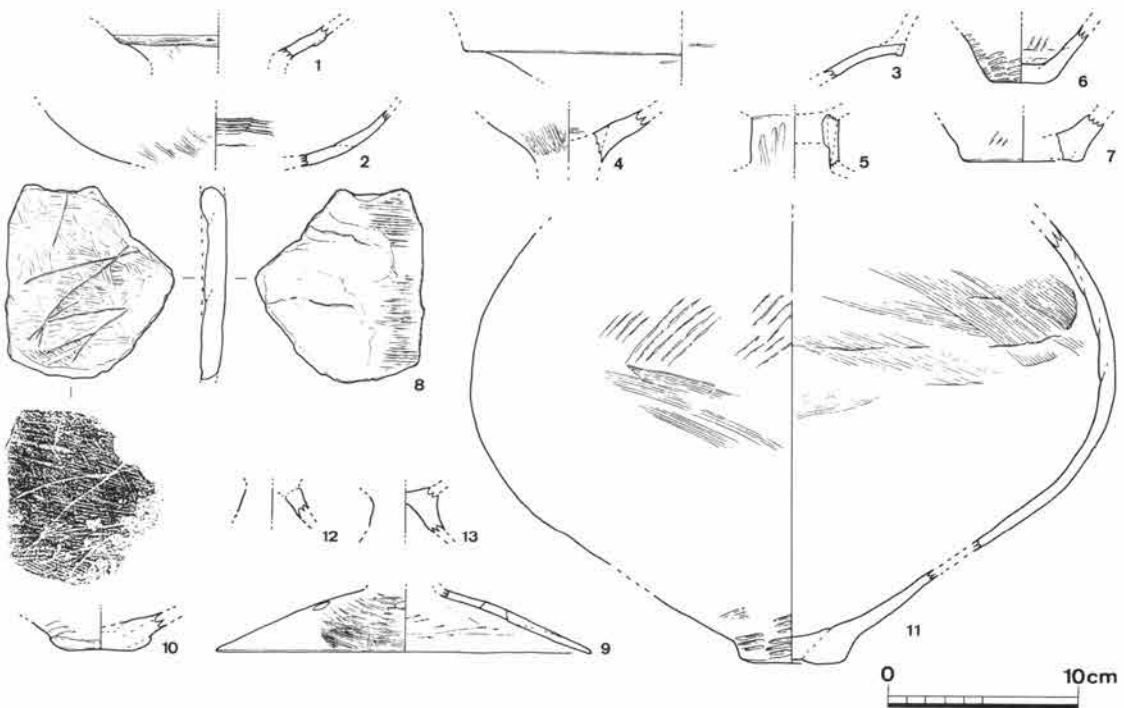
第82図 今林7号墳出土須恵器実測図

面にミガキをとどめる。充填した円盤が接合面から剥離している。6は底部である。いずれも成形にタタキを用いる。6は底径3.1cmを測る。内側から粘土を充填する。1～3・5の胎土は0.5～1.0mm大の白色砂粒・灰色砂粒をわずかに含む。色調は短黄褐色で、焼成はやや硬である。4



第83図 今林7号墳出土鉄器実測図

は0.5mm大の白色砂粒をごくわずかに含む。色調は淡橙褐色、焼成はやや硬である。7～10は第2主体部出土土器である。8は大形の壺肩部である。外面は斜めハケ後に横ミガキを施し、さらに縦ミガキを加える。内面調整は横ハケによる。外面にヘラ状工具を用いた線刻が認められる。ジグザグ表現が主となる。モチーフとしての竜の簡略化に伴い、鱗部分のみが表されたものとするのが現状では妥当である。9は高杯の脚部である。脚裾部径19.7cmを測る。内面にケズリを用いた薄い器壁をもち、若干内彎しながら強く外方に開く。外面には精緻なミガキを施す。透かし穴は外面から穿たれ、内面は面取り状に処理する。胎土は1.0～2.0mm大の白色砂粒をごくわずかに含む。色調は赤褐色、焼成はやや硬である。い



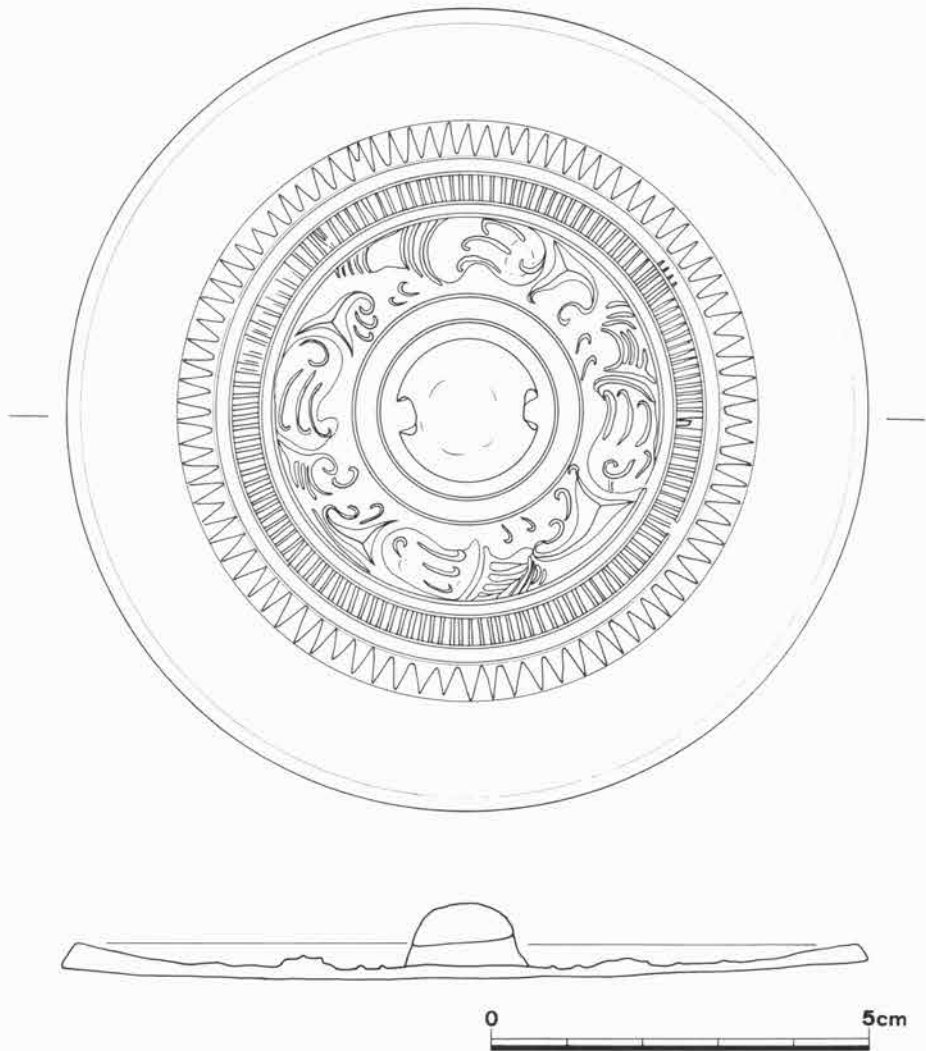
第84図 今林8号墓出土土器実測図

わゆる庄内系碗形高杯に類する。7・10は底部である。7は底径5.2cmを測る。10は底径6.2cmを測る。成形はタタキによる。7・8・10は0.5~2.0mm大の白色砂粒・灰色砂粒を少し含む。色調は淡黄~橙褐色、焼成はやや硬である。11は第3主体部の棺として用いられた壺である。強く張った扁球形の体部に突出底をもつ。体部最大径34.5cm・底径5.6cmを測る。輪台技法による底部からタタキを用いて成形し、外面上半はナデ、下半と内面はハケを施す。胎土は0.5~2.0mm大の白色砂粒・褐色砂粒をやや多く含む。色調は淡橙褐色を呈し、焼成はやや軟である。体部内面下半は土器棺特有の器壁の荒れが著しい。なお、図化には耐えなかったが、胎土・色調・焼成から明らかに別個体と判断できる壺体部片が11とともに出土した。外面調整はハケ後に粗いミガキ、内面調整はハケによる。胎土は0.5~1.0mm大の白色砂粒をごくわずかに含む。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや硬である。器壁の荒れなどは認められず、蓋として用いられたと考えられる。12・13は高杯である。12は墳丘墓西側側溝、13は墳丘墓北裾から出土した。ともに短い脚柱部に、外方に強く開く脚裾部を備えたものと考えられる。胎土は0.5~2.0mm大の白色砂粒をわずかに含む。色調は褐色で、焼成はやや軟である。

(三好 玄)

②鏡(第85図) 当該鏡は面径10.6cmを測る。鏡背面は平縁、鋸歯文+無文帯+櫛歯文という外区構成を採り、内外

区に段差はない。鈕は半球形で、鈕孔は長方形で鈕座面に接して穿孔されている。鈕座は細線の圏線を二重にめぐらす。内区には4体の獣形が時計回りに配置され、乳はない。獣形はやや高く浮彫され、内区面から1.3~1.5mmの高さがある。獣形一つの単位は胸から前脚を表現したと見られる稜のある三角形の部分と肩の部分を表した巴形の部分、胴体から後脚を表現したと見られる部分の3つから成り立つ。肩部



第85図 今林8号墓出土鏡実測図

の頂点には渦文状の細線があり、そこから後方に向かってやや弧を描きながら3本の羽毛表現の細線が伸び、先端を上方にカールさせる。1本1本の線は互いに離れており、線の間には平坦面が存在する。その後方は徐々に低くなり、肩部は区切りの線を持たずに終息する。胴体から後脚にかけては3種類の表現が存在し、獣毛表現を後方に向かって横方向にカールさせながら伸ばした後、縦方向の獣毛表現を配置するものと、横方向の獣毛表現だけのもの、そして胴体には横方向の獣毛表現を持たずに無文のまま、2か所の縦方向の細線で胴体を3分割するものがある。また内区面の獣形の胸部と胴体部の上方に釣針形の細線が配置される。鏡式については微妙な問題をはらむため、考察で詳述する。

③鉄器(第87図)

ヤリ(1) 関部に呑口状に木質が残存している点から剣ではなくヤリと判断した。全長28.3cm・身部長19.5cm・茎部長8.8cm・身部最大幅3.1cm・茎部最大幅1.7cm・身部最大厚0.5cm・茎部最大厚0.3cmを測る。茎部に目釘穴が1孔確認できる。(壱岐一哉)

タビ「咩咩」(2) タビは踏鋤などと訳される。長さ27cm・幅6cmを測り、20cmを測る刃部に袋部が付く形態をしている。2つに断裂しているため正確な角度は不明であるが、刃部と袋部との境界部でやや反っている。刃部の断面形態は長方形であり、刃部端の平面形は丸みを帯びている。タビは朝鮮半島に分布の中心があり、茶戸里1号墓で出土したタビは長い木柄が装着されていたため、土掘り具と考えられている。今回出土したタビは洛東江流域の浦項玉城里から出土したものに形態が類似している。日本では島根県の西谷16号墳、鳥取県の妻木晩田遺跡で出土しており、本例が3例目となる。<sup>(注29)</sup>(福島孝行)

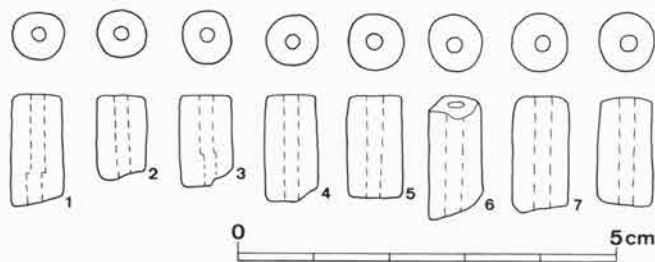
方形鋤・鋤先 3は第1主体部から出土した。縦幅5.6cm・最大横幅12.8cm・基部幅12.2cmを計り、横に長く、刃部が基部よりも広い平面形態で「八」の字状に開くような形態を呈す。折り返し内に柄の装着痕跡は確認できない。全体に厚身で重厚感がある造りである。中央から右よりの刃の先端が欠け、折れ曲がっているが、土圧による欠損や変形にしては不自然な折れ方である。葬送儀礼に伴う人為的なものであるとする説もある。<sup>(注30)</sup>4は第2主体部から出土した。縦幅5.1cm・刃幅6.1cm・基部幅5.8cmを計り、やや横に長い長方形に似た形態を呈す。折り返し内に柄の装着痕跡は確認できない。全体にやや身が薄いわりに、造りは堅固である。刃先と基部がともに弧を描くような形態をとることから、元々いびつな形態の鉄板を加工しているようである。

鉞(5) 柄の端部から約7cmと8cmの2か所で鈍角に折り曲げられている。復原長は、約11cmとなる。刃部の中央付近から先が欠損している。遺存状況は良好であり、柄の木質がほぼ完全に

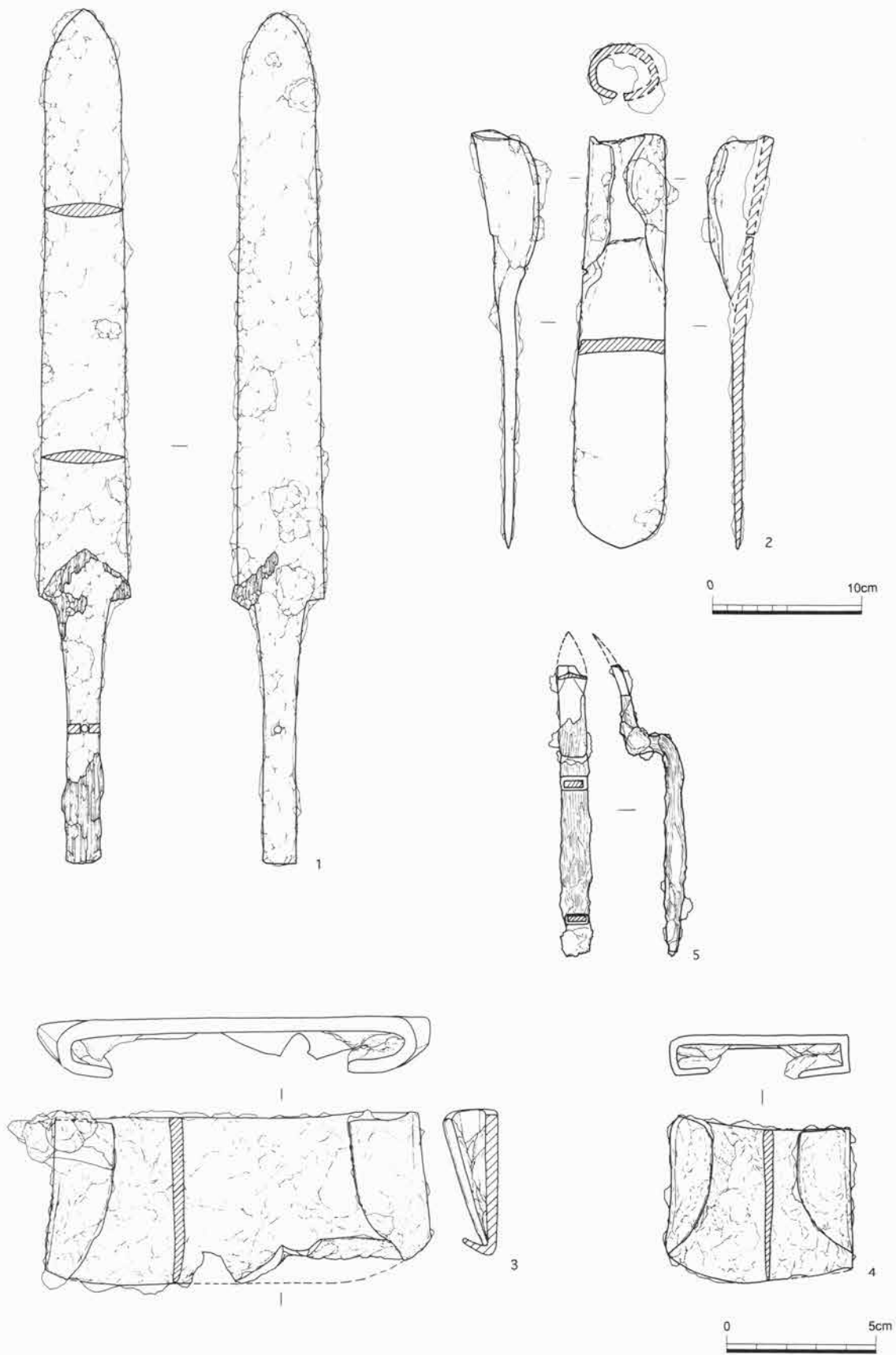
残存している。身部は薄い造りである。折り曲げによる身部の折損は全く認められない。

(古川 匠)

玉類 棺床面および棺床から10cmほど浮いたレベルからガラス管玉が計8点出土した。直径



第86図 今林8号墓出土ガラス管玉実測図



第87図 今林8号墓出土鉄器実測図

は6～8mm・長さ1.2～1.4cmを測る。色調は透明度の低いブルーである。気泡は球形で玉内に散在し、列状や筋状をなすことはない。片側の側縁が破損した後に研磨している状況が見られ、故意に折ったか折れたものを再利用していると考えられる。穿孔は両面穿孔である。したがってこのガラス管玉は棒状のガラス素材から石製の玉類と同様の方法で切り出し、穿孔したものであると考えられる。ガラス素材はカリガラスと推定される。<sup>(注31)</sup>

## (5) 今林遺跡 3次調査

### ① A地区

A地区は今林古墳群の所在する尾根の3号墳から北へ派生する尾根に設定された調査区である。ここでは竪穴式住居跡4基を検出した。調査区の上位、尾根の中央部でSH01、そのやや北東でSH09、さらに北側と調査区の北東隅でSH10・11を検出した。SH01を除く3基は尾根の東斜面に位置しており、SH10とSH11は切り合いが見られる。(福島孝行)

#### a. 検出遺構

SH01 長辺約6.0m・短辺約5.0mを測る竪穴式住居跡である。この住居跡は五角形を呈している。北に伸びる尾根上に造られているため、北側の周壁は流失している。住居跡には周壁溝がめぐらされており、尾根側で幅20cm・深さ7cm、谷側で幅20cm・深さ10cmを測る。地表面からの深さは、最も深く掘り込まれている尾根側で周壁溝の底まで約55cmを測る。周壁溝は西側で浅くなっており、その両側に柱穴が見られることから、この部分を出入口として使用したのではないかと推測できる。床面では方形に配置した主柱穴となる4つのピットのほかに、いくつものピットを確認した。主柱穴は、径約20cm・深さ40cmを測る。主柱穴と考えられる4つのピットのうち、東側と南側の主柱穴の底から土器片が出土しており、何らかの埋納行為が行われていた可能性がある。床面の中央には径約50cm・深さ約10cmの中央土坑が設けられている。炭化物や被熱による赤変は見られなかった。また住居跡の南東側に径約50cm・深さ約45cmの特殊ピット2基を確認した。この特殊ピットの中からは、土器作りに使用したと思われる小児人頭大の粘土塊が出土している。流出を免れていた南東側からは、12個ものほぼ完形の土器が、床面直上・周壁溝・特殊ピットから出土した。また中央土坑の南側から台石と見られる石も出土している。この住居の西側からは、切り合い関係からこの住居に先行する時期のものである半円形にめぐる溝が検出されている。これらの出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と推定される。住居の平面プランについて、多角形住居であれば主柱穴は平面プランの角に対応するといわれているが、この住居は方形に配置されている。<sup>(注32)</sup>西側は急な傾斜地のため周壁溝をめぐらせることが困難である。したがって本来は方形プランを指向していたと考えられる。(重松朋孝)

SH09 SH09はSH01の北東側、尾根の東斜面に位置する竪穴式住居跡残欠である。溝の形状から方形の竪穴式住居跡であったと見られるが、北東側のほとんどの部分を流出により失っているため、住居の規模を知ることはできない。ただし南東隅では直角に周壁溝が曲がっており、ここが本来の住居のコーナー部分であったと考えられる。このコーナー部分から残存する溝の長さは4.3mを測るため、住居は一辺4.3m以上の規模であったと考えられる。残存する周壁溝内に

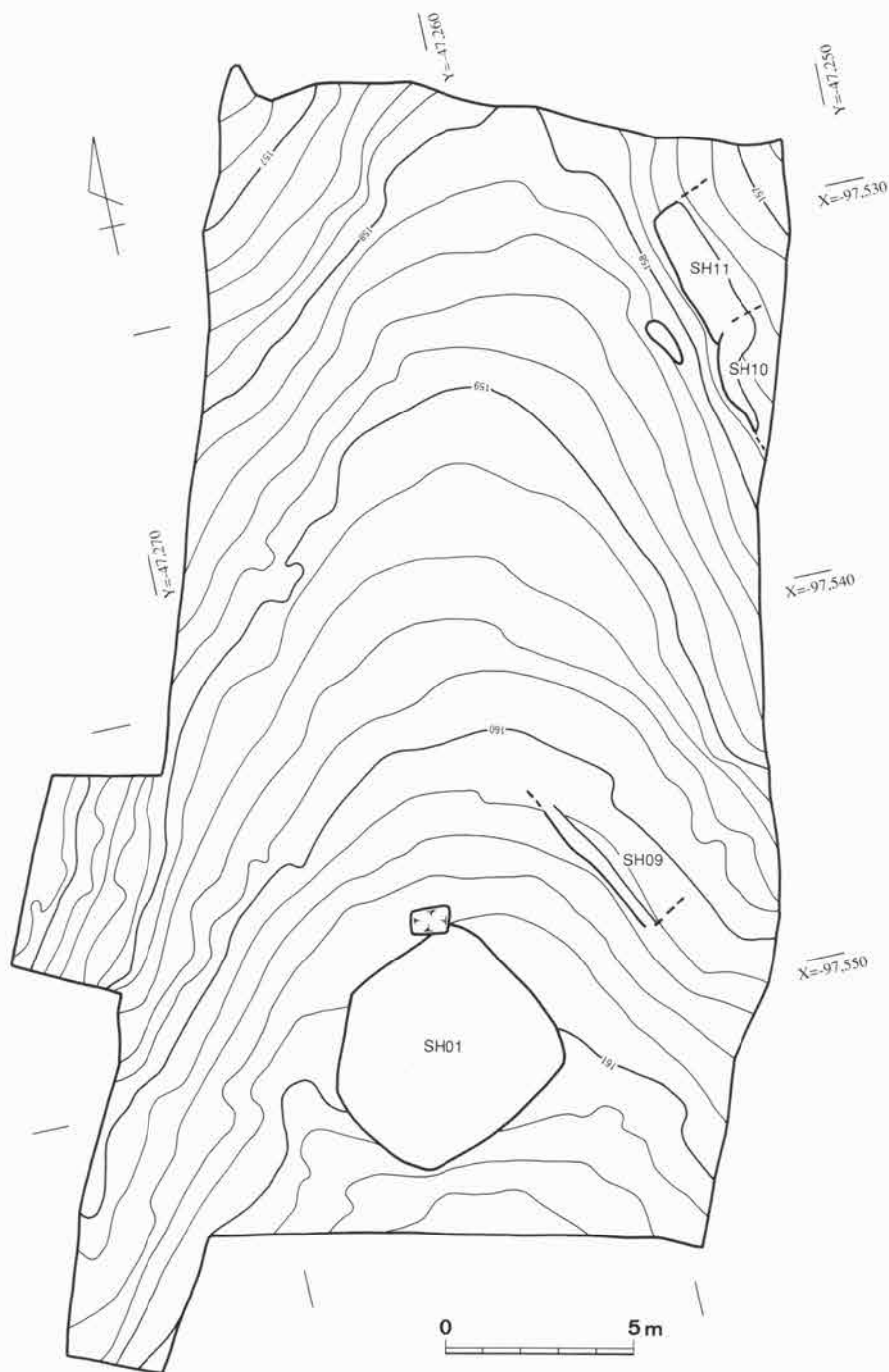
は弥生土器の破片が落ち込んでいた(第91図13~15)。

SH10 SH10は調査区の北東隅で検出した2基の住居跡の内、南側のものである。残存する部分はやや屈曲するが全体として弧状を示す溝2.6m分のみで、斜面側にはわずかな平坦地が検出されたに過ぎない。弧状を示すことを最大に評価すれば、円形の住居跡であろうが、定かではない。SH11を切っている。遺物は出土していない。

④SH11 SH11はSH10の北側に位置し、SH10に切られる方形竪穴式住居跡である。北側には周壁溝の屈曲部分が見られるが、南側はSH10に切られるため、失われている。残存する周壁溝の長さは3.4mを測る。周壁溝および床面から弥生土器(第92図16~20)が出土している。

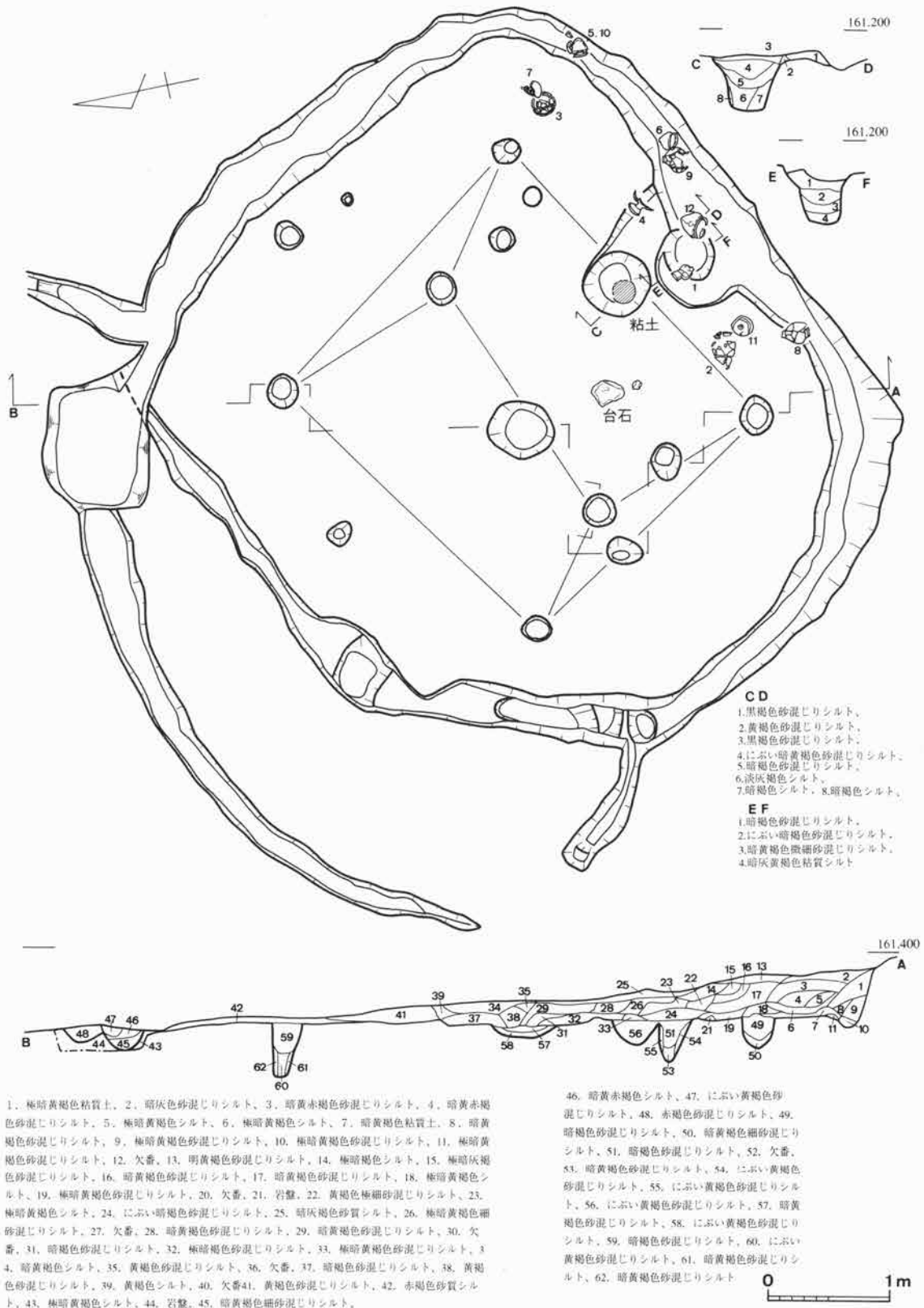
**b. 出土遺物**

土器 第91図1~12はSH01の床面、周壁溝および特殊ピットから出土した完形土器である。土器番号の後ろの記号は取上番号である。1は長頸壺である。口径10.7cm・器高17.3cmを測る。外面はハケを施した後、下半をヘラ削



第88図 今林遺跡A地区遺構配置図

り後ミガキ、口縁部を横方向に板ナデを施す。内面は指ナデを施す。肩部上端に2条のヘラ描き沈線文をがある。2は広口壺である。口径11.9cm・器高24.5cmを測る。外面はナデ後下半をヘラ削り、内面にはナデを施す。3・4は高杯である。3は口径16.8cm・器高9.6cmを測り、4は口

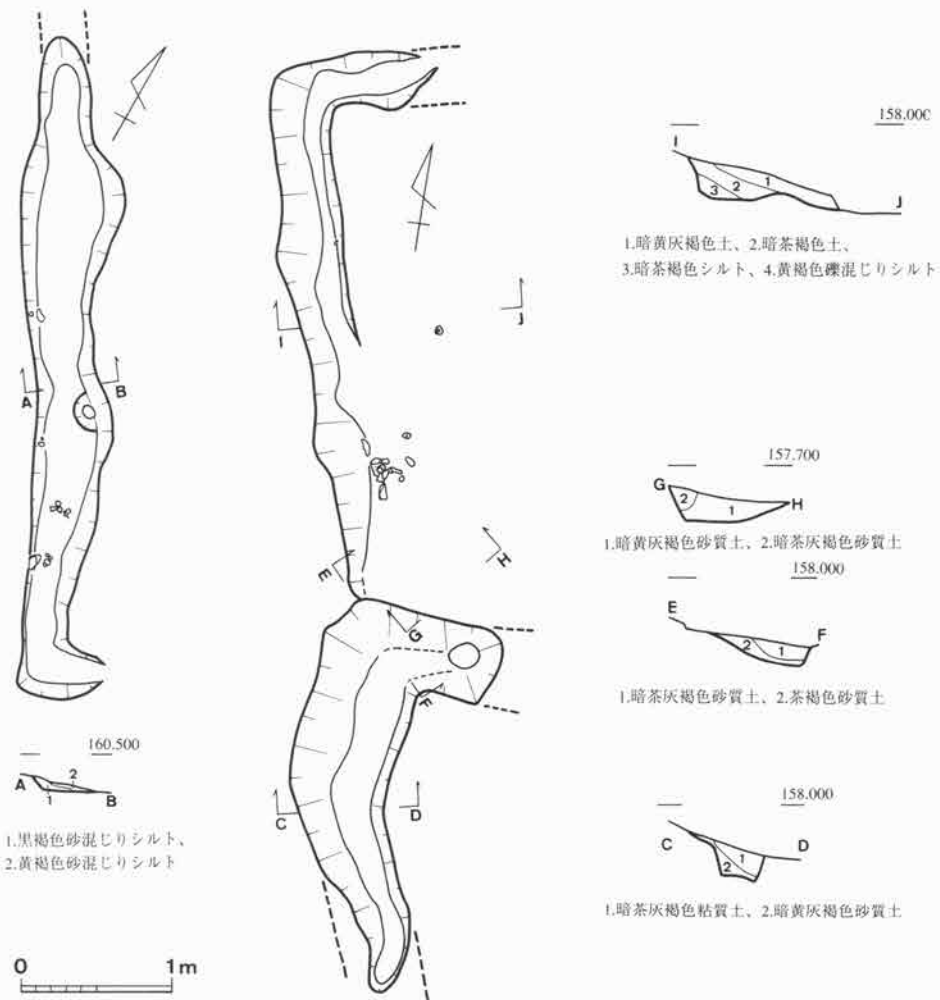


第89図 SH01平面・断面図



径19.7cm・器高14.4cmを測る。3は口縁を外反させ、4は内彎させる。3の外面調整はナデ、4はハケである。内面は3がハケ、4は磨滅により不明である。5～9は甕である。5は口径11.1cm・器高11.6cmを測る。6は口径13.4cm・器高13.9cmを測る。7は残存高14.2cmを測る。8は口径12.7cm・器高22.4cmを測る。9は残存高21.6cmを測る。5・6は「く」の字口縁、8は外反口縁、7・9は受口状口縁である。外面調整はすべてハケであり、6の底部付近にタタキの痕跡が見られる。内面調整はハケまたはナデである。9は肩部にハケによる列点文が見られる。なお5は10に入れられた状態で周壁溝内から出土した。10～12は鉢である。10は口径13.2cm・器高11.2cmを測る。11は口径17.1cm・器高11.3cmを測る。12は口径15.0cm・器高17.5cmを測る。10は「く」の字口縁で、他は受口状口縁である。10・12の外面最終調整はミガキであり、11はハケである。11・12の口縁部には列点文が見られる。2・6～12で外面に煤が見られ、10の内面に炭化物の付着が見られた。13～15はS H09出土土器である。13・14は同一個体であり、小型の高杯の脚部および脚柱部になる。外面調整はミガキ、杯部内面には蜘蛛の巣状のハケが見られる。15は壺または甕の底部である。内外面にハケ調整を施す。第92図16～20はS H11出土土器である。16は受口の広口壺、17は長頸壺である。16は口径13.7cm、17は口径12.2cmを測る。外面調整はミガキである。18

は高杯である。外面はナデ、内面はケズリを施す。19は壺または甕の底部である。20は「く」の字口縁の甕である。口径13.7cm・器高21.9cmを測る。外面はハケ調整、下半のみケズリ、内面はケズリ後ミガキを施す。土器の色調は淡橙褐色～淡黄褐色で、胎土は白色・灰色、褐



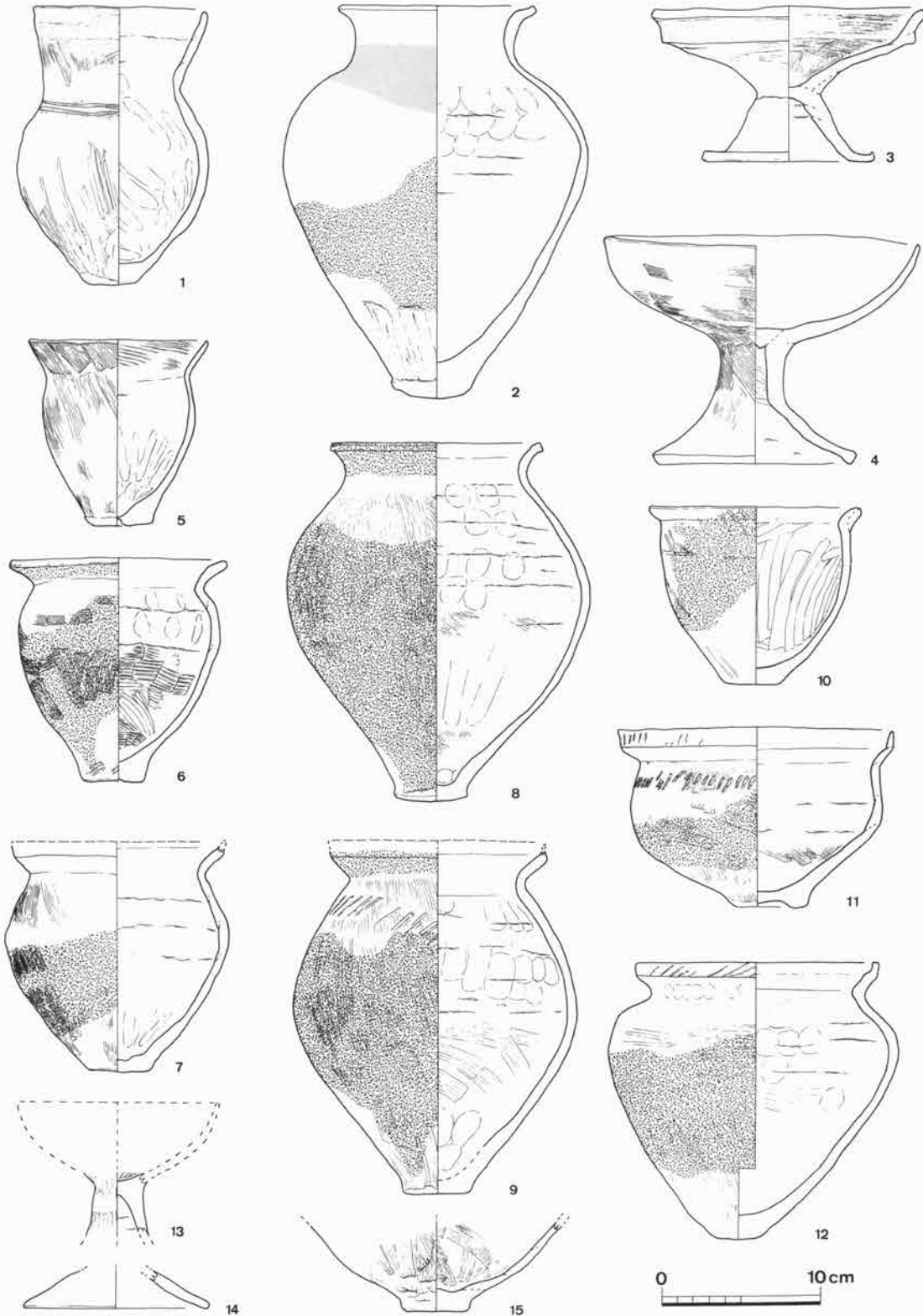
第90図 S H09・10・11平面・断面図

色砂粒をやや多く含む。焼成はやや軟である。

(福島孝行)

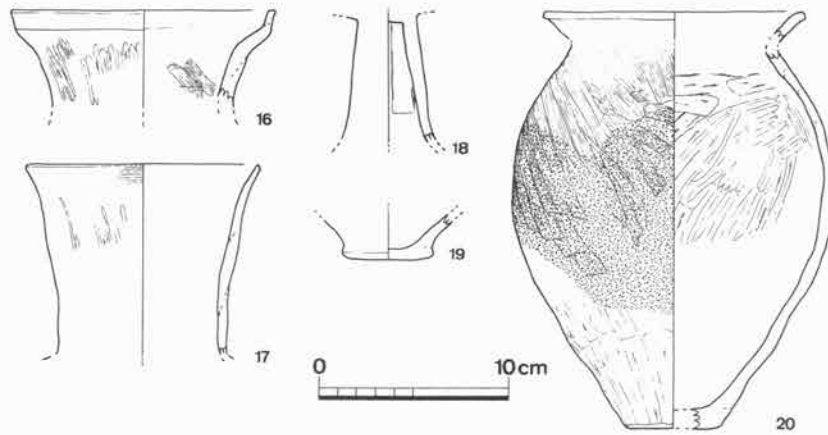
②B地区

A地区の西側約85m西側に位置する。今林5号墳がある丘陵頂部から北東側に延びる小尾根である。この地区では、平成10年度の試掘調査において、南西側尾根高所と東側斜面部分で竪穴式



第91図 今林遺跡A地区出土土器実測図(1) (粗いアミはスス、細かいアミは赤色塗釉)

住居跡を確認した。これにより、この地区に集落が広がっている可能性が考えられ、発掘調査を実施することになった。南西側尾根高所部は開発対象からはずれることになったため、それより北側を掘削した。今林遺跡では丘陵上部だけでなく、



第92図 今林遺跡A地区出土土器実測図(2)

斜面部にも小テラスを造り出して竪穴式住居を設けており、東側斜面部の住居も同様な地形部分に立地する。ただ、テラス状地形でも試掘調査で遺構が検出されなかった部分については、調査対象から外れることとなった。調査は、まず重機により表土等を除去し、その後、人力で掘削精査して行った。

調査の結果、尾根稜線部分では竪穴式住居跡の痕跡とも考えられる若干のくぼみや少量の弥生土器とみられる土器片が出土したものの、顕著な遺構は残存していなかった。その他、風倒木痕等を確認したのみである。西側斜面部では、調査前に狭いテラス状地形が認められる部分があったが、掘削した結果、顕著な遺構は認められず、遺物も出土しなかった。主に遺構を検出したのは東側斜面部のテラス状地形部分である。ここでは、試掘調査で確認していた竪穴式住居跡1基のほかに部分的に残存していた竪穴式住居跡1基および土坑・ピット等を検出した。

a. 検出遺構

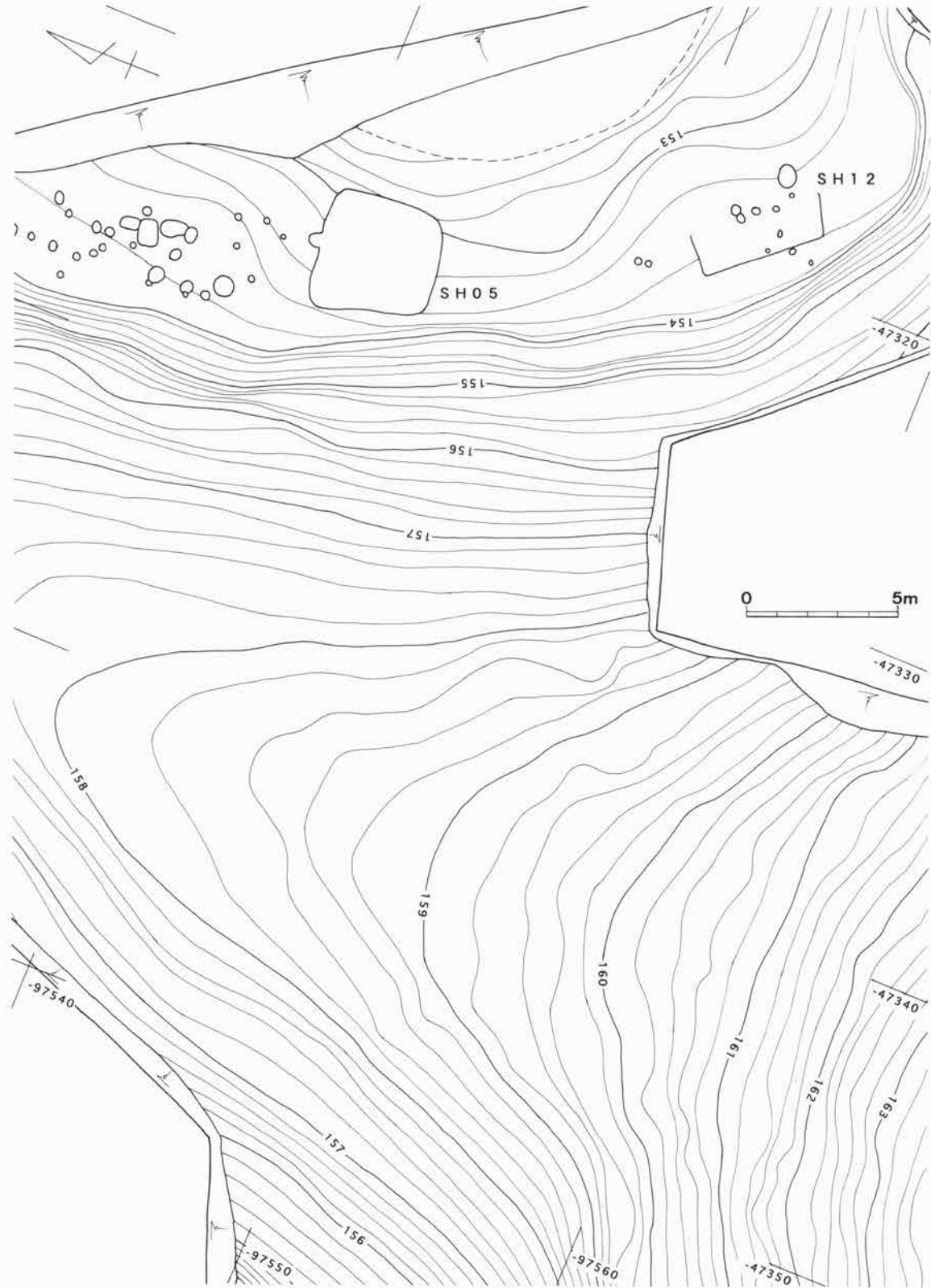
**竪穴式住居跡 S H05** 試掘調査で確認していた住居跡である。一辺約3.8mのほぼ正方形を呈する。北辺ほぼ中央部に造り付けの竈をもつ。西辺側は良好に残存しており、最も深い部分では約0.7mを測る。東辺は、周壁溝が残存している程度である。床面には4か所に直径約20~30cmの主柱穴がある。周壁溝は、幅約20cmで、西・南・東辺をめぐる。竈のある北辺には認められない。遺物は主に竈の東側から出土しており、土師器甑などが含まれる。

**竪穴式住居跡 S H12** S H05の南側約9mに位置する。方形住居の西辺および北辺約0.75m・南辺約0.65mが残存しているのみである。西辺は約4.2mである。幅約30cmの周壁溝がめぐる。北辺延長上、住居内に当たる部分に竈の痕跡とみられる焼土があり、北辺に竈が設けられていたものと推定される。この焼土部分からは、二段スカシをもつ須恵器有蓋高杯が出土している。また、西辺周壁溝内北半部から土師器把手付椀が出土している。

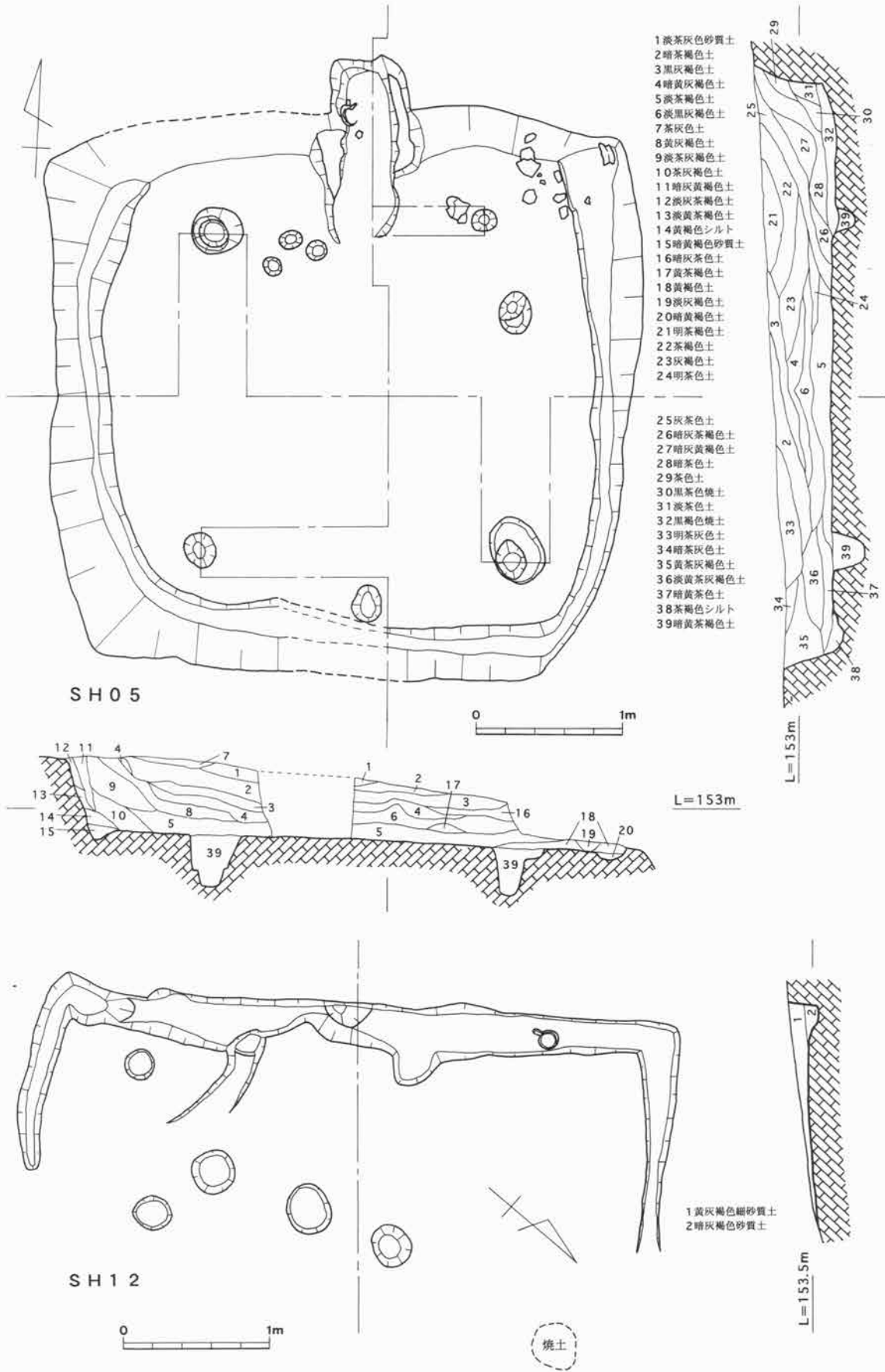
b. 出土遺物(第95図)

**竪穴式住居跡 S H05** 須恵器杯蓋1は、南東側埋土中から出土した。稜がなく、天井部は丸味を持つ。頂部付近のみをヘラケズリする。口径13.0cm・器高3.9cmを測る。焼成は堅緻である。陶邑編年のTK209型式並行か。土師器甕2は、小形のもので、竈内埋土中から出土した。口縁

部は、やや外開き気味に短く立ち上がる。体部外面は風化のため詳細な調整は不明であるが、わずかにハケ目が認められる。内面はケズリ後ナデ調整である。口径約10.8cmを測る。焼成はやや軟である。土師器甑3は、口縁部が直立し、端部は丸く終わる。2個の把手が付く。内外面ともナデ調整である。口径12.8cmを測る。焼成は良好である。竈東側から出土した。



第93図 今林遺跡B地区遺構配置図



第94図 今林遺跡B地区竪穴式住居跡平面・断面図

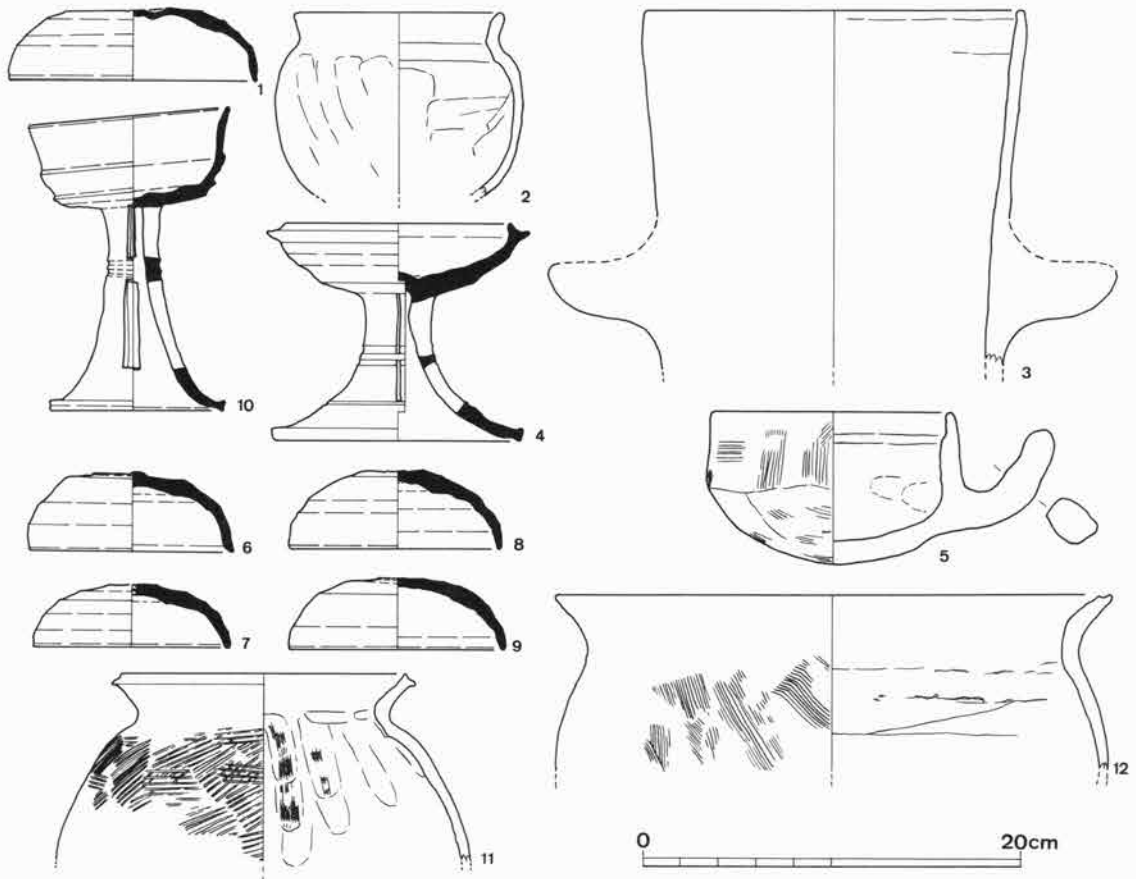
竪穴式住居跡 S H12 須恵器高杯4は有蓋で、竈痕跡とみられる焼土部分から出土した。脚部にスリット状の狭い2段スカシを2方向に持つ。杯部の立ち上がりは低い。杯部径11.8cm・脚部径13cm・器高11.5cmを測る。焼成は軟である。土師器把手付碗5は、西辺周壁溝内北半部から出土した。外面にハケ目調整がみられ、器壁は厚手である。口縁端部内面は強く横ナデされ、段状になる。側面に上彎する把手が付く。口径12.8cm・器高8.0cmを測る。焼成はやや軟である。

包含層 弥生土器甕11は、口縁部が体部から「く」の字状に屈曲するもので、体部外面にはタタキ目が残る。口径約15cmを測る。須恵器杯蓋6～9は、竪穴式住居跡 S H05北側の平坦地から出土した。天井部は丸味をもち、頂部付近のみヘラケズりする。口径10.2～11cm・器高3.4～4.1cmを測り、やや小形である。陶邑編年のT K209型式併行期以降のものか。須恵器高杯10は、無蓋のもので、脚部に方形の二段スカシを2方向にもつ。杯部径10.5cm・脚部径9.1cm・器高16.0cmを測る。竪穴式住居跡 S H12東側の斜面部から出土しており、あるいはそれに伴うものか。土師器甕12は、口縁部が体部から湾曲気味にたちあがり、口縁端部は段状になる。体部外面はハケ目調整・内面には横方向のケズリがみとめられる。口径約29cmを測る。 (引原茂治)

③C地区

C地区は今林古墳群の7号墳と8号墓の間に設定された調査区で、多数の土坑、土壙墓と柱穴、溝を検出した。以下に主なものの概要を報告する。

S X08 今林遺跡第2次調査においてS D08として報告されたものである。2次調査は試掘調



第95図 今林遺跡B地区出土遺物実測図

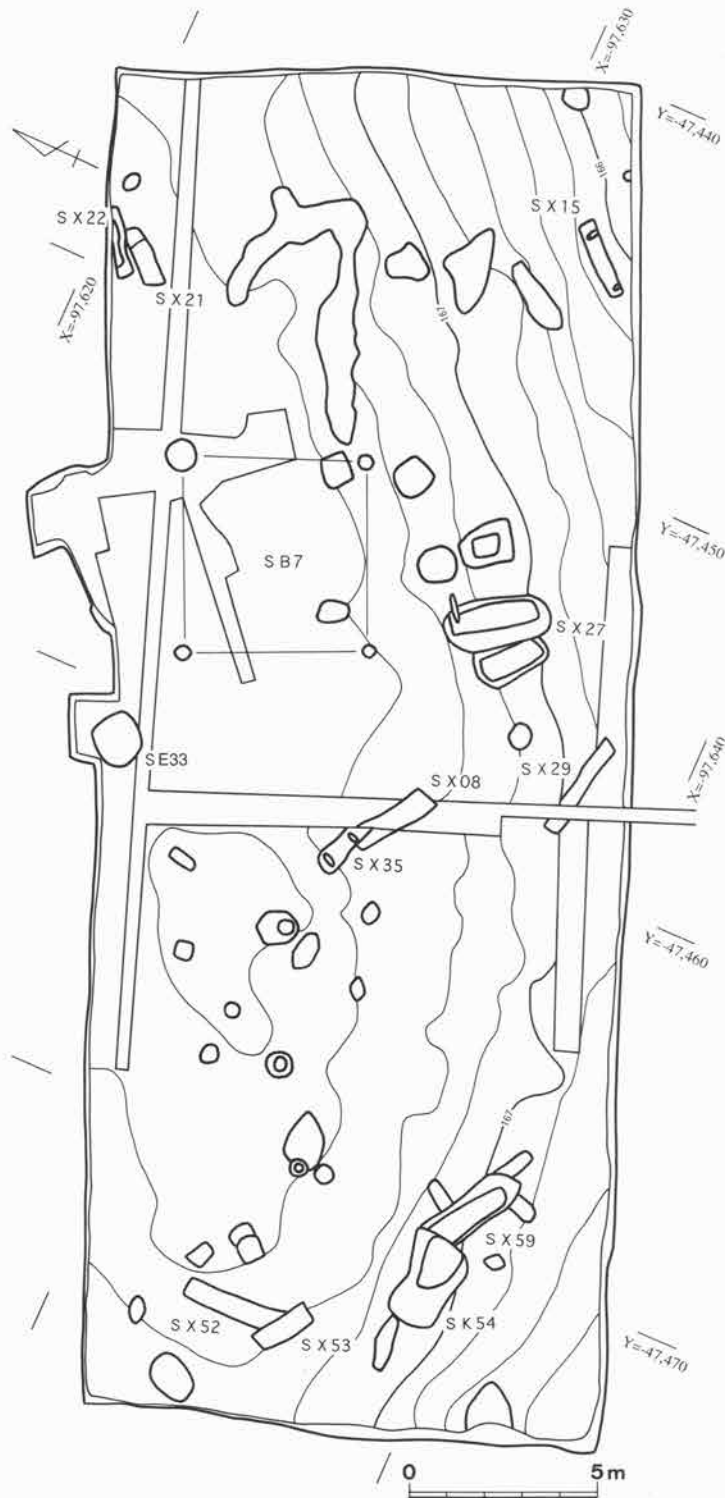
1～3 S H05、4・5 S H12、6～12 包含層

査であったため平面形態を把握し得なかったが、面的な調査の結果木棺墓であることが判明した。墓壙の平面形態は長方形で、長辺2.25m・短辺0.6mを測る。後述するS X 35に切られている。出土遺物はない。

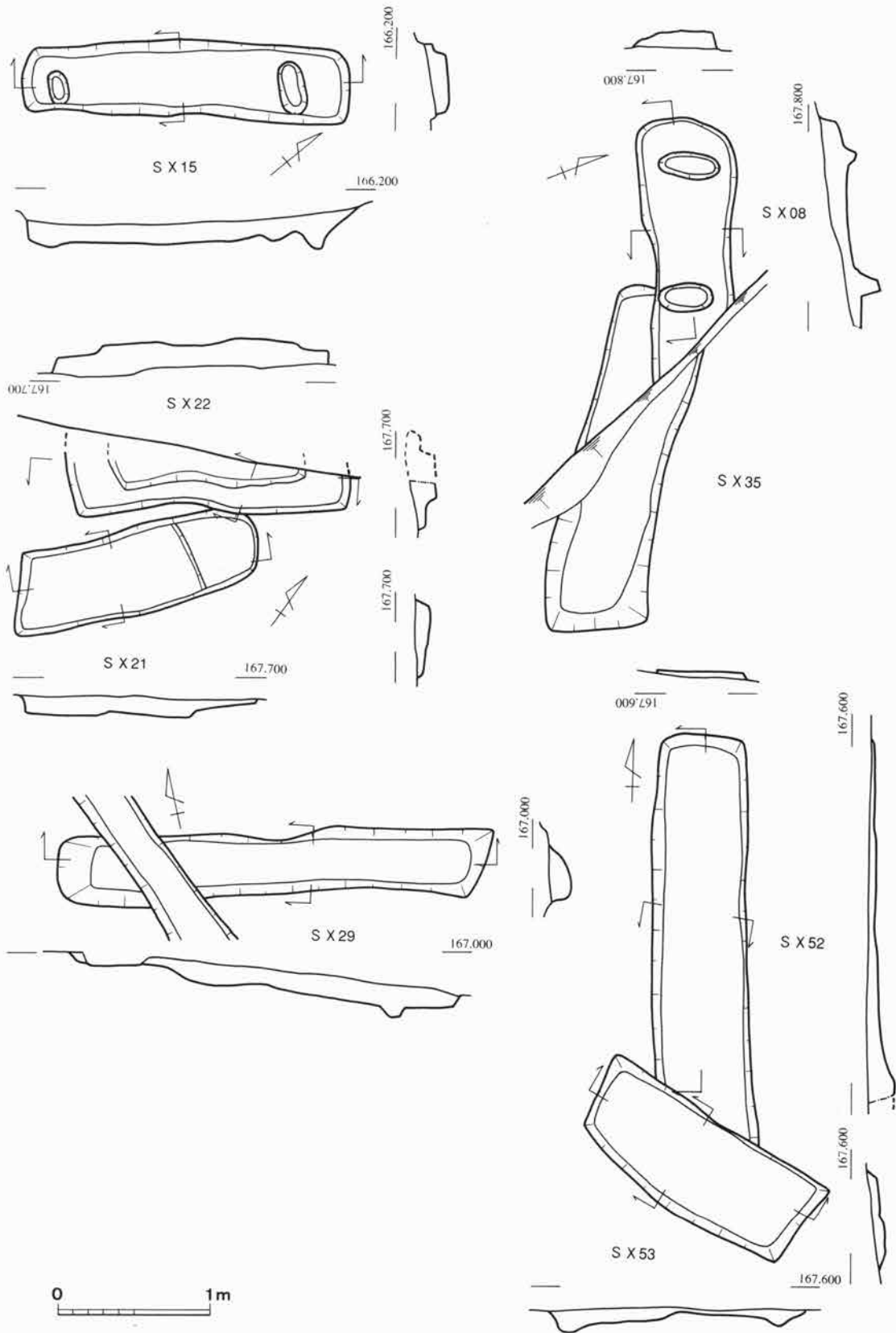
S X 15 調査区の南東隅付近で検出した木棺墓である。墓壙の平面形態は長方形であり、長辺2.1m・短辺0.5m、検出面からの深さ23cmを測る。墓壙は等高線に平行して配置されている。主軸と直行する細い溝が墓壙底の東端と西端にあり、これらが小口溝であると考えられるので、S X 15は木棺墓であると考えられる。出土遺物はない。

S X 21 調査区の北東隅付近で検出した土壙墓である。墓壙の平面形はやや不正形な長方形を呈し、長軸1.65m・幅0.65m、検出面からの深さ12cmを測る。墓壙底は西側約40cmほどが5cm分高くなっている。墓壙検出面中央部で拳大のチャート礫が出土した。出土状況から、墓壙上もしくは木棺上に置かれていた標石が、木棺の腐朽に伴い転落したものである可能性が高い。出土遺物はない。

S X 22 S X 21の北側で検出した墓壙である。墓壙の半分は調査区外へ伸びるため、遺構の全容は不明だが、平面形は長方形で、長軸1.8m、検出面からの深さ17cmを測る。墓壙は2段墓壙である。

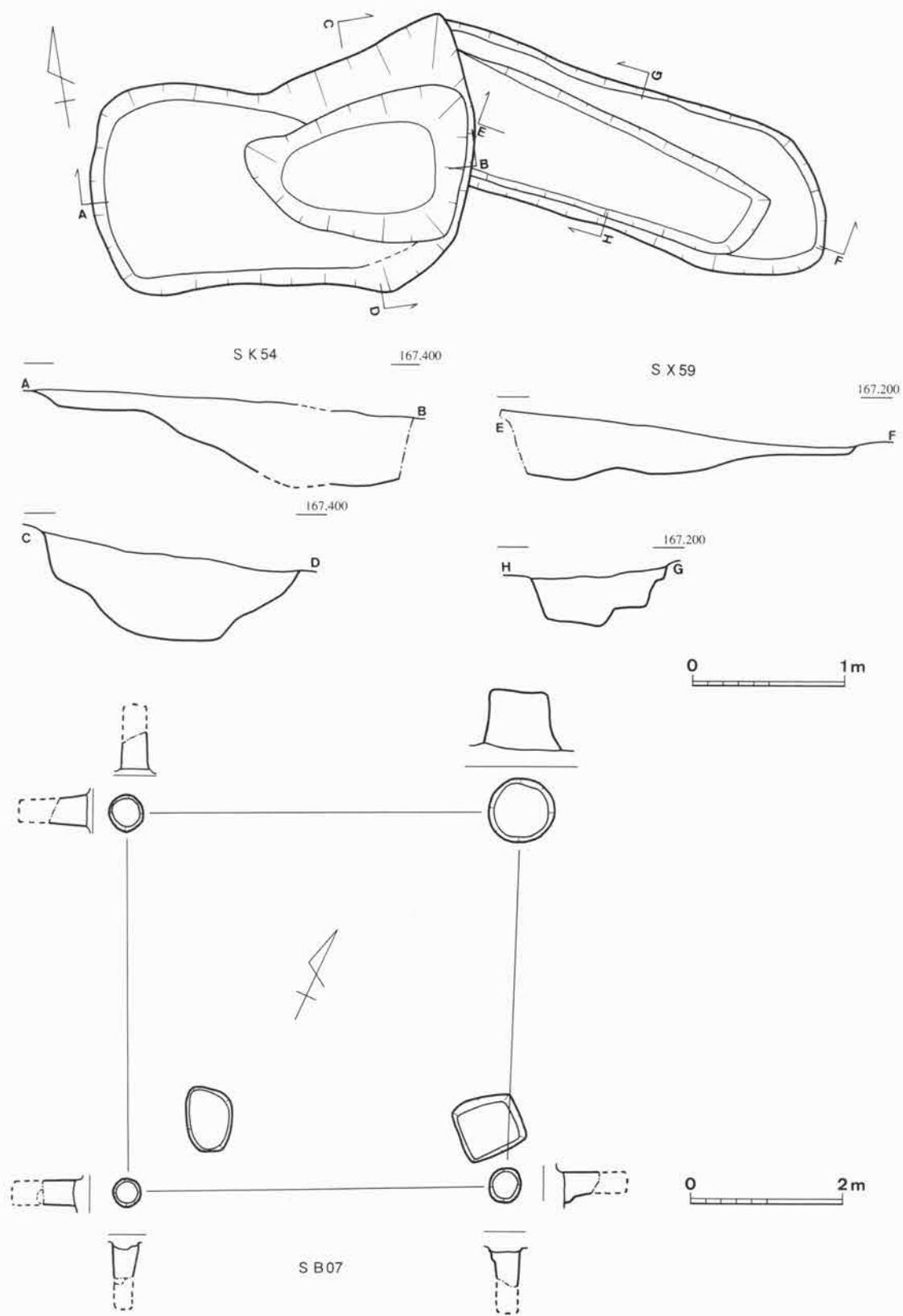


第96図 今林遺跡C地区遺構配置図



第97図 今林遺跡C地区遺構平面・断面図(1)





第98図 今林遺跡C地区遺構平面・断面図(2)

2段目の長さは1.3mを測る。S X21に切られている。出土遺物はない。

S X27 調査区の中央やや南寄りで検出した木棺墓で、平面形態は長円形を示し、2段墓壙である。上段の規模は長軸2.9m・短軸1.4mを測る。下段は長方形を呈し、規模は長さ2.35m・幅0.65mを測る。墓壙底の検出面からの深さは13cmを測る。出土遺物はない。

S X29 S X27の南西、調査区南端付近で検出した土壙墓である。平面長方形を呈し、規模は長さ2.8m・幅0.4mを測る。墓壙の平面形態から木棺を用いたと判断される。出土遺物はない。

S X35 S X08を切る木棺墓である。南東側を第2次調査の試掘トレンチによって削平されているが、平面形は長方形を呈すると思われる。規模は長軸1.8m以上・短軸0.6m、検出面からの深さは12cmを測る。墓壙底には幅9cmの小口溝が2条見られ、当該遺構は木棺墓であった判断される。出土遺物はない。

S X52 調査区西端で検出した木棺墓である。S X53に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸2.1m以上・短軸0.6mを測る。検出面から墓壙底までの深さは約7cmを測るが、南端は徐々に深くなり、最大で18cmを測る。これを小口溝と見れば、墓壙形態と合わせて木棺を用いたことが推定される。出土遺物はない。

S X53 S X52の南側に位置し、S X52を切る木棺墓である。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸1.65m・短軸0.65m、墓壙底からの深さ10cmを測る。墓壙底には幅13cmの小口溝が2条見られ、このことから木棺墓であると判断される。出土遺物はない。

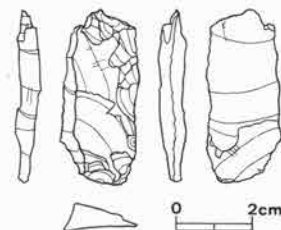
S X59 調査区の南西隅で検出した土壙墓で、S K54・56・57・58に切られる。墓壙の平面形態は長円形で、部分的に2段墓壙となっている。このことからS X59は木棺墓である可能性が高い。規模は長軸2.8m以上・短軸0.96m、検出面から墓壙底までの深さは19.5cmを測る。出土遺物はない。

S B7 2次調査の時点で検出されていた柱穴と、今回検出したP23・30・32の4基の柱穴からなる1間四方の掘立柱建物跡である。規模は南北・東西とも5mを測る、ほぼ正方形を呈す。2次調査で検出した柱穴は直径110cmを測る大型の柱穴であるが、P23・30・32は直径40cm前後の円形で、検出面からの深さは約70cmを測る。

S E33 調査区中央部北縁で検出した大型の円形土坑で、直径1.3m・深さ約50cmを測る。素掘りで、断面逆台形を呈する。出土遺物はない。

S K54 調査区南西隅で検出した土坑で、S X59を切っている。平面形は長方形であるが、断面形は楕円状を呈する。規模は長軸2.5m・短軸1.6m・検出面からの深さは70cmを測る。出土遺物はない。

C地区から出土した遺物は2次調査の時点で出土した弥生土器片を除くと、P16上面で出土した弥生土器高杯脚柱部、調査区南西を精査中に出土したチャートの剥片(第99図)のみであり、検出した遺構の時期を積極的に示すものはない。2次調査出土土器、およびP16の土器がこの地区の遺構の時期であれば、弥生後期の可能性がある。



(福島孝行) 第99図 7号墳下層出土サヌカイト剥片実測図

## 5. 考 察

### (1) 弥生後期の南丹波地域の土器変遷

これまでに集積した資料に加え、今回の平山丘陵での調査によって良好な資料が得られたため、南丹波地域の弥生後期の土器について、その変遷を概観してみたい。南丹波地域といっても、ここで扱うのは山塊に囲まれた亀岡・八木・園部の3市町にまたがる桂川水系の盆地である。

弥生後期前葉の土器と見られるのは、今林遺跡2次SH03出土の土器群である。広く浅い杯部に、明瞭な屈曲部を持たずに立ち上がる口縁部を持つ高杯を特徴とする。長頸壺は肩部の張りが強く、底部は広い平底となっている。この一群の土器を平山遺跡群の1式とする。これに近い様相を示す土器群は、宮川遺跡竪穴式住居跡9出土資料である。<sup>(注33)</sup> この高杯は口縁部が明瞭に屈曲せず立ち上がる部分と、直立する部分があるが、外反はしない。小型の高杯は脚部をほとんど外反させず、V様式前葉の特徴をとどめている。これらの資料は今林2次SH03よりはやや後出するが、現時点では平山1式に包含させておく。今林1号墳(墓)下層墓の土器棺SX05もこの小様式に属す。

平山1式に後続する土器群は、今林遺跡1次SD16出土土器群である。高杯には大型と小型があり、双方ともわずかに外反する。この時期の土器群は資料が少なく、実体は不明である。この土器群を平山2式とする。狭間墳墓群はこの段階から造墓が開始される。5号墓第1主体部出土の高杯は口縁部の外反度が弱いほか、裾端部に明確な面を持っており、さらに上方につまみ上げている。こうした特徴から5号墓は平山2式に築造されたと考えられる。

平山2式に後続する土器群は、今林遺跡3次SH01出土土器である。この土器群は、短い頸部の長頸壺、肩部の張る短頸壺、短脚の外反口縁高杯、椀形高杯、受口と「く」の字そして外反口縁のハケ甕、受口と「く」の字の鉢で構成される。外反口縁高杯の口縁部の外反度は平山2式のものより強くなるが、裾端部には明瞭な面を持たせている。タタキ甕はこの段階には少ない。この資料を指標とする小様式を平山3式とする。今林遺跡1次SH01出土土器はほぼ同様の時期の土器だが、高杯の脚部裾端部には面を持たせず、やや後出的な様相を持つ。壺に球形胴受口状口縁のものが加わり、甕にはタタキ目をもつものが若干存在する。今林遺跡3次SH01との間にわずかだが型式差が見られるため、平山3b式とし、今林遺跡第3次SH01を平山3a式と細分することとする。今林遺跡第2次SH11の土器群は、平山3式に属すと考えられ、これには丹後系の有段口縁高杯が含まれる。

これらに後続すると考えられるのは、今林遺跡1次SH02・09の土器群である。SH02の外反口縁高杯は退化が進行し、あいまいな口縁形状になっている。裾端部には面を持たない。SH09の高杯は、杯部径がいまだ大きいままである。器台は小型化し、脚柱部も細い。これらを平山4式とする。資料が少ないため、若干他の遺跡で補うと、千代川遺跡10次調査SH10099の資料がこれに当たるであろう。<sup>(注34)</sup> 甕の外側調整にタタキ目を残すものが多くなるのが特徴である。タタキ甕は3式から4式にかけて漸増するが、4式ではハケ甕とタタキ甕とが相半ばする。また、「く」の字口縁にハケ甕が多く、受口状口縁にタタキ甕が多いという傾向が見られるが、近江系の文様や形状をよく模倣しているものはハケ甕となっている。他に丹後系の土器が見られ、椀形高杯と

器台が存在する。狭間4号墓第3主体部の土器棺身に用いられた土器はこの小様式に属す。

さらに時期が下ると、平山丘陵では資料を探すのが困難になる。ここでは北金岐遺跡S B03の資料を当てておきたい。<sup>(注35)</sup>高杯の杯部上端の直径が口径に対して小さくなり、丹後系有段口縁高杯の口縁端部外面の擬凹線が消滅する。甕はタタキ甕が優勢になり、高台状の脚部を持つ鉢が増加する。丹後系の装飾器台も見られる。この土器群を指標とする小様式を北金岐式とする。高杯の杯部径や甕・鉢の形状を見ると、畿内地域では庄内式の開始期に当たっている可能性がある。

北金岐式の次の段階には曾我谷遺跡溝状遺構の資料が挙げられる。広口壺・直口壺・受口状口縁壺などは器種を越えて同様の体部成形、内外面調整を特徴としている。タタキ甕が優勢で、甕の形状に庄内甕の影響が見られるものが出現する。高杯は庄内式の模倣品があり、小型器台は筒状の脚柱部を持つ。台付鉢が多いのも目立つ。外来系土器としては、西部瀬戸内系の内傾する複合口縁壺、東海系の瓢壺・高杯・台付鉢、丹後系台付鉢・器台、北陸系の甕などが見られる。この小様式を曾我谷式とする。この小様式は畿内地域の庄内式前半と併行関係にある。今林8号墓の土器棺と供献土器はこの小様式に属す。

曾我谷式の後、布留式が展開するまでの間を埋める集落における一括、準一括資料はほとんどない。したがってやむを得ず墳墓資料をもって当て、資料増加を待ちたい。ここで取り上げるのは黒田古墳(墳墓)の供献土器群である。この墳墓からは、二重口縁壺と受口状口縁壺が出土しているが、二重口縁壺はホケノ山古墳(墳墓)から出土した二重口縁壺との親縁性が高く、庄内式後半に併行するものと考えられる。この小様式を黒田式とする。平山遺跡群ではやや後出的ではあるが、今林1号墳(墓)がこの小様式に属すと考えられる。

以上、弥生時代後期から末にかけての土器変遷を概観してきたが、良好な一括資料はまだ少なく、個々の土器を系統的に分析するには資料不足である。したがって、この変遷観は暫定的なものであり、現状での変化傾向に対する一解釈に過ぎないことを断っておく。

## (2) 平山遺跡群の首長権形成と消長

今回の調査によって、平山丘陵及びその周辺部においての首長権形成過程が明らかになりつつある。ここでは、今回の調査をふまえて、墳墓遺跡からその消長を概観することとしたい。なお、今回調査を行った遺跡群の総称として、ここでは平山遺跡群と仮称したい。

平山遺跡群の中で首長権形成に向けた動きとしては、今林1号墳(墓)下層墓がその嚆矢となる。今林1号墳(墓)下層墓は、庄内式併行期の墓として報告された。しかし、1号墳(墓)自体も庄内式併行期の時期が与えられており、庄内式併行期の墳墓の上にさらに墳墓を築造したことになる。そういった例は他に類例を見ない。また、この墓の土器棺S X05の蓋に用いられている結合形土器は、大和・山城の5-1~2様式に位置づけられているものであり、この墓は弥生後期前葉、平山1式の築造であると考えられる。この墓は地山を隅丸長方形に削り出し、墳頂平坦面に不規則に土壌を配している。中心主体はなく、副葬品もない。単独の墳墓を造営している点では階層化が高く進行した状態であるともいえるが、これと併行する時期の今林遺跡の遺構は2次調査SH03のみに過ぎない。したがって集落が十分発展する以前の墓地であると考えられる。

1号墳(墓)下層墓に引き続き、狭間墳墓群が平山2式~北金岐式にかけて造営され続ける。最

初に造営される墳墓と切り合い関係を持つ、1～4号墓、5～9号墓、10・11号墓、12・13号墓の4グループに分けて考えると、土器の変化と切り合い関係から4世代にわたって4集団が営んだ墳墓群であると考えられる。後2者が2世代で途絶えるのに対し、前2者は4世代目まで造営し続ける。この間、今林集落は最大規模の状態を保持し続けるため、集落規模の拡大に伴って4集団が有力層として墳墓造営権を獲得するが、時期が下がるにつれ、内2者のみはその権限を保持し続け、残る2者は淘汰されたと考えられる。墳頂には2基・東西頭位を原則として主体部が築かれる。この段階で墳墓に埋葬されるのは2人、および次代の有力層を約束されていたであろう、胎児または乳児のみに限定されている。また、副葬品は貧弱で、鉈や300点を超えるガラス小玉などは丹後・但馬地域の影響と見られる。これは今林遺跡の集落で、当該期に丹後系の土器が入っていることから検証できる。しかし供献土器は近江系の影響が強い。

狭間墳墓群は、北金岐式頃にその造墓活動を終えるが、これに続いて今林8号墓が築造される。この墳墓は単独で造営されており、墳頂部には成人2名と胎児または乳児1名が、狭間墳墓群の原則通り埋葬されている。単独墓になったことで、狭間墳墓群の段階で2者あった有力層は遂に1集団に絞られている。ここでは鏡、朝鮮半島系の鉄製土掘り具・鉄ヤリ・方形刃先・ガラス管玉など、豊富な副葬品が見られ、広域な対外交流をうかがわせる。この段階には今林遺跡の集落は廃絶しており、曾我谷遺跡へ集落を移動したと見られる。

今林1号墳(墓)は8号墓に続いて築造される黒田式の墳墓であるが、単独に築かれ、墳頂には1基のみ主体部が築かれる。階層化は極限まで進み、特定個人墓の出現を見るわけだが、副葬品を失い、首長を含めた平山遺跡群の他地域に対する相対的な地位は低下している。

平山遺跡群では確実に古墳時代前期前葉に遡ることができる墓は存在しない。平山古墳が園部垣内古墳に先行して築かれるが、それも遡って前期中葉である。しかも弥生後期を通じて方形墳の伝統を守ってきたにもかかわらず、円形墳を採用している。この変化から見ても、庄内式併行期末に凋落した平山遺跡群の首長は、古墳時代の開始とともに、その首長権を畿内政権に、いったん奪われ、1世代ほど経た後に首長として復活したのではないだろうか。

平山古墳に続く首長は丘陵からわずか500m南に立地する園部垣内古墳の被葬者と見たい。従来、園部垣内古墳は畿内政権からの派遣将軍の墓として認識されてきたが、今回の調査をふまえて、在地勢力である平山遺跡群の首長系列に連なるものが畿内からの特別なてこ入れを受け、大型前方後円墳を築いた可能性も考えたい。想像を逞しくすれば、首長権を取り戻した平山遺跡群の首長は、丹後・山陰経営と連動して丹波山地への入り口の守護を任せられたのではないだろうか。

中期前半には、豊富な副葬品を持つ今林6号墳の首長を支える層から、カチ山北古墳群の被葬者にも古墳築造権が与えられるが、園部盆地の南部に岸ヶ前古墳群などが勃興してくると、平山遺跡群の首長は徐々に力を失い、後期初頭の今林2号墳、横穴式石室を主体部に持つと見られる3・4号墳を最後に平山遺跡群の首長系列は途絶えるのである。

### (3)今林8号墓出土鏡について

当該鏡の鏡式について、当初から2つの意見がある。一つは四獣鏡の一種と見る意見であり、もう一つは捩文鏡の一種と見る意見である。調査終了後、樋口隆康氏、下垣仁志氏に加え、森下

章司氏のご教示を得ながら筆者なりに当該鏡について検討した結果を以下に述べることとする。

樋口氏は捩文鏡は環状乳神獸鏡から凶像を抜き出し、配置したものであるという系譜を提唱<sup>(注38)</sup>され、後に田中 琢氏によって、環状乳神獸鏡と捩文鏡の間に鼈龍鏡を介すべきであることが提唱<sup>(注39)</sup>され、現在に至っている。また下垣氏によれば捩文鏡の原鏡となった鼈龍鏡の内、最も古い副葬例が雪野山古墳2号鏡であることを挙げ、捩文鏡は古墳前期中葉を遡らないという。

ここで問題となることは2点ある。1つは当該鏡が捩文鏡の一種であるかどうか。すなわち捩文鏡とは何かをめぐる問題。もう1つは遺構の時期の問題である。雪野山古墳は布留式古相の壺形土器を出土したが、当該鏡は庄内式併行期の墳墓の主体部から出土したのである。

まずは前者の問題について。前橋天神山鏡や楯原寺山鏡といった形式的に最古式に属する捩文鏡は、みな鼈龍鏡の内区外縁部をめぐる、環状乳を肩部に持つ文様単位を抜き出したものという指摘はある意味で正しい指摘と思われる。しかしこれらの内区文様を観察すると、鼈龍鏡の大きな獸形の顎(髭)の部分なども取り込まれている。つまり、捩文鏡は鼈龍鏡内区の大きな獸形を省略し、内区の内側半分を消去し、内区外側半分を再構成したものを内区に持つ。したがって捩文鏡は当初から獸形を意識して、そこから頭部や脚部を省いたのではなく、初めから頭部や脚部を持たないデザイン化された体部を含む、鼈龍鏡内区外側半分を再構成したものと定義すべきである。その意味で田中 琢氏の樋口I型を再び捩文鏡から外すべきという考え方には賛同できる。

さて、では当該鏡はどうか。雪野山古墳出土の鼈龍鏡内区外縁の文様に似ている部分もあるが、これは獸毛や羽毛表現の線同士が密着しており、前述した当該鏡の羽毛・獸毛表現とは異なる。鼈龍鏡内区外縁の文様では乳以外を平板に表現しているが、当該鏡は肉感のある浮彫表現である。さらに当該鏡では獸形の胸から前脚にかけての部分を、稜のある三角形の浮彫で表現しているが、鼈龍鏡内区外縁の文様ではそれがすでに省略されている。当該鏡には鼈龍鏡にはない獸形が含まれている。これらの相違点から、最古の鼈龍鏡である雪野山鏡とは同一系譜上にあるとは考えられない。したがって当該鏡は捩文鏡の一種ではないと判断する。では、どの鏡式に属するかということだが浮彫式獸帯鏡を祖形とした鏡であると考え。根拠は獸形の表現と三本の密接しない細線によるカールした獸毛表現、三角形の胸の表現などである。獸毛表現や獸形の形状は三重県東山古墳の浮彫式獸帯鏡に近似し、三角形の胸の表現は芝ヶ原鏡の獸形表現に通じるものがある。舶載の浮彫式獸帯鏡は、漢鏡7期に製作され、三重県東山古墳や長野県弘法山古墳で庄内式併行期の墓から出土しており、庄内式併行期の日本各地の墳墓からも出土している<sup>(注40)</sup>。したがって、これを原鏡とした当該鏡や見田大沢鏡が庄内式併行期に存在することも何ら不都合ではない。

出土状況の問題については、8号墓は第1・第2主体部とも墓壙上に破碎土器供献を行っており、これらには突出する底部を持つ破片や庄内式椀形高杯の脚部・脚裾部片が含まれる。第3主体部は土器棺であるが、やや偏球形の体部に突出する底部が付く。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ調整である。口縁部片が無いので厳密な時期は決定できないが、曾我谷遺跡の溝資料との比較から下がっても庄内式併行期末までである。むしろ庄内式併行期でも、前半である可能性が高い。さらに第1主体部の棺内には、棺上から転落したと見られる甕底部片があり、当該鏡の北わずか3cmから出土している。これもタタキのある甕で、直径3cmの平底を有する。しかも

体部の立ち上がりが急なため、球形胴にはなり得ない。したがって、伝統的V様式系の甕が球形胴化する以前の庄内2式とするのが穏当であろう。なお、墳丘盛土に伴って弥生後期～末の今林遺跡の包含層から土器が混入した可能性を検証すべく、墳丘を岩盤まで断ち割ったが、盛土およびその下層の旧表土を含め、1点の土器も出土しなかった。なお、今林遺跡の2次調査で、当該地点からはほとんど遺物が出土していないことが報告されており、また8号墓の東方に隣接する今林遺跡C地区でもほとんど土器が出土していない状況から見て、混入遺物である可能性は限りなく0に近い。

以上2点の問題を検討した結果、当該鏡については庄内2式併行期に副葬された浮彫式獣帯鏡を原鏡とする四獣鏡の1種であり、「特定の地域において独自に」行われた鏡生産の1群であると理解するのが現状での妥当な解釈である<sup>(註41)</sup>と考える。(福島孝行)

## 6. ま と め

狭間墳墓群は弥生時代後期中葉から造墓活動が開始され、後期末まで続く。土器や切り合い関係から築造時期がわかるものについては1・5・9・11・12→2・8→4→3・6号墓の順で築造されたものと考えられる。墳丘は方形ないし長方形に削り出した截頭方錐形の台状部に、若干の盛土を行って成形する台状墓である。台状墓間の空閑地にも整然と埋葬が行われている。主体部は11号墓を除いて東西頭位であり、2基の主体部を設けるものが卓越する。主体部は木棺直葬であるが、棺の形状はさまざまであり、墓壙形状も変化に富む。特に5号墓は、2重木棺の可能性があり、11号墓は構築墓壙の一種である。また土器棺も見られる。副葬品は2・5・11号墓に限られる。土器の供献形態は墓壙上の破碎土器供献が主体を占めている。供献土器には近江系の甕や近江の影響を受けたと見られる甕・鉢などが目立つ。

平山古墳は、長軸17mを測る楕円形墳である。墳丘は岩盤を削り出して成形し、中央に2段墓壙を穿ち、その中央に割竹形木棺を据えている。頭位は東西方向であり、鏡の位置を頭位側とすると、西側頭位である可能性が高い。副葬品はすべて棺外に置かれ、2群に分けて置かれている。副葬品の中で特筆すべきは鳥頭四獣鏡である。供献土器と副葬品の構成から築造時期は古墳時代前期後半でも末葉には下らない時期であると考えられる。

カチ山北古墳群では、1号墳から供献されたと考えられる土師器群が出土した。これらの土師器は5世紀後半頃のものと考えられており、1号墳は5世紀後半の築造と考えられる。2号墳は、鉄刀や有肩鉄斧の形状が、4世紀末以降の時期を示している。ただ、両古墳のあり方からみて、あまりかけ離れた時期の築造とは考えにくく、ほぼ5世紀のうちに築造されたものとみられる。隣接して築造されている両古墳で、主体部の主軸方向が異なるのが注目される。南丹波北部における中期古墳の様相を知る上で良好な資料となる。

今林古墳群では新たに中期古墳2基、庄内式併行期の墳墓1基が調査され、全体像に迫ることができた。特に6号墳は長辺が22mの小規模な方墳でありながら、埴輪列を持ち、舶載鏡や短甲など、豊富な副葬品を持つことを特徴としている。また8号墓は長辺18mの庄内式併行期の墳墓であるが、初期の仿製鏡の他、タビ・方形刃先・ガラス管玉など、今林1号墳には無かった副葬

品が見られ、園部川流域の黒田古墳にも匹敵する内容であることが明らかとなった。

今林遺跡3次調査では、SH01から完形品12点が出土し、南丹波の弥生後期の良好な一括資料を得ることができた。また、B地区では尾根の中腹に古墳時代後期の竪穴住居跡が見つかり、当該時期の集落形態に新たな形態を加える結果となった。

全体を総括すると、平山丘陵は弥生～古墳時代にかけて連綿と集落・墳墓が営まれ続け、園部盆地北部の中心的な位置を占め続けたと考えられる。

(福島孝行・引原茂治)

なお、調査中および整理作業中を通じて、下記の方々に多大なご教示やご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝したい(敬称略)。

松本学博・荒川 史・安藤信策・壱岐一哉・魚津知克・内田真雄・大賀克彦・岡林孝作・加藤晴彦・亀山善弘・阪口英毅・重松朋孝・杉原和雄・杉山拓己・鈴木一有・鈴木篤英・清野孝之・高木芳史・高橋克壽・田中晋作・塚本敏夫・辻川哲郎・辻健二郎・寺田良喜・豊島直博・中川 渉・中村潤子・中村 弘・橋本達也・浜中有紀・樋口隆康・広瀬和雄・古川 匠・松田 度・三好 玄・村上恭通・村上計太・森浩一・森下章司・門田誠一・山口裕一・山田邦和・吉井秀夫・和田晴吾

注1 調査参加者は、次の通りである(順不同・敬称略)。

金城竜成・莊林ハツエ・人羅幸子・井上洋子・人羅義雄・壱岐一哉・三好玄・天池邦彦・天池佐栄子・西山佳助・石堂和博・柚田祐子・山下秋雄・山下春子・古川 匠・潮田昌子・竹中万弓・栗原明日香・宅間のり子・森口 亮・前田富士子・矢野ふさゑ・三浦悦子・前田年枝・前田準一・内藤ふさ子・筒井茂子・佐々谷勉・佐々谷暉美子・大下尚夫・大下陽子・山内浩司・木村明隆・大下昌輝・吉田修一・野口和子・初野玉子・亀山善弘・山口裕一・長曾敬子・中井智恵子・重松朋孝・森房子・杉山拓己・古賀 聡・中井千代巳・濱口 隆・大下信治・中井優志

注2 平良泰久編『曾我谷遺跡発掘調査概報』園部町教育委員会 1977

注3 同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会編『園部盆地における考古学的調査』同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会 1981

注4 辻健二郎『園部町内遺跡発掘調査概報 平成10年度(宮ノ口遺跡)』園部町教育委員会 1999

注5 野々口陽子「今林2号墳・今林遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

戸原和人「今林遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第88冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注6 石崎善久「善願寺遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第98冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注7 森下 衛ほか『船坂・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町教育委員会 1991

注8 柴 暁彦「国道478号バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第62冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注9 森 浩一編『園部垣内古墳』同志社大学文学部 1990

注10 門田誠一編『佛教学園部校地の遺跡—考古学調査のあらまし—』佛教大学 1999



- 注11 辻健二郎『園部町小山東町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書(徳雲寺谷遺跡群)』 園部町教育委員会 1997
- 注12 引原茂治「園部城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注13 前掲注7
- 注14 前掲注7
- 注15 安藤信策・山口 博ほか『温井13号墳発掘調査概要』 園部町教育委員会 1981
- 注16 辻健二郎『園部天神山古墳群発掘調査報告書』 園部町教育委員会 1995
- 注17 前掲注3
- 注18 福島孝行「礫で棺表示する古墳について」(『京都府遺跡調査概報』第87冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注19 ガラスの材質については、大賀克彦氏(京都大学)のご教示による。
- 注20 森下章司「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」(『史林』第74巻第6号 史学研究会) 1991
- 注21 野島 永・河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注22 庄内式併行期が弥生時代か古墳時代かについては、前者の都出比呂志氏と後者の寺沢 薫氏との間で、鋭く対立している。筆者は弥生・古墳社会の階層構造の検討から前者を支持している。  
都出比呂志「日本古代国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」(『日本史研究』343 日本史研究会) 1991  
寺沢 薫「纏向型前方後円墳の築造」(『考古学と移住・移動』同志社考古学シリーズⅣ 同志社大学考古学シリーズ刊行会) 1988
- 注23 森下章司「鏡の伝世」(『史林』第81巻第4号 史学研究会) 1998
- 注24 岡村秀典「後漢鏡の編年」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館) 1993
- 注25 末永雅雄『日本上代の甲冑』 木耳社 1934
- 注26 高橋 工「甲冑製作技術に関する若干の新視点」(『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究協会) 1991
- 注27 阪口英毅「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲—変遷とその特質—」(『史林』第81巻第5号 史学研究会) 1998
- 注28 ガラスの材質・生産地については大賀克彦氏のご教示による。
- 注29 村上恭通氏(愛媛大学)のご教示による。
- 注30 田中新史「使用具の古墳埋納(上)」(『古代』第98号 早稲田大学考古学会) 1994  
田中新史「使用具の古墳埋納(下)」(『古代』第100号 早稲田大学考古学会) 1995
- 注31 ガラスの材質については大賀克彦氏のご教示による。
- 注32 福島孝行「平面多角形の堅穴式住居跡の検討」(『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ 同志社大学考古学シリーズ刊行会) 1999
- 注33 福島孝行「宮川遺跡」(『埋蔵文化財調査概報』1996 京都府教育委員会) 1996  
野々口陽子・福島孝行「宮川遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第72冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

- 注34 森下 衛・鶴島三壽『京都府遺跡調査報告書』第16冊 千代川遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注35 石井清司・田代 弘『京都府遺跡調査報告書』第4冊 北金岐遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
- 注36 藤田三郎・松本洋明「大和地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社) 1989  
森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社) 1990
- 注37 森 浩一「まとめ」(『園部垣内古墳』同志社大学文学部文化学科) 1990
- 注38 樋口隆康『古鏡』新潮社 1979
- 注39 田中 琢『古鏡』日本の美術No.178 至文堂 1981
- 注40 岡村秀典「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」(『出雲における古墳の出現を探る』出雲考古学研究会) 1992
- 注41 岸本直文「雪野山古墳副葬鏡群の諸問題」(『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会) 1996

版 圖

図版第1 狭間墳墓群

(1) 狭間墳墓群遠景(北から)



(2) 1号墓全景(南西から)



(3) 2号墓全景(東から)



図版第2 狭間墳墓群



(1) 3号墓全景(東から)



(2) 4号墓全景(西から)



(3) 4号墓貼石(北から)

図版第3 狭間墳墓群



(1) 5号墓全景(西から)



(2) 5号墓頂部(東から)



(3) 6号墓全景(西から)

図版第4 狭間墳墓群



(1) 7号墓全景(西から)



(2) 8号墓全景(東から)



(3) 11号墓全景(北から)

図版第5 狭間墳墓群

(1)12号墓全景(西から)



(2)13号墓全景(西から)



(3)11号墓主体部(南から)





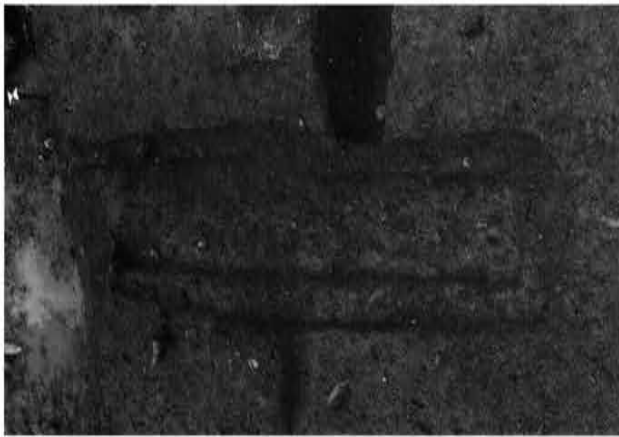
図版第 6 狭間墳墓群



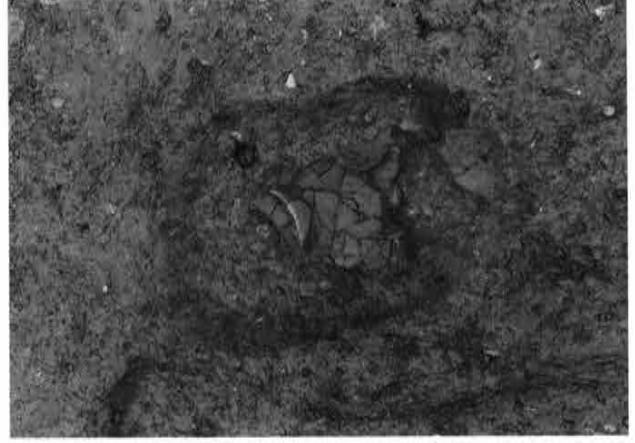
(1) 2号墓第1主  
体部棺内完掘  
状況(東から)



(2) 2号墓第2主  
体部棺内完掘  
状況(東から)



(3) 2号墓第3主  
体部棺内完掘  
状況(東から)



(4) 2号墓第4主  
体部土器出土  
状況(南から)

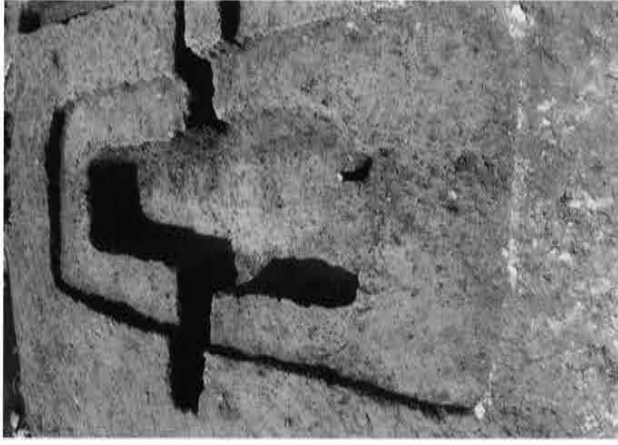


(5) 2号墓第3主  
体部棺表示際  
検出状況  
(東から)



(6) 3号墓主主体部  
棺内完掘状況  
(東から)

図版第7 狭間墳墓群



(1) 4号墓第1主体部  
内完掘  
状況(東から)



(4) 5号墓第1主体部  
内完掘  
状況(西から)



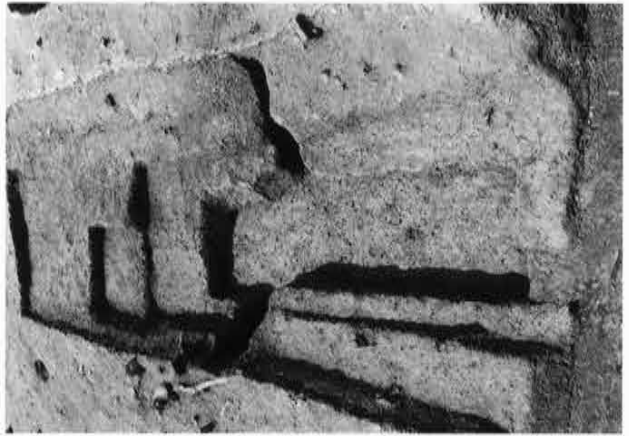
(2) 4号墓第2主体部  
内完掘  
状況(東から)



(5) 5号墓第2主体部  
内完掘  
状況(西から)

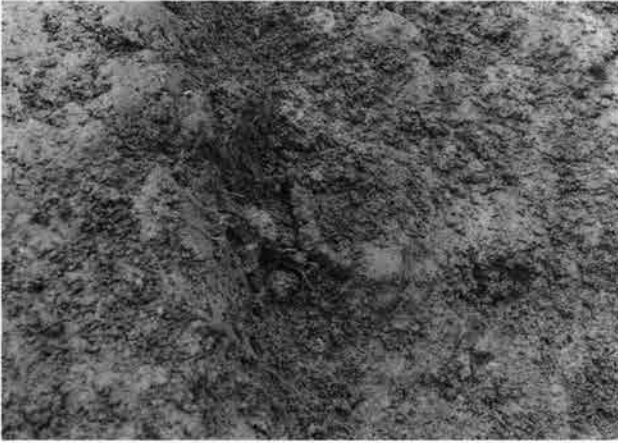


(3) 7号墓第1主体部  
内完掘  
状況(東から)



(6) 7号墓第2主体部  
内完掘  
状況

図版第8 狭間墳墓群



(1) 2号墓第1主体部鉏出土状況(東から)



(4) 4号墓第3主体部土器検出状況(東から)



(2) 8号墓第1主体部棺内完掘状況(東から)



(5) 6号墓主体部棺内完掘状況(東から)



(3) 8号墓第2主体部棺内完掘状況(東から)



(6) 8号墓土器埋納土坑土器検出状況(東から)

図版第9 平山古墳



(1)平山古墳空中写真(北から)



(2)平山古墳空中写真(上が北東)



(3)平山古墳主体部(西から)



(1)副葬品北群出土状況(北から)



(2)副葬品南群出土状況(南から)



(3)主体部小口溝完掘状況(東から)

図版第11 カチ山北古墳群

(1)カチ山北古墳群空中写真  
(北から)



(2)カチ山北古墳群空中写真  
(上が東)



(3)1号墳主体部鉄刀出土状況  
(東から)





(1) 1号墳南溝土器出土状況  
(南から)



(2) 2号墳主体部副葬品出土状況  
(北から)



(3) 2号墳主体部副葬品出土状況  
(西から)



(1) 6・7号墳空中写真(上が北)



(2) 6号墳埴輪列検出状況(東から)



(3) 6号墳不明土坑完掘状況  
(東から)

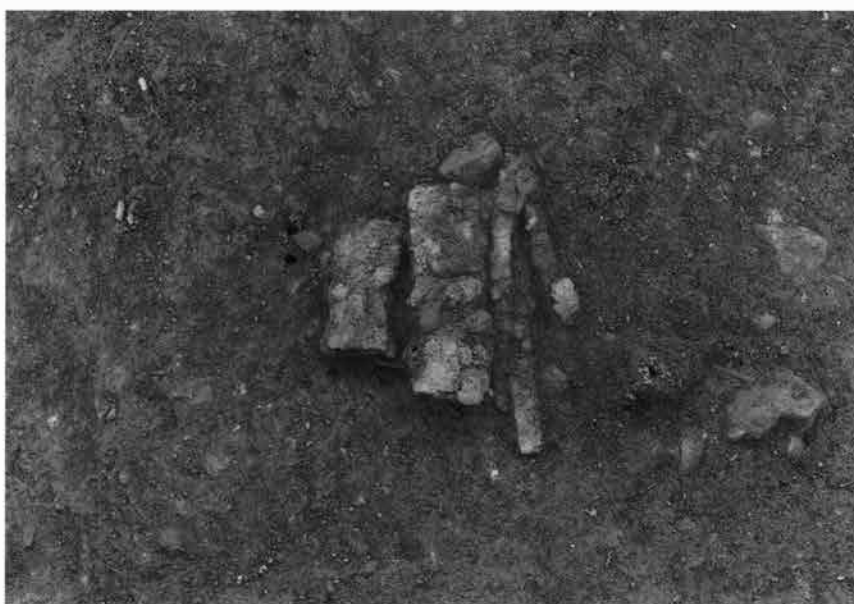




(1) 6号墳主体部副葬品出土状況  
(西から)



(2) 6号墳刀剣類出土状況(南から)



(3) 6号墳農工具出土状況(南から)

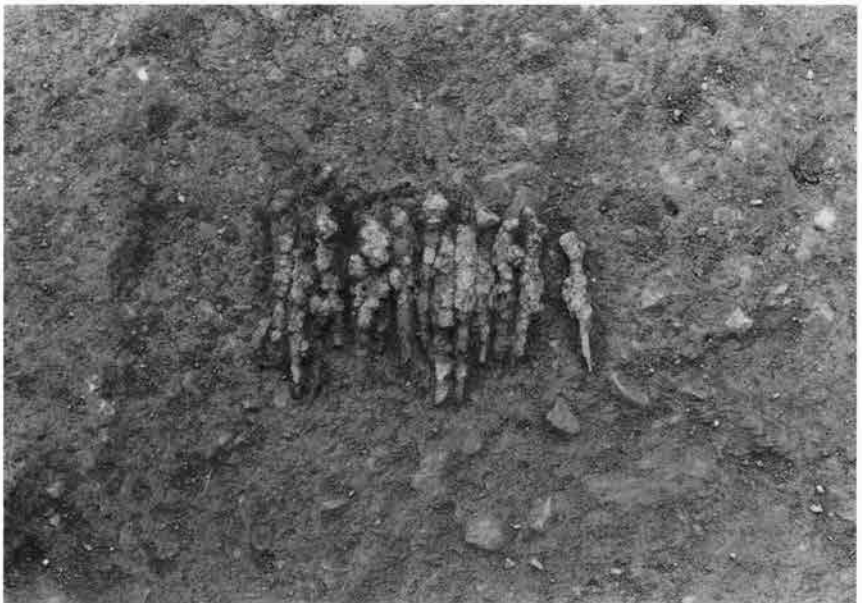
(1) 6号墳鉄矛出土状況(西から)

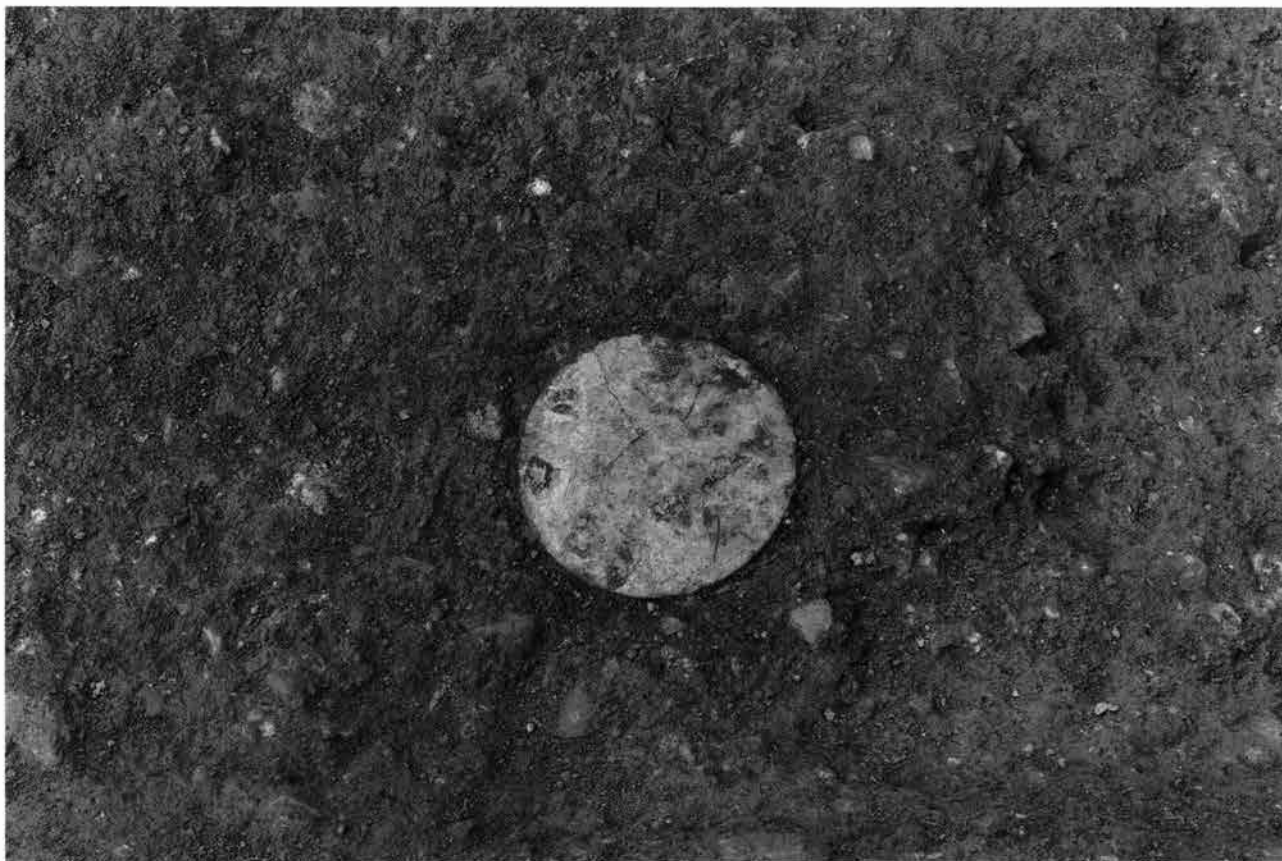


(2) 6号墳玉類出土状況(南から)



(3) 6号墳鉄鏃出土状況(東から)





(1) 6号墳鏡出土状況(南から)



(2) 6号墳短甲出土状況(東から)

(1) 7号墳主体部棺内完掘状況  
(南から)



(2) 7号墳「U」字形鎌・鋤先出土  
状況(西から)



(3) 7号墳曲刃鎌出土状況(南から)





(1) 8号墓空中写真(上が北)



(2) 8号墓墳頂平坦面(西から)



(3) 8号墓第1主体部完掘状況  
(東から)

(1) 8号墓第1主体部副葬品出土  
状況鏡取り上げ前(北から)



(2) 8号墓第1主体部副葬品出土  
状況鏡取り上げ後(北から)



(3) 8号墓第1主体部農工具出土  
状況(西から)





(1) 8号墓第1主体部鉄ヤリ出土状況(北から)



(2) 8号墓第2主体部石材出土状況(東から)



(3) 8号墓第2主体部棺内完掘状況(東から)

(1) 8号墓第2主体部鉈出土状況  
(南から)



(2) 8号墓第2主体部方形刃先出土状況(西から)



(3) 8号墓第3主体部土器出土状況  
(東から)



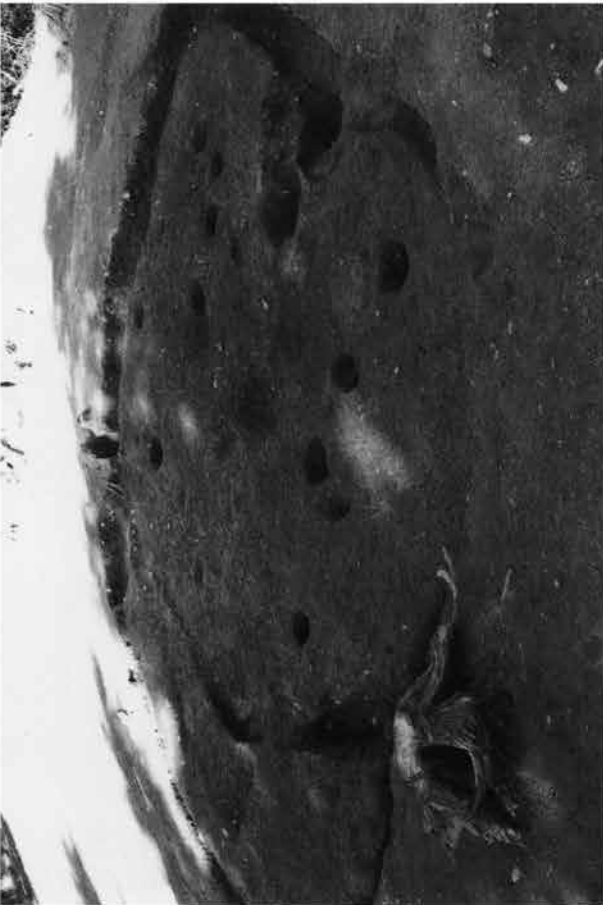




(1) A地区空中写真(北から)



(2) A地区S H01土器出土状況(1)(北から)



(3) A地区S H01完掘状況(東から)



(4) A地区S H01土器出土状況(2)(北から)



(1) B地区空中写真(北東から)



(2) B地区S H12完掘状況(東から)



(3) B地区S H05完掘状況(西から)



(4) B地区S H05竈検出状況(南から)



(1) C地区空中写真(上が南)



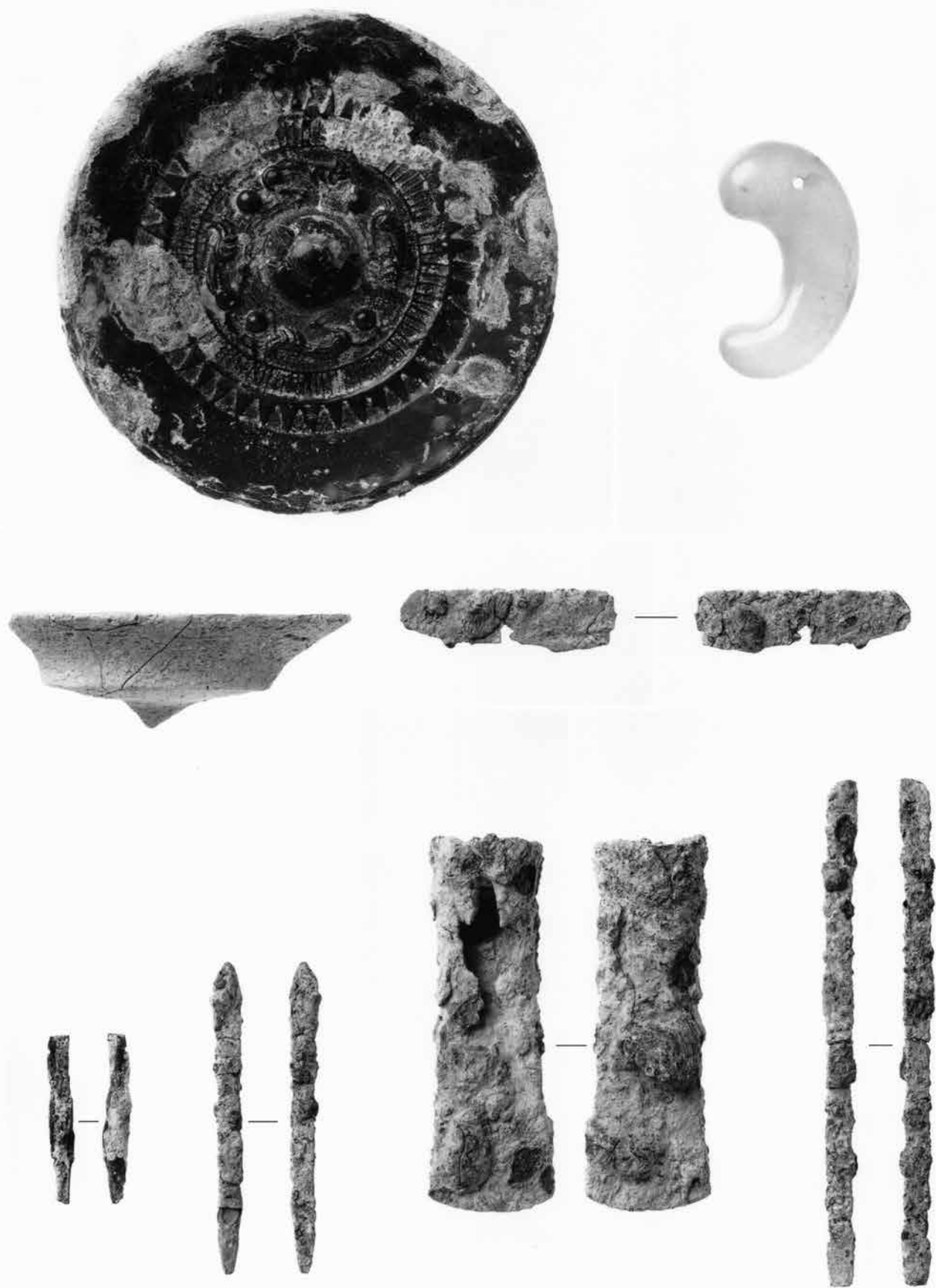
(2) C地区 S X 15(南東から)



(3) C地区 S X 35・08(北西から)



(4) C地区 S X 29(南西から)

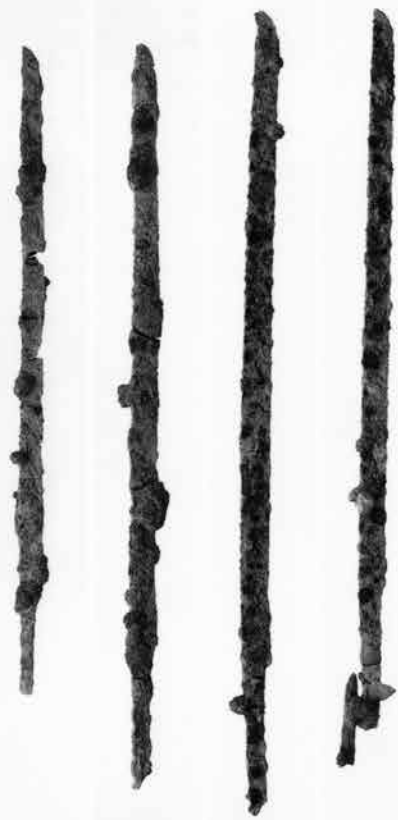




第7図-1



第56図-6

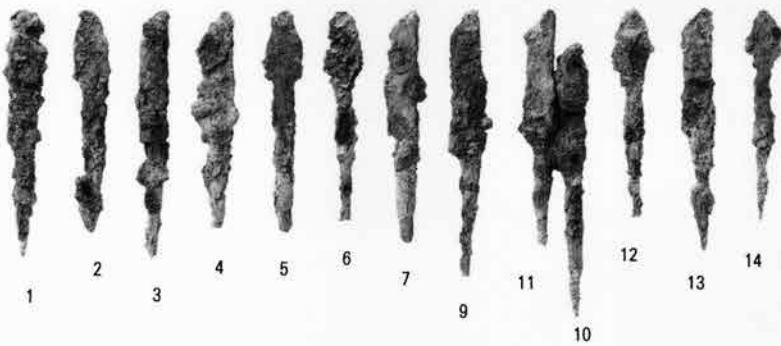


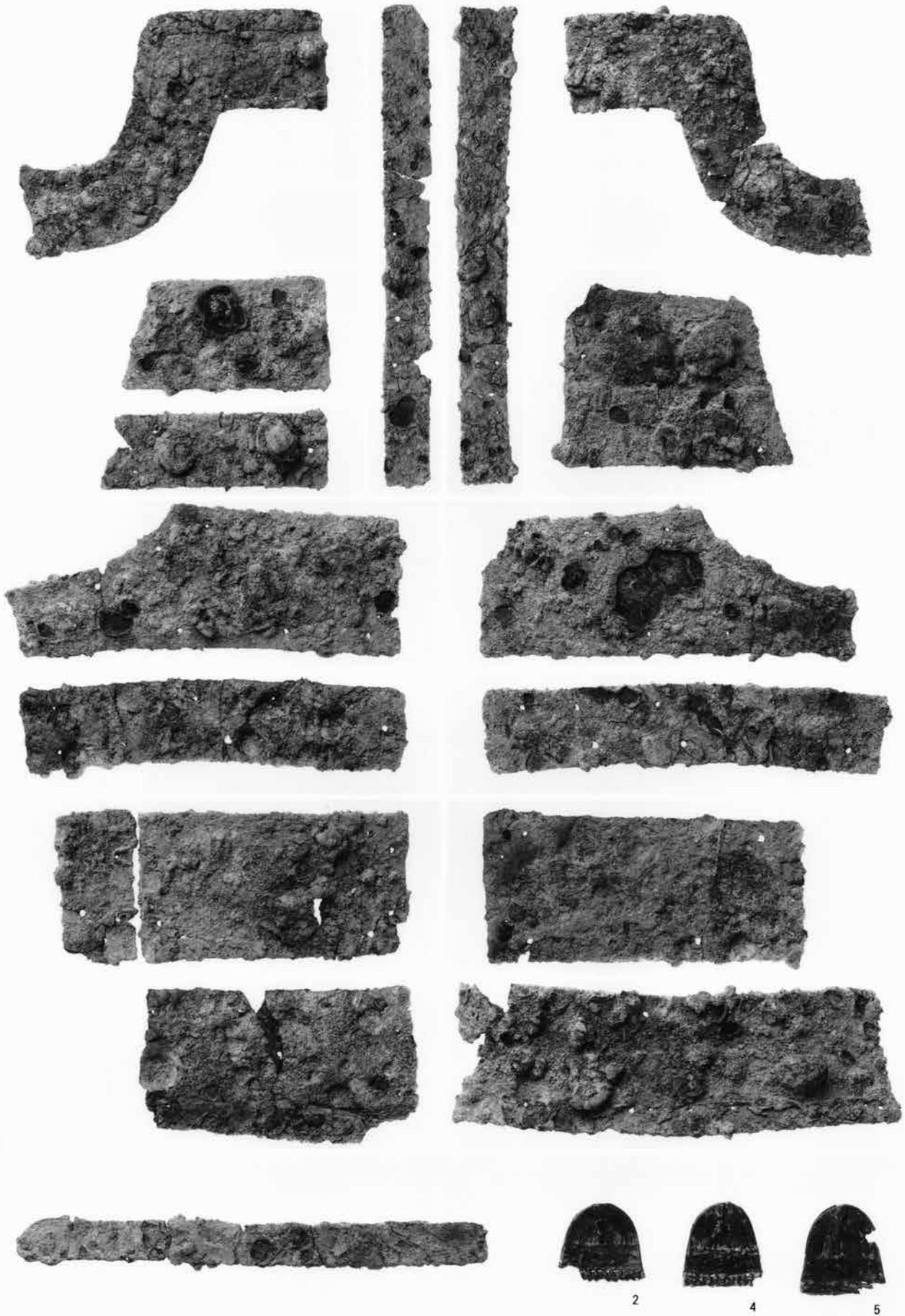
第56図-1

第56図-2

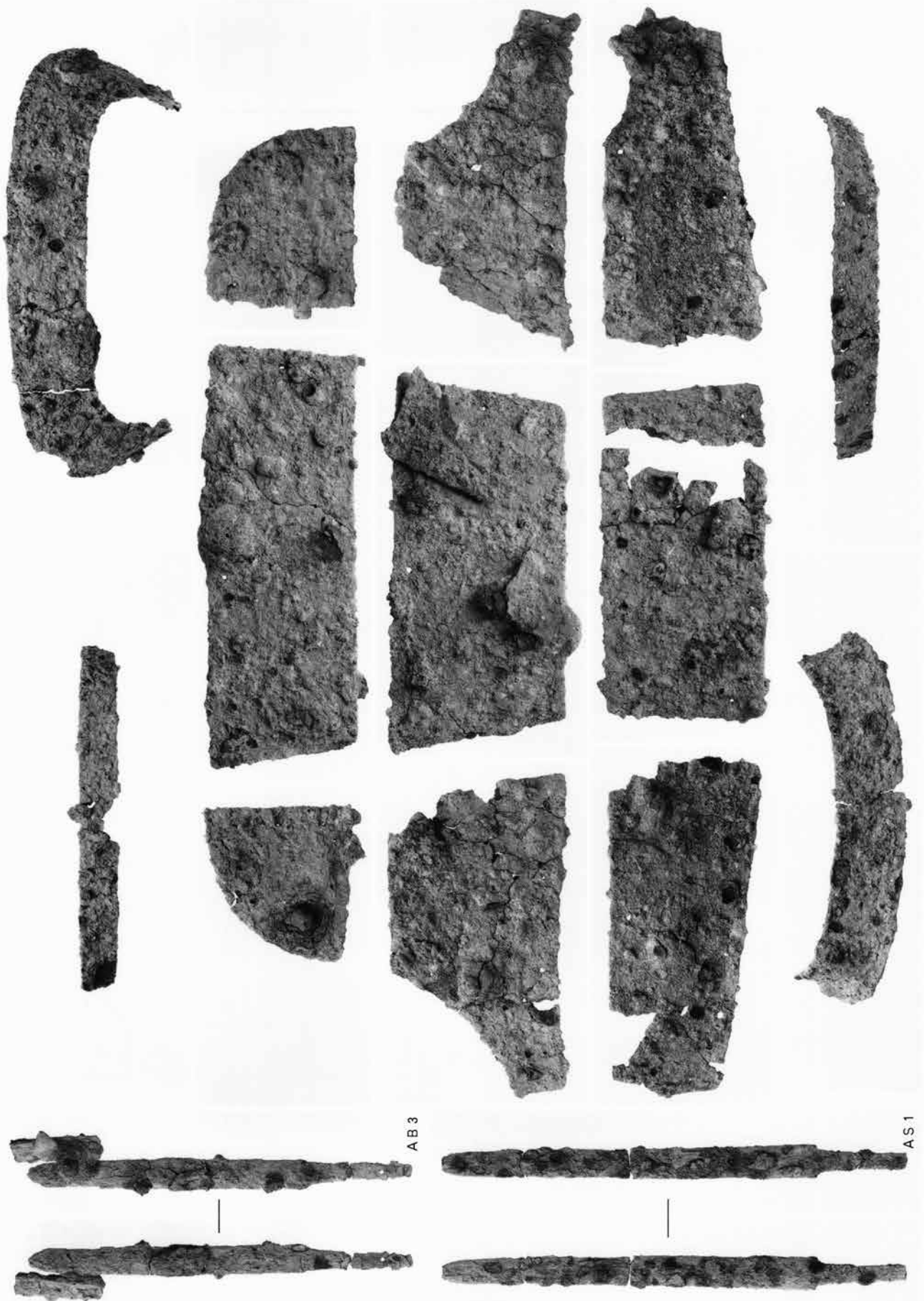
AB1

AB2

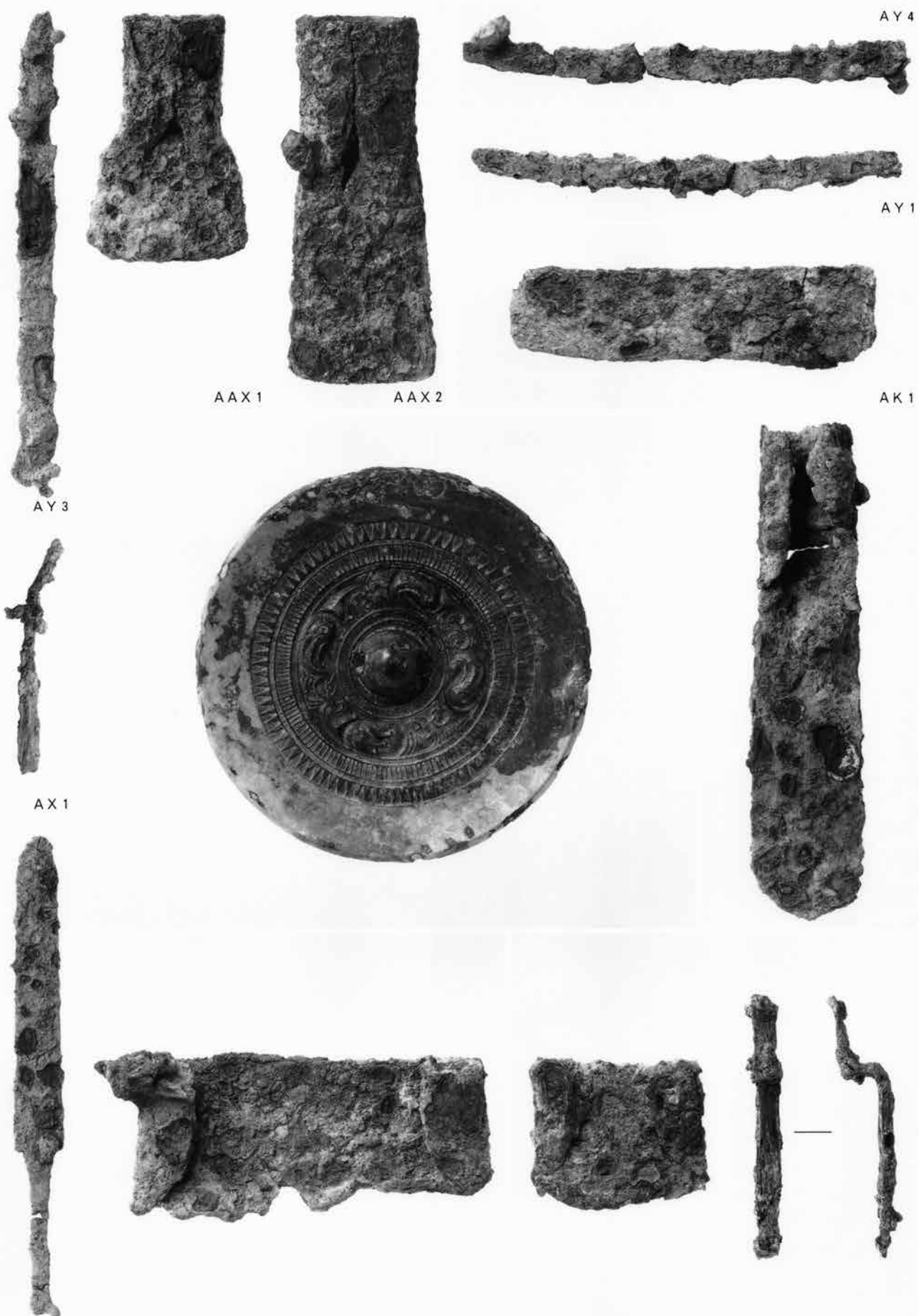




AY 2



今林古墳群出土遺物(2)



今林古墳群出土遺物(3)





第86図



第84図-8



3



1



2



4



5



10



6



8



11



7



9



12

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第97冊							
編著者名	引原茂治・福島孝行							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2001年 3月 26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ひらやまいせ きぐん 平山遺跡群	ふないぐんそのべ ちようりゆうの・ うちばやし 船井郡園部町瓜生 野・内林	401		35° 7' 13"	135° 28' 32"	19990908 ～ 20000926	5,300	工業団地建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
狭間墳墓群	墳墓	弥生		墳丘墓/木棺墓/貼石		弥生土器/ガラス玉		
狭間中・近 世墓群	中・近世墓	中・近世		円形土坑/方形土坑		キセル/銭貨/土師皿		
平山古墳	墳墓群	古墳		木棺墓		鏡/玉/土器		
カチ山北古 墳群	墳墓群	古墳		木棺墓		土師器/鉄刀/斧		
今林古墳群	墳墓群	古墳		木棺墓		埴輪/甲冑/鉄剣/鏡/ タビ/農工具/玉		
今林遺跡第 3次	墳墓群	集落		竪穴住居		弥生土器/土師器/須 恵器		

京都府遺跡調査概報 第97冊

平成13年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Phone (075)256-0961 (代)